

新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ



1953・7

奇譚クラブ



定價 百円

地方売価 百参円

縛られた女の集大成

美

し

き

縛

し

め

(縛られた女ばかりの十六態)

☆ 五百部限定版 ☆

絶対に市販せず
限定番号捺印

頒価一部 五百円

(送料 二十四円)

内容

雁 字 揃 目	目 の 絞	紅 と 白	床 の 置 物	く さ り	芋 虫	高 手 小 手	エ ビ 責
猿 轡	犠 牲 台	荒 縄	観 念	滑 車 吊	蠟 燭 責	鞭 打 ち	足 枷

各葉解説文句付

・美濃村 晃・構成・

縛られた女の中、優美さと緊縛感の秀れた代表的な拘縛目をあぞむ十六態
特アールに美術コロタイプ印刷を施した十六葉を貼付した豪華なアルバム

アルバムの大きさ・A5版

絶て新に特写したもののばかりですから、従来の写真と絶対に重複することはありません。
本誌の依頼に依り美濃村氏が腕をふるつて指導した逸品揃い、どうかコレクションの一翼にお加え下さい。

全部未発表の特寫！

(限定版は特別会員に限り分譲)

・塚本鉄三・撮映・

申込所
大阪府堺局区内菅原通

曙書房代理部



縛られた女



一辛五〇〇

百鬼夜行

江談抄に、野篁井高藤卿遇百鬼夜行事あり、大鏡に、九條師輔あはゝの辻にて百鬼夜行に會ふの條が見え、宇治拾遺物語には、或る僧がこれに遇ふた話を記いてあるなど、この百鬼夜行のことは、平安中世以降屢々聞くところの怪談である。



・奇譚クラブ 七月号 目次・

口絵写真 猿ぐつわ五態・口繪 百鬼夜行の図

扉 誘惑 (キリアンの銅版畫) 辻 番 附 伊藤晴雨

クリスチーヌの受難(二) キトロドシユトツク 吾妻新・訳 (16)

手記 妻は縛らず 岡田圭介 (32)

女 腹切 八景 切腹本願 龜岡絃七郎 三條春彦・画 (38)

川端多奈子さんへ 羽村京子 (46)

祭壇に君臨する脚 馬 族 保 (48)

淫 火 (第七回) 松井籟子 (166)

らぶ・すれいぶ (第七回) 鬼山絢策 (116)

時代 小説 片耳傳奇 (一) 窪村 弘 (130)

女体緊縛美について 千葉三郎 (58)

囚獄の思い出 嶽 收一 (60)

歌舞伎とサジズム 宮内義雄 (64)

暴帝イワン罪惡史(三) 高取辰治 (68)

あるマゾヒストの手帖から(二) 沼 正三 (74)

辻番附の話(其頃を語る 二) 伊藤晴雨 (29)

或る体験より

切 腹 願 望 水内武郎 (54)

信太蓉子さんへ 羽村京子 (84)

變の字問答 (第三話) 浮家鷹三 (86)

磔になったお姫様 毛利綾子 (94)

四馬路界隈 姫宮四郎 (98)

—魔都上海の思い出から—

我が告白の断章(二) 須藤律夫 (148)

くすぐられるよろこび 山本百合 (152)

女囚私刑体験記(三) 小坂多美枝 (162)

私の主題 岡田咲子 (126)

一清教徒の日記(二) 粟 島 洋 (134)

曇 後 雨 川端多奈子 (177)

新しいサディズム 吾 妻 新 (190)

映画 暴帝イワン 泉 辰之助 (160)

挿繪に現れた縛り繪

構成

三木隆弘

五月号に於て高月大三氏が「戦後の挿繪に現れた女の責め場」を構成せられ大変興味深く拝見したので小生の蒐集した縛り繪の中から適當なものを選んで読者の御便宜に供したいと思う。先ず右側の繪は昭和二十四年十一月に確か一回きりで廢刊になつた妖星という雑誌に載つた乃木田潤氏作、柴谷宰二郎氏筆の愛欲地獄圖の挿繪である。下は昭和二十五年二月に出た犯罪実話に載つた寺本忠雄氏の挿繪である。内容はとり立てゝいう程のものではないが、後手の女に繩を両足にからませた変つたものなので引用した。左下は同じく犯罪実話の同月号に魅せられた強盜の題で稀玉一夫氏作、尾先四白氏繪の挿繪の一場面これは立つて後手にしごきで縛られたものであるが、文章には一寸頂ける場面があつた。



寺本忠雄

りべらるという雑誌を繙いてみると相当多数の縛り絵に接して嬉しく思った。五月号にも一葉引用してあつたが、こゝに載せた以外にもまだくゝあつた左側と下の画はくりべらるゝ昭和二十一年九月号、舟橋聖一氏作の「お七と吉三」の挿絵で、絵は岩田専太郎氏である。後手に首縄、囚人の白裳束だけに清純で可憐である。下のお七が柱に縛りつけられて今や火炙りになろうというところである。実際の処刑の時、こういった縛り方をするものかどうか知らないが、胸の下、腰、それに膝と足首のあたりをぐゝと柱に縛られた姿態は妖艶である。舟橋聖一氏の筆になるこの内容はマゾヒスチックな点からみて大変興味をひかれた。お七の処刑の前日、町奉行



中山勘解由と老中、土井大炊頭利勝の何れか、お七の身体を自由にしたか、というところあたりは、処刑の描写よりもよかつた。

下はくりべらるゝ昭和二十四年七月号の続・猿飛佐助、富田常雄氏作、叶内重

助氏の挿絵である。女忍者のおかめが恋人の猿飛佐助を助けようとして伊賀の穩密船に捕えられ、佐助の幸村の行方を白状させようとして佐助の前でおかめは信賢の激しい折檻を受けるのである。おかめは霧隠才藏の意に従う約束で信賢にかくれて秘かに縄を切つて貰うそして小舟に乗せられた佐助を慕つて海中へ飛込む。





上図は昭和二十四
年七月の「りべらる
」の悪魔屋敷（角田
喜久雄氏作）挿絵は
緒方恒雄氏、およね
が鈴の行方を白状せ
よと浜田屋の老人に
責められるところ、
縞蛇と蛙が小道具と
して登場している。
左と下の図は女ばか
りの縛り絵の中で、
少年が年増に縛られて
いる絵である。昭和二十
四年四月号の大衆読物で
浜尾四郎氏作、今村恒
氏画の「マダムの殺人」、
少年のマゾヒスティックな
場面が多分に濃厚な描
写をしている。左下の図は、
昭和二十七年三月のりべらる、
岩堀光氏作、中尾進氏の画で
関白秀次の一場面、おいとが
不義の疑いで関白の為に銀否の
樹に縛りつけられているところ。
——秀次は、つかつかと進んで、
いとを尻を蹴った。いとはこ
ろりと横にころがりそれでも、
ももをちぎめて人々の瞳から
下腹をかばおうとする——。

マダムの殺人

浜尾四郎
今村恒雄氏画





上の画は昭和二十六年二月号の妖奇、島本春雄氏作、中島喜美氏絵の麗笛小姓
 の題字カット、上左はりべらるの昭和二十二年二月号、切られお富、岩田専
 太郎氏の絵である。内容は舟橋聖一一流の粘っこい文章で縛りの場面と濡
 れ場をふんだんに見せている。これは縛られたお富が与三郎に助けられよう
 とするところであろう。
 中の画は昭和二十三年頃のネオリベラルに載った木村進氏の絵で今迄の挿
 絵に猿ぐつわがなかった
 ので特にこれを選んだ。
 下は昭和二十六年二月号
 の奇抜雑誌、津田浩氏の
 絵である。内容は別にと
 り立て、言う程のものではない
 が、今迄挙げた分と変っている
 ので参考にもと思つて掲げた。





誘惑！

キリアンの銅版画

新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

七月号

第七卷 第七号 通巻第五十七号



クリスチーヌの受難 (二)

キドロドシュトック
吾妻新・訳

屈 伏

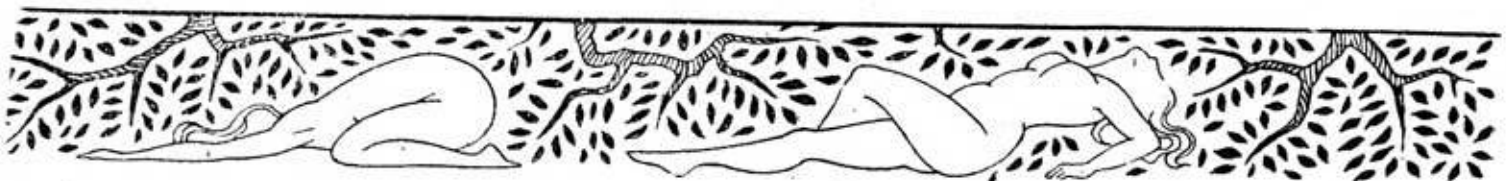
ポールが傍に寄つてきて、しやがみこんだとき、私は横むきに転がされていたのですが、本能的に脚をちぢめて、からだを二つ折りにしました。

「まあ、なんて行儀のいい、恰好だろう。やつぱり育ちのいいお嬢さんはちがうとみえる」と彼は毒々しく笑うのです。

「俺がそもそもお前に惹かれたのは、その優しい気品なのだ。ところがお前は、俺が成り上りの金持なのを知つて、金銭を軽蔑したね。金を軽蔑するのは、とりも直さずこの俺を侮辱することなんだ。その上お前は俺をけたもの扱いにした。いいかね、これから俺は、その高慢な誇りを打ち砕いてやるんだ。そして、いやでも成り上り者の俺を尊敬させてやる。さもないと、男と女は幸福に愛し合うことはできないんだからね」

「私にわるいことがあれば、いくらでもあやまりますから、乱暴しないで下さい。それに暴力で愛情や尊敬の生れる筈はないんです。それはあなたも分つていると思います」

と私は必死になつて抗弁しましたが、彼はユツクリと首を横にふりました。





「心配しなくてもいいよ、クリスティーヌ。俺には俺のやりかたがあるんだ。それにはまず、お前がもつと柔順にならなくっちゃいけない。愛するのはそれからさ。いそいでムリに愛してくれなくともいいんだよ」
 そう言っただかと思うと、彼は荷物でも扱うかのように、私の上半身をひき起し、うしろからしつかと抱きしめました。

とうとう獣は牙をあらわしたのです。私は厭わしい男の肉体を全身に感じて、身も世もあらぬ気持でしたが、両手をかたく縛られているのでどうすることもできません。するとポールは私の髪をつかんで、ぐつと顔をあおむかせ、遠慮会釈もなく厚い口唇で私の口をふさぎました。のけぞらんばかりに身をもがきましたが、臭い息は口一杯にひろがり、窒息せんばかりです。やがて彼の右手は私の……ぐり、胸から、腹から下へと……してゆきます。

「ああッ、ああッ」

「どうだ、抵抗できるかね。俺のしたい放題じゃないか、高慢なお嬢さん！」

悪魔はからからと笑いながら、羞恥と屈辱で気の遠くなりそうな私を、いつまでもなぶりものにします。

「ああ、ああッ、もうゆるして」

私は息も絶え絶えに訴えずにはいられませんでした。

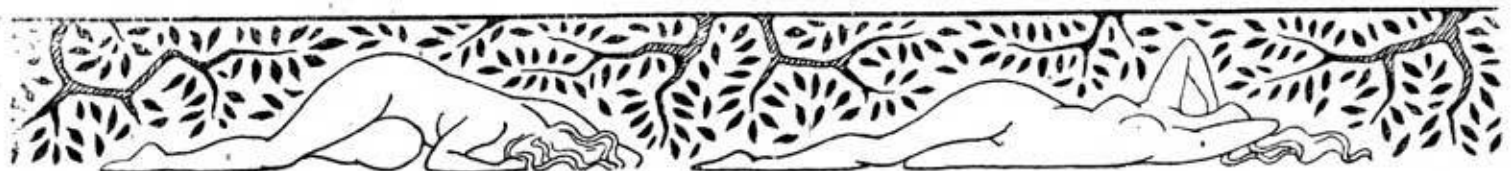
「いや、まだ許すわけにはいかない。その前にもう一つ、俺のやりたいことがあるんだ。元来俺はうしろに興味があつてな、いつべんお前のお尻を拝見したいと思つていたんだ。さだめし美しい顔に劣らず、いい色艶をしていることだろうな」

「それだけはやめて、お願いだからやめて下さい！」

だが、その哀願はいつそう彼を刺戟したらしく、彼はもう一度私を床にころがして俯伏せにすると、馬乗りになり、スカートをまくり上げ、おもむろに下穿をずりさげました。

それから彼のはじめたことは、正にけだものの名に価します。彼は二つの半球を撫で、つねり、平手で打ちました。もつとひどいいびりかたをされましたが、それはどんなに勇気を奮つても申し上げることができません。私の眼はくらみ、悲鳴で咽喉はかすれました。すると彼は満足そうな叫びをあげて、

「どうだ、お前の泣き声でセレナーデをきくと約束しておいたが、なかなかいい声じゃないか。さあ、もつと歌うんだ！」





と、尙もその行為をつづけました。

こうしたあらゆる凌辱の結果、私はもはや彼と争う勇気を失つてしまいました。一切の誇りは踏みにじられ、わずか一時間ほどの間にみじめな奴隷におちこんでしまったのです。思えばボールのやりかたは、冷酷な心理的計算の上に築かれていたので、彼はこうして私を無抵抗の状態に陥れておいてから、思いのままに弄ぶつもりだったのです。

やがて彼は立ち上つて、もとの椅子に腰かけると

「ひとまずこれで紐を解いてやるつもりだが、柔順になると約束するだろうね、クリスティーヌ。それとも、もう少しセレナーデを歌わせてやろうか」

「柔順になります」

涙にかきくれながら私は答えました。

「どんな命令でも従うんだな」

「はい」

「よし、その言葉を忘れるんじゃない。お前がくだらぬ反抗さえしなければ俺も追々と優しくしてやるからな」そう言つて、彼はやつと手と足の紐をほどいてくれました。誘拐されてから十時間以上もたつて、私はやつと自由になれたのです。ところが、それも束の間でした。疲れ果て、よろめきながら私がスカートの乱れを直していると「裸になるんだ」というボールの言葉が飛んできました。私は自分の耳を疑つて、しばらくは返事もできませんでした。

「聞えないのか、クリスティーヌ。裸になれと言つてるんだよ」

「それだけは……」と弱々しい声で言うと、彼はたちまち声を荒らげました。

「たつた今、どんな命令にも従うと誓つたじゃないか。いやだというなら、痛い目を見るだけの話だよ」

私は恐怖に震えて、ホツクに手をやりました。今となつては逃れるすべもないのです。またどんなに哀願してみたとところで、この男の気持を動かせないことも分つていました。死ぬ思いで、私は一枚一枚と、脱いでゆきました。愛する父にも、ジョルジュにも見せたことのない裸体を、厭わしい男の眼の前に曝す辛さは耐えがたく、私の頬は無念の涙があとからあとからと滴り落ちました。

「なんて素晴らしい身体をしてるんだ。まるで大理石のダイナスだぜ。それにここの桜色はなんともいいえない





な」

と、ポールはさつき責めぬいた尻を叩き、舐めるように糸纏わぬ全身を眺めまわしていましたが、やがて私の腰に手をまわすと、

「さあ、これから存分に愛してやるよ」

言いながら、ベットの方へ連れてゆこうとしました。

思わず私は両脚を踏んばって抗いました。恐怖で痙攣してしまった良心がこのとき目覚めたのです。誘拐されたときから、私は予感におののいていましたが、いざという瞬間には死んでも争わねばならぬと決心していました。私は身をよじり、大声をあげ、夢中で暴れました。男の腕に爪を立て、足を蹴りつけました。

「まだ従順さが足りないな、よし、こうなれば力づくでやるまでだ」

冷やかな声でそう宣言すると、ポールはまたしても私を床に押し倒し、さつきの紐で後手に縛り上げました。

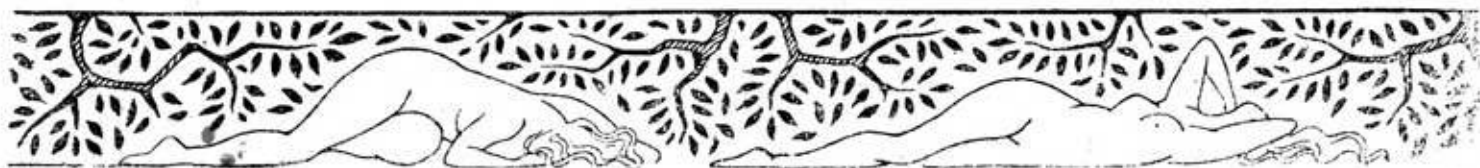
ああ、その時ほど女の弱さを悲しく感じたことはありません。いかに全力をつくしても私の両手はねじ上げられ紐の感触がまといついてくるのです。その上、私は前よりも強く猿轡をかけられ、虫のように呻く有様です。卑怯にも彼は、そうして一切の抵抗力を奪ってから、ベッドにひきずってゆきました。

浅間しい全裸の姿で、両手も動かせず、口もきけない私に、もはや何ができるでしょう！ 私は怒りに燃える眼で、彼が服を脱ぎ、やおらベッドに上ってくるのを眺めている外ありませんでした。私は………父を想い、恋しいジョルジュを想い、しだいに氣を失っていったのです。

二度めのいけにえ

意識を取り戻したとき、両手は解かれ、猿轡は外されていましたが、私の脱いだ服はどこかへ持ち去られ、依然として裸のままでした。もう日は午後傾き、食事の皿がテーブルにのつています。あたりはしんとして物音一つしません。

私は寝台の上に顔を伏せて、わつと哭き出しました。悪夢のような現実がいまハッキリ思い出されたのです。恋しいジョルジュにささげるべきものは悪魔の手で踏みじられ、それと共に清く明るかつた私の人生は永遠に過ぎ去ってしまいました。もはや私は砕かれた花です。天使メカエルといえども生氣を吹きこむことはできません。





ん。

だが、それが結末でなく、始まりなのだと思うと、いつまでも慨き悲しんでいられず、私は涙をおさめて立ち上りました。もちろん食事など採る余裕もなく、なんとかして逃れ出る方法を考えねばならないのです。

まずカーテンをそつと開きました。ところが、この部屋に唯一つの光線を投げる窓は手の届かない高みにあるばかりでなく、鉄格子が嵌つています。しかもその外にある高い石塀は視野をふさいでいます。したがって外部からはこの部屋も鉄格子もみえず、怪しまれるおそれもないのです。

私はドアを眺めました。いまはここ以外に出る道はありません。錠が下りているだろうとは思いますが、試みに押してみると、意外にも開くではありませんか。胸は急に激しく浪を打つて息苦しいばかりでした。奸智に長けた怪物のことゆえ、よもや手ぬかりないと思いがちながらも、ここでじつと夜を迎える気にはならず、思いきつて私は一足踏み出しました。

それは両側を壁で囲った長い廊下で、そのさきはまたドアがあります。そしてちやうど父の工場で見掛けたような、ドアの上部に窓がくりぬいてあつて、そこから幽かな光りが洩れているのです。

足音を忍ばせて近づき、そつと窓からのぞいたとき、万が一の希望はもろくも消え失せました。そこは狭い部屋でテーブルや椅子がならび、夫婦ものらしい男女が腰かけているのです。その男の顔を一眼見たとき、私は昨夜短刀をつきつけたあの三人組の一人だと直感しました。してみれば、ここは何か好ましくない犯罪の巢で、ポールは彼らと以前から気脈を通じているに相違ありません。そして、この部屋を横切らなければ戸外へ出られない以上、コッソリ脱け出すことは到底できないのです。

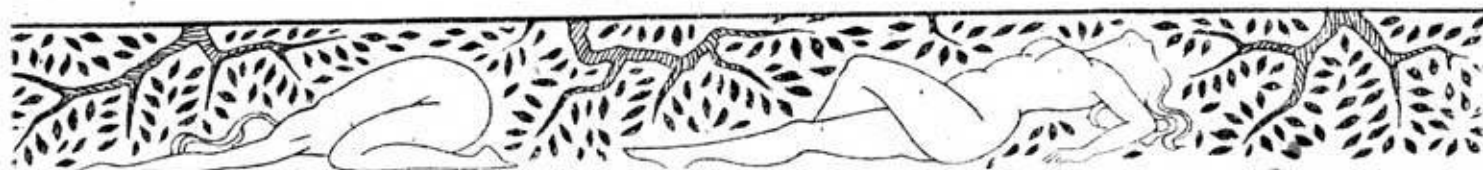
私は再び部屋に戻つて、みじめな自分の立場に泣きくれました。ひろい世の中で、なぜ私だけがこんな目に会わねばならぬのか。私は自分の美貌を慨きました。そして、神よおゆるし下さい、あのような男を創り出したのは果してあなたのみ心だろうかと疑わずにいられませんでした。

ポールが戻つてきたのはそれから一時間ほど後です。彼は手に抱えきれぬほどの包みを持つていました。

「どうして食事をしないのだい」

この怪物は、ふしぎに優しい声で言うのです。

「むりに食べるとは言わないが、もし断食で俺に対抗しようとしたら後悔するよ。俺はお前のどんな反抗もゆるさないし、かならず屈服させる手段をもっているんだよ」





私は眼を伏せ、齒をかみしめていました。

ポールが包みを解くと、私はおどろいてしまいました。まるで舞踏会に出るときのような華やかな衣裳と、高価な化粧道具がごろがり出たのです。

「すばらしい贈り物だろう」

ポールは私が呆然としているのを見ると、さも満足げに、絹の衣裳をとりあげて、私の足元に投げてよこしました。

「殺風景な部屋だが、当分ここを出すわけにはいかないから、せめて鏡でも飾ろうと思うのだ。お前の運命もきまつたんだから、いつまでも泣き顔を見せるものじやない。この服を着て、できるだけ美しく化粧してこの俺をよろこばせてくれることだな」

力づくで誘拐し、檻禁し、手ごめに会わせた揚句、この男は私を着飾らせて幸福な顔をせよというのです。でも、裸でいることは耐えがたいので、私はだまつてその服を着こみました。

「白粉も紅も、もつと濃い目につけるんだ。さあ、早くしろ、俺は待つてるんだぜ」

一つ一つ命ぜられるたびに、私は反抗の氣力を失つてゆきます。一つの屈伏が無数の屈伏につづくのです。あれほど輕蔑し、憎悪し、顔を見るのも忌わしかつた男が、いまは私を赤子のようにあしらうことができるのです。私は彼の好みにしたがつて、娼婦のように色濃く化粧しなければなりませんでした。

「もういい、もういい、こつちへ来るんだ」とポールは満悦して叫びました。そして、私を膝の上に抱き上げました。

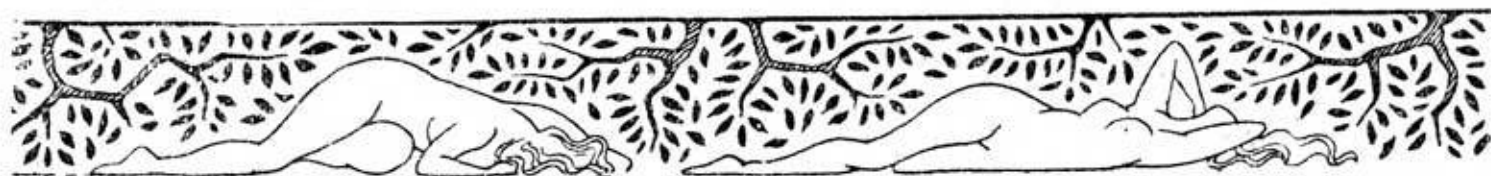
またいやらしい接吻と、右手のいたずらが始まります。私は人身御供のような氣持で必死にそれを耐えようとするのですが、容赦なく………れる右手に身をもがかずにはいられません。すると彼は「なぜ反抗するのだ？」と言つて、強く私の頬をつねるのです。

やがて、次第に興奮してきた彼は、嗚咽する私の頬を両手にはさんで

「いまごろお前の婚約者は、氣もそぞろになつて搜索願を警察に出しているよ。まさかこの俺が、こうしてお前と楽しんでいることは知らずにな」

とからかいました。

ああ、なんという残忍な言葉でしょう！ 私は身に焼けた鉄を当てられる思いでした。しかもそれがポールの





計画だと知つたら、無理にでも沈黙していたのですが、私はまんまと彼のワナに陥つてしまいました。

「ジョルジュ！」

私がそう呟くのを、彼はすばやく耳にしました。

「おう、ジョルジュ！、あいつがお前の恋人だつたのか」

そう言いながら、再び……を……の下に……こんだのです。

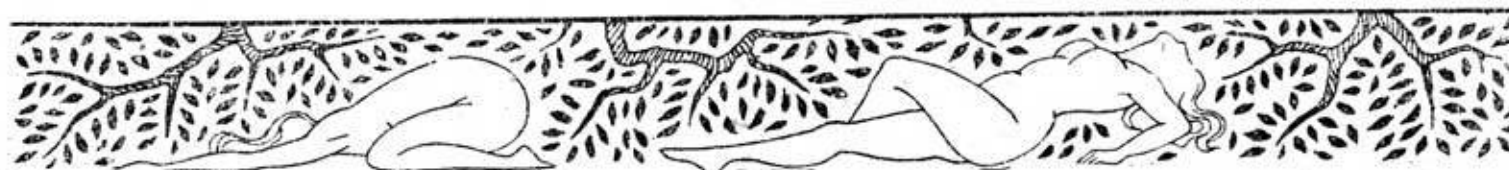
恋人を思い出させて、現在の屈辱をいつそう耐えがたいものにさせようとする彼の意図は成功しました。私はたつた今まで忍んできたことがどうしても耐えられなくなつて、彼の厭らしい腕を払いのけ、椅子から立ち上ろうとしました。後になつて分つたのですが、ポールは一方では私を奴隷のように柔順にさせると共に、他の一方では絶えず刺戟を与えて反抗させ、それを理由に私を責めることを好んだのです。彼の感情と称するものは一度も優しい形をとつたことなく、常に残虐な慾情の嵐でした。だからこのときも、私がしがき出すのを心待ちに待っていたのです。

「お前はまた言いつけに背いて、せつかくの衣裳を台なしにしたね。よしよし、その衣裳を脱いでもらおう。そして、改めて教育のやり直しだ」

両手をつかんで部屋の中央にひきずり出すと、彼はむりやりに服を剥ぎ取つて、また私をすつ裸にしてしまいました。私はたちまち泣き声になつて許しを乞いましたが、彼はかまわずベットのの上に投げ出してある例の細紐と猿轡を持つて近づいてきました。

「私が悪うございました。もう、どんなことでもききますから、縛るのだけはやめて下さい。きつと素直にしますから……」と私は手を合せて詫びたのですが、それも永くはつづきませんでした。彼は鷹のように私におどりかかると、両手をうしろにねじ上げ、今度は手首だけでなく、胸に廻して乳房の上と下とに紐をかけました。

一糸まとわぬ裸体にされるのさえ耐えがたい羞かしめであるのに、さらに両手を縛られるとは、思えば情ない限りです。しかも私はそれに価するようなことをしたのではなく、ただ苦しみ身に悶えたにすぎないのです。それでも私は抗議する勇氣はなく、ひたすら詫びつづけました。というのは、せめて猿轡だけでも免れたかつたからです。それは汚い布切れを押し込まれて息苦しいだけでなく、鼻から口へかけて拘束された姿が眼にうかぶと一種の説明しがたい羞恥と苦しみを感じるからです。その後もそうでしたが、私は手足を縛られるよりも猿轡を恐れました。だが、なぜかポールはそれが好きで、後に述べるように毎日、ときには半日以上もその責め苦を





味わせるのでした。

その時も彼は私を後手に縛り上げると、さつそく猿轡をかけ、それから足首を縛りました。そしてベッドへ寝ころがすと、自分もその横に寝そべって、動けぬように胴をしつかり……自由な片手で……

びはじめます。

優しい愛情と処女の誇りに包まれて育った私は、たつた一日の中に無残にもこの男の獣慾の犠牲となつてしまつたのですが、だからといって羞恥心が少しでも鈍つたわけではありません。ですから、想像も及ばない嗜虐的なやりかたで弄ばれることは、全く気も狂わんばかりの思いでした。しかも彼は、どうすることもできない私が一つまた一つと……ために洩らす猿轡の下の呻き声を至上の音楽のように楽しんで、ゆるゆると、間を置いては、責めつづけるのです。こうして私は腹の底まで淫虐の泥を飲まされるのです。

足の紐だけを解かれ、ふたたびいけにえの祭壇に上つたのは、もう夜でした。それが済んでから彼はまた私の足を縛り、死人のようなからだを抱きしめたまま眠りにおちました。私が一睡もできず苦しんだことは申すまでもありません。

奇妙な折檻服

地獄の夜が明けて朝がきました。ポールはいつものように工場に出かけず、部屋に食事を運ばせました。盆を持つて入ってきたのは、前日あの廊下からのぞいたときにいた女でした。

彼女は、やつと手足を解かれ裸のままベッドの片隅に震えている私を見るなり、びつくりした声をあげました「いい身体してるねえお前さん、まるで大理石に血が通つてゐるみたいだ。これじやどんな男だつて食指が動くわねえ」

「よけいなことを言わないで、アンリを呼んでくれ」

ポールはむつとりして命じました。

やがて、監視部屋——そうとしか思えません——の男が入つてくると、ポールのテーブルに近づいて椅子に腰かけましたが、私の姿に灼けつくような視線を注ぎます。私は眼を伏せて身動きもできませんでしたが、ポールはそんなことにお構いなく、葉巻に火をつけて、ちよつと考えこんでいました。

「じつは外でもないのだが、どうやらここも安全でなくなりそうなんですね、河岸を変えようかと思うのだが」





「嗅ぎつけられましたか」

と、アンリは膝をのりだしました。

「いや、まだ大丈夫だ。しかし、うるさい奴が俺の跡をつけようとしてるらしい」

「じゃあ、そいつをバラしちやつたらどうです」

その一語で、私はぞつとしました。というのは、なぜかそれがジョルジュのような気がしてならなかったからです。

「それはまずいよ」とポールは言下に答えて、「俺は人を殺したくないんだ。そんなことをすれば問題は大きくなる。それより、安全なところへ移して、事件を迷宮入りにしてしまうつもりだ」

「しかし旦那」と、男は私の裸体をむさぼるように眺めながら、

「ここはリヨン中でいちばん安全なところですよ。それに、いまはどんな馬車でも調べられる恐れがあります。移すにしても、ホットボリの冷めるまでは動けやしません」

「それもそうだが……」と、彼ははじめて私に一瞥を投げました。

「まあ、そのことはもう少し考えることにしよう。俺は出かけなくちやならんが、これに何か着せるものはないか」

「旦那があんな衣裳を買ってきたから、この女の服は私が頂戴したんですが、それを持つてきましょう」

女は残念そうに呟いて、出てゆきました。ドアがしまり、足音が遠去かると、アンリは急にこんなことを言い出しました。

「ポールの旦那、お願いがあるんです」

「何だね」

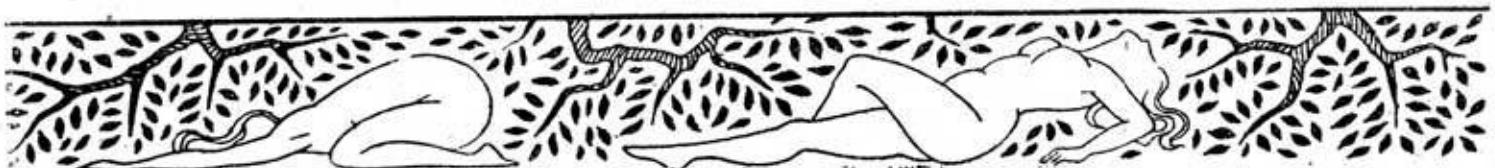
「この娘ですがね、もう旦那はさんざんおたのしみになったんでしよう。ついては如何でしょう、私にもお相伴さして欲しいんですが」

「ばか言うんじゃない。お前にはジュリイという、れつきとした女房がいるじゃないか」

「女房は女房ですよ。第一、これとは比較になりませんや」

「それだけは断るよ。こいつはまだ、俺にとつても必要なんだからね」

「それは分つてますよ。なにも譲つてくれというわけじゃないんです。旦那の留守の間、ほんのちよつと自由に





させてくれればいいんでさあ。だつて、こうして毎日傍にいておあずけ食っているのは、辛いこつてすぜ」
この男は全裸の私に、急に慾情をそそられたとみえます。狼がまた増えたのです。私は生きた心地もありませんでした。

だが、こればかりはポールも承知しませんでした。彼はあくまで私を独占しておきたかつたのです。
「お前にはたんまり報酬をやつてるじゃないか。女を自由にすることだけはいけない。これは飽くまで俺だけのものだ」

「旦那がどうしても承諾して下さらなきやしかたありません。だが、いくら報酬を貰つていても、私も危い橋を渡つてゐるんですよ。金だけで満足しろというのは、すこしばかり無理でさあ」

アンリという男は、明らかにポールをゆすつてゐるのです。ポールもそれに気づきました。二匹の狼は險惡な表情で睨み合いました。ポールは、自分の留守にこの男がどんなことをやるか分らないと感じたらしいのです。そこへ、アンリの妻が私の服をもつて現われました。

「いや、ちよつと待つてくれ」とポールは言つて、部屋の中を歩き廻りました。ジュリイはポールのイライラした様子と、裸で震えている私と、それに燃えるような視線を注いでいる夫とを見比べていましたが、たちまちその場の空気を悟つたらしく、みるみる顔色が変わりました。

「お前さん、まさか、へんな氣を起したんじゃないかね」
と彼女は言いました。

「もしものことがあると、私が承知しないよ」

「えい、だまつていろ！」

アンリは押し殺すような声を出しました。

「ふん、黙つちやいられるもんか」

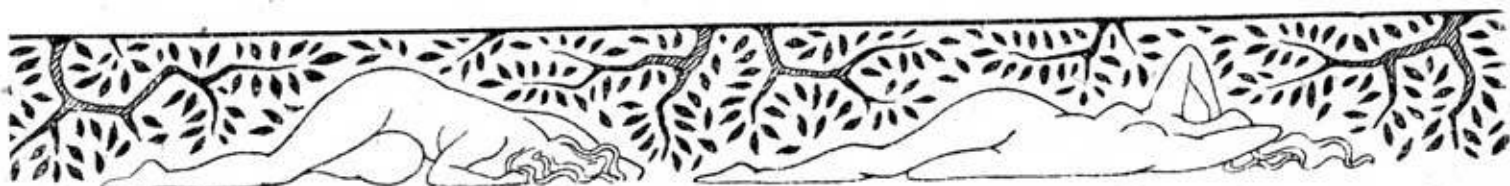
「お前の知つたことじゃないんだ」

「その言い草は聞き捨てならない。ポールの旦那、一体どうしたんです？」

ポールは足を停めて、苦笑しました。

「すつ裸のクリスティーヌが、ちつとばかしお氣に召したらしいのさ」

そこで、アンリとジュリイの激しい喧嘩が始まりました。ジュリイは嫉妬で狂氣のようになり、今にも掴みか





からんばかりです。ついにポールが仲裁に入りました。

「まあ静かに俺の言うことを聞いてほしい。事の起りはクリスチーヌだ。たしかにアンリの気持も分らなくはない。だがジュリイにしてみれば、よその女に手を出されて我慢できるものじゃない。……そこで俺は妥協案を出そう。まず、アンリはクリスチーヌを冒してはならない」

「すると、どういうことになるんです」

興奮してアンリは叫びました。

「だが、最後のものを奪わなければ、どうしてもかまわない。抱こうとキスしようと、いいことにしようじゃないか」

「そう巧くゆくもんですか」

と叫んだのはジュリイです。

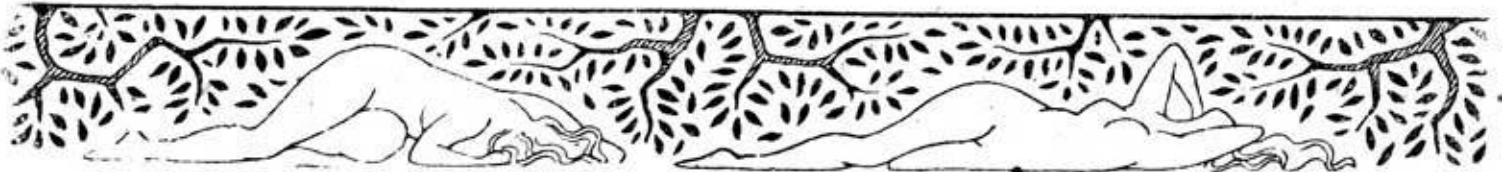
「それには方法があるんだ。お前のところに作業服があつたね。あれを持つてこい」「ひどく汚れてますよ」

「なお結構さ。その上衣とズボンを、クリスチーヌの身体に合せて縫い縮めるんだ。次に、ズボンの前を縫い合せ、上衣とズボンも縫いつけてしまふ。着たり脱いだりするためには、背中を切り開いておいて、靴の紐を結ぶように平生は編み上げておくのだ。その最後の結び目に、俺は封印する。その封印を切るのは俺だけだから、これならジュリイも安心できるだろう。……その代り、アンリが服の上から抱きしめたり、いたずらする位のこと

は大目に見てやらなければいけないよ。どうだ、これで三方うまく納まるじゃないか」

アンリはまだ不足らしかつたが、これ以上の要求は無理と思つたらしく、しぶしぶ承諾しました。ジュリイも不平をならべ立てしましたが、最後の牙城を巧みに防いだポールの方法にすつかり感心してしまい、さつそく作業服を持つてきて、いそいで仕立てにかかりました。

それにしても惨めなのは私です。こんな妥協ができた以上は、それこそ夜も昼もなく、彼らの手から免れられつこないのです。たとえポールの奇抜な方法で、アンリから最後のものは奪われないにせよ、それ以外のどんな厭らしい攻撃をも避けることはできないのだから、思つただけでも息が詰まりそうです。私はとめどなく涙を流しながら、どうかそんな気狂いじみた考えはやめてくれるように願いましたが、もちろん聞き入れる筈もありません。彼等の利害関係の前には、私は一箇の品物にすぎないのでしよう。私は丸裸のまゝ三人の前に立ち、直立不動の姿勢をとらされ、腕、胴、腿の附根から足首までの長さを計られました。そのとき、姿勢が崩れたといつ





てジュリイは毒づき、ポールは尻を革の鞭で叩きました。

やがて、でき上った服を着せられる番です。背中しか割れていない服ですから、とても一人では着ることも脱ぐこともできません。三人が寄つてたかつて、私の両脚をまずズボンに突っ込み、次に両手を通し、むりやりに押し込んで、腰をバンドで強く締めます。それから背中を太い紐で交互に穴を通して結び上げました。ポールは最後の結び目に薄い紙を巻きつけ、糊で閉じた上に、さらに封蠟で印をしました。

「さあ、これでいい」

ポールは手を打つて笑い出しました。

ああ、なんという変り方でしょう！ 男装は神の許したまわぬことで、いまだかつて私は見たことも聞いたこともありません。それに私は肌着も下穿もつけていないのです。そのため油で汚れた作業服の粗悪な布地がじつとりと肌にまといついて、間断なく刺戟されます。しかもジュリイが胴の長さを故意か偶然かちぢめたので、ズボンは痛いほど股間をしめつけます。だが何よりも辛かつたのは、それがあまりにも身体にピッタリ作られたことでした。胸は乳房の形を露わし、バンドでくびれた下腹から腿や尻にかけては脱ぐにも困難なほど密着して、わずかに膝から下が緩やかなのです。女でズボンを穿かされたということ、それが汚れ切った布で、しかも裸体同然だということで、私は二重の恥ずかしさに苦しめられました。

ポールは私をひきよせ、ちやうど商人が品物を検査するようにあちこち眺めまわし、叩いたり撫でたりして、蠟の封印をもう一度たしかめてから、

「さあ、アンリ。たしかに預けたよ。封印さえ切らなければお前の自由だ。どうしてもおもちゃにするがいい。但し、大切な品だからひどく傷めては困るよ」

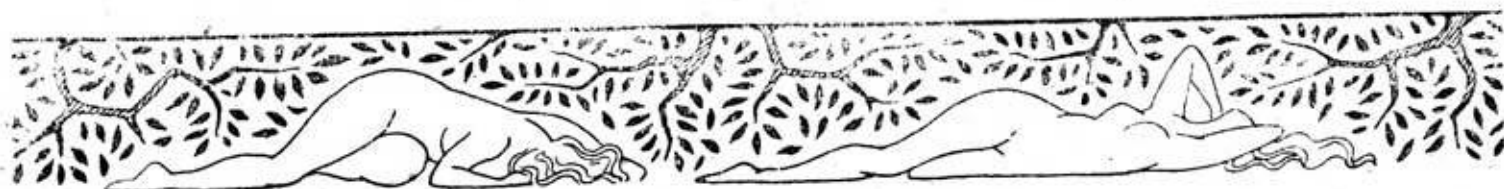
と言いつち、自分の思いつきを誇るように口笛を吹きながら部屋を出てゆきました。

あとに残つた三人の立場はまことに奇妙なものでした。私はこれからどんな眼に会うのかと思うと身動きもできませんでしたし、アンリは射抜くような眼つきで私の異状な服装を上から下まで眺めていました。それはまるで餌食を前にした猛獣がどこから飛び掛ろうかと思案しているようでした。

「ちえッ、大した貞操帯を發明しやがつたな」

彼が吐き出すように言くと、ジュリイはそばから、

「それだつて色事の真似はできるよ」





と、トゲを含んだ声で言いました。

「だつて、こいつが便所へ行きたいと言つたらどうするんだい？一々脱がせてやる外ないじゃないか」

「ふん、そんな世話までやるものか。ボールの旦那が帰つてくるまで、何がどうだつてお前さんが脱がしちやいけないんだよ」

さつきから私はこの女の眼つきをいちばん恐れていたのです。女だけの知る感情とでも言いましょうか、その眼は暗い嫉妬に燃えているばかりでなく、一方では私の苦しみ悩むのを悦ぶ一種異様の残忍さに輝いていたからです。

この種の生活者によくあると思いますが、おそらく彼女は夫の好色をよく知っており、そのため激しい喧嘩をやるくせに、最後に憎むのはその夫でなく、夫の対象となる哀れな犠牲者なのです。ましてや私はこの男を好きなどころか、身震いするほど厭なのに、ただ夫が惹かれたというそれだけのことで、全部の責任が私にあるかのように、敵意をこめた眼で私をにらんでいるのです。

更におどろいたことは、この下劣な女は、夫が私の貞操を奪わぬかぎり、そのほかのどんなことをしても許せるらしいのです。

「眺めてばかりいないで、早く好きにしてごらんよ。私はここで見物してるからね」
ジュリイはこんな言葉を吐きました。

私の背筋を戦慄が走りしました。思わずうしろにさがると、椅子にぶつかつて、私はよろけました。

「往生際が悪いね、クリスチーヌ」

そう言いながら、アンリはそろそろと近寄つてきました。

愈々完結篇 ックリスチーヌの受難 (第三回) //

逃亡の試みと失敗の結果

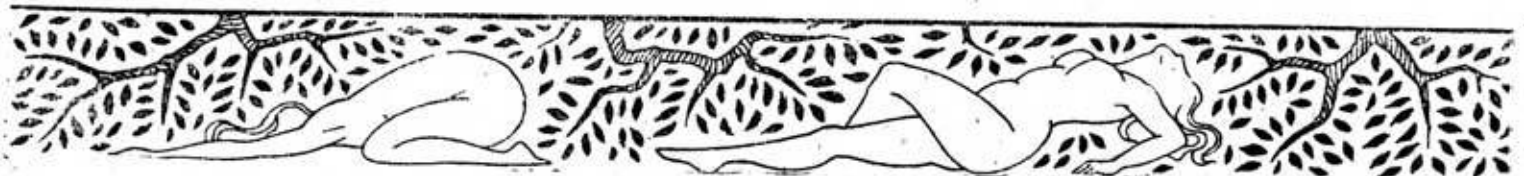
奴隸宣告、さまざまな折檻、

結 末

次号八月号 //

益々佳境

乞御期待



—其頃を語る(二)—

辻 番 附 の 話

伊 藤 晴 雨

もりかけ各一錢五厘宛、そばと湯銭は維新前から同額であつたものだと故老の話に聞いて居ましたが入浴料も大人、金二錢五厘、小人、金一錢五厘、乳香児八厘と定価表には記してあつても大抵五厘が相場であつた。新築の二階六畳一間に床の間が附いて畳が新しくつて前納一ヶ月分二円五十錢といへば最高級、「二階かし間あり」の札を見て即日引越しが出来た時代の事。其頃の食生活の標準として仕出し屋の三食弁当が最高一食四錢（當時は五厘が単位になつて居た）で刺身に吸物が附いて来た。香弁というのは奈良漬、ラッキョウ等のつけ合せてトント大阪市内のドブ附けと同じ様な弁当、飯が充分詰つて居て定価は二錢五厘、一日十三錢五厘あれば優に中流生活の食い物に有り附け、十五円の収入があれば二円五十錢が家賃で二畳、四畳半、六畳、外に台所三畳の長屋に住まえ、家族三四人樂に生活が出来たという、今から思えば嘘の様な物価の明治三十年頃には演劇の宣伝方法が極めて幼稚で新聞広告を利用するのは歌舞伎新富明治座の一流劇場の事で廻り舞台と引幕を許可されなかつた二流三流の俗称綴帳芝居は辻番附というものを市中の理髪店、浴場、焼芋屋等の人の集まる所に掲示して開

場を知らせる以外には何等の方法も講じる事を知らなかつた。電車も自動車もなく大衆小説作家の故前田曙山君の細君が自転車に乗つて向島の土手を通つたら一度で附近の話題に上つた時代であつたから辻番附だけで宣伝が出来たものと思われる。

辻番附といつても現代の青年諸君は見た方が少ないと思われるので概念的に説明すれば大きさは新聞紙の約一頁より少し大きく日本紙の証全判位の紙（後には模造紙になつた）に木版印刷で座名、開場の月日、観劇料、狂言の表題、俳優の役割等を全部、一枚に記載し、輪廓の中に狂言の全場面を画いてあるが其構図は一見して劇全体の脚色を略推知し得べき様に描かれてある。

奥庭の松に女が吊されて責められて居ると敵役が丸窓から覗いて居る。其松の木の一部は崖になつて居て崖の上には辻堂があり、其崖の一部が川になつて居る。川の上部が海になつて居るといった様に寄木細工の様に排列された極めて不合理な遠近法を無視した画面であるが序幕から大詰迄説明なしでも略判る様になつて居るのが辻番附の特色であつて辻に立つて之を見た者に観劇慾をそゝる様に巧に描かれて居る。此構図を考えるのは狂言作

者の仕事である。(別図参照)

之れを東京市中の人の目に付き易い場所に帖つて置くので辻番附という名称が起つたのであろうが道路に広告用とした場合は辻番附と云い、観劇中に観客に配る場合、或いは俳優から最負先へ贈呈する場合には之が「通し」という名に変わるから妙である。其頃の東京市民は辻番附の前にポカンと立留つて甲を評し乙を品して芝居の評判をして居た。

辻番附なるものは大正の末期から昭和の初期に到つて自然消滅して仕舞つたが其最後の画家は甚だ鼻白む次第だが、翁、翁と本誌の読者から翁扱いにされる晴雨であるので責の番附を描いた理論から辻番附の話を記して責の文献として演芸専門の雑誌にも未発表の話を書く事にする。

此の通しといふ辻番附という異名同一画は前にも云う如く文字無くして芝居の荒筋を想像し得べき様に描かねばならないので随つて主要人物の外に端役から仕出し迄細密描写をせねばならぬ。又其画面を見た丈で甲の役は誰が扮し、乙の役は誰が扮するかという事を主客の区別、俳優の地位に応じて大小の比例を考へて描かねばならぬ。座長格や書出し格の俳優の役を小さく描き、名題下(新派な

らば幹部役以下)の役を大きく描くと上位の俳優から苦情百出して其通しは使い物にならなくなつてしまふのである。

東京にはそうした事は少ないが、大阪の旧俳優となると番附に役者の定紋が描いてある(現在でもそうだと思う)雁次郎ならばイ菱延若なら重ね井筒、という様に定紋がついて居るが其紋の大きさに不同があると苦情百出番附屋さん大困りという、神経質の役者になると何ミリという些少の相違迄苦情をいうものである。夫れかくの如くウルサイ役者に納得の行く様に平均に人物を描くのは相当な技術と熟練を要するので学校出のホヤ／＼先生では手も足も出ない仕事である。旧習と一口に蹴飛ばして仕舞えばそれッ切りであるが人に知れない技巧を要するものだ。

これを開場初日の二、三日前に街頭に吊り下げて置くのだが現代ならば半日も経たぬ中に破かれて了うであらうが人間が呑気だったのか将又、道徳性が高かつたのか、何れにしても其芝居の千秋楽迄破れもせずに完全に宣伝の目的を達して居た。

私は当時丁稚小僧にやられ月収として主人から貰う小遣は金五銭であつた(一日に五銭宛ではありませんぞ)これである賣場の絵を

コレクしようとしても手も足も出ない。如何に物の安い頃でも五銭はやはり五銭にしか通用しない。餅菓子は一銭に二個、焼芋は一銭に七本、古本屋で草双紙を見附けても二、三銭するので窮余の一策、目的には手段を選ばず、義を見て為さざるは勇なきや、と古人の金言を実行に移して件の辻番附のドロボーを思い附いたのであつた。

日本髪が多かつた(全部の女性が日本髪)時代、髪油の匂いは青春の血を漲らせ、性の眼を開けて呉れた神様は通常人と違つた「縛られた女」にウツボツの水の捌け口を見出した。転々反側、深夜五分芯の光を頼りに美人画のスキ写しをして縄を書き添えて居たが年と共に責め場の蒐集癖となり、主人の代理として町内の葬礼の帰りに辻番附で見覚えた小劇場の女の責場「明島夢泡雪」や「好色敷島譚」の責場を一幕見物して夜に入つて主家へ歸つて、叱られる事数十日に及んだが、此の蒐集癖の結果、集めて置いた天保、文化より明治、大正に到る責場の資料無慮数万を戦災の為、一物も残らず失つてしまつた。

以下辻番附の筆名と女の責場の脚本、其作家、責の方法等を逐号記して日本演劇史中責場の文献として本誌の読者に一読を煩わした

く責の絵を描きつづけて五十年、さゝか記述の筆を進めたいと思う。

明治三七、八年後の本郷座全盛時代には新派正劇といつてDORAMAと洋文字を入れた辻番附がどんなにハイカラ（という言葉さえ今は昔になつたが）なものであつたという事は学生町の本郷座だからコケオドカシが利いたのだと思います。辻番附を見て筆者は責場の蒐集を思い立ち興行中の責場の画面を通行人のスキを見て切り取つて歩いたのはたしかに盗みセツ盗の所為で完全なドロボーであつた。人の目を盗み物を盗む事に怪しからぬ行為で、それが動機で後年芝居に飛び込み、伊井・河合、喜多村等の番附や絵看板を描く様様になつたが、余り馬鹿々々しい役者本位の話しがある。

大阪劇壇の作者、小島孤舟作「靈火」を焼直した真山青果のある脚本であつた。河合武雄の女高利貸の役を大きく描いてくれという河合武雄の注文であつた。（当時の辻番附は一応印刷にする前に大谷竹二郎社長に見せ幹部俳優に通眼を通して貰う習慣になつて居た。）其時、河合は自分の役が小さ過ぎるからモット大きく描き直せというので大きく描き直してやるとモット大きくしろくと

【読者通信】——投稿歓迎——

先日雨の降る晩、お泊りのお客さんがおいていつて下さつた奇譚クラブを読んで妾も何かお便りを書きたい氣持が起りました。妾は満二十才になる無学の女です。朋輩はお屋から皆映画ノ縮図ノを見るんだといつて出かけてゆきましたのでひっそり閑としています。妾は今二階の窓から向い家の手すりに乾してある長繻絆を何んとはなしに眺めながらこのお手紙を書いています。妾は今迄自分のことについては何にも知らなかつたのですが御本を読んでから妾の氣持もはつきりした様に思います。妾今年の二月から此方へ来て居りますがこの商売についてには少しも嫌な氣持はありません。それよりも夕暮になるといつも妾の心を妖し

くゆさぶり得体のしれないものに悩んでいたのです。妾はこゝへ来る迄浜大津に居りましたが、そこで工事場の飯場で飯炊きをしていた時知り合つた前夫と十八で結婚したので。一年半ばかり同棲の上別れたその前夫がどこをどう尋ねてきたのか一月程前やつてきてお客として上つてゆきました。そして三日に一度は妾目当にやつてくるのです。今の妾には忘れる事の出来ない馴染の客もありますが、彼は来る度に妾に無理難題をふつかけて責めるのです。何故彼と別れねばならなかつたか、いろいろ書いてお送りしたいと思うのですが、よろしいでしょうか、名前は今使っている源氏名です家の名は少し変えておきました。

（大阪・橋みどり）

○御送稿をお待ち致します（編集部）

再三描き直しを命ぜられた。私も少し面倒臭くなつて通常人の五倍位の大きな顔に描いてやつたら「これでよし」と来た。版下で見た時と印刷になつてからの感度を河合君は知らなかつた。其儘印刷に附して出来上つたらサア大変、大きいも大きい、全体の調和をブチコワす程の大首がボカリ浮き上つて今更日限

が迫つて居るので改作も出来ず閉口して「ヤアこれはしまつた」と頭をかいて居た。

新派の名優、河合武雄一代の縮尻話と役者氣質の標本としてかくの如し。（未完）



手記

妻は縛らず

岡田圭介

はない。

縛られた女の姿態に好奇と憧れの気持を持つようになったのは何時の頃からか。とにかく随分古く、幼年期にまでさかのぼる。

映画館の看板やスチール写真に、縛られた女優の姿があるのを見ると、矢も盾もたまらず、母から小遣金をせびりつつ、終日観て暮した小学生の頃から、風俗雑誌や写真を筐底深く秘めて、飽かず繰返し眺める今日まで私の半生は、「縛られた女」への異常な執着を中心として貫かれて来たと言つても過言で

一昨年の暮、恋愛の過程を通つて妻をめるに当り、「縛られた女」の姿態を自由に愉しめなくなるであろう結婚後の生活に思いを馳せて些かためらわざるを得なかつたのもそのためであつた。もちろん、妻に縄をかけて

「縛られた女」のイメージを現実化することを考えないではなかつた。だが、私の場合妻にそのようなことを要求することは気が進まなかつた。夫婦生活と家庭に尊厳と神秘を求める心が強かつた私は、妻に縄目の恥を味わせることによつて、それが冒瀆といわな

ところをいえば、妻の性格や体質が「縛られた女」のイメージにマッチしていないことが主な理由であつた。だが、また知らぬ結婚の愉しみへの意欲が、私を駆つて恋愛から結婚への途を踏ん切らせた。

たしかに、新婚の当初は「縛られた女」への憧れは忘れられた。私の筆で書くのもおかしいが、妻は容貌の点でも、性格の点でも、私に過ぎた女であつた。私は世間の夫たちと比較して、決して不幸な夫ではなかつた。

ダンスの底に不用意に隠し忘れていた「縛られた女の写真」の数葉を妻に発見されたのは、三月ほど経た或日のことであつた。包装紙の包み具合で、それが妻によつて見とられ

たことを知った私は、内心の秘密をアバかれた羞恥と不快を感じた。日頃、社会科学書を座右から離さず、社会の矛盾と不正との闘いを情熱的に説く私の半面をのみ見せていた妻に、おゝいかくしていた他の半面をはつきりと知り尽くされたことは、自己嫌悪の気持を私に抱かせた。私はこのことについて妻から詰問されるであろうことを予期し、落着かぬ気持で数日を過ごした。

果して、或夜、床の中でペーゼを交わしたあと、突然妻は言つた。

「この間、私、変な写真を見たわ」

それは、詰るようなヒビキではなかつたが最愛の夫が変質者ではないかという疑心心配混濁した声音のように思われた。トツサに、私は用意しておいた答弁をした。

「どんな写真？」

「……タンスの底にあつたの」

「あゝ、あれか。金に困っている友達から預つたんだ。金を貸してやつたカタにね。」

「どうして女の人を縛つて写真撮るの？」

「知らないよ、そんなこと。カタだとかから預つたんだが、あんなもの置いとくの嫌だから、この間返してやつたよ。」

「……………」

半信半偽のまゝ妻は黙つてしまつた。このとき、フト私の頭をよぎるものがあつた。

（女房のヤツ、自分も縛られて見たいんじゃないかな？）

だが、私はすぐこの想像を打消した。たとえそうであつても、前にもいつたように、妻を縛りたい気持はサラ／＼起らない。なぜなら、私の場合、現実に縛つて見たいという意欲を起させる女には、幾つかの条件が必要であつた。少くとも

① 全然他人であること（家庭の中にこの遊び／＼を持ちこみたくないという気持から

② 肥満型であること（妻は痩せていた）

③ 二十才未満であること（大人くさい思慮分別の介在は遊び／＼の妨げである。妻は二十五才であつた）

以上三つの条件は不可欠であつた。妻に対しては良妻賢母であること以外に、私は望むべき何ものをも持つていない。

写真の一件は、このようにしてウヤムヤに解決されたが、それからは「縛られた女」への憧憬をます／＼ひた隠しせねばならぬ気持に自ら追いこまれ、はた目には幸福そうな夫婦生活に、私は充分浸り得ない気持を積み重ねていた。

その頃、昨年の夏、私は飯山康子という女性を発見したのである。

彼女は、新制高校を了えたその年の四月、私の勤め先に採用された娘である。色の浅黒い、小肥りの、目元の美しいほかはこれというとり得もなかつたが、一寸男好きのする感じを持つていた。かなり大柄な方で、高校時代にはバスケット・ボールの選手をしていたとかで乳房も腰まわりも、すでに成熟の域に達していた。その康子が、七月になつて、私の所属する課に編入されて来たのである。

それまで、妻以外の女性に関心を持つとうとしなかつた私であるが、康子を一眼見たとたん、甘酸っぱいものが胸にグーンと込み上げてくるのを覚えた。

隆起した胸を軽いワンピースにつゝみ、腰を振り／＼お茶を運んでくるこの娘の稚顔を見るたびに、私の心臓は高い鼓動を打つた。「縛られた女」を写真や絵の世界のみで憧憬しそれで満足していた私が、現実の世界で女を縛るとしたら、この飯山康子以外にないと思ひこみ、彼女の服も下着も剥ぎとり、両腕を脊後に捻じ上げ、細引でキリキリと縛り上げることができたという想念が、日増しに私の胸を苦しめ責め立てるようになった。

映画館の中で不思議な快感を覚えた幼い頃から、空想の世界でのみ女を縛っていた私は妻をめとり、三十に手が届いた今になつて、はじめて現実の世界で女を縛りたい欲求に駆られ、その対象を発見したのである。

飯山康子を縛ることができたのだつたら、私はもう何も要らないし、すべてを犠牲にしてもよいとすら考えるようになった。妻を抱いている最中ですら、高手小手に縛められ、苦しみ悶える康子の裸身を空想しないでは、満足できぬ始末であつた。

「あゝ康子を縛りたい！」

と、日夜私は懊悩し、声なき声で叫びつづけた。一方、夫に対する妻の敏感さで、私の内心の異変に妻が気がつきはしないかとの恐れで、私は絶えず緊張し、妻に安心感を与え、するためにいろ／＼気を使わねばならなかつた。私は疲れた。こんな状態がつづけば、一切が駄目になつてしまうのではないかとすら考えられた。

たとえ暴行罪に問われることになろうとも彼女を一度は縛つてやろうという棄鉢な気持ちにまで私は迫りつゝいた。幸か不幸か妻は妊娠し、翌年早々実家へ引取られることになつてゐた。私は、これを機会とし、それにすべて

を賭けた。

ところが、康子を縛る機会は思いもかけず早く現われた。恒例の秋季運動会の準備委員に選ばれた私は、突嗟に一つの思案をめぐらしたのである。

「まず、一般競技種目を定めるに当つて『パン喰い競走』を入れることを主張した。女子委員から二、三反対があつたが強引に押切り出場者は手拭で後手に縛られてスタートしフールド中央で、吊下げられたパンを喰えて決勝点へ駆けこむという競技方法まで決定させた。

「本当に縛らなくても、手を後に組むだけでいゝじゃないか」という反対意見を予想したが、それは出なかつた。

次に、職場へ帰つてから、飯山康子に、その競技に出ることを無理に納得させた。

「パン喰競走なんて嫌だわ」

脚力に自信のある彼女は、短距離競走を予定していたが

「この種目に出場者が少いと、提案者として面目ないことになるんだ。頼む」

不穏な気持ちを胸底に秘めながら、平生何くわぬ顔で、他の横柄な同僚と違い優しく接する私を慕しいものに思つていた彼女は、この

言葉にしぶ／＼ながら従つたのである。

当日、黒いブルマーから太い健かな脚を惜し気もなく露出した彼女を、

「しつかり頼むよ。提案者の課から、ぜひ一等を出したいからね」

と変な理由をつけて激励しながら、私は出発点までついて行つた。

「大丈夫よ」

康子は無邪気な声で、出発準備の地点で足ぶみをしながら、私にくるりと脊を向け、

「ゆわいて」

と手を後にまわした。私は閃光に打たれたようにクラ／＼とした。迂余曲折の末、ようやく恋人の手を握ることのできた果報者の味わうと同じ心の昇天を私は感じた。

「どうしたの？」

向うむきのまゝ、私を促す彼女の声に、我に返つた私は、慌てゝ彼女の手首に手拭をまきつけた。

「痛つ」

康子は思わず悲鳴をあげた。

「途中でほどけちゃうとみつともないからね」

私はおかまいなしに強く締めた。

一等はもちろん彼女であつた。私は決勝点

で彼女を待ち受けた。彼女は、パンを喰え、上気した顔で、後手のまゝ決勝点へとびこんできた。私は彼女の後にまわされた両腕をつかみ

「偉い、く」

と賞め、そのまゝの姿で控席へ連れてくると

「我が課のヒロイン康子嬢を紹介します」

とおどけた。歓声、奇声の中で、彼女は恥ずかしそうに縛られた自体をくねらせた。

このことがあつて以来、私はぐんぐん彼女に接近していった。〃奥さんのある人〃というだけの理由で、康子は少しも私を警戒せず兄のように私になつて来た。

先ず第一段階は成功——と私は内心に笑みを洩らした。次には彼女の唇を奪うことだ。

断つておくが、私は彼女にいわゆる恋愛感情を抱いていない、私は妻を深く愛している



妻以外の女性に私は愛情を持つとは思わず、また持てそうにもない。妻も私を信じている。やがて子供も生れる。

康子の唇を奪うのは、飽くまでも彼女を縛りたいためだ。両腕に喰いこむ縄の痛さに眉をしかめ、身をのた打たせる彼女の姿態を見たいからだ。

女は、何でも無い男に黙つて縄を打たせる筈がない。最後のものを奪われてもいゝという覚悟がなくて、どうして裸になり、おまけに縛らせたりするのであろう。

だから、彼女から性の歓喜を得ようなどという気持は毛頭ないが、彼女を縛るためには先ず唇を奪い、次にはすべてを私に捧げて悔いなしとの気持を彼女に植えつけねばならない。

かくして、私は手練手管のかぎりを尽くした。忘年会の夜、彼女の唇はついに獲得した私にしがみついた康子は、歓喜の息吹も激しく身悶えた。豊かな乳房を惜し気もなく私の胸に押しつけ、彼女は私の次の行動を待たした。しかし、私は彼女の身体を静かに押し離し、新春の三日、駅で待合せる約束をして彼女を帰らせた。

著しく腹のせり出した妻は、肩で息をしなから、翌日、私に介添されて実家へ落着いた。

「留守中のことは心配するな」

私のいたわりの言葉に、何の疑念も持たず彼女は久しぶりに会う両親や弟妹と若やいだ声で話し興じていた。私は後めいたものを感じつゝも二三日世話になり、口実をつくつて三日の朝、そこを辞去した。

駅にやつて来た康子は、初めて和服姿を私に見せた。新たな情慾の燃えあがりを抑え、その日は型通りのアベック行に、歌舞伎座の

新春興行を添え物とした。康子は、私に掌をあずけ、肩をすり寄せて熱い呼吸を洩らしていたが、帰途は流石に言葉が少かった。妻ある男と、深みへ入つてゆくことを恐れていたに違いない。

（違うんだよ、康子。僕はただ君から緊縛美を見せて貰うだけでいいんだよ）

彼女の肩を抱いてやりながら、こんなことを心の中でつぶやいたが、彼女を縛るための手段としてその心を掴んだことが、とり返しつかない罪悪であつたことに、私は次第に気がつきはじめていた。しかも、その半面、彼女が苦しみ、今後ますます苦しむであろうことに悪魔的な喜びを感じていることも事実であつた。

翌日、康子は私の家を訪ねて来た。彼女はすでに意を決していたらしいが、私はわざと昨日の芝居の話から始めた。

「昨日はどれが一番よかった？」

「さあ……私、歌舞伎は余りよくわからないのでも、番町皿屋敷のお菊、可愛想だったわ」「昨日のは岡本綺堂の皿屋敷だけど、もう一つ別の皿屋敷では、お菊はずい分残酷な眼に合はされるんだよ」

「どんな？」

「縛られて井戸に吊され、胴斬りにされるんだ。あぐくは幽霊になつて出てくる……」

「ずい分ひどいのね」

「江戸時代にできた歌舞伎には随分ひどいがあるよ」

「ザンニンだったのね、その頃の人は」

「ザンニンなんじゃないよ。美の追求だよ」

「美の追求？」

「そうだよ。縛られて井戸に吊されるのは苦しいだろうが、その姿、美しいとは思わない？」

「そうかしら」

「たとえばだね……」

私は話が筋書通りに発展したことを祝福し思わずツバを飲みこんだ。

「この世の中で、一番美しいものは何だと思ふ？」

「さあ、何かしら。わからない」

「それはね、女性だよ」

「まあ、いやな人……」

「ホントだよ、それも裸のね」

康子は何かを感じて頬を染めた。私は、かまわず続けた。

「それも、縛られた姿が一番美しいんだよ」廉子は驚いように私を眺めた。私は、今や

機会の来たことを知った。

手文庫の中から、写真やサシエの切抜きを持つてくるとそれを康子に見せた。一糸まともぬ姿の女が、いろいろな形で縛られ、くねくねのたうつ姿の妖しい美しさを康子が理解したかどうかかわからない。だが、明かに興奮で頬を染めている。時機や好しと私は机の引出しから細引をとり出した。

「君、一寸縛られてみない？」

彼女は、どう返事したらよいかわからぬ、という表情で私の余りにも真剣な視線に気押され、黙つてうなずいた。

白いセーターの背に交叉して組まれた彼女の手首をキリキリと縛ると、乳首の上下を二巻きし、その余りで足首も縛った。

ポーツと上気してうなだれている康子を見無造作に抱きあげると、鏡台の前につれてゆき坐らせた。

「どう、鏡を見てごらん、自分でも、美しいと思うだろう？」

「いや」

康子はチャリと鏡の中を覗いただけで首を振った。私はその顔を両掌でハサんで鏡に向けた。彼女は泣きそうな顔をつくつたが、それでも妖しい興奮で細目の中の己の身体を緊

張させた。

ガストロープで温められた部屋で、彼女は

ついに何も彼も脱がされ、全裸となつた上

海老責の恰好までさせられて縛られた。私は

興奮で胸が張り裂けそうであつた。『遊び』

に耽けるうち、かえつて、康子の方で『そこ

をもつとキツく』などと私に指図するように
なつた。

「緊縛美を見せてもらうだけだ。そのほかは

彼女の縛られた裸身から何も求めぬ」

という頭初の私の考えは、次第に崩れて行

つた。今は、彼女と一体にならなければ治ま

らない心の騒ぎを感じはじめた。その心をふ
り払うために、私はズボンからバンドをはず
し、柱に括りつけた彼女を、はげしく打撃す
るのであつた。
(未完)

【読者通信】

私は以前よりミ女の責めミの絵を
見て感激していた者ですが、私達
同好者の共通な面白い点を見出し
ましたのでお知らせします。それ
はおかしな事ですが、眼帯とマス
クについてなのです。私は前よ
り女の人の眼帯やマスクをかけて
いるのを見ると丁度女の縛られて
いるのを見るような錯覚を起すの
です。そして此れは少々自分はお
かしいかな?と思いましたが最近
やはり「責められる女」の愛好者
のグループでも眼帯をした女を見
るとたまらないと云います。昔か
ら女の眼帯したのはきれいに見え
ると云われて居りますが本当です
ね。真白な眼帯をかけた女の人の
見ると私はいつ迄も後をつけてゆ
き、自分がその人になつたような

気になり楽しんで居ります。しかも
その眼帯がびつたり眼に合つてい
て、少しきつい位がいゝのです。
これは縄で縛られるのと一脈相通
ずるところがあるのではないかと
思います。片方の眼が眼帯で掩
れているので開いていゝ方の眼も
幾分見にくそうな所が、縛られて
哀願してゐる所の図と似てゐるの
ではないでしょうか、又眼帯のび
つたり目に合つてゐるのは顔の筋
肉に眼帯の紐が喰ひ込んでゐるの
なんかも縛られて肌に喰ひ込んで
ゐる縄に似てゐるのではないでし
ょうか。又マスクを掛けたの見る
と、女の猿ぐつわを掛けられてい
るのを想像させられます。口の周
りをガーゼが被つてゐるマスクは
本当は猿ぐつわから変化したもの
でないかとさえ思います。本誌の
読者の中にも〃女の人眼帯をか

けられた姿〃を好む人が大勢いら
れると思います。それは眼帯とマ
スクは縄と猿ぐつわとの関連性を
持つからです。私も眼帯を中心と
した実話(女学生間の)を書いて
もいゝのですが、同好の方は誌上
で連絡下さい。(山田生)

私は奇クに発表された森山美歌
様の「悩ましのサディズム」の文
中にある三吉です。読者通信のお
蔭で中野安太郎君が美歌様の奉仕
者として僕達の仲間入りを致しま
した。中野君のような気品のある
美青年のマゾヒストを紹介下さつ
た奇クに心から感謝いたします。
初対面は互いにハンカチが目印。
それから三十分後には彼は全裸で
後手に縛られて美歌様の鞭の下に
のたうち廻つてゐたのですなんと

素敵な現実のフアンタジーでしよ
う。暖かくなつたら三人で拷問の
写真を撮るつもりです。今からそ
の構図の想像に楽しんでゐます。
勿論、他人には見せられない様な
濃厚な写真ばかり出来ることでし
よう。それから奇クへの御願ひ。
女体の責められるモードや絵ばか
りで男のそれはさつぱりないのは
つまりません。奇ク愛読者数万人
の中の男性の七割はマゾの傾向を
十分に持つてゐます。どうかそう
いつた素晴らしい企画を御願ひしま
す。(東京 三吉)

前号の読者通信で各相反した御
意向の読者の便りを掲載しました
為、その事に關しての反響が沢山
寄せられました。あれは編集者
からの御返事に代えてその代表的
なものを選んでのでありますから
其の点御諒承おき願ひします。
(編集部)

切腹本願

亀岡絃七郎
三條春彦画

「お礼津どの」

と云つたきり、勝之丞は思はず絶句してしまつた。艶々と青春の血汐に輝いていた礼津の豊頬が、此の心労からか、透き通るように白い。明るく愛嬌深かつた瞳も、今は凄艶なまでに澄んでいる。

「此の度のこと、何ともお慰めの言葉もないお父上も、永年御辛苦の甲斐も無き此の仕儀——。」

月並な悔みの言葉が却つて気恥ずかしいほど、礼津の表情は変れながらも、乱れを見せではない。

主人の嘉門を失い、湿っぽい線香の薫りが泌み付いた吉江家の玄関で、宮崎勝之丞は、父一人娘一人だつた礼津の哀しみを、しみじみ思い量るのであつた。

「ともかく、お上り下さいまし」

礼津は弔間に謝意を述べた後、彼を仏間へ導いた。先に立つて行く礼津の引き緊まつた足さばきにも、勝之丞は、遂に叶うべくもない二人の縁を思い、きり／＼と胸が疼いた。彼が嘉門の仏前に端座して合掌した時、立つて行つた礼津が、老僕の儀助を呼ぶ声が奥で聞えた。

嘉門の死は変死であつた。お馬廻り百五十石を勤めていた彼が、小普請組入りを命ぜられ、体のいゝ蟄居同然の身となつたのは、つい二年前のことである。

表向きは病身のみが理由のようであつたがその事の真相を知る者は武州岩槻一藩の藩政を左右する、お側用人亘利繁太郎と、其の子息儀三郎だけであつた。

嘉門は早く妻を失つた。然し一人娘の礼津を継母の手にかけるのが不慙さに、後妻を求

めようとはしなかつた。若党の儀助と下働きの下女だけで過して来た。妻が病死した時には未だ僅か三才だつた礼津の、成長のみが彼の楽しみであり、慰めであつた。

十二の春、礼津は奥に上つて、女の嗜みを習う事になつた、楓という名も与えられ、く／＼とよく肥つて愛らしい容貌から、奥方にも可愛がられ、早く母を失つた彼女に始めて幸せが訪れたのである。十七の春には小太刀を取つては奥女中の古参にも容易に引けを取らず、男勝りの武勇を謳われる一方、琴はもとより、茶道華道を始め女芸一通りの習練を経て、昼夜を分たず奥方のお側去らずの奉公ぶりであつた。

その頃、殿のお側には側用人の亘利繁太夫が勢威を揮い。自然君寵に狎れて私曲が多かつた。生来謹直な嘉門は、繁太夫に敢て直言

もし、音物などとは思ひもよらぬ風だったから
繁太夫は事有れば嘉門失脚の機を窺つてい
た。

一方、五十の坂を越して俄かに身の衰えを
感じた嘉門は、礼津に養子を迎えて隠居しよ
うと思ひ立つた。その時、彼の心に浮かんだ
のが、先年お国詰であつた頃、隣屋敷で親し
く往来していた宮崎家の次男、勝之丞である



春子

の兄が躍起と思わしい養子先を探していので
あつた。

嘉門には勝之丞程度以上の婿も望めなかつ
たし、又、勝之丞にしても、吉江家より格の
高い家から迎えられそうにもなかつた。実直
さだけが取り柄の、極く平凡な青年だったの
である。それは、例え勃々たる青春の野心が
本人の胸中に燃え立つたとしても、結局は

礼津とは三
つ違い、未だ
やつと遊び始
めた許りの礼
津を、勝之丞
は、一とかど
の兄ぶんで、
引き廻してい
た。その勝之

丞が最近江
戸詰になり、
もう妻帯の時
期ながら、是
も小身の、ま
して冷飯食い
とあつては容
易ならず、彼

門閥という厚い灰色の壁が、びくともしない
頑丈さで張り廻らされ、何うにもならない武
家社会の階級的基盤が、徒らな諦めを彼ら
に強いていたからである。凡庸でも家老の息
子はやがて家老、輕輩の子は永久に輕輩で終
る地位が定まつている以上、縁組もその地位
相応に行われる。すべてが未生以前の宿命な
のであつた。

嘉門は、夫婦になつた礼津と勝之丞を想像
した。何方かと云えば、生真面目な代りに覇
氣のない。いわば運命に抑え付けられて反撥
する力も無いような勝之丞を、その故にこそ
身近かに感じるのであつた。あの男なら礼津
を大切にしてくれるに違いない。嘉門は多く
を彼に望んではいなかつた。二人が平凡な夫
婦になつてくれるだけが希いであつた。

久しぶりで一日のおひまを貰つた礼津に、
待ち兼ねていた嘉門は此の話を切り出した。
「礼津はお父上次第、何も判りませぬ。」

そう云いつゝも、凜々しい眼もとが、勝之
丞の名に薄く赧味を帯びたのを、嘉門は見逃
してはいなかつた。彼は、自分の眼に狂いが
無いのを知ると共に、一沫の淋しさも感じた
それは一人娘への父親としての愛著であつた
かも知れない。

まず勝之丞の兄の内諾を得た嘉門は、繁太夫を訪ねた。

「此の頃は、いたく体が云うことを聞きませぬ。御奉公に欠けるところあつては、気がかりで居りまする。」

いゝ顔を見せぬ繁太夫に、彼は訥々と心境を述べた。

「倅でも有れば夙くに隠居致すべきところ、生憎娘一人、此の上は養子を迎える他は無いと存じまする。」

「ふむ」

始めて繁太夫の顔色が動き、軽く肯いた。

「礼津とか申されたな、何、もう十七、早いものだ。家中の若侍どもが噂して居るそうなあれだけの美形、親父どのさえあの頑固さが無くば一番口説いて見ようとな、いや是は冗談……して養子には？」

露骨な嘲弄が胸に込えながら、嘉門は強いで押し耐えて、

「宮崎家の次男、勝之丞殿をと存じまする。」

「それはちと勿体ない。あれも余り切れた男では無い。」

不快さを見せまいと俯向い嘉門を尻目に、庭のさつきへ眼を逸した繁太夫は、薄く笑いを浮かべて嘉門を振り返り見た。

「吉江氏、物は相談、お礼津どのを手前へお預けなさらぬか。養子は分家からでも貰えよう。」

はつと面を上げた嘉門の眼に、繁太夫の淫らな笑顔が映つた。

「何と申される。」

「いや、倅の身の廻りにな、いや、強いてとは申さぬよ。ま、先刻のお話、よく耳に留めておき申す。」

「では何卒よしなに。」

嘉門の激しい顔色に、繁太夫の薄笑いも消え、言葉は穏かながら、二人の視線は鋭く絡み合つた。

嘉門が小普請組へ左遷され、非番続きの挙句、悶々として病臥の日を多く持ち始めたのは、それから間もなくの事であつた。

養子縁組の願ひは、繁太夫を経て殿の許へ差出されたはずであつた。然し裁可は二年近く経つても其のまゝであつた。

堪り兼ねた嘉門は、久々の宿下り毎に、美しく成長して行く礼津を見るに付けても、一層絶望に近い焦りを感じた。彼は礼津が帰つて行つた夜、病軀を押して繁太夫を訪問した手に貯えの黄金が何枚か包まれていた。

「是は軽少なから、久しぶりに御挨拶に罷り

出ましたお印迄に」

彼は心底から憎み嫌つていた音物というものを、始めて繁太夫の前に差し出した。

「何だ、それは」

繁太夫は横柄になればなる程、嘉門は卑屈になつた。

「いや、此の度は又、何かとお骨折りを」

言葉半ばで、繁太夫は声を立てゝ嘲笑つた「また養子縁組の話か、それをまとめてほしいと申されるか、何と心得違いを申されるものかな、吉江嘉門とも有ろうものが、年に似合わぬ老ぼれよう、よくお考えなされ、侍の行往坐臥すべて是、お上の御奉公につながる何こともお上のお役に立つよう取仕切るが道理。お上のお役に立とう縁組で無いと思えばこそ、繁太夫も殿に強つてお許しをお奨めせなんだ迄。何と足掻こうと、お許しは無いわ——。」

道理は既に論外であつた。お上のお役に立つ、ということが、如何様の尺度で定められているのかは、誰も答えられないのである。

嘉門は眼の前が真ッ暗になり、胸がシーンと冷えて来た。

「さつさとお持ち帰りなされ、それとも」こゝで繁太夫は薄く笑つた。渋色の頬が、

悪魔的に震えた。

「考え直して此方へお預けなさるかな。然し今では、たゞのおはしたにしか使えぬかも知れぬ。」

嘉門は憤怒と絶望に口が利けなかつた。

（お礼津、腑甲斐ない父であつたと、怨むであらう。）

気が付いてみると、居間に端坐し膝頭を震える手で搦んだまゝ、嘉門は呟いていた。

その夜更け、嘉門は、瘦せたるんだ腹の皮を左手で右へ引き寄せ、家に伝わる鎧通しで腹一文字に掻切つて死んだ、断末魔の呻きに儀助が駆け込んだ時、小机の上には、礼津に宛てた長い遺書が載つていた。

嘉門は乱心の末狂死と断定され、後嗣が定まつていないことから、吉江家は即日断絶。

礼津も奥から永の暇を出されたのが、つい三日前の事であつたのである。

「勝之丞さま、此の家も今日限りとなりました。今も儀助を引越先の叔母の方へ、やつたところでございます。」

仏前を次の間へ起つた勝之丞に、礼津は手を仕えた。

「お礼津どの、お父上の最期もさることながら、我らの縁も所詮はかないものであつたと

つくづく思い申す。」

「いゝえ、哀れなは父、二人が結ばれさえすれば、と念じて居りましたことも叶わぬと知つて、生きる気力も無くなつたのでございませう。」

涙が、ぽつりと肥りじしの膝に落ちた。

「侍に有るまじき不心得かは知らず、それがしは、幼馴染の其方が、家中の若侍に美形と噂されるを耳にして、諦めて居り申した。そこへお父上から兄への思いがけないお言葉。

永い思ひの叶う嬉しさを止め得なんだ。冷飯食いと蔑まれるにも馴れはしたが、せめて妻だけは優れた女性をと希う、卑しい男心とお喰ひ下され。」

「その思ひは礼津も同じこと、いえ貴方さま以上に深い思ひ……。勝之丞さま、礼津は、お別れしとうはございませぬ。なれどお別れせねばならぬ厳しい掟、たゞのまゝでは余りにも酷い定め、礼津は、もう……」

礼津の瞳が燃えるような艶をたゞえていた。激情に震える唇が勝之丞の全身を揺すぶつた。知らぬ間に二人は、何方からとも無くにじり寄つていた。勝之丞は思はず礼津の肩を抱いた。ぽつこりとした肉付きが勝之丞の恋心を掻き立てる。

（お父上、お許し下され）

彼は心の中で詫びると、片掌を張り切つた礼津の乳房に押し当てた。こり／＼と固く突立つた乳首に触れた時、礼津は微かに身を悶えた。膝へ抱き上げられながら、礼津は切なげに眼を閉じ、唇が花びらのようにそよいでいた……

礼津が漸くすゝり泣きを止めた時、

「只今」

と勝手で儀助の声がした。

勝之丞は袴の襷を気にしながら、ゆつくりと玄関の方へ歩いて行つた。随いて来る礼津も無言である。勝之丞が玄関から一と足踏み出した時、礼津が

「勝之丞さま」

と訴えるような声である。振返つた眼に、薄靨く夕映えを湛えたような礼津の顔が、強く焼き付けられた。

「御機嫌よく。」

「其方も息災に」

礼津は微かに首を、否むような振り方であつた。何故とも考えず、勝之丞は思い切つて歩き出した。残された礼津は、未だ微かに快い疼きの残る乳房を抱き締め、

（奥方様、礼津一生の思い出に、此の肌を男

故に濡らしたお詫び、あの世で仕ります」と、心の中で呟いていた。

その翌日の夕方である。繁太夫の邸を礼津が訪ねて来た。

「嘉門の娘が来たというのか、何用かな。」

夕食を済ませて寛いでいた繁太夫は儀三郎の方へ顔を向けた。

「面あてがましい死にざまを致し居りましたが、娘はそれでも一寸は、しおらしいところがあるのでござりましょう」

儀三郎は、細面の切れの長い瞳に猾そうに笑いを浮かべた。

「ふむ脈が有ると云うのか、ます何と申すか会つてやらねばなるまい。」

繁太夫が立つと、儀三郎も少し後れて続いた。

「おう、お礼津どのであつたか。ま、お上りなされ。」

繁太夫は努めて碎けた気分が出したかつた自分が苛め殺したような嘉門で有つてみれば多分に後めたいだけに、親切げに振舞つてやりたかつたのである。

「はい」

と頭を下げただけで近付こうとはしない礼

津を、繁太夫は気軽く手で差招いた。

「さ、」

その瞬間である。花鳥を染め抜いた大振袖が翻つたかと思うと、白い光りが夕暮の重い空気を裂いた。

「あッ、何を」

云いかけるか云いかけないかに、繁太夫は肩口に灼くような痛みを覚え、ぐらりと体をゆすつた。

「う…む、うむ」

呻いた時、既に次の刃は彼の胸許を刺していた。彼は踏み耐え切れず、式台に崩折れて伸びた。どす黒い血が、壁にまで散つた。

「奸賊、父の讐思い知れ」

礼津が叫んだ時、

「狼藉者」

飛出した儀三郎が云いざまに斬りかゝつた手許が、狼狽に狂つた。

礼津が小太刀の使い手であることを、忘れていた繁太夫親子の不覚である。

「トウー」

再び礼津の凜然たる声音が其の朱唇から迸つた時、儀三郎は強かに脇腹を斬り込まれ、父の死骸に折り重なつて倒れた。

礼津は袖で刃の血を拭うと、静かに目付三

沢次郎右衛門の役宅へ向つた。

次郎右衛門は礼津の悪びれぬ態度に好感を持つた。繁太夫の権勢には見と見ぬふりをしていたものの、嘉門の窮死に同情していたのである。

「そなた、父の非業な死にざまに乱心致したな」

彼は一通り事情を聞き取つてから、こう聞いた。

「いえ、乱心など仕りませぬ。お言葉有難く存じますれど、礼津は充分、後先の事も弁えた上での刃傷にございます。此の上は御法通り、存分のお仕置をお待ち申上げて居りまする」

次郎右衛門は彼女に乱心の沙汰と云わせた上で、乱心者なれば吟味叶うまじく、と殿に言上する心算であつた。事情が事情だけに、むざ／＼と打首か縛り首にして了うのは哀れと思つたのである。

然し、そうした次郎右衛門の配慮も見抜いた礼津の潔さであつた。

報告を受けた阿部盛次の怒りは一通りではなかつた。最大の寵臣を討たれたのである。

「縛り首じや、不埒者めが……」

盛次の憤怒に対して、次郎右衛門は分別ある処置を望んだ。

「殿、お怒りは重々御尤もながら、つい数日前迄、奥にてお召使いの者なれば、死罪は死罪としても、奥の御意向もお伺い申すが順当かと存じまする」

見苦しい死に様をする縛り首よりは、打首の方が美女の最期にふさわしいのである。次郎右衛門は、せめて礼津に打首の刑を与えてやりたかつた。

「よきに計らえ、但し助命はならぬぞ」

苦り切つて盛次は、吐き出すように云つた次郎右衛門の報告を受けた奥方は、

「不惑や」

たゞ一言、あとは涙であつた。

「して、同じ死罪にしても、せめて打首になりと存じまするが」

次郎右衛門の言葉に、奥方はじつと考え込んだ。

「待ちやれ、男まさりの礼津、待並みに切腹させるは如何なるものか、是非、切腹させてやりたい」

「然し、女性の身で先例も聞きませぬが」

「いゝえ、あれなれば立派に切腹致そう、せめて最期の晴れを飾らせてやりたい、たゞ介

錯だけはちつとも早う、それだけが妾よりの頼みじや、」

切腹の名誉が其の苦痛に比例する矛盾を、救うのが介錯である。形式だけでも刃を腹に触れ、ば、打首に等しくとも潔い切腹と謳われる世相であつた。

次郎右衛門は盛次に奥の意向を伝えた。

「格別の思召を持ちまして切腹仰付けやり下されば、奥方も御満足と存じまする」

「何と申す、うむ、本人さえ其の気なれば、それも面白からう。」

生意気にも女だてらに刃傷沙汰を惹き起した礼津が、苦痛に耐えて腹を切つて見せるかどうか、盛次には寧ろ痛快に思つた。そして一日も早く此の事件を処置して了いたかつた礼津の切腹は、翌日の未の下刻、下屋敷に於て執り行われることに定まつたのである。

礼津は早朝から身を潔め、水の外は口にせず時刻を待った。やがて預り人の邸から、下屋敷へ駕籠で送られた礼津は、奥方から香を炷きしめて齎らされた白装束に、若くして自ら絶たねばならぬ生命を包み、庭上に設けられた席に着いた。

切腹人は、介錯の便宜を計つて、茶筌髪に

取り上げるのが通例であつたが、礼津は女のことでもあり、髪も平常通り艶やかに結い上げ、許されて薄化粧を刷いた美貌は、死に就く人とも見えぬ落着きを見せて、静かな輝きを湛えていた。

裏返した畳二枚を白布で巻き、四隅には櫛を立て中央に礼津が端座すると、留守居役の浜田七郎左衛門が進み出た。

切腹の申し渡しを読み上げると、手を支えて聞き終えた礼津の前へ、柄を紙縊で巻いた九寸五分を載せて、三宝が差し出される。礼津の願いで、腹切刀は嘉門が自刃に用いた鎧通しであつた。奇縁で、父娘二代の血を吸う刃となつたのである。

足輕頭の山口惣兵衛が彼女の背後へ廻つた時、礼津は検使の七郎左衛門を見上げて、「何分、女の身で不調法は幾重にもお許しを願ひ上げます。此の上の我まゝには、合図致しまする迄、介錯をお待ち下さりませ。」

声音に何の淀みも無かつた。惣兵衛は驚きの眼を検使に向けた。七郎左衛門は、咄嗟に「是ほどの覚悟なれば女ながらも、見苦しい振舞は有るまいと、判断した。

「如何にも承知仕る。お心おきなく御最期を遂げられい」

云いながら、惣兵術に背いて見せたのである。

満足げに微笑した礼津は、徐かに袴の紐をゆるめ、ぐつと押し下げると、するりと右から左の肩を脱ぎ、艶やかな上半身を露わした。豊かな乳房が眩いほど白く盛り上り、薄赤い乳首が突き出ている。滑らかな肌を、惜しげもなく下腹まで押し寛げようとした時、玄關から庭へ通じる木戸の向うに激しい人声がした。

「待てッ——」

木戸を押開けたのは、新しく側用人となつた安川頼母であつた。

「只今、御赦免相成つた。」

息も切れ／＼に叫ぶ頼母へ居並ぶ一同がほとと息を吐いた。若く美しい礼津が、今眼の前で我と我が腹を断ち切つて行こうとする悲愴な姿を見るに忍びない思いが、七郎左衛門以下、居合せる者すべての内心を支配していたのである。礼津は頬を少し赧め、肌を入れて畏つた。

「只今殿には、其方の斬奸状を御覧あつて、其方の心底健気なを嘉せられ、切腹は取止め改めて吉江家を再興、宮崎勝之丞と養子縁組お許しに相成つた」

斬奸状を、彼女は切腹の当日まで待つて、目付に差出したのであつた。

頼母の言葉に七郎左衛門が、

「お礼津どの、忠孝並び全しとは其方のことさ、一刻も早く不吉の座をお立ちあれ」然し平伏したまゝで、礼津は動かなかつた。暫しあつて顔を上げた時、頬に涙が散つた。

「忝う存じます。殿のお言葉、お礼の言葉もございませぬ。さりながら、一旦お仕置仰せ付けられながら変改あるは、殿の御威信にも関ります。御家中の御所存のほども恐しくまして亘利様御一門のお歎き如何許りかと狼藉者として、礼津は此のまゝ切腹仕りとう存じます。微意をお汲み下さいましただけでも冥加に尽きる喜び、別して奥方様お情けにて贈りました切腹の恩命、たゞ／＼有難くお受け仕るほかに、礼津の道はございませぬ」凜然と云い切つた時、涙は既に跡を払い。やゝ蒼ざめてはいたが、それだけに一層冴え返つた美しさである。

彼女は幸福の絶頂であつた。余りにも幸福すぎる。そして彼女の十九年の生涯で、幸福感は必ず直ぐに覆されて来た。此の喜びのさ中で、此の幸福感を破らない為にも、彼女は赦されたが故に尙、死にたかつた。女の切腹

は前代未聞、と云われるだけに、立派にやりとげて見せたい。それだけが今の礼津の願いであつた。

頼母と七郎左衛門の慰撫も、彼女の固い決意には勝てなかつた。頼母は再度馬上の人となつた。

晩春の陽もやゝ西に寄り、申の刻に近くなつた。白装束のまゝ端座する礼津の頬を微風が撫で、後れ毛が一とすじ、耳もとに流れた待つこと暫し、再度頼母が馳せ付けた。続いて入つて来たのは勝之丞であつた。頼母は傷ましげな腫付きで礼津を睥めながら、

「何うあつても強つて切腹致さるゝか」と問いかけた。礼津は含羞を見せて、

「我がまゝお許し下さりませ」

「強つて云い張れば是非もない。妹分の扱いして取らせ、とのお言葉であつた。拙者、殿に代つてお見届け仕る。高崎勝之丞改め、吉江勝之丞に別れをさせよ、との思召し、有難くお受けなされい」

頼母は嘆息と共に勝之丞を招いた。

礼津は一礼して再度につこりと微笑んだ。

輝く許の満足が、その瞳にあつた。

「お礼津どの、来世こそは夫婦ぞ、此の上はお心安らかに」

勝之丞が呻くように告げたのへ、手を仕えた礼津は、

「勝之丞さま、お先に参ります。吉江の家を宜しくお願い申し上げます。よき奥様お迎え遊ばして、お栄えのほど祈りまする」

少しの乱れも無く一礼して、礼津は改めて白装束の衿を押し開いた。潔く両肌を脱ぎ棄てた。練絹のような柔肌が、暖かい皓さで人々の眼に映った。

お碗を伏せような乳房の下から、見事にくびれ、更に下腹へと滑らかな膨らみが続く。その下腹を、礼津は左手でゆつくり撫で下し撫で上げた。

今失われて行こうとするお礼津の生命を、彼女自身よりも、立会う人々の方が引き止めたい思いでいた。然し如何ともしがたい礼津の決心は、まこと切腹の悲願と見えた。

勝之丞は、たゞ一度の抱擁の思出に、切なく胸を絞めつけられ、拳を固く握りしめて、眼は憑かれたように礼津の手許を瞞めていた

礼津の右手が三宝に伸びた時、豊かな乳房のかげから黒々と縮れた腋毛が、ちらと覗くと見えたのも束の間で、礼津は左手も柄頭に持ち添えた。冷く光る切先が、艶やかな左の

下腹に差し当てられた。頬が赦らんだ。

「ウム」

微かな気合と共に、厚い脂肪を内深く湛えた腹へ、鋭利な刃は吸い込まれるように喰いつた。瞬間、ピクリと彼女の鳩尾の辺りが震えたが、それを押耐えるように、五分ほども突き入れられた刀を、両手で右へ、ゆつくり引いた。血が湧き出て、白装束の膝に滴ると、礼津の顔からは血の気が引いて、更に牙えまざる。人々の呼吸さえ途切れた。

かみしめた唇から呻き一つ洩らさず、礼津は刀を力の限り右へ廻して行つた。

「お礼津どの、武士も及ばぬ御最期、必ず殿に言上致す」

頼母が絞り出すような声を立てた。居並ぶ一同に代つて叫ばずにいられぬ気持でおつたのである。礼津は強いて微笑しようとしたが流石に頬が微かに震えただけであつた。

臍の下一寸ほどを横に掻切つて行く切口は朱を引いたように鮮やかな一線が、盛り上り噴き滾れる血汐にぼかされ、少しづつ口を開いて行つた。刀の動きを瞞めている勝之丞は自分自身が腹を切り割くよりも苦しい悶えに思わず腰を浮かした。心の中で、

(お礼津) と呼び続けていた。

然し白刀は、礼津の意志のまゝに、彼女の豊満な下腹を断ち切つて行く。苦痛を耐えようとして、一層刀を握りしめる両腕に力がこもり、切先は右へ行くほど深く入つて行く。右脇まで切り終えた時、彼女の額には脂汗が滲んだ。漸く苦痛を表情に見せる礼津は、遠去かろうとする意識を呼び戻して、切先を腹に刺し込んだまゝの姿勢で、

「いざ」

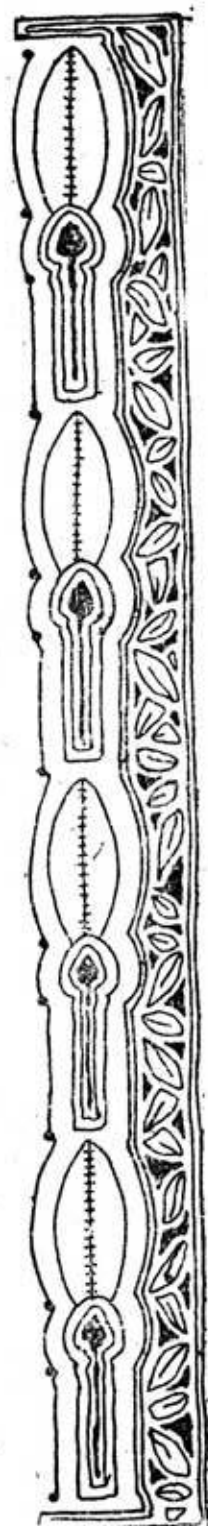
と声をかけた。流石に少し力が無かつた。切先を引き抜けば腸が流れ出るに違いないのを、そこは女の嗜み、礼津は恐れて、わざと刀を残したのである。血は膝の下に溜り、彼女の二つの腕にも散りしづいていた。

張り詰めた緊張が極点に達した勝之丞は、胸の鼓動が一段と激しくなり半ば浮かした腰の内側で、生暖い湿りを覚えた。止めようもないお礼津の生命の終りに、云い知れぬ淋しさと思えを感じ、彼は子供のよう泣き出したい思ひであつた。

その瞬間、惣兵工の振り冠つていた太刀が夕陽の中に閃いた。

たゞきつけるような勢いで、首は礼津の体を離れて前に落ち、腹に刀を刺し入れたまゝの姿勢で倒れた死骸から、真赤な血汐がどくどくと奔流して行つた。

(了)



川端多奈子さんへ

羽村京子

多奈子さん。本当にお許し下さいね。京子はあなたの足もとにひれ伏してお許しを乞いますわ。一月九日付の私の手紙が三月号に載つて、四月号では早速あなたからお返事をいただきましたのに、私はその後あなたにお便り一つ出すこともせず、それでいて今日はまたこんな失礼なお手紙を差し上げるんですもの。

三月号で私たちはあなたをお招きしたいと申し上げて四月号であなたの御快諾を得ましたけれど、私たち、よくよく考えてみると、生来内気なものでなか／＼勇気が出ませんのよ。やはり今のところは誌上で御交際ねがうことに満足したいと思つていますの。あなた

に対して本当に申しわけありませんわ。私たちは毎号あなたの御発表になる記録や、質問へのお答えなど、そして何よりもあなた的美丽い縛られた裸体を写真で拝見するだけにとどめたいと思つています。あなたのお書きになつたものや、写真の中のあなたのお姿を拝見していると私は本当に身につまされる思いがして、あなたを本当に身近な親しいものを感じてしまうのです。

「桃色のベールに包まれて」 「破つた日記帳」 「ゆうべ見た夢」 「吊られた白鳥」 いずれを拝読しても「獣肉のように吊り下げられるよろこび」を私はあなたと共にすることが出来ます。私の大好きな逆さ吊りのこと

も書いていらつしやるわね。

それから写真の中のあなたの肉体。むっちりとした若々しい、私よりも大分大柄のように見受けられる美しい肉体が縄でがんにがらめに縛られているのを見ると、本当を云うと、私、少しあなたが可哀そうになつてくるの。でもその「可哀そうに」という気持が何となく「いゝ気味」というのに通じていて、それでいて「羨やましい」と云う気さえ起るのよ。何だか猛烈にマゾヒスティックなそれでいてサジスティックな気持がわいちゃつて、あなたとどこかと体をぶつ／＼け合いたいような妙な愛情を覚えてしまうのです。四月号の「高手小手」は背中だけで、私の興味をもっている腹面の方が見えなかつたのが、私の好みからいうと残念でした。(あなたの背中はずばらしいけど)

それが五月号であなたのたつぷりと肉のついた美事なお腹が荒縄にくびれているのを見た時はくらく／＼とする位でした。もつ／＼縄がきついのがいゝんだけど、あなたのお腹つて本当に魅力があるわ。たゞ写真が部分的なので全身的な束縛感がないのが惜しいけどあなたのすばらしいお腹を接写でよく鑑賞出来て本当によかつたと思います。どうし

たものか私のマゾヒズムはすぐ腹部に、そしてその中の臓腑に集中してしまふ傾向があるのです。また、私はあなたの腹が子を孕んで丸く膨らんで突き出しているのを想像してみたりします。処女でいらつしやるあなたにいけないことだと思いますが、あなたのお腹が子を持つてふくれていたらどんなにすばらしいだろうと思うのです。ご免なさいね。

それから、また悪いことをお教えるんですけど信太蓉子さんにおすゝめした肛門（と大腸）のいたずらをあなたにもおすゝめしたくなつてしまいました。私つて本当にいけない女ですわね。私なんか、あなたのような心のきれいな素直な方とちがつて妙に神を怖れない不遜な女かもしれませんわ。私の大好きなボードレールの「悪の華」から――

悪魔がわれらを操る糸を握っているのだ！
われらは忌むべき物に魅力を感じ

日毎に一步づゝ地獄へ墜ちて行く、
悪臭を放つ暗闇を恐れもせずに横切つて。

私は生れつき悪魔派なのかも知れません。あなたをお招きしたいと書いた頃、毎晩ベッドの中で空想することは（ごめんなさいね）どうしてあなたを誰にも分らないように、はらわたを出して料理してしまふかということ

でしたわ。あなたのぐねぐねと長い腸の妄想が私の頭にこびりついて離れませんでしたのこんなことまで書いてしまつたら、この次か

あるマゾヒストの手帖から

前号の補遺と訂正

第一回の分は倉卒の間に稿を草したので訂正を要する箇所があつたのは申し訳ない。その序でに他の分も補充しておく。

第一「マゾヒストの詩」では、原独文の方に相当の誤植を生じたが、読める人には訂正も可能だろうからここで一々訂正することはしない。訳文第一行の「たしかに」は「したたかに」の誤りである。

第二「飲器」では、尿管としての意味文が正しいような書き方になつてしまつたが、智伯の場合にも諸家の解釈が両説に分れていたのであり、「飲器」を酒盃と解すべき場合も勿論沢山あることを申し添えておく又頭蓋骨を工作して液体容器にする場合に「酒盃」に作られることは決して少くない極く著名な例としては、ナヴァル女王マルグリットの「エプタメロン」第三十二章にでてくる独乙貴族の話で、姦夫を殺し、頭蓋骨で盃を作つて、姦通の罰として毎食妻にこれで水を飲ませている。十五世紀の話である。

マゾッホの「キエフ流血婚」を「公妃の

らどんなにお願いしても決して来て下さらないわね。でも正直に書いてみましたの。

復讐」と題して近く本誌上に記載する予定であるが、女主人公オリガの息子英雄スヴァトスラフが多年の征戦の後、最後にベチエネグ人に殺され、彼の髑髏はベチエネグ候の酒盃とされたと伝えられていることも、オリガの小説の予備知識として、提供しておく。

尤も勇士を倒したものが彼の勇気を自分のものにするため、彼の肉を食い、彼の武器を受継ぐというような呪術的渾沌的な人格観は、タイラー以後、原始民族において夙に観察されて来たことである。髑髏酒盃は、その中の飲料をひとが摂取するものであるから、この種対象同一化の心的機制の下においては、髑髏に対する尊敬の動機に基づく場合も少からずあり得たのではないかと思われる。所が髑髏便器の方は、同一化思想からも、遂に排泄物を摂取せしめることによつて、これを汚辱する効果が期待しうるのみであつて、酒盃に於るような尊敬の契機の可能性は微塵もない。同じく頭蓋骨を液体容器となすこととてあり。文明人の刑法からは遺骨損壞の同上罰条に問擬せられる場合でも、マゾヒストとしての見地からすれば、これは根本的な相異であるといわねばならぬ。

祭

壇

に

君

臨

す

る

脚

馬族保

(一)

三階から四階売場の階段を中途まで登りかけたとき、階段の上からグリーンの、あたりが急にバツと明るくなるような派手な外套を着た女が降りて来るのに、優子は気付いた。

「あら、優子じゃないの。」

自分の名を呼ばれて優子は相手の顔を見直した。本当に三年振りだ。いつも気にはかけていたが、あれ以降音信を絶っていた山上江子であった。

「まあ！江子。」

優子は懐しさのあまり思わず彼女の手を軽

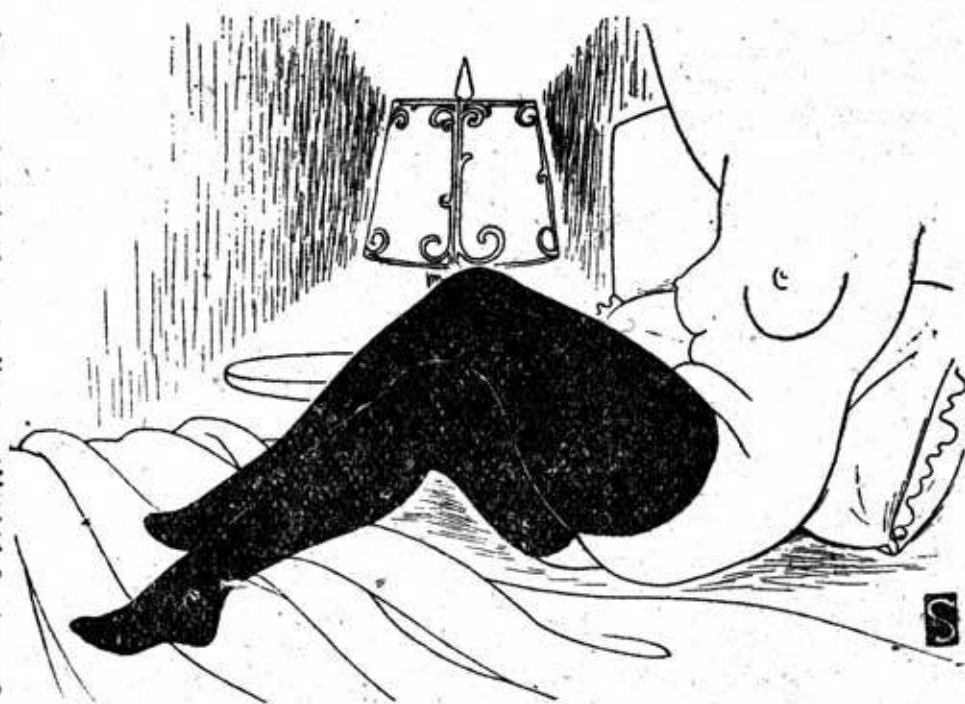
く握った。山上江子はいつくしむように優子を抱きしめながら、

「ねえ優子、私の家すぐそこよ。ちよつと寄つてみてよ。会いたかつたわ。ねえ寄つて」

百貨店を出ると、江子は嘗ての女学生時代に返つたように優子をなつかしがった。あの事件以来、優子は江子の秘密に触れたような気がし、愉快ではなかつたので、自然江子から離れていつたらしいのである。

事件というのはこうである。

春さき、優子は江子と二人でブラリと映画に這入つた。階上中央の正面の椅子を占めフランス映画の「情熱のバラ」を見ていると、



一人の男が暗がりを歩いて来たが、その土間にハンカチを拡げて座つた。風間なので、場内はガラシとして階上の椅子は幾つて空いているのに、態々優子達のすぐ傍の土間に腰を卸したのである。丁度そこは、中央席の上席に登る階段になつていて、優子達の坐つた席はその階段の左端の椅子で、江子は左の外れに座つていた。優子は画面に見入つていた

ので江子に腕を小突かれるまでは気付かなかつたのであるが、男は江子の丁度足下に座り込み何となくソワソワ落着かぬふうであつた江子の話によれば、おかしな男だとは思つたが、気にもとめず画面を見てみると、ふと脛のところを生ぬるい体温を感じた。何となく予感があつたので素知らぬ顔で様子を窺つてゐるとどうやら男の手の甲がいつか接触してゐる。男は映画を見る振りをしながら、彼の視線は熱心に江子の脚を觀賞しているらしい男の昂奮しているのがハッキリ感じられた。江子は胸騒ぎを覚えた。

山上江子の美貌は万人の認めるところであるが、その美貌と同じくらい彼女はまた脚線美を自慢していた。身長五尺三寸、体重十五貫という堂々たる肉体から受ける印象の通り精力的で活動的で、征服する側に立つほど山上江子は積極的な性格である。

いま、彼女の足下に蹲り絹靴下に包まれた江子の脚に凝視をつづけている男の明らかに昂奮したその挙動は彼女の自尊心を十分に満足せしむるに足る光景であつた。もはや映画なんか豚にくわれてしまへである。江子は思ひ切り右足を組み替えた。長い、肉附のいゝ脛はなだらかな線を描いて、男の膝のあたり

まで突出された。男はハツとしたらしい。チラツと江子の顔を仰ぎ見たが、素知らぬ顔の江子をみると、激しい喜びの表情を現わしたこの男の心情にはどのような激しい変化が起つてゐるのだろうか。そう考えると江子の頬もカツとほてるのだつた。

優子が腕を小突かれて、江子がさも勝ち誇つたように足下の男を眼顔で指し示したのは停電があつたあと、再び映画が始つたときで突嗟なので、それだけに優子の胸騒ぎも大きかつたわけであるが、当時電力不足で映画館の停電も決して珍らしくなかつた。江子の言葉借りていえば、予期していたのだそうだが停電は少くとも、暗がりから五分ぐらゐは必ずあつて、停電して間もなく、彼女は組んでいる右足の靴をキュウツと握られた。と同時に火のように熱い吸盤が激しく脚を愛撫し始めたのだつた。優子が腕を突つかれて見た光景がそれで、江子はこのまゝ電燈がともりませんように、と祈つたそうである。

映画館を出ると、不愉快になつた優子は山上江子と別れたが、実はこの話には後日譚がある。優子と別れた江子が、彼女のアパートの部屋に帰つて間もなく、ドアを叩くものがあつた。「どうぞ。」といつてしまつてから

彼女はハツとした。見知らぬ男が這入つて来たからである。そしていきなり床の絨緞に両手をつく。「先刻は本当に失礼いたしましたこの通りです。お許し下さい。」と額をすりつけて平謝りに謝り出したのである。

山上江子はそのときの顚末を次のように語るのだつた。

「本当は私もちよつと不憐な気がしないでもなかつたのだけど、こんなふうにくペコペコ謝られると本当にこの男が失礼な奴にみえて来たの。どうぞ許してくれ、お詫のつもりで実は貴女に靴を贈りたい、というのよ。黙つてゐると、男は包箱から一足の靴を取り出してテーブルの上にキチンと並べるの。それは一寸もすてきな金色の室内靴なのよ。それから男はクドクドと私を永い間あこがれていた。自分のような男が貴女のような美しい人に想いを寄せるなどと勿体なくて罰があたる。自分を貴女の奴隷にしてくれというのよ。貴女はその美しい脚を拝ませて下さるだけで私は幸福です。嘘ではありません。その証拠に何もかも貴女に差上げます。私の財産も、体も命も差上げます、というのよ。まるで信徒が神に祈るみたいで、私もすっかりいゝ氣持になつてしまつたの。映画館でこの男は私の足に

接吻した。嘘をいつているとは思えない。しかも私は水色の電気の光線の中でビロード張の長椅子にフカブカと身を凭せているんですもの。そのときの雰囲気も私の位置も、急にもう一度この男の願いを聞き届けてやれるような気がして来たの。本当に神様になつたような気がして来たの。じゃ、お前の望みを叶えてあげるから奴隷が女王様にするようにその靴を穿かしておくれ、つて命令したの。すると面白いのよ。男はテーブルの上の金色の靴を取つて、恭しく額に捧げて床の上に跪く。その真面目くさつた顔つたらないのよ。ついおかしくなつて、私はフムと笑つてしまつたの。でも男はちつとも笑わないの。靴を額に捧げて私の足下に平伏しているの。嚴かな儀式なのよ。私は上履を脱いで男の眼の前に足を突き出してやつたの。そのとき私はこれがほんとうに女王さまと奴隷なんだわ、と思つたの。女王様は恋の奴隷なんて見向きもないでいゝのだわ。何となくそんな気がしたの。奴隷なんて女王様には生きた道具なんだわ。本当にそんな気がしたの。何て説明していいかしら。神様が私のために一人の奴隷を与えて下さつたような、そんな傲慢な気持。とてもいゝ気持。「この奴隷……」そういつて靴で

男の頬を蹴つてやろうかとも思つたの。しかし私は黙つていたの。靴を穿かせ終ると男は私の足を膝の上に載せてまるで宝石のように愛撫したり、果ては靴を額におし頂いたり、身もだえしながら爪先にくちづけしたりするの。私はもう夢の中の女王様になつてしまつたの。「お前は私の奴隷になつたのよ。私の命令することは絶対服従しなくてはならないわよくつて？」私はクツシヨンの上から脚を伸して男のアゴを掬いあげその顔をジツと見降してやつたの。男はおとなしく頷いたの。その哀れな顔……このときだわ、私の美容のためはこの男を肥料にしてやろうと心が決つたのは。……」

浮き浮きと語る江子の表情を眺めているうちに優子は憂鬱になつて別れたのだつた。あれから三年——当時の思い出が優子の脳裏に昨日のように蘇つた。しかし不思議にいまは不快ではない。いや、輝やくばかりに一層美しくなつた江子の派手な服装といい、豊かな肉附といい、江子の天質の美しさはいよいよ妖艶ささえ加えて来たようであつた。

外に出ると、江子はタクシーを呼びとめたあつという間もなかつた。自動車は坦々とした道路を走りものゝ廿分もすると郊外に近い

高台の赤い屋根の蕭洒な洋館の前で停つた。
江子美容院——玄關のドアの硝子にそんな金文字が彫り込んであつた。

(二)

優子はその夜、江子の大盤ふるまいに会つた。その夜というのは、デパートを出たのが午後五時を少し廻つていたので、江子が近所の支那料理に電話をかけて御馳走を取り寄せウイスキーを飲んで大いに談笑しているうちに氣付いたときは夜になつていたのである。江子は優子を離そうとしなかつた。今夜はどうしても泊めるのだと諸かなかつた。優子は少し家のことが氣にかゝらないでもなかつたが、母と住込みの弟子がいるので、思い切り江子の好意に甘える氣になつた。だいいち、もう動くのも大儀だつた。大型の寝台に体をくつつけて何やかや語り合つた。

「優子、あなた結婚まだ？」

フム、彼女は笑う。この数年間、美容院経営にうち込み最近ようやく安定したのでそろそろ真剣に考え始めた今日この頃である。すると江子の誇らかな青春が嫉ましくさえなつていた。

「あなたは、江子？」

もう結婚してるんでしょ、ときめつけたかったのであるが、惻い口な優子はそんなふうにいひ廻した。

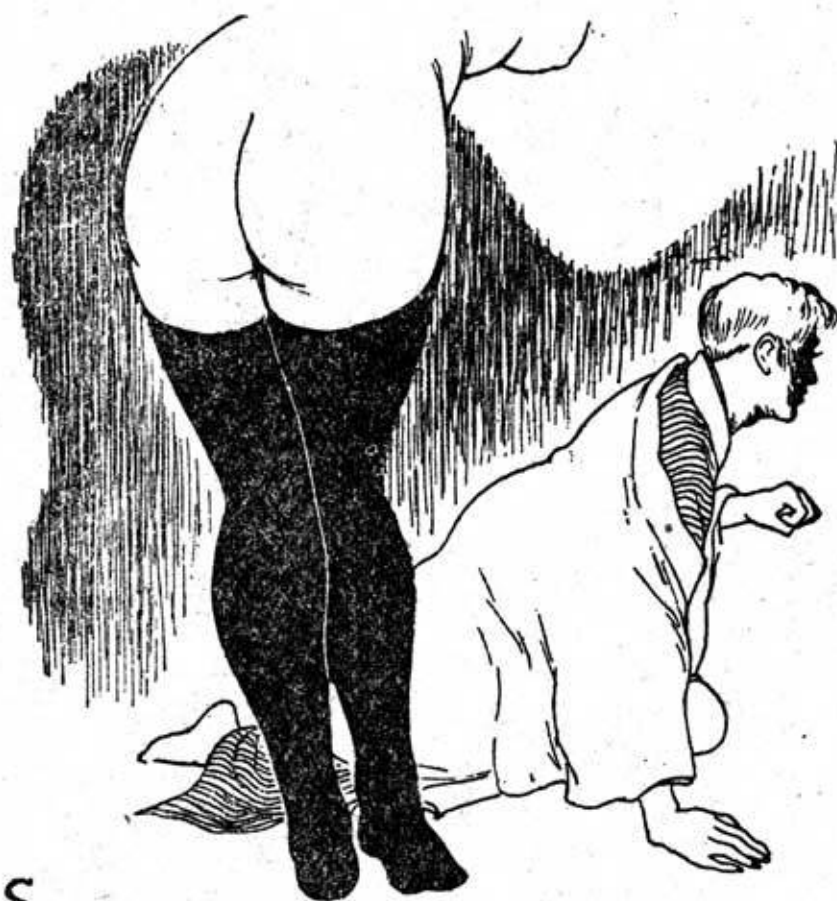
「私？フ、一生結婚なんかしないわ。」

あらッ、優子は危く口に出るところであつた。じやアこのお家は？と問いたかつたであらう。

「男なんて、私にとつてはみんな奴隷！奴隷と結婚するなんておよそおかしいみたいだわ優子、この脚を見て頂戴。ほら、私を恋した男の接吻で磨かれたこの脚を。」

どう？素晴らしいでしよう。」

江子はバジャマの裾をはだけて一方の脚に両手を支えてニユーツと空に差上げた。その艶々とまぶしいばかりによく磨かれた脚は蠟細工に血を通わせたようにすすべと



S

美しかつた。また江子の自己偏愛症が始まつた。そう思いながらおかしかつたが、しかし肉付の豊かな恰好のよい江子の脚の美しさには女である優子でさえうつとり見惚れずにはいられなかつた。

そのうち優子はいつの間にか眠つていた。どのくらい時間が経つたものか分らなかつたが妙に咽喉が渇くので枕元の水差を引寄せて水を飲んだ。ふと気付くと一緒に寝たはずの江子の姿がない。電気スタンドのスイッチを捻つてみたが、

やはり江子は部屋のどこにもいなくなつた。階下の間に降りたのかもしれない。だが、江子は中々帰つて来なかつた。優子はそのときペランダに通ずる窓際のドアが開いたまゝになつてゐるのを発見した。上履を突っかけ

ると優子はぬき足さし足ドアに近づいた。ペランダにいるはずの江子のうしろから飛びついて驚ろかしてやるつもりだつたのだらう。が、そこにも江子はいなかつた。諦めて引返そうとしたときだつた。彼女は隣の部屋の窓から赤い光線が洩れているのを認めた。ペランダはその部屋の窓まで続いている。優子は窓際に忍び寄つた。重く垂下つたブラインドの隙間から部屋の中を覗いた瞬間優子は思わずハツと息を呑んで棒立ちになつてしまつた

(三)

部屋は十六畳敷もあろう洋間であつた。ほんとにそれは赤い部屋であつた。緋色の間——その言葉がもつとも似つかわしい、天井も壁も、絨緞までもが緋色で、シャンデリヤだけが虹に擬して七彩の光線を放つていた。部屋の右手には濃紺の緞帳がドツシリと降りて、その裾は左右に絞られていた。緞帳の奥は七〇センチほど高い段になつていて真正面に彫ものの模様の豪華な大型椅子が据えられ、その上から虎の毛皮が放埒な形でフワリと敷かれていた。一人の女が傲然と脚を組んで毛皮の上に腰を卸している。彼女の肉体の皮膚は光線の中で透きとおるように白く輝やいて

見える。女は半裸体であつた。黒色のビロードのように柔かい光沢のある衣裳は、水着に似せて彼女の肉体の最小限を蔽うてゐるだけである。わずかに乳房から腰部までかくし、胸部も四肢もはち切れそうな華麗な肉附であつた。頭には金色の冠をかむり、靴もやはり金色で、眼もくらむほど臨みつけた女の肉体にさらに威厳と蠱惑を添えてゐるのは、冠にも水着にも靴にも、珍奇な石が鑲めてあるとみえてギラギラと不思議な光彩を放つからでもあらう。

女の脚のすぐ下の床には二人の男が、これもパンツ一つきりの裸体の姿で両手を上にあげたり、蹲つたりしてゐる。始めは審しく思えたが、眼が慣れるとようやくその意味が取れた。蒙古の活仏の前に出た信徒の礼拝と同じ意味であつたのだ。男達は口になかを唱えながら両手を捧げ、それから土下座し、額を床にすりつけて女を拝んでゐるのであつた。女は女神である。しかも女神は正しく江子自身であつたのだ。江子はさも心地よさそうに眼を細めて男達の礼拝を受けてゐるのであつた。

やがて江子の靴がコトリと鳴つた。それが合図でもあつたのだらう。男達は跪いたまゝ

高座の床に向つて腕を差伸べた。御供物でも載くような恰好である。江子は脚を解いた。彼女は右の脚を左の男の眼の前につき出したすると男は恭しく靴の踵を捧げ持ち、額に押し頂いてそれから爪先に接吻した。次は右の男が替つた。

今度は脚をあげて靴を遠くの床に投げた。男達は向きを変えてスタートの位置につく。江子の手にした鞭がビューツと床に鳴つた。二人の男は同時に四つ這になつて駆け出した四つ這で駆けることは大変な労働に違ひないが、また、それは大変滑稽な姿でもあつた。壁際まで投げられた二つの靴の片方を人間犬どもはめいめい口に啣えて必死に競いながら女王の足下に駈戻つて来た。全と同時にゴールインした。遅れた犬は女王の刑罰が下るのである。が、同時だつたので刑罰は免れた。御褒美として女王の足の裏を舐めさせられる両方の足に顔を寄せ、子供が乳房でもしやぶるように男達は畏まつて舐めるのである。眼を閉じて、江子のときどき身震いするさまが手に取るように見えた。

「馬！」

江子の命令する声が聴えた。と、男達は動作をピタリとやめ再び靴を取つて恭しく捧げ

た。履かせ終ると二人はおとなしく首を揃えた。江子はゆつくり毛皮から立上つた。彼女の水着や靴の石がギラギラと光る。大柄の、いかにも威厳のある歩き方で段を降りた。手にもつた革紐が忽ち二人の口に啣えさせられる。江子は二人の背に跨つた。鞭がビューツと宙に鳴る。女王様を乗せた二頭立の馬は緋色の絨緞の床をグルグルと這い廻り始めた。見事な調教である。一回——二回——馬はフー鼻息を荒くして来た。江子の鞭はビシビシと馬のお尻を打つ。三回——四回目にはさすがに二頭の馬は江子の腰の下でベシヤンコに潰れてしまつた。苦しさのため全身が大波のように起伏する。と、立上つた江子は傍の丸椅子に倚り俯伏せになつた馬の頭を双方の靴の下に踏み敷いて激しく鞭を揮ひ始めた。江子の眼は残忍な喜びで輝やき、彼女の鞭と脚に虐げられる二つの肉塊の哀れさを眺めてみると、優子の胸にも、江子の驕慢な美しさが天の配剤であり如何にふさわしいものであるかがよく分るような気がした。

「江子！優子も奴隷が欲しくなつたわ。」

(四)

この話には続篇がある。

江子にはこの二人の外に三人のいわゆる彼女の美容の肥料がいる。一人は彼女の全身化粧に奉仕する美容係、一人は彼女のある行為を口だけで勤める係、もう一人は彼女の外交

裸女緊縛の考察

サディズムは吾妻新氏の言われる如く倫理(善い悪い)の問題でなく趣味(美か醜か)の問題でありますから、その見地から云つて

先ず緊縛美といつて簡単に緊縛と美とを結びつけてしまつてよいか問題です。従つてその前提として、緊縛ということ、とり分け女の裸体を縛ることが何故広く一般に喜ばれるかという事を考えねばなりません。それは女を縛ることが最もプリミティブなアブノーマルの性衝動だからです。だからこそ本誌の一枚看板としてアツピールするのだといえます。いわば縛るということは軽い楽しい前戯といつてもいいでしょう。

さて、それでもどんな緊縛が美しいか?これは一般的な美学とその基準を一にします。或るものは美しく或るものは醜い、貴誌の扱われる写真、絵はお世辞でなく美しい。即

係兼装飾品一切の手入を勤める係である。

もう一つ重要な話は、内気な優子が江子の指導を得てやがて立派なサディストに成長してゆく過程についてであるが、いずれも次の

それは各人の趣味の問題であるけれど洗練されてゆく中に自ら客観的な基準が出来てくるものです。近代的な洗練されたセンスが私達の心に迫つて行きます。ヒネくれたものや徳川時代の刑罰の絵等はいたゞけない。

(栗本緒比古)

私達の常に憧れてやまない縛られた女体は着衣なれば長襦袢、全裸となれば尙更当人の羞恥心が加つて目を射るような眩しさを思わせる魅力的な美しさを発揮するものである。

縄の掛け方は五月号にあつたカットの本陽菱のような縛り方がよく、殊に私の気になる結び方は首筋と二の腕とは必ず二巻きにして喉首の結び目をはつきり固く締め、後手は腰より下げず、水平か或はそれより更に肩近く向けた形が緊縛感からいつて理想的である。

縛られた女体は暗い陰惨なものや、憤怒怨恨の眼差し、或は棄鉢不逞腐れ等は醜悪のみ

機会に紹介することゝして、今回は一応これで筆を擱くことゝした。(終)

× × × × × × × × × ×

を現して美の滅殺である。素裸に剝かれ逃れ避くべき両手を後に捻じ廻され、羞恥と悲哀に消え入りたい気持、やるせない凌辱感それらが入り混つて身悶えする姿態これこそ如何なる他の女体美にも優る陶醉恍惚の境地である。厳しく縛られ自由を奪われる事が苦しみとなり、責め折檻される事が痛みであり、翻られ弄れる事が悲しみである。征服と屈辱に観念する身のこなし、等が混然一体となつてその人の全肢体からコケティッシュな妖艶さとなりサグライムな艶麗となる。これが本能美の絶頂といつても過言ではないであろう。

(加左和天恩)

◎お願い◎

本誌の縛られた女の絵、写真についての御希望はどん／＼御遠慮なくお申出下さい。出来るだけ御意向に副いたしたいと思います。

或る体験より

切 腹 願 望

水 内 武 郎

御誌の出るのを毎号待ちかねて愛読している者ですが、「切腹史談」殊に女性の切腹の記事は胸を躍らせて読みました。

「女の腹切」何と素晴らしいことでしょう。

私はこうした活字を見るだけで堪らない昂奮を覚えるのです。女が拷問にかけられたり、縛られたすることにはさして興味が持てず又同じ様なことでも女が腹を裂かれたりしたのでは駄目なので、女自身がその肌に刃を当てたのでないはいけないのです。

私はこうした気持を十五の時から持ち始めたので、勿論これには直接の動機がありました。それは私が親戚の家へ泊りに行っていた

丁度その時三軒ばかり先に住んでいた遊び人の女房が割腹自殺を企てた事件が起つたのです。何でも亭主が仲間を傷けたとかで刑務所に入れられている間に情夫が出来てしまったのですが、明日亭主が出獄という前日に自殺を図つたのだとききました。

近所の人々の騒ぎに何事だろうと物好きに行つて見たとき、私の目に移つた光景は、まだ異性に対してそんなに関心を持たなかつた私の意欲に突然何とも言えない強い衝動を与えたのです。

大きな柄の浴衣を肩から羽織つたまゝ細紐一本なしで両の乳房を露わに鳩尾のあたりか

ら真白な晒布が巻かれその最も膨らんだ部分がベツトリと血に染まつているのです。左手を前に突き、右手に出刃庖丁の柄を握つて腹へ突込んだまゝ、肩から乳房、乳房から腹と大波のうねりの様にうねらせ、水色の湯文字からあぐらをかいいたような恰好で真白な太股が露わになっていました。多数の人々が近く近くの病院へ担ぎ込んでしまつたのですがその夜私はこの姿が脳裡に灼きついてしまつてどうしても眠られず、しかもその夜始めて××××を体験してしまいました。

それ以来「八犬伝」や「長町女腹切」はもとより講談本や稗史小説を片っぱしから漁つて女の腹切を見付けることに骨折りました、新聞も先ず社会面の記事の下の方の小さな標題から「女の割腹自殺」などという活字を見付けると胸をドキ／＼させてしまつたものです。私は又絵も漁り廻りました。草双紙の中にはかなり多く発見されました。伏姫や、犬村大角の妻雛衣の血塗れ姿には多分に刺戟されるのですが、こゝも又毒婦船虫が裸にされて縛られ、牛の角で腹を突破られている姿には余り興味を持てませんでした。

併しどんな凄惨なものでも絵はやはり絵でしかも草双紙に書かれたものは、時代の差の

あることも一つの原因でしょうが、自分の感じにびつたりとくるものがありません。といつて現実に見られることはまず絶対により得ないことなのです。その点女剣劇はこの私の異常な欲求を多少でも満足させてくれるものゝ一つなのです。捕方を相手に散々暴れ廻つて髪もさんばらに双肌脱ぎになつた女賊が最後にもうこれまでと捕方を踏んまえて立ちながら腹を切る。これだけでいゝので筋なんか私の場合どうでもかまわないのです。

こんなわけで独身時代にはその対象として女の腹切を頭に画くのでした。それは丁度本誌の四月号所載、信太蓉子様の書かれた姿そのものなのです。又時にはあの様な型式を具えない、三宝の上の腹切刀を右手になど、いうのではなくて、出刃庖丁か何かで下腹を抉り廻し血塗れになつてのたち廻つて苦しみ、太股から下腹部まで露わになつてしまふ姿を想像するのです。

二十八才の時に妻を迎えました。しかし私のこの変つた嗜好は新婚の妻に対して一向に興味を覚えず、例の幻想を頭に描いて辛うじて気分を掻き立てる事が出来るのでした。こんな工合ですから妻の方でも何となく白々しくなつて行きましたが、と言つて私としては

自分の性癖を妻に打明ける勇氣がありません。苦し明らさずに話したらきつとびつくりして実家へ逃げ帰つてしまふでしょう。万一共鳴してくればこんな倅せんことはないのですからいつそはつきりと話してしまおうかと幾度か決心したこともありましたが、さていざとなると言いつらいのです。そこで一計を案じて或る夜「朝比奈巡島記」の巴御前が羸弱な於三丸のために腹を切つて臓腑を掴み出しその血を飲ませる話をし出しました。そして巴の腹を切る模様を殊更に詳しく、勿論自分の捏造も加えてしやべりながら妻の顔色をうかがいました。処が妻は話の筋だけには多少興味を持つた様でしたが腹切などには一向何の感興も持たない風情でした。私は「もしお前だつたら腹が切れるかしら」と尋ねて見ましたら妻は即座に「いやよ、お腹切るなんて昔の武士じやあるまいし、女がそんなこと出来るもんですか」と言下に否定しました。私はこの機会を逃しては又話し出すことも容易でないと思つて今昔の女腹切を並べたてたのです。すると妻は「もうよして、そんないやな話」と眉を顰めてしまつたのです。私は失望しましたが、同時に本心を打明けなくつてよかつたと思ひました。

それから間もない事です。私の勤めていた会社の宴会の崩れに、誘われるまゝ待合へ行きました。その夜私はかなり酔つていたので前後の考えもなく、とみ子という芸者とそこへ泊つてしまつたのです。引け間へ案内されて床へ入つて見ると無性に咽喉の乾きを覚えてたので枕元の水を一杯飲んで見たが、何か果物が欲しくてたまらなくなつて、その事とみ子に頼んだのです。彼女は快く承知して柿を五つ六つ盆にのせて持つて来てくれました。そして手早くその一つの皮を剥いて四つに庖丁を入れ、「柿つて酔が醒めるわ、さ、召上れ」と言いました。私は「有難う」といつてその一片づゝを次々と食べました。その間にとみ子は着物を脱いで真紅な長襦袢一つになつて私の枕元へくの字型に坐りました。私は例によつて大して感興が湧かないので知らん顔をしたまゝ柿を食べていると、彼女はいつか果物庖丁を取上げてじつと見ているのでした。

「切れそうね」と独り言のように言つて熱っぽい目で刃先を眺めているので私ははつとしました。急に何かわく／＼した氣持になりましたがそれでもなお表面だけは冷然と「果物ぐらい何だつて切れるよ、その庖丁そ

んなに切れるかしら」と一寸対手の様子を打診して見ました。する彼女は「切れそうだが」と言いながら庖丁を逆手に取つて長襦袢の上から乳のあたりへ擬したのです。私はもうすっかり有頂天になつて、

「着物の上からじゃ駄目だ、肌へじかでなくつちや」と上ずつた声を出してしまいました。女はにつこり笑つて胸をぐつと寛げて乳房を露わにしました。

「こゝ肋ら骨があつていや、お腹の方がいいの」と今度は伊達巻の下の方へ突立てる真似をしました。その時私の欲びはどんなだつたでしょう。

「脱いで〜」と私は囁言のように言いました。すると彼女は、

「無論よ、着物の上からじゃ切れないわ」と伊達巻をゆるめてずり下げ、長襦袢の襟を掴んで左右へひらき赤い湯文字の上へつけた半巾の晒布を露わにしました。更に左の手でその晒布の部



分を掴んで一気にぐつと押下げて臍の下までむき出しにしてしまったのです。それから後は殆んど夢中でした。世の中にこんな女が居ようとは思ひもかけなかつたのです。私はこの夜以来とみ子の許へひどい苦面をしてまでせつせと通つたのはいうまでもありません。

彼女が自ら腹を切る真似をして、時には蚯蚓ばれをこしらえてしまつたり時には浅いな

で満足感と味うようになったのも話を聞いて見ると私の場合と同じような動機を持つていたのでした。

彼女は十九の時に茨城県のF町で、或る料理旅館に女中奉公に出たのでした。そこに二十一の時まで居たそうですが、或る春の夜に男女連れで泊つた客、男は二十八九の商人風で女はその妻といつていた二十五六の一寸仇つばい容姿だつたそうです。この男女が夜明け方に呻き声を上げているのを彼女が誰より先に聞きつけて、急病でも起したのかしらと思つて寝巻の上へエプロンをかけてその室へ駆けつけました。

「どうかなさいましたか」と言葉をかけてから襖を開けた時、前夜就寝の時切りかえた電気スタンドの薄ぼんやりした光の中に書き出された光景。

「それは何て言つたらいいかしら、とても口下手な私なんかにはうまく言い表わすことが出来ないわ」と彼女は前置きして断片的にその状況を語りました。

二人とも宿の寝巻のまゝ、寝床の上で七首で情死をしたのです。後で判つたことですが女が男の腹と心臓を刺して殺した後、女は腹を掻切つて死に切れず苦悶中だつたわけでした。

二人はこの世の名残と散々情痴の限りを尽くした挙句、先ず気の弱い男を刺殺し、その断末魔の喘ぎを眺めながら、しどけなく乱れたまゝの姿で心ゆくまで男の血を充たした豊満な下腹部へ男の血で軋つた刃を突立てたのでしよう。とみ子が見たときは仰向けに倒れた男の血塗れた腹の上へ裸体同様に乱れた姿の女が寄りかゝつたまゝ両手を血に染めて下腹を掻き切つていた瞬間だつたそうです。

「あの女の人の姿、私もあゝして本当に苦しんで見たい」と言つて彼女はその時の情景を思い浮べてうつとりするのです。

とみ子は私と逢う度びに色々変つた方法を考へてはそれを実行して私を飲ばしてくれました、刃物も短刀だのナイフだの出刃庖丁だのその時々によつて変えるのです。私はその度毎に新しい刺戟を満喫していましたが、その内の一つだけ述べてみましょう。

私は彼女のいうまゝに一緒に風呂へ入りました。とみ子は無論刃物を用意しているでしょうが、今夜は何を持ち出すかしらと思うともうそれだけで胸がわく／＼する思いでした。私は風呂につかつて彼女の様子を見ていました。一度温つて上氣した彼女の肌はほんのりと桜色になつて、流し場に片膝を立て、

指先など洗つていましたが、やがて、

「あなた、あたし今夜は本当に切るの、お別れよ、よく見ていて」といゝながら鏡の前に隠してあつた西洋剃刀を取り出しました。

そして左手にタオル手拭を鷲掴みにしたまゝ左の下腹に当てがい、いきなりその手拭を当たてたすぐ上へ西洋剃刀を突立てたのでした。

私は真裸体の時には西洋剃刀が如何にも適わしいので息をつめて見据えましたが、その瞬間彼女の下腹からタラ／＼と鮮血が噴き出して来たのです。私は流石に陶酔境からふつ飛ばされて愕然としました。湯舟から飛び出して「何てことをしてくるんだ」と彼女の右手をむずと押えました。とみ子は、

「離して、死なして」といゝながら臍の下へ引廻そうとあせります。その間にも血は滾々と迸つて彼女の下腹から太股まで真赤に染めました。

「とみ子、死んじやいけない」と私はどうしていいのかわからず途方に暮れました。

「あんだ、しつかり抱いて」と言われるまゝ夢中で彼女を後抱きに抱きしめたのです。

とみ子は私の手が緩んだすきに剃刀を真一文字に右の下腹まで引廻して、私の手に抱かれながら苦痛に身をくねらせて悶えます。

「とみ子、とみ子」と私は半狂乱になつてしまいました。彼女は

「まだ死ねない。苦しい」と喘ぎながらまた剃刀を引廻した右下腹の処でぐ／＼抉りました。そして低く「あつ」と叫んだ瞬間私に軀を持たせたまゝぐつたりとしてしまいました。私が周章てゝどうしようという分別もなく立上つたとき、彼女は突然顔を上げてにっこり笑つたのです。そして、

「あゝよかつた。あんたは？」というのでした。勿論その顔には少しも苦痛の色などなく如何にも満足し切つたうつとりとした顔付で「でも驚いたでしょう。あたし死にはしないわ、種はこれよ」

といゝながら真赤な糠袋見たいなものをタオルの下から出して見せました。彼女はゴム引の小さな袋へ糊紅をいっぱい入れて置いて、この袋を剃刀で切つてそれを流し出しながら下腹一面になすりつけたのでした。

こうした遊戯を続けているうちに、僅かな月給取の身分では、あつちこつち借金だらけになつて身動きが取れなくなつてしまいました。勿論妻は私から離れて実家へ帰つたきりになつてしまつたのです。どう仕末をつけていゝか全く手のつけ様のない状態になつた時

私にとつては天の祐けともいふべき召集令状が下つたのでした。

終戦と共に外地から帰つた時は今までの一切が御破算になつていました。帰還以来、運よく勤め口があつたので、一生懸命働いてこ

うした妄念を去りたいと努めていますが、やはり駄目です。併しその為に世間の人々に何の迷惑もかけず、ましてや危害を及ぼす様なことは絶対にないのですからまあその点で気安く思つていますが、それにしてもあのとき

子という女はどうなつてしまつたか、当時二十七とか言つていましたから今は三十六の筈です。

(終)

女体緊縛美について

千葉三郎

誌上、読者の意見に依れば、或る人は浮世絵にみるような妖艶な美しさを、或る人はモデルで健康な美しさを求めている。そして至観的であるとか、ないとか云つた議論がこれに附随するこの様な異つた意見に、普遍的な判断を与え得る客観的な基準が成立するものかどうか。問題の前提はこの点にある様に思う。結論を先に述べると、私はそのような基準は成立しないと考へたい。問題は性に係

ることであり、各人の潜存意識に作用したゆがめられた欲望が判断の基礎にある以上、それに対する如何なる説得も無用に思われるから――。

従つて、他の人の異つた意見も、この点に關する限り、私はそれが正しい意見であることとを認ないわけにはいかない。

緊縛美の形式(スタイル)について、私は旧い時代のそれが好ましい。完璧な芸術に依

つて人々が感動するのは。それがリアルに描かれてゐるからではなく、それが美しく描かれてゐると云う単純な理由に依る。縛しめられた女性の姿に感動する時も同様である。而して縛しめられた女性の美しさに感動するのは、雑駁な、日常的な感情によつてゐるのではない。或は縛者と受縛者との合意と云う現学的な約束によるものでもない。もつと心理的な詐術を必要とする美的な想像力によつてゐる。

想像力の豊かさは個人の資質に依るであろう。しかしそれだけではない。その場の雰囲気、人物の衣裳、髪かたち、姿態などにも大いに影響をうける。そして、その様な想像力に依つて、我々は縛られた人を眼前にして、日常の荒々しい生活を離れ「物語りの人物」に空想的に転身する。生れ変わる。次に、その「物語り」は私にとつて現代ではいけない美について容易に語られ、しかも美が生活の

感情から遠く遊離してしまつた現代に於ては私の想像力は衰れに枯渇してしまふ。私の想像力も豊かにしてくれるのは、旧い時代である。Aesthetic——耽美とか、唯美とか言葉の綾ではなく、人々の日常の裡に生きていた懐しい時代である、それは犯した罪さえ庶民のたくましい美的感情のなかで許容され、讃美された時代である。

だから、私にとて、日本髪やキモノは縛られた人の美しさのためには、どうして必要な要素なのである。健康でモダンな女性の縛られた姿には、あまり感動しない。彼女たちの姿はあわただしいオフイスの雰囲気や、自動車の流れや、ボリスのリズミカルな白い手袋の近代生活の中でこそ美しいものであつても現代を支配するメカニズムはとつくの昔に、我々の生活感情のなかからエステティックなものを洗い流してしまつてゐる。

緊縛美のスタイルに関しては以上のようなものが私の望みであるが更に縛られた人の顔或は姿からにじみ出る様々な訴えについて簡単に述べてみよう。悲しみや怒り或は羞恥や苦しみのマスクのなかで、最も私の共感をよぶものは悲しみや哀れさ、或は諦めの表情である。反抗的な怒りや極端な苦しみの表情は

美しくないと云えぬまでも、見る者の心の底まで滲み透る様な共感をよび起すことは少い縛られた人の感情に自分の感情を合させ理解することに依り、始めて美の交渉が両者の間に行われるのであり、其の場合、苦しみや怒りはそれを理解するためには、理解する側に於て、強い感情のゆさぶりが必要となるため、自然、その後で行われる美意識の交流がはゞまれ、極端な場合には、それを醜悪とまで感ずる様になる。その点、諦めや悲しみの表情は、柔い心の動きを必要とし、心の柔軟さこそ、美の理解の最大の要素であると考えらる。反抗や怒りをおさめ、潔ぎよく亡びにこうとする心こそ、マゾヒズムの心情である

四月号の読者通信で、大川由紀子さんが、「観念し切つた姿の美しさ」について述べられ、更にそれを様々な「仕置き」のうちに実現されていることを読んで、不思議に私の望みと全く一致していることを感じた。刑をうける者は最後には、如何なる自由も残されてないことを知らねばならない。肉体の自由だけではなく、心の動きの微妙な点にまで、捕はれている者の悲哀と羞しめを感じる。最早、逃れる術はないと、自分の運命を繰り返し繰り返して自分に語つて聞かせなければなら

ぬ、その様な心理のキャラクターは、明らかに現実の心理の動きとは、別種のものである。こゝでは現実の約束は全く無効であり、新しい法則が各人の想像力に支えられて支配する。その想像力はその場の雰囲気助けられる。その場の雰囲気をも出し出すものは、人物の表情であり衣裳であり、髪かたちである、大川さんは「観念し切つた美しさ」と、「お姫さまの姿」と云う具体的な例を上げて、その事実を示していられる。

特別會員の機関誌

KK通信の中間発送について

従来本誌の発売と同時に発送致して居りましたKK通信は第十号より本誌とは別にお送りすることとなり、従つて本誌の直接購読者に対する贈呈も中止することになりましたので、購読御希望の方は、半年分百円、一年分二百円、御送金下されば毎月本誌発売の中間を狙つて直送申し上げます。只今のところ過渡期にて確実なる発送日は申し上げかねます。が追て同紙上にて御知らせ致します。極めて安価な紙代にて毎月お手元へお届けするKK通信を何卒本誌と御併読下さるようお願い致します。(見本一部切手三十円にて急送)

囚獄の思い出



獄

収

一

今までいろいろ少年矯正院の事を書きました

たが今まで書かなかつた事を述べてみようと思います。何時も申し上げておりますように私の入れられたのは戦時中で、しかも某植民地なのでありますから、現少年院とは大分異つていますので念のため申し上げておきます。先ず審判所の判決を受けて入院を申し渡され、始めて囚人となるわけですが、囚人には一級より五級までの階級があり、先ず四級になるのです。この階級は何のためにあるかという、すべての待遇がこの階級によつて異なるのです。食事、衣類、戒具、運動、等全部

異ります。

囚衣から申しますと、作業衣と長衣とあります。作業衣とは作業の時着るもので、長衣とは監房の中で着るのです。その色は、作業衣は一級は全部白、二級は上が白、パンツが黒、三級は上下共青、四級は上柿色、パンツ黒、五級は上下共柿色でした。いずれも作業衣は上衣はランニングシャツ、下衣はパンツでした。長衣は、一級はかすりで普通寸法、二級は黒、三級は青、四級は柿色、五級は長衣なしで、作業衣と同じ物を用います。この五級というのは作業を怠けるとか脱走すると

か、又は脱走が未然にわかつた時等の者で懲罰のため、いつもひどい目にあわされるのがこのクラスで私はこの五級にたゞきこまれていました。

長衣といつても袖はひじまでのもので一級にならぬ限り人間扱いはしてくれません。作業衣は三級より五級までは白で大きく受刑者番号が縫いつけてあり遠くからでもわかります。二級はこの番号が黒字でした。一級は番号はつけません。長衣の場合、一級は番号なし、二級より四級までは左襟に漢字で番号を書いた白布を縫いつけなければなりません。

始めて柿色の四級の作業衣を着せられた時は、いわゆる赤い着物を着せられるのですから気が顛倒してしまいました。やがて慣れゝば何ともなくなりました。

さて日課について述べてみましょう。

先ず晴天の場合、起床は六時です。二級の雑役囚が運んでくれる水桶で顔を洗い監房の鍵があいて前に整列。点呼を受けます、これが又大変で一人、一人第何号囚と、自分の受刑番号をどならねばならず、順序がちがつたりしたら、まず答の五つや六つは覚悟せねば

なりません。点呼が終つたら房へ帰り、正座して食事を待ちます。食事は雑役囚が運んで呉れますが木の箱に入つて居り、各級により食事の量が異なるのです全く犬猫の取扱です。やがて食事始めの号令がかゝつたら大至急で食べないと箸を置き〃の号令になつたらおしまいです意地の悪い看守は三分位しか食事の時間を与えてくれない時があります。

七時になると、全員房の前に並びます。そうすると看守が作業場へ行く者すべてへ両手錠をかけますが私は五級で甚だ目立つた恰好をしています、五級の者だけは房の前で高小手に捕縄で縛られるのです。やがて更衣室へ来ますと、そこでいましめは解かれ今まで着ていた物は全部脱がされ、全裸体で両手を上に上げ、看守に全身をみせて何も持つていないことを示し、作業衣に着替えれます。そして各級に応じたいましめを受けるのです。五級は捕縄と連鎖で縛られ作業場へひきずり出されます。作業は主として土工でたこつぼの防空壕掘りでした。作業中にはく物も級によつて異なります。一級は靴下及びズック、二級は地下足袋、三級はゴム草履、四級は藁草履、五級は跣足です。つまり五級は罰のためなのです。一日の量がわりあてられ、それ

を果さないと答刑です。昼休み二十分、夜の七時まで作業です。作業後、房に帰るのですがこの時必ず今迄着ていたシャツとパンツを毎日洗濯し、そして干して置かねばなりません。(もつとも私の入れられた少年矯正院の所在地はたび／＼申し上げるように熱帯です)から薄いシャツ等一時間もあれば充分乾きます。その時は全裸体です。そして両手を上にあげ口の中、肛門等の検査を受け、一本のロープをまたがされます。そして何もかくしてない事を確かめて風呂へ入れられるのですこれをカンカンおどりと云つていました。

風呂へ入る時も右の二つの腕に小さい木の札の受刑番号を紐で着けねばならず全くつらいです。入浴時間はたつた五分です。五分過ぎれば交代です。そして長衣を着て監房へ帰るわけです。そして食事が八時で点呼八時三十分、消燈と云つても廊下はかん／＼に明るく、いくらでも房内は見られるのですが十五分置きに看守が見廻ります。雨の日は全くの地獄です。起床等は同じですが作業時間が正座か又は俵かつぎでどちらにしても看守のなぐさみものです。つまり看守のサディズム的气氛を充たしてやるだけの事です。

次に俵かつぎについて書いて見ましょう。

先ず食事をすませて作業衣に着換え、そして各級に応じていましめを受けるわけですがそれから、雨天の日は雨天運動場という大きな建物へ行くのです。こゝは普通の学校でバスケットボールが出来る位の広さの板の間ですこの板の間へ縛られたまゝ二歩間隔に開かされて正座させられます。物を云う事は勿論、横を見たり、膝を崩す事等は厳禁です。一寸でも動けば正面に見張つている看守が〃何号〃というとき他の看守がとんで来て答を十位くれるので動くわけにも行きません。二時間もすると正座をしている足がしびれ、そして縛られている二の腕から手首の方がしびれどうにもこうにもならぬようになって来るとどうしても体の姿勢が悪くなります。四級以上の者は両手を前にして両手錠だけかけられの正座ですからそれほどありませんが五級の者はどうしても姿勢が崩れて来るのです。そうすると看守が〃二四号姿勢が悪い〃とどなりまします。すぐ答刑です。〃はつ〃として姿勢を直そうとしても体が云うことを聞きません。そうすると「そんなに座るのが嫌なら俵をかつげ」と申渡されます。そうすると後に他の看守が来て縄尻をとつて「立て！」と云つて立たされるのですが、足がしびれて

いで立てるわけがありません。二人でかゝえられ立たされ、雨天運動場をかゝえられて一廻りさせられるとどうやら歩けるようになります。そうすると、後手にしていた両手だけ解いてくれます。そして二の腕を縛っている縄をしびれがとれる迄ゆるめてくれます。結局首と両二の腕に縄がかゝり、それが背中中結んであるわけです。そして砂の入った重さ三〇キロの俵をかつがされます。俵をかつげばどうしても両手を上に上げねばならず、従つて二の腕も上に上るわけですから非常に捕縄が締まり痛いのです。そうするとそのしまり工合を適当にして呉れますが、それからが大変です。雨天運動場を一周すれば約八十メートルあるのですがこれを十分間二十回の割合で俵をかついで走るのです。つまり他の囚人の正座している周りを走らされるのです。

一周三十秒でまわればよいのですが三十キロの重い荷物を持つては始はよくても、そう走れるものではありません。十分間に二十回廻れなかつたら、その回数を計り一時間走らして、又次の罰があるのです。二十分位はよろしいが三十分もたてばへとくで汗が滝のように流れ、赤い囚衣も汗でべつたりつき、もう何も考えることも出来ず、たゞ走るだけ

です。やがて五十分位すれば走る事は出来ず歩くだけです。一時間たつと「やめ」と云つて俵を降させます。そして捕縄を解き、裸にして汗をふかせます。そしてパンツだけ着けさせ両手錠をかけ、看守長の所へ連れて行かれ

「只今の俵かつぎは不足が二十回であつたから規定により答刑八十に処す」と申渡されます。

つまり一回廻れなかつたら答で四回なぐられるわけです。そして正座している他の囚人の前で後向きにされ直立させられ動けないように両足を縛られ背中と尻を答で八十なぐられるのです。作業の時の答刑はうつぶせですが俵かつぎの時は直立です。悲鳴をあげるなど云われても二



十位まではびしりとそのたびに、背中に或は肩に、又は尻に、焼火箸を当てられたような激痛でどうしても悲鳴をあげるようになり、三十以上ではそれが呻き声になり、やがて五十位になれば倒れます。すると両方から看守が腕をかゝえて尙も答打つのです。

正座して見ている囚人も始めはこんな答打ちを見ていると気が遠くなるような気がするので、いわゆる囚人根性に徹して来ると、何号か答打たれている時は看守の注意がすべてその方へ行つていきますから少々位姿勢を崩してもわからないのでかえつて楽です。ので、誰かやられるといふのに位にしか感じなくなりません。

前にも述べました

読者の皆様の雑誌である奇クをより強く皆様に密着させるため、努めて読者諸氏の作品を掲載したいと思ひますので御達慮なくドシドシとお寄せ下さい。文章の巧拙等は問いません。誌上匿名は御自由ですし、本名其他の秘密は厳守致します。枚数や用紙も問いません。掲載の分には薄謝を呈します



歌舞伎とサジズム

宮内 義雄



歌舞伎を構成する三つの大きな要素は、なんといても「殺し」と「切腹」と「濡れ場」だといえるだろう。その「殺し」も「切腹」も血を見せる芝居なのだから、歌舞伎とサジズムとは切つても切れない縁がある。それに、打首、首実検、手負い等、数えればきりがない。歌舞伎の狂言のせりふによく「さあ、さあ」と言い合うセリフがあるが、これも精神的サジズムに通じるものが多い。

「殺し」の惨忍さが「こんぱく此の世にとどまりて」幽霊となり、歌舞伎独特の怪談芝居になる。言いかえれば、お化けの出る芝居には大抵その前にむごたらしい殺し場があるものだ。皿屋敷のお菊、四谷怪談のお岩、法界坊など、その代表的なものと言つていいだろう。

尤も幽霊をともしなわな惨忍な殺し場がないでもない「夏祭」の団七が義平次を殺す所などは、泥田の中の殺しで、泥まみれ、血まみれになつて死闘する。しかし、男が女を殺す場面には、殺される側に美しさがあるが、腰が曲つて見るから貧弱な薄汚ない義平次が

死にきれないでもがいても、その苦悶に美しさはない。むしろ殺す方の団七のさげ髪が、素裸に締縮緬の褌と相まつて美しい。

けれど、サジストの側から言つても、マゾヒストの側から言つても、どうも、加虐する方よりは、被虐の姿に美しさがある方がいいのではないだろうか。

金閣寺の雪姫にしても、明烏の浦里にしても、縛られた姿は美しいし、男でも、権上の権八とか、切られ与三だとか、縄をかけられる側が美しいのが常になつてゐる。

そこで「殺し」の中で陰惨な美人の漂うものから順に話を進めようと思うと、先ず第一に皿屋敷のお菊の責めに指を折ることになる。

皿屋敷と一口に言つても、現今、此のお菊が責め殺される「皿屋敷化粧姿視」という狂言はあまり上演されない。同じ皿屋敷という外題でも、岡本綺堂の「番町皿屋敷」とか黙阿彌の「新皿屋敷月雨暈」の方が度々上演され、知っている人が多いだろう。「番町皿屋敷」でも腰元お菊が殺されるが、これは主人

で恋人である青山播磨の心をためそうと思つて、大切な皿を割りそれを播磨が、お菊を愛している自分の心をためしたということに腹をたてて、手打ちにするので、お菊は喜んで死んで行くのだから、責め折檻するような所はない。「新皿屋舗月雨暈」は六代目菊五郎がよくやつたから、魚屋宗五郎として知つてゐる人が多いだろうが、これも宗五郎の妹が井戸端で責め殺されるくだりは舞台ではあまりやらない。ただ宗五郎の妹の死を知らせにくる女中の口から、井戸端で、もとどりをつかんで顔をこすりつけられたり、打たれたりして責められたあげく、井戸の中へ斬り殺されてしまふ有様が語られるのだが、その語り方のうまさに思わず体が引締る思いをするものだ。

その他「けいせい鏡台山」にも「新入御伽草」にも皿屋敷のくだりがあり、惨虐な殺し場があるが、近頃上演されたためしがない。

「新入御伽草」には、巳の年、巳の月、巳の日に生れた女の生き血を土に混ぜて皿を作る為に、幸崎という腰元が、縛られて辻堂の中に押しこめられ、一日一本づつ指を切られ、すでに九本切られて血のしたたる指のまま荒縄で両手を縛られ、やつれはてて引き出され

る場面がある。これが後にお菊の様に亡霊になつて出るのだ。だから皿屋敷には腰元の惨殺と、お皿がつきものということになるらしい。

さて、そこで歌舞伎の皿屋敷のお菊の責めを話す前に、この狂言のもとになつた実説について、少し書いてみようと思う。これが又いろいろあつて、確かなことはわからない。古跡というのが仙台にもあれば、松江にも熊本にもあり、実説と称する伝説が多すぎて、実説の実説をきめるのが困難だ。ただそのどれでも、殿様の大切なお皿を割つたので、井戸で吊し斬りになり、その亡霊がお皿を数えて九枚目までゆくとさめざめと泣くというのであるが、私は一寸風変りな実説を拾い上げることにする。

それは、寛政七年八月、大阪の市中の井戸の中に、おきく虫といつて、女が縄目にかゝつてゐる姿に似た異虫が多く生じたという古事のことである。

それによると、お菊という十七になる娘が播州のあるお屋敷に奉公していた。父は亡く母に孝行で、御主人大事と一生懸命つとめていた。ところがそのけなげで美しい様子にその家の殿が深く思いをかけ、夜毎夜毎にくど

いたが、お菊はそれとなくさげ通していた。ところがある晩、お菊が針仕事をしている所へ急に殿がお帰えりになつた。あわててお菊は針を髪へさして出迎えた。今の髪では針をさす所がないが、昔の人はよくやつたもので私が子供の頃、祖母が丸まげへ糸のついてゐる針をさして忘れてゐることがよくあつたのを覚えてゐる。お菊も何の気なしに桃割か島田かの上へ一寸さして出たのだろう。そして膳部の用意やら、お給仕するやらで忘れていた。ふと気づいて髪へ手をやると針がない。これは大変と思つてあたりを見廻したが、どこにも落ちてゐない。運の悪い時は仕方ないもので、その針が殿の食器の中に落ちてゐたのだ。

「おのれ、主をなきものにしようとはかつたか」と殿はいきなりお菊のたぶさを引つつかんで、畳へ顔をこすりつけた。

「誰に頼まれたか言え」

と責められたが、もとよりお菊はただ自分の不注意を詫びるより致し方ない。それを日頃の恋のかなえられない意趣返えしもあつて、殿は針一本を言いがかりにしてお菊を責めた。

「誰に頼まれたか言え、言わぬな。言わなけ

ればこうしてやる」

と、お菊を後手に縛り上げその柔らかい肌をところきらわず針で突いたがそれでもお菊はただ泣きながらあやまるだけだ。

それを今度は古井戸の端まで引きずって行つて、苔や蔦の重つている古井戸へ沢山の蛇を入れ、そこへお菊をつりおろした

蛇はお菊の腹へくいつき、首へまといつて地獄の苦しみもよもやと思う苦しさに、お菊がのび上がるのを上から槍でついた。それも一とつきで急所をつくわけではない。二たつき、三つき、血みどろになつてもだえる体に蛇がまといつき、その凄惨さは生地獄そのまゝだつたらう。お菊は虫の息になつて呻きな



缺血責めの番付より

名宗全は細川の重役浅山鉄山、忠太の兄弟と謀つて殿を毒殺しようとするのを、腰元のお菊に見られたので、お菊を責め殺すのだ。鉄山がお菊に思いをよせていたのだが、三平という夫もあり、子までなしているので鉄山の恋がかなえられない。その意趣もあることになつてゐる。

がら、この恨みはきつとはらしてみせると、体をふりしぼるように言つた。するとその妄念が火と燃えて、たちまち異形の虫に変つたというのだ。この古事にはお皿のことは何にもない。

芝居の「皿屋敷化粧姿視」は播州姫路の城主細川巴之丞が傾城に溺れているのに乗じて、山

その責め場だけをここに書いてみよう。はじめ四人の仲間が青竹で撲たれる。髪をつかんで引きまわされる。その時髪がとけて乱れ髪になる

「くくし上げよ」

と鉄山がいうので、逃げようとするのを無理やり井戸の所へくくられて、着物が肩からすべり落ち、長襦袢の衿が広く出る上を縄をかけられて、井戸の上へ吊し上げられる。乱れた髪が右肩から前の方へたれて「アアッ」と呻きながら、足をブラ／＼と揺すぶつてもだえる。

その姿を見ながら、鉄山が長い恋のくぜつをするのだから、鉄山という男はよほどサジストだ。そして白刃をつきつけてお菊の肩へ斬つけると、衣裳を通してお菊の肩へ血がにじんでくる。これはゴムの箸で血のりを通わせる仕掛けになつてゐる。そこで井戸の中へ縄を下げて水を浴びせ、再び吊り上げる。この時本水を使う為、お菊の衣裳はちりめんだと縮むので、袖を用いるということだ。

「ああ、苦しや、堪えがたや」

と、お菊は足を井桁にかけて、身をふるわしてもだえるのを、再び水につけられる。そして今度はお菊の口へ刀をくわえさせて引く

ので、お菊の口からたらたらと血が流れる。

これも、お菊をやる役者が口の中へ血のりをいれたゴムの玉をふくんでいて、歯でくいきるのだが、肩からは血がにじみ、口のはたにも気味悪く血が流れてきて、おまけに後手に縛られて、本水までかけられているのだから、お菊をやる役者も、役者であることを忘れて、本当に責められているような気になるものらしい。そうになると、呻いたり、恨んだりするセリフが本いきで出来るようになる。

お菊はそうまで責め苛なまれても、夫に一目会つて死にたいと思うので、止めをさされたくない。苦しみもだえながら、この地に思いが残っているのに死にきれないのだ。それを鉄山が颯り殺しにする。お菊は苦悶が増すに従つて、何とかして死ぬ前に夫に一目会いたいと思う心の苦しさも増すので、鉄山への恨みが深くなる。一太刀ですばつと斬殺されてしまつては、幽霊になつて出る程の妄執は残らないわけだ。

苦しみ、恨み、訴えながら、お菊は後手に縛られたまゝ、とどめの一太刀を受け、井戸縄を切られて、そのまゝ井戸へ沈んでしまうのだ。

そのあとは今度はサジストだつた鉄山が、

お菊の亡霊に悩まされるのだから、立場が反対になるわけだ。

四谷怪談でも、死ぬまでさんざん虐げられ

「あるマゾヒストの手帖から」

前号の補遺と訂正

第三「香唾壺」の例の追加。安成二郎の近著「怪力乱神」(本としては大したものではない。)の中に「人間痰壺」として、前秦王付堅のいとこの朗が客人を招いて席を設けた時痰がきれる度に給仕に跪いて口を開かせその中に吐き込んで外で吐き出させたという話がのつている。出典をあげていないが、「世説」あたりに載つてたかと思うので、いずれ調べて見るつもりである。

第五「ドミナ」はdominaとなつてゐるが勿論dominaの誤植である。実はこの二行は記憶によつて書いたので一寸不安があり、念の為、調べて見たら誤脱があつたから訂正しておく。

O demens, ita servus homo est? nil tacerit, esto:

hoc volo, sic iubeo, sit Pro ratione voluntas. おゝ、馬鹿なことをお言い。それ

では奴隷は人間なのか。あれに何も悪いと

たお岩が、幽霊になると面白いように人を苛む。しかしこの話は次にゆずつて、一先ずこの稿を終ろうと思う。

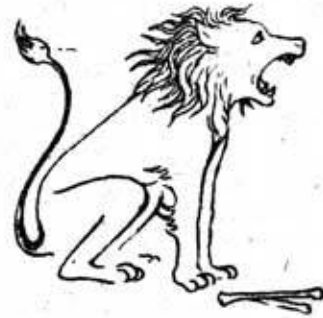
ころがなくつても、私のいつけ通りにおし。私はこう望むのだ、だからこう命ずるのだ。私の意志がお前の理性の代りになればよいのだよ。

因にこの二行を含む第六篇はユヴェナリスの諷刺詩の中でも女性に対する露骨な諷刺が多いので特に有名な部分であつて、流布本ではこの一篇は削除されてゐるのが多い。

第六「蓄生道」の所で輪廻転生は印度文に見られる思想と述べた。これについては、西洋思想史上でも、ピタゴラスやエンペドクレスの輪廻(metempsychosis)の思想があるではないかという駁論があるかも知れないが、ピタゴラスはこれをエジプトから学んだものとするのが哲学史上の定説で、しかもショペンハウエルが早く指摘しているように、エジプトの輪廻説自体が印度に由来していると考えられる。又エンペドクレスはピタゴラスの影響を受けたものである。だから結局輪廻説は西欧的な思想でなく印度起源のみと断じて差支えないのである。こんなことをあらさがしする人はないだろうと思うが、念の為一言しておく。

暴帝イワン罪惡史

(三)



高取辰治

八

ツァーの乱行は次第に激しくなるばかりである。しかも誰一人この虐殺に言をさしはさむ者はなかつた。尊きも卑しきもたゞこの暴君の意のまゝにその運命に身を委ねた。イワンの前では如何なる物も^{ひた}鏖一文の値打もない。彼がその太刀を杖にして立ち上り、恐ろしい眼で睨み廻すと、万人は悉く平伏して戦き震えた。彼が声を挙げると何百人、何千人の人々が無言のまゝ土に額を埋めたし、彼の手が一度動くと人々は群をなして断頭台へ駆け上つた。この専制的暴君の前に誰がその存在

を確信し得よう？誰がその富と名誉とを誇り得よう？名誉は危険であり富は犯罪に外ならなかつた。帝座近くに立つ大官は、その外見に於いて最も幸福であり、又最も高い名誉を誇り得た。しかしそれは同時に一番ツァーの御機嫌を損じ易い地位にあることでもあり、ツァーとその子供からその家の宝や美しい妻を狙われ易い地位にあることでもあつた。

イワンに最も愛せられていた將軍ペートル・オボレンスキー・セブレフノフ大公は或時モスクワへ召された。拜謁に感激した大公が、イワンの前に歩み出て、跪座礼拝すると彼の首はもうオブリチュニキの手で飛んでい

た。コザリノフ・ゴロフワストフ將軍にもその運命が迫つていた。身の危険を知つた彼は修道院に隠れて、神に仕える身の日夜を送つていた。しかし彼のこの僧侶生活も悲惨な死を救わなかつた。嗅ぎ出したイワンは彼を爆薬に縛りつけて空中へ吹き飛ばした。

「坊主は天の使じやそうな、天へ昇らせてやるぞ！」

まことに前代未聞の惡逆ではある！

第三の犠牲者は官吏のムエゾエツド・ウイスロイであつた。彼の妻は美貌の聞えが高かつた。イワンはその妻を夫の前で××した後絞首台に上らせ、まだその息の絶えぬ間に夫ムエゾエツドの首を刎ねた。

やがて暫くはイワンの狂暴に沈静期がやつて来た。オブリチュニキは姿を消し、大衆的虐殺が止んでしまつた。血に餓えた狂犬は疲れたのだろうか？いやたゞ暫く眠つていただけだ。イワンは死に近づくほど益々狂暴になつて来る。この惡鬼が眠るのは更に幾百倍の力を以つて立ち上る準備に外ならぬ。彼は自分の老い先きが短いことを悟つて来た。地獄の王者となるのにまだ血を浴び足りぬ、彼は猛然と起ち上つた。

ミハエル・ウオロチュンスキー大公はカザンの攻略者で且つ最も人民に愛せられた將軍であつた。彼はツァーに苦言を呈して追放されてゐたが、蒙古軍がモスクワを脅かすや、イワンの召に応じて上京し、モスクワとロシア帝國とを累卵の危さから救つた。だが、この英雄はイワンからどんな褒賞を受けたであらうか？例によつて密告者が現れる。大公の召使が訴人した。太公は魔法使いと結託してツァーの命を縮めようと企てゐる！それで充分だ。この武勲嚇々たる將軍、カザンの攻略者モスクワの救い主、幾百度の試練によつて我も人も許す無二の忠臣、しかも今は一生の苦難に年老いて名声名誉を求める心としては微塵もなく、ひたすら風月を友として静かな人生の夕を送ろうと希い願つてゐる彼、その將軍は物静かな平和な死によつて墓へ入ろうとする直前を捕えられ、山と積んだ薪の燃え上る火の間に挟まれて生きながら焼かれることになつた。

イワンは自らその大刀の先で薪の火を掻き立て、一と思ひに焼き殺す慈悲さえもなく、じわじわと生きぬように死なぬように老將軍の身体を炙つた。この慘澹たる苦しみで老將軍が意識を失うと、刑吏はその半死半生の身

体を火刑台から下して氣付け薬を吞ませ、愈々最後の場所としたピイエロ湖に投げ込んで溺死させた。

同じようにモロゾフ將軍夫妻とその子供達が又イワンの犠牲に挙げられた。モロゾフは大して有名でもなければ取り立てゝツァーのお氣に入りでもなく、魔法使いの嫌疑も蒙らねば大逆罪の嫌疑も受ける余地がなかつた。彼は非常な高齢で今は官宮を遠く離れた片田舎に静かな余生を送つていたのである。その彼はたつた一つの点でイワンの氣に入らなかつた。というのは、彼が不思議と今迄の大虐殺を逃がれて、同僚の全部がもう殺されてゐるのに、たつた一人イワンの前後五回の虐殺時代を無事に生き延びてゐる。その事実が怪しからぬのだ！

彼の一家が殺される時には、景物としてクラキン大公、ブツールリン大公、多くの寵臣、貴族及び三人の僧侶、即ちブスコフの修道院長、ノウゴロドのレオニダス大僧正、僧院長テオドリテスが巻き添えを食つた。僧侶は特別の尊崇を受ける階級であるから、その刑も亦特別でなければならぬ。修道院長は拷問具によつて生き乍ら八つ裂きになり、僧院長は水へ押し込んで溺死させられた。だが僧

正は最高の教職にある。彼は熊の皮をかぶらせてその中に縫い込まれ、飢えた犬の中へ追いつめられた。これはツァーの氣に入つた。それから以後ツァーは寵臣や、裁判官や僧侶をやつゝける時にはきつとこの方法を用ゐることにした。

この頃になるとイワンは殆んど狂人であつた。御飯を食べていて氣が進まぬと急に首斬り人を呼び寄せ、食ひ終えぬ食卓から立ち上つてその儘牢獄へ行き、即座に百人以上の囚人を殺してその血を浴びる。すると急にせいせいの氣持になり改めて食卓にはげしい食欲を以つて向うことが出来るのだつた。吸血鬼となつたイワン！

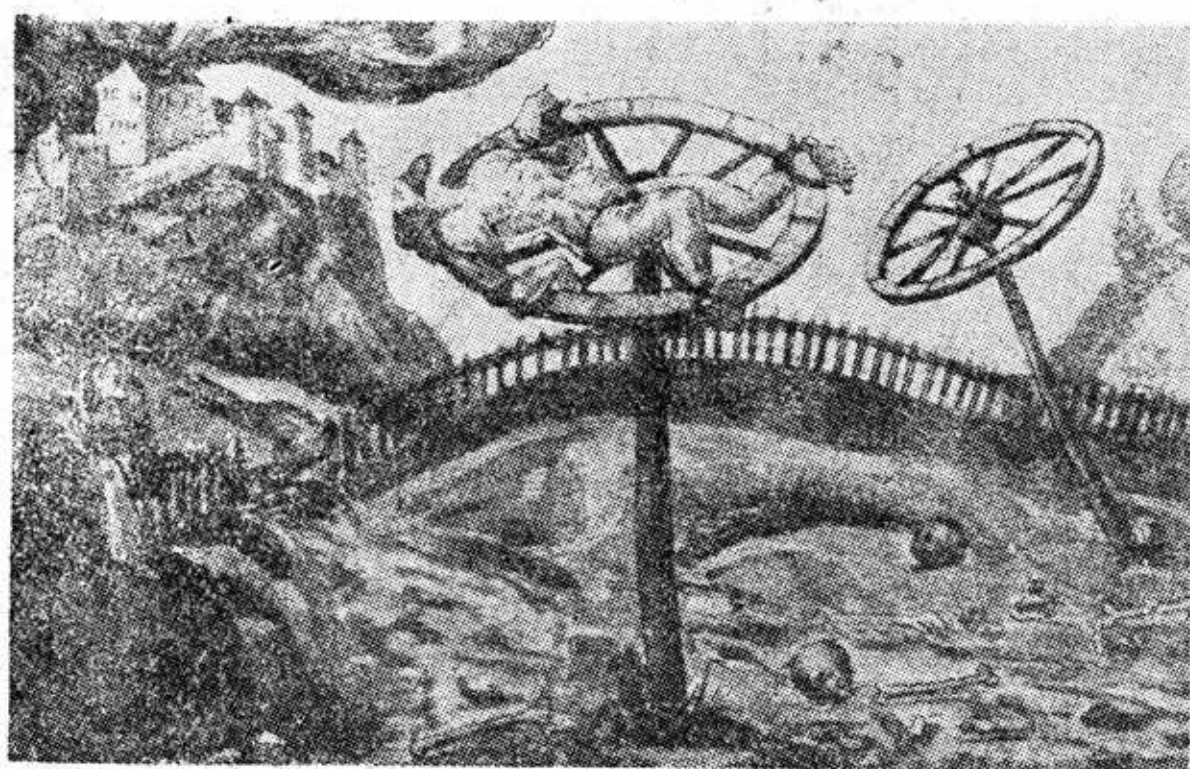
拷問用具と死刑方法は益々巧妙複雑さを加えて来た。発明者には莫大な賞金が与えられた。かくして、生きた人間を焼く鉄の棒やらストーヴやら、美事な働きをする釘抜きやら針やらが拷問の道具として完全の域に達し、手工業、技術、工業、科学のすべてが皆ツァーの惨忍性を満足させるために夜も昼も活動を止めなかつた。

人を殺すにも一定の方法があつた。狂人沙汰にもなお法がある。たとへば八つ裂きに処せられるにしても先ず関節を折り砕いてから

始められ、死の苦痛を出来るだけ長びかせるように努められた。意識を失わせないようにと一切の順序が組み立てられていた。そうして寸断された肉体は紐のように引き延ばされた。或者は鋭い金属の糸で肉を鋸かれたし、

又或者は生きた身体を背中から皮を剥がれてなお仲々死に切れなかつた。まだ生きてゐるのにその肉体の一部は餓えた獣に投げやられた人もあつた。その人は医師の手で意識をはつきり保たせられ、自分の眼で獣が自分の肉を貪り食う有様をはつきり見なければならなかつた。

流れる血潮はこの暴君にとつて醍醐の酒であり、獣の叫び声は、死ぬる人の呻き声は、名曲であつた。時によつては一



と思ひにその手で突き殺すこともあつたが、直ぐにそれが犠牲者の苦しみを長く楽しむ力のない弱者の方法であり、馬鹿氣な同情心から出たものだと思つて悔いていた。彼は意識的に死者の断末魔を引延ばすことを考え、そ

れに凡ゆる嘲罵を浴びせかけて喜んでゐた。其処には又このツアーに力を貸す科学者が出来て来た。

医師のボメリウスは悪魔の智慧を絞つて、長い苦心の後に一種の毒藥を發明した。それは一定時間の後、正確にその服用者を殺すという恐ろしい藥であつた。ツアーはこの藥を先ず囚人に実験して成功した。寵臣家臣はツアーの意のままに時計の針のように正確に殺された。ボメリウスの發明したこの

地獄の藥の効力はまことに完全無缺だつた。イワンはこの藥によつて狙つた人間の悶死時刻の予定表を拵え、そいつを自由に運用した。グオスデフ・コストフスキー大公は觀兵式の最中に死に他の寵臣は中食をしてゐる最中に斃れた。激しいのになると結婚式が落んで、いざ花嫁の部屋へ入ろうとする瞬間に死んだ男もあつた。發明者ボメリウスも亦イワンに愛せられた人と同じ運命を免れなかつた。その異常な天才は猜疑心の深いイワンにその鬼才を妬まれて、不意打ちに捕えられて火炙りの刑に処せられたのであつた。半死半生に焼けたゞれたまゝ、生きながら土に埋められたとも云われている。

九

イワンの暴虐はたゞ人民や家臣に対してのみ行われたわけではない。皇族もイワンの暴虐の例外ではあり得なかつた。たゞその虐殺の方法が變つてゐるだけであつた。イワンはその舅のナゴイーを虐殺するときには、医術に長けた商人シュトロガノフに命じてナゴイーの横腹と胸とに毛で出来た糸を縫い込ませた。これは皮膚の下を化膿させて堪え難い苦痛を起すものなのだ。

イワンの義兄ニキータ・オドイエフスキーは死刑の宣告を受けたまゝ、その執行を数年間延期せられた。イワンがその心理的苦悩を見て楽しむためなのである。イワンの第三番目の皇后が突然衰弱し始めたとき、第一、第二の皇后の親族は魔法使いの嫌疑により撲殺と磔刑とに処せられた。たつた一人無事だったのは義弟のウラジミール・アンドレーウイチ公だけだったが、この男にも最後の時が来た。一五六九年彼はイワンの命により軍隊を統率してアストラハンへ遠征した。コストロマの市民は彼をツアー・イワンの名代として大歓迎をした。それがイワンの機嫌を損じた先ずコストロマの市長がモスクワへ召されて殺され、次いでウラジミール・アンドレーウイチ公にも帰還命令が発せられた。公爵の一族はモスクワ入りの直前に逮捕され、ツアー毒殺の陰謀ありと断定せられた。イワンは公爵夫妻とその息子の前に現われ毒薬を突き出して言つた。

「自分で飲んで見るがいゝよ！」

「首斬り役人の手にかゝるより、暴君の手にかゝった方がましだわ。」

公爵夫人がそう答えた。

やがで公爵の一族は毒を仰いだ。ツアーは

その傍に立つて死ぬる人々の苦しみを見届けた後、公爵の女中達をその主人の死骸の側へ呼んで彼等は特に許すと云つた。

「妾達はあんたの御世話にはなりません、この吸血鬼奴！ 妾達をずたずたに引き裂いて見ろ！ 妾達はあんたを心のどん底から憎み蔑んでいるんだ！」

女達は口を揃えてツアーを罵つた。イワンは彼等をすぐ素裸にして絞殺し、ウラジミール公の母が尼になつてゐる修道院へ駆けつけて、よぼよぼの老婆をも立ち所に溺死させた

十

イワンの心は女によつても和らがなかつた。彼はロシアの教会法に反して次から次へと八人の妻を代えた。しかし彼はそのうちの誰一人をも愛してはいなかつた。八人の妻のどれもこれもが皆女奴隷に過ぎなかつたのだ。最初の結婚はイワンが十七才にして帝位に即くと、当時モスクワに行われた東ローマの風俗に従つて行われた。ツアーに仕える藩王の娘で嫁入り盛りの年の者はモスクワへ集り、その中で最も美しい百十五人の娘は百以上の部屋（その一部屋には十二の寝台が用意してあつた）を持つ大きな建物に収容された。かく

して或る日若いツアーはたつた一人の老臣を連れて美人を選びに来て、アナスタシヤ・ザハリン・コシユキンを選び出した。アナスタシヤは結婚後間もなく毒殺された。するとイワンは旧来の見合いの儀礼を無視して、ふと見染めたチエルケシヤの王女、テムブルク大公の娘をモスクワへ送れと命じた。この粗野なチエルケシヤの女は大変イワンの気に入つた。彼は彼女に洗礼を受けさせて一五六一年に結婚をした。キリスト教に改宗してマリアと呼ばれたこの女はその惨忍さに於いてイワンに劣らなかつたと伝えられているが、これも亦二年の後には毒殺された。

第三番目は商人の娘マルファ・ソバキニだつたが、彼女は結婚後二週間目にもう毒殺されてしまつた。ロシアの教会はもうツアーに結婚を許さなかつた。イワンは僧侶に対して次のような弁解をした。

「マルファ皇后は処女で死んだので、結婚は實際完了してはいないのだ。朕は修道院に入りたが、朕にはなお朕の子供を養育し、国家とキリスト教を保護するの義務が残つてゐる。によつて、朕は出家が出来兼ねる。朕が在家の人として罪を重ねまいとすれば、どうしても結婚をせねばならぬ。」

「僧侶はイワンの命令に従わねばならなかつた。イワンはアンナ・コルトフスコイと第四度目の結婚をした。この女は非業な最後こそは遂げなかつたが、それでも直ぐに修道院へ幽閉せられた。イワンはそれ以来坊主の承認なんかに目も呉れず、更に五度目をアンナ・ワシルチコフと結婚し、又々毒殺した後末亡人ワシリツサ・メレンチエフと六度目の結婚をした。ワシリツサは非常な美貌であつたがそれがふとしたことで瘦せて来るともう気に入らなくなつて片付けられてしまつた。七番目の花嫁はマリア・ドルゴルコフであつた。その結婚式の夜、マリアに情夫のあることが判つた。この隣れたマリアはその翌朝閉じ籠めた馬車に乗せられ、馬車もろともに河の中へ投げ込まれた。

一五八〇年、廷臣ナゴイの娘マリアが第八人目の皇后に選ばれた。これも亦イワンの気に入らない、イワンはもう国内で花嫁を探すのを断念して、外国の王女に手を延ばすことにした。時にイワンはその才五十に達してゐた。

彼は侍医のジエコフ・ロバートというイギリスのエリザベス女王の血縁に美しい娘のゐることを聞いて、フェドール・ツイワノウイ

ツチ・ビゼムスキーをイギリスに送り、その娘を是非にもと所望させた。

その娘というのはロード・ハンチントンの愛娘マリー・ヘースチングスである。ビゼムスキーは、はるばるとイギリスへ出かけて行つてウインゾア宮殿でエリザベス女王に拝謁し、商業上の利権を交換条件にしてマリーをツアーの花嫁に下さるよう嘆願した。エリザベス女王には別に異存はなかつたが何やかやと手続が遅れているうちにイワン自身の寿命が尽きて、このイギリスの娘は思いがけず

も魔の手から逃がれることが出来た。それは一五八三年の冬のことであつた。

十一

イワンが心から愛した女は一人もなかつた否、イワンはたつた一人の例外を除けば自分の子供さえ愛してはいなかつた。その例外というのは皇太子のイワンである。この父と子とは恋人のように親しかつた。重要な政務を議するときも、旅行をするときも、酒池肉林の饗宴にも、大虐殺の享樂にも、二人はいつ

Selection of Abnormal documents

変態処方箋

(昭和5年、相馬二郎著)

変態の探究は単なる耽奇ではない。
 変態嫉妬考
 処女非処女の鑑定
 性的犯罪の種々相
 変態結婚風俗の種々相
 変態性慾の種々相
 原始男女関係に於ける奇怪なる様式
 結婚の変遷と蓄妾制度
 一妻多夫雑考
 江戸城大奥の荒淫生活
 掠奪結婚の奇習
 裸体美雑考
 口碑と伝説に現れた変態結婚
 接吻物語
 川柳を通じて見たる性的風俗考
 変態刑罰史
 食人奇譚、淫薬及淫具考
 変態殺人考、江戸時代の墮胎
 変態見世物史
 男女関係の隠語秘帖 等々

も離れたことがなかった。甚だしきに至つてはお互にその側女を××し、同時に××の××をしたことさえある。それについて或る挿話がある。或時ツァーがその愛人を皇太子に送つたことがある。宮廷の女達がその女を嘲笑した。イワンは真赤になつて、その女達を嚴寒素裸にして雪の中へ引き出し、衆人環視のうちに凍死させた。半死の女を前にイワンが怒鳴つた。

「さあ、笑えるだけ笑つて見ろ！」

結婚の問題でも子のイワンは父に負けてはいなかった。彼も亦次から次へと先妻を修道院へ監禁して新しい妻を迎えた。夜伽ぎの女の如きはその数に於いて無数であり、まるで寝衣でも着代えるように毎晩取り換えられた虐殺、淫樂、何もかも父イワンとそつくりだつた。それがこの吸血鬼の氣に入つたのである。だがこのイワンまでが遂に不興を買うことになつた。それは一五八二年のことである。ロシアは外敵に包囲されて苦境に立つた。皇太子は愛国心に駆り立てられて父の膝下に走り

「父上、敵軍を粹砕しようと思ひます、軍隊を与えて下さい。」
と願つた。

イワンはその内心をさえ疑つた。
「謀反人奴！」

殺人の発作に襲われたイワンの刀はその息子の脳天をさつと打つた。皇太子イワンは血まみれになつて倒れた。

「僕は僕の子供を殺した！」

我に返つたイワンはその子供に抱きついて涙を流しながらキスをした。医者 of 応急手当もその効がなかつた。この地獄の苦しみにたゞイワンを慰めたのは、断末魔の皇太子のみが自分を殺した父を恨まなかつたことだけだ。「父上、私が悪いのです、許して下さい。私は父上の愛する子として、又その最愛の臣民として死んで行きます！」

イワンは死んだ子の死骸の上によろめいた。二日も三日も何一つ飲みも食ひもしないで、夜は夜で寝もやらず呻吟懊惱し続けた。ほんとにこの時だけはイワンは出家してし修道院へ入る氣になつていた。しかしそれも諫止せられた。イワンの底意を知らない廷臣達はイワンに一杯食わされるのが恐ろしかったのである。

遂にこの人面獣にも最後が来た。しかしその最後こそ正に彼の惨虐の一生を飾るものだった。死の苦しみに呻きながらイワンは病床

にのたうち廻つていた。兄が殺されて皇太子となつたフェドールの貞淑な妻が、この死に行く舅を見舞ひに来た。美しい皇太子妃が慰めの言葉をかけようと、イワンの顔に顔を近づけて

「お父様、いかがですか？」

と優しくたずねた。

とたん——彼女は悲鳴を挙げて狂人のように病室を飛び出した。断末魔の惡鬼が最後の力を振り起して、この優しい娘を××しようとしたのだ！

暴帝イワンはかくしてその最後の瞬間まで暴虐に狂い廻つて死んだ。皇太子フェドールがツァーになつた。だが、それはもうルエリック王朝自身の最後であつた。直ぐその次にロマノフ王朝がその変らぬ虐政を以つて北寒の大帝国に出現したのであつた。(終)

謹告

特別会員申込書、会員証、及び

景品等は本誌並びにKK通信には同封出来ませんので御承知おき願ひます。従つて景品は封書にて別送申し上げます。会員申込書、会員証を御請求になられる方は必ず郵券封入の上お願い致します。(読者係)



あるマゾヒストの手帖から (二)

沼

正

三

第九「深海魚」

日本の探偵小説（所謂変格物）の中には変態性欲を扱ったものが非常に多く、中にはマゾヒズムに関するものも相当数に達している。これを一度に扱っては到底一項には収まらぬから作品毎に取上げてゆくことにするが、ここでは香山滋の一作品を紹介しよう。紹介といつても既に大衆誌（面白倶楽部だつたと思う。昭和二十四年）に発表されてゐるのだから御存じの方も多からうが、知らない人も勿論ある筈だから、そういう意味で今後も紹介の語を用いることを許されたい。

香山滋は戦後デビューした人で生物科学のネタを幻想的に扱うのを得意とする。雰囲気はエキゾチックであり豪奢であるので、異国名の貴婦人がよく出て来る。そしてその貴婦人が絶滅せんとする種

族の最後の女首長だつたりする。そういう場合貴婦人は充分に權威を具えていて、輩下の男を鞭つて懲らしめたりする場面も少くない。これらは香山小説の持つマゾヒスティックな要素である。然し彼の小説では貴婦人がいれば必ずそれに対抗し、それを圧伏する丈の超人的な男が出て来る。そして全体としてはむしろ男が女を苦しめるサディスティックな場面の方が多いのである。だから部分的には非常に惹きつけられる所を持つに拘らず、香山は結局マゾヒストとして読む必要のある作家ではない。

所が一つ丈、文句なしにマゾヒスト向きのある。これが「深海魚」だ。ホテルに定住して贅沢に暮している美貌の未亡人がある。彼女の夫は生物学教授であつたが、深海探險中事故で行方不明になつた。教授を探索した時、代りに発見された畸形の人間とも狐猿ともつかぬ動物を以後夫人は亡夫の記念としてフアリと名づけて飼育

している。然し部屋から出すと「貴婦人の玩み物」を見ようとする人目がうるさいので、夫人はファリの定位位置をホテルの自分の室に附属したトイレットの中とし来客の時には必ず其処に入れることにしているのである。美しく富んだ彼女の愛を得ようと男達が群くが彼女は偉丈夫だった夫の在りし日の姿を忘れない。が又爛熟した肉体の満たされぬことからくる焦燥もある。そんな時用を足しにトイレットに入つてファリを見つけると、彼女は胸中の鬱積をこの罪のないファリに向けて靴を投げつけたり、気絶する迄蹴り続けたりして折檻するのだ。その中に亡夫の俤を偲ばせる男がとうとう彼女の愛人となる。男はある日彼女にファリの正体は何かを推理しつつ語る。それによると教授は深海で起つた事故の時恐ろしい水圧を受けて筋骨の組織が歪められ、その結果頭文大きい狐猿のようになつたのであつて、ファリは即ち教授であるという夫人は真相を知つて驚く。然しトイレットの戸を開けると、今の話に自己の正体を知られたと悟つた教授は、恥じて、水洗用の鎖で縊死している。男は教授が自殺することを予期しつつ、聞えるように語つたのである。

以上が梗概である。短い敘述でもこの作品が非常にマゾヒスティックな印象を与えることが分るであらう。この小説の面白い点は夫人がファリの正体を知らぬところに在る。勿論夫と知つて虐待することにしても又異つた味の作ができようが、この小説では夫人はファリを全くの畜生として愛玩動物として取扱つていたのである。(こういう情況設定は私の今思ひ出せる所では他にシュポリヴィエルの

のものに一篇ある丈である。)そしてマゾヒストの深奥の願ひは実はかように全くの畜生として扱われることに在るのである。ただ現実に彼に与えられた人間の肉体はどうすることもできぬから、彼は次善的に人間も人間と承知の上で畜生化する女性サディストを求めることになるに過ぎない。だからこの小説はマゾヒストの本来の夢を小説化して成功したものであるといえよう。

言い忘れていたが、この作品より前に香山は猛獣狩に行つた夫がゴリラになつてくるのを世間に隠して死んだことにし、未亡人として他の男を誘惑する女性を書いている。これは一見右の作品と似ているようだが、このゴリラは他人のいない所では依然として主人顔をしているし、誘惑された美男子を次々に殺すことにも妻と共謀している等、家畜的存在としては見られないので、マゾヒスティックな印象は殆んど与えない。

第十 空想的の愛

前項で文学作品のマゾヒズムを取上げたから、マゾヒストとしての読み方について書いておく。戦前は勿論、検閲のなくなつた今日でも、発表ということはどうしても露骨な表現を避けさせる。又文学作品として追求する美的規準は一般にマゾヒストの要求するところと一致しないから、この点からも隔靴搔痒の感は免れない。そこでマゾヒストは読みつつ行と行の間を埋め、氣に入らぬ行を抹殺して自分で補い、更に好みの場面を好きな文敷衍するといった空想の





力を持たねばならない。抽象的な言い方に止めず、実例を示して見よう。前項の作品について、トイレットの中の場面を敷衍してゆく楽しい空想である。――

フアリはトイレットのタイルの上に坐つて外の音を聴いている。夫人の寢室を隔て応接間からは男女数人のさんざめく声が聞える。中に一際高い夫人の笑声。だが宴もそろ／＼終るようだ。フアリの脳中には寝台の裾の方の床に置かれた自分の食器が目に見え、客が帰れば、客の残した食物は全部彼の食器に入れて貰えるのだ。「早く帰らないかな。それにしても妻は暖いソファに倚つて飲み喰いして遊んでいるのに。俺はタイルに坐つて、お残りを待兼ねるとは。いや不足はいうまい。今は教授でもない、夫でもない、俺はフアリなんだ。愛玩家畜として妻に飼われている身なのだ。妻の傍にいられるだけで満足しよう。けれどいつまでも果して傍に置いて飼つてくれるだろうか。妻はどうやら再婚する気らしい。それも俺はどうすることもできない。俺には嫉妬する資格はない。妻さえ許せば俺は再婚のベツトに迄ついてゆきたい。が許してくれるかしら。一体妻は俺をどうする気だろう。先日妻がプロポーズの手紙を受けとつて再婚しようかすまいかと迷つていた時俺は妻の腰掛けてる足許に坐つていた。考えあぐんだ妻はいら／＼してスリッパのまゝ俺の頭を蹴飛ばしたが、あの時「そうそうフアリの処置も考えなくちや」といつたつけ。今迄妻は俺をフアリとして可愛がつてくれた。だがそれは教授だつた俺、即ち偉丈夫だつた亡夫の思出のためなのだ。

だから再婚に際して古い思出を持ちたくないと思つてゐるのかも知れない。一体俺をどうする気だろう。まさか家畜商に売飛ばしもすまい友達に呉れちまうというのかしら。そういえばいつもは誰にも見せぬ俺を昨日はついぞないこと、公爵夫人にお目通りさせたあとで、夫人のもつてるベルシャ猫のことなんか訊ねてたが、夫人の方から俺と猫と交換の申出でもあつたのかな。あゝどうにもならない。飼われている身であれば売払われようと贈物にされようと苦情はいえないが、妻よ、俺がこんな姿で生きているのは、ただあなたの傍にいたい為なのだ、何とかして傍に留まれないものか。――再婚を止めさせることができない場合、俺が妻の傍に留まる道は二つある。一つは妻の気持を変えることだ。「フアリをやはり連れてゆこう」という気にならせることだ。もう一つは花婿の方から「フアリをつれて来て下さい」といわせることだ。俺はプロポーズして来た妻の愛人を知つてゐる。昔の俺と顔の似た奴だ。俺は何とかして奴と一人で話し会つて見よう。まさか俺の正体を見破ることはあるまい。俺は奴を説得し、奴の氣に入られ、新家庭にもフアリがいた方がいいと思わせてやろう。然し妻の氣が変らぬのでは何にもならぬ。これが先決だ。俺は今迄猫のように只飼われてる丈だつたがこれから犬のように恩返しサービスを心掛けよう。そうすれば妻も俺を見直し、再評価して手放さなくなるだろう……」想念は突如中断される。宴はいつか果て、客を送つた夫人が寢室に戻り、用を足しに来たのだ。今迄のフアリはそんな時トイレットの隅に坐つて見

ている丈で、夫人は彼を無視して用を足して出てゆくのだつた。今日はフアリは突嗟ににじり寄つて、夫人が自分で衣裳に手をかける前に機敏に手を働かした。夫人は彼の意図を知つては、えみつつ彼にさせるフアリのまごころが通じたのだ。排泄作用が終るとフアリの手が既にトイレット・ペーパーを用意している。片手で水洗の鎖を曳く。夫人はとうとうちつとも自分の手を使わずにトイレットを出ていった。水洗の水が勢よく物を流し尽した後でフアリは腰掛の穴から首を差込んで水を飲む。トイレットが定位置とされた以来彼の水飲場はここなのである。外では彼の食器に残り物が捨てられる音がする。フアリは急に元気づいてトイレットを出てゆく。

——空想に翼を与えてはとめどがない。空想的読書法と題したこの項はこれで終りとしよう。

第十一 印度版「痴人の愛」

前に（第六）畜生道の起源を論じて古代印度にマゾヒストがいたろうと述べた際当然引用すべくして忘れていたネンダ王の話をここで補つておく。クラフト・エビングの「病的性心理」を読んだ人には馴染みのものであるが、「あゝあれか」という人があればそういう人には後で更にお訊ねしたいことがある。

短いもの（エビングの摘要による）だから先ず全文を訳出する。「ネンダ王妃は（何か色恋沙汰の揉め事があつて、その為）王に對して非常に腹を立て、後悔した王が熱誠をあらわして懇願したけれ

ども和解に応じようとしなかつた。王曰く「私を愛して下さい。貴女なしには私は生きてゆけません。私は貴女の足許に身を投げ出して、私にやさしいことばを下さる様お願いします」王妃答えて曰く私があんたに轡をくわえさせ、あんたを馬にして跨がり、鞭で駆り立て、そしてあんたが馬見たいに嘶いたら、その後で初めてあんたを赦して上げる」王はこれに従つた。題して「女の策畧」なる程こうして和解した——というより赦免された——のでは、王はその後二度と王妃には頭が上らず敷かれつ放したつたろうから、夫婦間の策畧としてはまことに上の上なるものである。「痴人の愛」のナオミの手と同じである。（脱線であるが、痴人の愛自体にこの話が影響してるかも知れない。饒太郎によると、谷崎はクラフト・エビングを愛読しているし、玄壯三藏に窺われるように古代印度を研究しているから、この話も原典に遡つて読んでいたのではないかと考えられぬこともないのである）

この話を既に知つている方に伺いたいことというのは、右にいう「原典」の如何である。エビング自身は「パンチャ・タントラ」から引いたように書いているが、私の調べた（尤もサンスクリットは読めぬので英訳本で）ところではパンチャ・タントラは全体が動物寓話集であつて、この痴人の愛の印度版は載つていないようである。エビングが間違えたのだらうと思うが、何と間違えたのか私には未だに分らない。御存じの方は教示せられたい。





第十二 映画「痴人の愛」

映画化された「痴人の愛」について書こう。公開前に伝え聞いたシナリオでは、第一場がナオミ入浴図で、そこへ讓治が割烹着姿でスーブの味を見て貰いにくるという光景から始まり鎌倉海岸でも讓治がナオミに奴隷のようにかしづく所があり、ただ原作のようにナオミが讓治に跨つて永遠の屈従を誓わせるのではなく、その場面のあと又悶着があつて追い出されたナオミは結局落ちぶれてしまう（モームの「人間の絆」が「痴人の愛」と題する映画になつたことからヒントを得たものか）ことにして一般の倫理観と妥協するということ計画になつていたようで、スチールもこれに応じたものが見られた所が、映画倫理規定ではこれでも駄目ということ、途中で讓治が馬になる所がおどなりに残された丈で肝心の場面は殆んど削られ、結末もナオミが落ちぶれてもどつて来て詫言を入れ、今度はナオミが馬になつて、讓治がこれに乗るといふ、原作を知る者にとつては幻滅とも噴飯とも、いやはや呆れ返つた作品になつてしまった。女性の勝利、西洋の勝利、悪徳の勝利、そのシンボルとしてのナオミの讃歌が原作の「痴人の愛」であつたとすれば、映画のそれは反対に「常人の愛」に墮してゐた。ただ京マチ子の伸びくした四肢に初めてスクリーンで接したこと、ともかくも京マチ子が宇野重吉を四這にさせて跨つたこと、（尤も一寸腰を下した程度でとてもハイ

ドウの感じはなかつた。）それでも今迄の日本映画には女が男に馬乗りになる場面はなかつたらう。そんな点で記憶に残っている。

第十三 女王様ごっこ

映画の話が出たから、もう一つ映画のことを書く。カルネの「ホテル」良い映画だつたが映画評は止める。この中に「女王様ごっこ」の場面があるのを御存じだろうか。アルレッティの演ずるすれつからしの年増女レイモンドは同棲してゐたエドモン（ルイ・ジューベ）に捨てられ、仕方なくエドモンの代用品として、今迄彼女に求愛していつも振られてきたデブ（誰が演じたか失念）を採用するが、これがマゾヒストなので相手になつてやるに當つて注文をつけ自分を女王様として仕えるように命じ、男も承諾する。彼女が日も高くなつて眼を覚すと、男はベットの横に侍つてゐる。「櫛」といわれて、「ハイ、女王様」と渡し、「化粧着」といわれて、「ハイ、女王様」と捧げる。ベットで身づくろい終ると「靴」「ハイ、女王様」とてひざまずいて、彼女の足（アルレッティの脚は美しい）を手にとつて靴を穿かせる。と、そこへ彼女の客がやつて来る。彼女は靴を穿かせ終つた男を「奴隷にもう用はないよ。」と追いやる。期待に満ちてゐた男は残念そうに、しかし口応えもできず出てゆく。この場面自体は映画の筋からは必要な箇所ではないが、西欧の文獻に屢々見かける職業的な女主人の生態を理解する上からは、マゾヒ

ストにとつて一見の価値ある一場面である。(断つておくがこのレイモンド自身が職業的女主人というのでない。レイモンドとしてはたま／＼男がマゾヒストであるからこそその酔興である。しかし女王様ごつこの形としては職業の場合も同様だからその意味で参考になるというのである。)

第十四 サニスタン(d) (sanistand)

今度は便器の話。(どうも便所に関する話が多くて恐縮だが、私自身の好みもあつて、どうしても資料が集つてしまうのでつい「手帖」に書くことになる。) 近頃米国から歸つて来た友人に聞いたのだが、あちらではサニスタンという女性用立小便器が出来て目下段々普及実用化しているそう。日本の普通のビルやオフィスでは洋式便器でないから御嬢様方は一遍毎に靴下を膝小僧迄下ろしてそれから蹲んでいるのが多い。どうしたつて時間がかかるから、休み時間など婦人便所はよく行列ができてゐる。あちらでは腰掛だから膝の曲り方は日本ほどでないわけだがやはり皺がよる。それから一遍毎にお尻を腰掛にベタリとあてるのも考えて見れば不衛生である。大便器に一日一度しか坐らなくて良いのは男性の特権であつてはならぬ。というわけだ、ここに出現したサニスタンは、御婦人方が足を少し開いて一寸中腰になる事で、用が足せ、靴下も傷まぬし、便器に一々身体を触れなくても良いという点で衛生的な便器である話してくれた友人も男だから自分で使つたことはなく、見た丈だそ

うだが、要するに白陶製の大きな漏斗が床からぬつと出て立つてい
ると思えば良いそう。間をカーテンで仕切る丈で大便所見たいに
場所を取らぬので設備する側の経営者達にも好評という。WCの婦
人用の方も殿方用同様大便所は一つ二つであとはサニスタンの行
列という時代がきつと来るだろう。サニスタンの效用を減殺する
大敵は現代の婦人の誰でも穿いているズロース(パンティーズ)で、
(それに女性排泄器の構造ということもあつて、) サニスタンを
使つても男子の立小便と同様にはいかぬらしい。然しサニスタン
の本質的な便利さは絶対的なものであるから、保守的な様で案外合
理的なものである服装の方がサニスタンに順応し、チャックの使
用などでズロースにも男子ズボンにあたる仕掛が施されるようにな
るだろう。その時こそ女性はオフィスにおいて全く男性と対等の快
適さを楽しめるだろう。こんなことをビーターソンというサニスタ
ンの考案者がいつているそう。

何でも米国直輸入の新しいものを喜ぶ日本人であるが、個人のモ
ードなどと異り、婦人の職場進出という社会経済的条件の整わぬ中
は、サニスタンの設置は仲々行われないだろう。と同時にもし条
件が熟してくれば必ずこれが採用されるだろう。そうなると今日で
は洋式の腰掛をいやがつて「蹲まないとうまくゆかない。」などい
つてゐる日本婦人達も立つたまゝ足を開き、腰を一寸落した姿勢で
用を足す習慣を獲得するだろう。(新型ズロースも、昔腰巻という
甚だサニスタン向きの下着を使用したことを思えば問題でない。





腰巻と和服の時代だつたら、着崩れしないで用が足せるというので却つて流行つたかも知れないとさえ思う。

若い女性がこの姿勢でサニスタンドを使用する光景を想像することとは私にマゾヒスティックな昂奮を与える。いうまでもなく、自己をサニスタンドと同一化してこの心理機転である。「口を張りて尿を受く」(「迂愚隨筆」に在る表現) 姿勢としてはサニスタンドになるのが一番好適であると考えられる。

第十五 スラックス(slacks)

本来は水兵などの穿く「だぶだぶズボン」を指すが、戦時中米国で「婦人用ズボン」の意味を獲得した。今では日本の若い女性なら皆知つてゐる。日本でも戦後はスラックスを穿いた女性は随分多くなつた。戦時中のもんぺで下ごしらえができていたことにもよるのだろうが、主として米国流行の輸入で、われも／＼と穿くようになったのだ。前項のサニスタンドのことを教えてくれた友人の見聞談によると、思ひの外広範な流行で、slack-crazy(ズボンきちがい)という形容詞ができてゐる位だそうだが、今では既に流行の域を脱して風俗化しており、女子学生などは夜会などの特別の時以外には全部スラックスで通してゐる人が多いということだ。

これは仲々意味深長な現象である。長い服装の歴史を通じて、つい最近迄は、婦人の腰を纏つたものは常にスカートであつた。男性はズボンを専有した。ズボンこそ家庭内の権力の象徴であつた。だ

からもし女がズボンを穿けば、それは亭主を尻に敷き家庭の主権を握つてゐますというに異ならなかつた。フックスの書物には夫と妻とが一つのズボンを争う絵や、ズボンを穿いた妻が威張つて椅子に坐つてゐるのに夫はズボン下のまゝ子供の世話をしてゐる絵などが沢山載つてゐる。女がズボンを穿くことは男にとつてはマゾヒズム的な意味のある現象である。だからこの新しい風俗は、米国という国の、又現代という時代の、マゾヒスティックな性格を端的に象徴しているといえるであらう。

一般論から個別論に進んでも、女がスラックスを穿くのを喜ぶ人はマゾヒスティックであり、特にその姿に惹きつけられる人はマゾヒストであることが多い。尤も本誌三月号に「サディズムの精髓」を書いた吾妻氏のように女を折檻するのにズボンが良いという人もあるのだから人さまざまという外ないが、私など妻にいつもスラックスを穿いていて貰う。それは前記の意味での主権者として妻を認めることであるが、そのみでなく、スラックスを穿いた妻の姿から非常に男性的なものを感じ、それが私のマゾヒズムを刺戟するのである。何か自分の方が妻になつたような錯覚を楽しむのである。他の女性でもスラックス姿の時には妙に惹きつけられる。尤も白人女性のように脚の長くない日本女性は余程スリとした身体でないとスラックスは似合わない(私の妻は五尺四寸で先ず似合う方である)。のは残念なことだが明治女性に比べると現代女性はずつと脚が伸びてゐるのだから、その中には白人並みに身長を半分を脚で占

める所迄体位が改善されるだろうと期待している。

第十六 鷹司夫人

ストラックスといえはこんな話がある。孝宮様が鷹司夫人となられた時、式のあとで外人記者が花婿に問うた、「奥様にストラックスを穿かせますか？」平通氏は「いえ、穿かせません。」と答えたそう。だ。華族という天皇家に寄生した家柄に生れた平通氏が天皇家の人である和子夫人に対して畏縮する気持を持つたろうとは容易に想像できることである。「降嫁」の文字は、結婚自体平通氏が和子夫人の御尻の下敷となることから出発するのを意味している。かかる高貴の方の御尻の重さを身を以て味えることはマゾヒストとして羨望の極みなのであるが、惜しいことに平通氏はマゾヒストでないのであろう。だから敷かれつ放しではいやだという気持があつて、さてこそ「ストラックスは穿かせない。」とせめてものレジスタンスの意志を表示したのであろう。

だが和子夫人の御尻は、宮中という特権地帯で特殊の精神的栄養を受けて肉付しているのだから、その重さは格別で、別にストラックスで武装しなくとも優に貧弱な平通氏を押え付けてしまう丈の目方があるだろう。鷹司平通氏は生涯夫人の御尻の下から這い出ることができないのではあるまいか。池田輝政氏はどうか？

第十七 手紙（その一）

「慈悲深き奥様！ 女主人様！ 女神様！」

最も深き畏敬の念と最も賤き謙遜の心とを以てかように申し上げます男は、ザッヘル・マゾツホ風の一夢想家でございます。

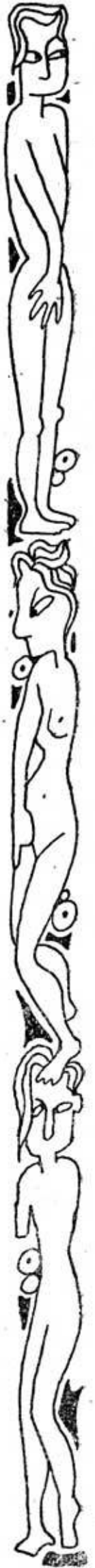
かかるマゾヒストとして、私は、「毛皮外套を着たヴィーナス」の理想をそのまゝ具現なされた御方である貴女様の足許に身を投げ出し、私に対して、その値打ちに相応した足蹴をお与え下さい。貴女様の半長靴の底を、貴女様の犬として、舌で舐めることをお許し下さい。卑しげにお願い致しますのでございます。そして、奥様よ、どうぞ御慈悲をもちまして、私が、貴女様の前に土下座し、小さな御足を自分の項の上に戴いたまゝの姿で、簡単に身上話を致すことを御許し下さいませ。既に子供の頃から私の心は、美人の足に接吻を許され、その足に踏まれたり蹴飛ばされたりすることを、私の女主人である方から奴隷として扱われ、犬のように仕込まれることをこいねがいました。

サーカスの女猛獣使を見た時、私は此の上なく喜ばしく思いました。この女調教師が踵の高い優美な半長靴を穿いた足で獅子や虎の身体の上を歩いた時、私は有頂天を感じました。

その後私は「毛皮外套を着た貴婦人達」という本を手に入れました。就中私を夢中にさせたのは「赤御殿」でした。と申すのは女主人の犬となつて彼女の足の裏を舐めさせられるという考えに恍惚となつたからです。

この時以来右の考えが私の夢想の頂天であります。そして、女主





人にとつても、自分の奴隷に、つまり犬に、自分の足を舐めさせるということは、楽しみであるのではないでしょうか？私の夢想の中に現れる光景では、米国南部の女主人が奴隷達を虐待して、馬に騎つたり、犬のように訓練したりするのです。嗚呼、貴女様が私にもそういう喜びを味わせて下さいましたら！

もしお気に障りませぬなら、せめてはこの紙を貴女様の御足で踏んづけて下さいませ。そうしましたら私はこの上ない賜物としてそれを私の唇に押しつけることができますのでございます。

私は想像致します。これをお読みになりながら貴女様の御唇は嘲けるようにひん曲げられ、快楽の光が侮蔑と混ざつて、貴女様の御目から輝き出ますのを。優雅な上靴をお穿きになつた可愛い御足はピクリと動いて絨氈をしつかりと踏み付け、小さな御手はしつかりと犬鞭の柄を握つておられます。そして御齒の間から洩れて来る御言葉は——「おお、奴隷奴、私はお前の心を知っている。犬奴、お前がクンクン啼いて何を欲しがるのか私には分つている！今ここに私の足の下にお前が居るのだつたら！そして私がお前の渴望を裏切らないことをお前は充分納得したのだらうに。私は女ながら人の主人たるに堪える人間だ。奴隷奴、私にはお前の欲望は分つている。犬奴、私にはお前の下賤な感覚がよく分る。丁度私が支配者としての欲望を知り、残酷な専制の快楽をば理解し、尊重する様に。私はお前の右の目玉を靴の踵で踏みつけて眼玉を飛び出させてしまおうそして、犬奴、お前に命じてその靴の踵の血を舐めさせてやる！私

の乗馬靴に私は鋭い拍車を取付けて、それで以てお前の肉をズタズタに切裂いてやる。お前はそれをやはり舐めて綺麗にしなければならぬのだ。そればかりでない。私はお前の舌にもつと他の全然別な仕事をさせよう。私の唾をお前は胃の腑に収めるのだ。女主人のおしつこをお前は飲むのだ！お前は私の中にお前の理想を見出さねばならないし、それを望んでいる！」

私は謹んでお返事をお願い致し、貴女様の足許に横わり、半長靴の踵を舐めます。そして奥様の奴隷であり、犬であります。

× × ×

本誌が特別会員に限つて文通斡旋をするという。さしあたり森山美歌さんの所などに手紙を書きたいマゾヒストは随分いる筈である。そういう場合気持丈はあつても表現が拙くては真情を伝えることはできない。そこでその折りの文範ともなし得るよう。先人の書いた傑作の数々をこの欄を借りて紹介してゆこうと思う。

今回の分は例のクラフト、エビングの「病的性心理」（近年翻訳が出たが抄訳である。）の旧版に載っているものである。内容は特に解説を要しまい。「赤御殿」（Der rote Edelhof）はローテ（Gothe）の小説である。「私の唾……」の所は、直訳すると、「私の唾はお前の栄養物であるべきものだ。お前の女主人の尿はお前の飲物であるべきものだ！」となり、当然の義務を示す強い表現で自分の意志を主張してゐるのである。（未完）

○ 私は本年十九才のオフィスガールでございます。昨日ふと書店の店頭で貴誌四月号を手にし、ましてもう矢も盾もたまらず本日こゝに小為替にて同封いたします故、貴誌の旧号全部をお送り下さいますようお願い致します。表書きのところは私のお勤めしているところでございます。どうか呉々も厳重に荷造りの上お送り下さいませすようお願い申し上げます。

今まで京都には貴誌が出ていなかったのをごさいますようか、若し書店に余り出ないようであれば、若し売切れたら大変でございます。ますので直接御申込みしたいと存じますのでその節はよろしく御願ひ申し上げます。かしこ

三月八日

曙 書房御中

室崎美佐子

早速御本お送り下さいまして有難うございました。それにKK通信第七号も同封頂き何んともお礼の申し上げようもございません。今日はお勤めから帰りまして、む

或る通信から

塚本鉄三

さぼるようにして拝見しました。何故今迄私の眼に触れなかつたのでしようか、でも九冊の雑誌が私の手元に入つたのでございませう。もう嬉しくて嬉しくて仕方がございませう。何度か何度か繰返えし繰返えし読みました。そして、私は自分の思いを編集部の方に申し上げたい気持ちが押えきれず、大変はしたくないこととございませうが、恥しさも忘れて書き出し

たわけでございます。と申し上げますのは、実はお願いがあるのでございませう。

○ 先便にても申し上げます通り私は京都の或る商社会社に勤めて居りますが昨年高等学校を卒業しまして丁度一年近くこゝにお勤めしたことになります。家には両親がおりまして私は一人子なのです。だから住所は何れお知らせ致しますが、只今のところはお許し下さいませ。

私、本当の事を申し上げますと縛つて頂きたいのでございませう。丁度御誌の川端多奈子さまのようにして、如何でございませう。どうか是非お願い致します。どうも一見識もない私から突然こんなことを申し上げてお怒りになられるかも知じませうが、何卒御返事を賜りますようお待ち申し上げます。かしこ

三月十二日
編集部御中

美佐子拝

○ 折返えし御親切なお返事、本当にうれしく拝見いたしました。私にお写真にとつて頂く方が嬉しいのでございませう。若し事情が許せば同性の若い方がそんな風に縛られているのを実際に見たいと思ひますし、又私が裸で縛られている所を沢山の方々に見て頂きたい気持ちが一杯でございませう。でも、そんなこととて出来ませんもの、せめてお写真にとつて頂いて、それを多くの方々に見て頂きたいと思うのでございませう。だから、お写真にとつて頂くことは一向かまわないどころか、私の喜びもそこにあるのでございませう。私のところは日曜がお休みでございます。でもその外の日でも前もつてお知らせいただければ都合をつけることが出来ます。裸になるのは私一向に構いませんの、勿論、私、今迄男のお友達つて一人もございませう。わ、どうか信用して下さいませ。私は自分のそんな縛られた姿が、よし写真にしても他の多くの方々に見られるのだと思うだけでもう堪らないのでございませう。どうか貴方様の方で私を撮つて下されるのなら是非お願いしたいと思ひます。それから大変厚かましい話でございますが川端多奈子さまに御紹介いただけてませんでしょうか。いと存じますので。

三月十六日 美佐子より
塚本鉄三様



信太蓉子さんへ

羽村京子

四月号の信太蓉子さんの「開花の契機」を拝見して、私に共鳴していたことを知り、大変おなつかしく思っていました。五月号にも読者通信にお便りを寄せていらつしやるわね。私は「奇譚クラブ」にはその後すっかりごぶさたしてしまいました。

私も信太さんの告白記はこれまで「奇ク」に載つたものゝうち一番私に近いように思つて夢中で読みました。切腹の真似というのも早速やつてみましたわ。でも私には切腹よりも他人に腹を割かれる方がもつと望ましく切り方も信太さんのように横真一文字ではなくてみぞおちから下腹にかけて縦に剖くのがいいんです。しかし、小刀の先を鈍らせてきつく肉にめりこませるようになるのはよかつたわ。おかげで私の体を夫の手によつてずたずたに料理し、解剖される快感が一層強くな

つたというものです。私たちは内臓への郷愁を共通にしているのね。内臓の彩色図が私を興奮させることはあなたの場合と同じです。膨満した腹部を好むというのも何かその中の臓腑と関係があるのかも知れません。

でも、私の肛門への執着と、妊娠子宮への憧憬とはあなたに賛成していただけなかつたのではないかと残念に思っています。妊娠子宮の方はあなたの臓腑への郷愁があるいは何らかの興味をかきたてにくれるのではないかと思うのですけど、肛門の方も一度試してごらんになつたらいかゞでしょう。悪いことをお教えするようですが、肛門と大腸とを……ことは一人でも相当の程度まで出来ることですし、少しづつやつてごらんになつたら自分で自分の体をいろ／＼と……にすることのたのしみがあなたにも、もつとどん／＼湧

いてくるのではないかと思います。既にいろ／＼工夫して試みていらつしやるあなたに対して失礼な云い分ですけど。

肉体のもて……には本当にこんなにたくさん種類があるのかと驚く程です。新しい可能性を是非一度試してごらんあそばせな。無茶なことさえしなければ、そして用心してやりさえすれば、私の経験からして体に害のないことは保証いたしますわ。そしてその結果を誌上に発表していただけたらどんなにすばらしいでしょう。くり返して申し上げますが、あなたもお気づきのように、体の外側の感覚だけでなしに、体の内側からの感覚を利用した責め(?)もまた、たのしいつて云うことをわかつていただけると思いますの。でも、女の体のうちで、乳房や臀だけでなく、腹、殊に膨満した腹もまたたのしいということとを告白していただいたあなたに、私はどんなに共感と感謝とを覚えたことでしょうか。

美女の人肉料理(空想的マゾヒズム)のことも同じです。あなたの料理法、しかも身の毛のよだつような奇抜な料理法をお知らせ下さいな。私は「料理される女」とか「解剖される女」とか、一般に「腹を割かれる女」というようなテーマで挿画画家の方が何故口

絵を描いて下さらないのかもどかしくてたま
らなく思います。臓腑が一ぱい流れ出たもの
すごいのを、ね。これは妊娠についても同じ
ことです。

さつきちよつと云い落しましたが、肛門と
〇〇とは安全ですけれど尿道だけは危険です
から用心なされた方がよろしいと思います。

私もやつてみましたが、尿道はすぐに炎症を
おこしてしまつて不快な目に逢いました。殊
に独身のあなたにはご不快な病気ですから、

えらく姉さんぶつてえらそうな事を書きま
したわね。私の方が多分一年位早く生れてい
ると思いますが、或いは同じ位、ひよつとし
たらあなたの方が姉さんかも知れないのにね
私、この三月で二二才になりました。私が
「狂い咲くカンナ」を書いた時はあなたが告
白をお書きになつた時と同じ二二才でした。

私は結婚していますけれど、美しいあなたに
もやはり理解ある協力者としてのご夫君がみ
つかるに違いないと思つています。告白に書
いていらつしやるように悲観なさることはち
つともありませんのに。でもあなたの謙虚で
正直なお気持には敬服しました。私もはじめ
は「他人の参考になる」とか「自分を見つめ
る」とかいうもつともらしい理屈をつけて告

白を書いているうちに、結局自分たちのあら
れもない姿を人の目にさらしたいというエク
ジビシヨニズムのとりこになつて、なるべく
生々しく露骨に過去を描写することに快楽を
感じていたのですわ。そしてあなたと同じよ
うに、自分の文章が活字になつているのを見
て、ドキ／＼してしまいましたの。

それから、私がサジストでもあるというこ
とは、多分、〃その後の告白〃の中のS子さ
んのことを指して云われるのかと思いますが
サジズムとマゾヒズムはほんの裏と表にすぎ
ないという気がします。サジズムの相手がみ
つからない場合、自虐症に陥ることはよくあ
ることであたや、結婚前の私などもそれだ
と思います。自虐症の中にマゾヒズムを発見
することは容易で、その逆の場合もあり得る
ことです。私なども自分の体を自分で弄んだ
経験、殊にそれを鏡に写して見た経験などが
ら、サジストの気持も味わえるようになった
のかも知れません。たゞ私にとつて重要な
は被害者が女であるということで、男性の虐
められることには興味がないのです。

夫に云わせると、私は封建的生活感情の中
に育つた女だから、男性はすべてえらいもの
と思つていて、そのえらい男性にいじめられ

ることは光栄であつても、男性を苦しめるな
んて思いもよらないんだらう、なんてひどい
ことを云うんですの。でも本当かも知れませ
んわ。とにかく私は大きなお腹をつき出して
ぶかつこうに歩いている臨月か、又はそれに
近い妊婦や、そうでなくてもふつくらとセー
ターの胸の盛り上つた肉づきのよいかわい
い女学生などを見ているとサジスチックな血が
わき上つてくるのを感じるのは事実です。
勿論、私はどちらかといえば明らかにマゾヒ
ストにちがいないのですけど。

蓉子さんがもし大阪か京都か位にいらつし
やつたらお会いして、一緒に楽しむことも出
来るのですが東京では遠くつて一寸駄目です
わね。本当に惜しいと思いますわ。でもこう
して手紙を書いて誌上で通信し合うことが出
来るのは本當にうれしい事です。今後も誌上
であなたのお書きになつたものを拝見するの
をたのしみにしています。

まとまりのない、だら／＼したおしやべり
になつてしまいましたわね。では

変の字問答 変の字問答 変の字問答

變の字問答

(第三話)

浮 家 鷹 三

この日の病室は、珍らしくも私一人を残して、他の二人の同室患者が、まるで申し合せでもしたかのように一度に退院して行つた後——私は何ということもなく、只果然としたまゝで、病室の片側を通う暖房用スチームに足を乗せると、恰度腰掛けの位置にあるベットの下方に腰を降し、何時しか、ウツラ／＼と舟を漕いでいました。

——不図、誰かに背中を叩かれて、私は仮眠から「ハッ」と眼醒めました。

「?—何だ、源さんかい、脅かすなよ」

左様です。——アレから久しく読者にも御無沙汰の彼、源さんが、今日は珍らしく私の病室を見舞つて呉れたのです。

「へッへ——先生。何をぼんやりしてなさ

るんで?……ま、お久し振りで、——その後お躰の方は如何です?。ちツたアよろしいんで?……」

「いや、有難う——。私は御覧の通り、相変わらずで困つて居る。ところで君は、どうなんだい。其の後、例の内儀さんとの仲は、うまくいづてるんだらうなア……?」

私は咄嗟に彼の機先を制した積りでチクリ!と、つゝいてみたのです。

(どの道、私と源さんが鉢合つた以上。遠からず又例の「変の字問答」が始まる事に、読者も期待をかけて居られる事だらう……)

すると、彼が——

「おツと、先生。その事なんでさ。——実アその嫌アの奴が、どうしたものか近頃は、又

とんとあツしに冷たくなりやがッたんでして——でまた一つ、何とか、あんさんのお智慧を、おツと、変の字の御教導に預り度えとそう思いやして、いえ、勿論。病院でのこんな話は、他の患者さんが居んなすツて、出来やし無え——とは存じ乍ら、ついどうも、あツしやもう持前の気性で待ち切れねえ。——堪ら無えんで、そいで、今日はまア先生のお見舞がてらに、ひよツとして間が良けりやアアノ話が聴け無えもんでも無え。——とそう思ひやして、お伺いに来やしたんで……まア一つ、何分又よろしく、お願え致しやす……」

——果してそう私に、告白するのですか。

「おい、源さん。——冗談言つちや困るよそれにその「先生」ッて私の事を呼ぶのを



三太郎

今後、絶対に止して貰い度いねえ——。

と謂うのはだよ。——あんたも承知の、つまり私と、あんたとは、ほらアノ去年の秋の夜に、偶然始めて意気投合して、その結果があつた。変の字問答になつて仕舞い、続いて今年の始め、あんたの宅で、つまり第二回目の変の字問答を闘わした訳だつたね——。

それで、素もと私は真の小説屋でも何でもなくて、只、こうして永い闘病生活の、そのつれづれにホンのチョツピリ、素人芸の原稿

を綴つてみて居る丈なんだ——。

従つてだねえ——。彼の第一第二回問答の時にはだよ、その場の行きがかり上、あつして君達が私の事を「先生」と呼んだ訳なんだが——然し今後は絶対に、止めて貰おう——」

（私は、彼がもう毎度。私を「先生」と呼ぶ事を、大いに迷惑に思つて居る。——恐らくは読者にしても好感が持て無いであらうと）すると、源さんは……

「そ、そいつア先生。あんまり殺生でさア。

——だつて左様じゃ無えですか？ 考へてもみて下せい……よござんすか？ あつし、という人間から、この持つて生れた江戸っ子癖と、それにあんさんと呼ぶ時の「先生」をいえさ、この二つの言葉を除かしやア一体、あとにやア何が残りますまい？……

第一、折角の変の字問答に、何ていうか、——その「意気ツてやつが抜けて了いまさアね。それに、この事アこの前の時第二話もそうでしたが、兎角物事——まして「問答」ツて奴ア、お互い立場の、いえ、つまり精々皆さんにお馴染深い呼名で行くのが定法じや無えんですかい？——あツしや難しい事ア判りやせんが、まア先生おツと、言つちやつた。……あんさんの心の何処かに、いいですか小説屋に成れたら成つて見度え——とそうした気魂が見えやす。——ま、怒らねえで下せえよ。——

あつしやア何時かも話しやしたが、ホラあつしの道楽で覚えた三文易学、あいつで熟つとあつさんの顔なり動作を見ておりやすと、自然に左様した事が判つて来やすんで……

でまア何時迄も、こんな話ばかりで、時間は費せ無え。——一つそんな事アもう除けにして、先刻言いやした嫌アとあつしの問題を

片付けてやつて、お呉んなせえな……」

私は、源さんのこの、全く予期し無かつた今の言葉に、何か知ら教えられた気持がするのでしたが、同時に又、この調子なら、恐らくは今日も私を「先生」と呼ぶその事を、変更しないであろうと思うと、又しても撥つた、それで居て何となく嬉しい気持も、心の何処かで躍っている感じがするのです。

私は素直な気持で、申しました。

「いや、恐れ入った。——全く、あんたという人には、軽い背負投を食った形だよ。——殊にその、三文易学と謂うが、中々どうして侮り難い実力だ。——私に文の観相学でもあるまいからね……。ところでそうしたあんたでも、アノ道。つまり、アブセックス——の方は、未だ卒業出来無いものと見える。……では又一つ変の字問答第三回目の幕を、切つて落すと仕様かな……」

いやもう源さん——欣ぶまい事か——。

「へッ……有難え。そう来なくツちや針の山でさ。是非々々お願い致しやす……。ところで先生。そいじや一つ話の順序として、現在あつしと嬢アの奴との間が、どんなふうになつてゐるかして事を、先刻も一寸匂わしやしたが、まあも少し詳しくお話して、そいであん

さんの御意見を伺い度え……。とそう思いやすんで……。で早速、申しやすが、——実アこの前。一月初めアノ時でさア。——男女田さんが帰つてから、あつしと先生と二人限りで、ホラ？葡萄酒を飲りやしたねえ——。

そいで先生がお帰りになつたと——。あの晩。嬢アの奴が里帰りから、帰つて来ましたんで……。どうも……帰つたら帰つたでや、こしい言い方をしましたが、判つて頂けたと存じやす。——で、その晩はまあ変つた事も無しに——つまり結構例の楽しみもやりやして、——でその翌晩頃から……。そのウ嬢アの奴の態度が、あつしに対して、すげ無くなつて来やしたのは。

え？——今ですかい？——さ、それでさア……近頃じやアもう一番先——つまりあつしが、始めて嬢アの奴をふん縛つた、それ以前でさ。あの頃より、もつとサービスが悪くなりやして、いやもう口答えはしやがるし、時にやア一緒に寝もしやがら無え。——

あつしやもうホト／＼手を焼きやした。ところが、でさア……。そのサービスの悪いのとは、ツロクし無え妙な事が、ありやすんで……と言うのは、それ程すげなくしやがる癖にして、あつしの毎朝持つて出る弁当や

らそれから身の廻りの品物なんぞにやア——却つて以前より、ずつと気が利いて居りやしてつまりサービスがして、あるんでさア！。でももう薩張り、あつしにやア判ら無え。

——その嬢アの真の気持が、でさ——。そいでです先生。こりやア一体何処に、その原因があるのかつて事を、今日も又一つ、あんさんに御教導にあずかり度え——。とこう思ひやすんで」

左様いい乍ら源さんは、私が寝台の上で楽な姿勢で話が出来よう——何くれとなく、細かいところに気を配り、それに何時の間に又、例の私の嗜好に叶つた、純良××葡萄酒迄用意して、私に奨めるのでした。

「いや——成程。それでまああんたが、今日私を訪ねて呉れた、その理由が判つたよ。

ところで今のあんたの頼み。——つまり内儀さんとの間が、近頃また旨いかわ無くなつた、その事に就ての判断を、又例の「変の字流」で私にして貰い度い——とそう言うんだね？　〃よし。心得た！〃と言ひ度いのは山々だが、君ツ——こいつは少々難しい問題だせ。何故ツてばだよ。元来夫婦間の性生活ツてもものは、例令それがアブであらうと、ノーマルであらうと、そんな事ア他人様の知つ

た事じやア無いんだ。殊にそれが、万が一アブな性質に浸り度いと欲する場合——絶対的に相手の慾求が何処にあるかを、それを先ず見極めなければ成らぬ。——無論、二人限りの秘密は厳守する事はいう迄も無いが、尠く共相手の慾求を観破して、その慾求を満たしてやるだけの自信を、両者で持つてなければ、せめて一方でも持ち、お互い陰陽両者の融合を、計るので無ければ恐らくは幸福な結果は招来しないのだ。大変糞むつかしい事をいう——とあんたは思うだろうが、あんたにならこそ私は、これを言うのだ。——

抑々あんたと私の初対面——つまり去年の秋の夜だったねえ——。あの時、あんたが私に、自分の過去を述懐し、併せて現在を告白して私の賛意を求めたのが、即ち、あんた自身の慾求が「想像的サディズム」——だと謂う事だった。

——「美女の緊縛場面の絵や写真」——まあ、こゝでは「責め絵」と一口に言おう。その「責め絵」に対する、あんたの疑念——即ち齢若い女の肉体を、縄や紐で後手に縛り上げた場合——。その實際理論の上に現われる姿態が、自体どんな風になるか？。又、魅力の焦点は何処に？……とその真実を追究する

の余り、遂にあんたは、内儀さんの躰を實地に縛り上げて見て、そして年来の疑念を晴らした。——とそう言つた話だった。

其の後、あんたと私との問答は、あんた自身の宅に、私が招かれて行つた今年はじめの第二回目だった。ところで今日。こうしてあんたとの、第三回目の「変の字問答」になる訳なのだが——私は今日迄に、あんたの内儀さんに会つた事が未だ一度も無い。——

無論——会い度いとも思つては居ないし又会わない方が、当然。あんた達夫婦の倅だとさえ思つて居る。

私はそこで、更に言う——。

私は、あんたと謂う人を、常に「想像的サディスト」だと、そう思つて居たかつた。

先ず最初にあんたが、責め絵に対する自己の疑念を晴らす為、内儀さんの、あんたに対するサービスの悪い、それを勿怪の幸いに夫婦喧嘩に事よせて、内儀さんを縛り上げて見た。すると、不思議な事に縛られた内儀さんは非常に欣んで、それからあんたへのサービスが、その昔の頃よりも、一層濃厚になつた——と、そう私に告白したのだつたねえ……。

で、その最初——去年の秋だよ。あの時あんたの述懐なり告白から私は推して、其の後

のあんたが、若しかして、内儀さんとの間にアノ術つまり内儀さんを縛り上げる事を——常套手段にしやすまいか？……との懸念が、咄嗟に私の脳裡を去来した。

何故ならばだ。——「想像的サディズム」には先ず危険は尠いが、それが「實現的サディズム」になると、非常にその運行が難しくもあり、且つ危険性が生じて来るからだ。即ちソレ先刻、私が糞むづかしい事を言つたアノ理窟だ。

人間——殊に女性は男性から屈服させられる事に、総じて性的満足を感じる以上。——その事自体が既に、マゾヒズムの現われとも言い得る訳なのだ。そして又このマゾヒズムは、その対手たる者の、熟練技巧のリードを受ければ、必然強烈さを増す可能性があるのだ。

判るかね？ 源さん？……

爾で私が懸念したというのも、実は、そこなのだ——。

あんたの永い間の「想像的サディズム」が始めて内儀さんを縛つて、内儀さんが欣んだそれを知つた瞬間から、或は危険性を醸し出す「實現的サディズム」に移りはしないかと懸念だ。心配なのだ——。

もう此処迄言え、大体判つて呉れるだろうが、——つまりだねえ怒つちやいけ無いよ——あんたに、その内儀さんの慾求を、どの程度迄観破し、且つリードする丈の「技倆」があるか?……と謂う事だ。いや、この言い分は、まずいかも知れない。

勘くともあんたは私の第二回問答の落んだ後——つまり内儀さんが、里帰りから帰宅した夜迄は、内儀さんを上手に、リードし得た訳なんだろう……。

ところがその翌晩あたりから、内儀さんのあんたに対する態度が、次第に冷やかになつて来て、今日ではいよ／＼話にならぬ位に、和合しようとならない。否、させ無い……。

とそうだったねえ——。然かも奇妙なのは———すげなくするのは、それは、あんたとの閨房の営みに際して丈であつて、その他の身の廻りの世話には、寧ろ昔より行届いたサービス振りだと、あんたは言う。さアそこだよ……それは決して、あんたを芯から嫌つて居るのでは無い証拠だ。脈は充分にあるのだ。否——君の技巧の如何に依つて、——君が内儀さんの慾求の那邊にあるかを観破して、上手にこなせる丈の技倆があれば、——君は今日の悲哀を私に訴える事無く、私も又これを

言わなくても良かった筈だ。

はつきり言おう。——あんたは最早——私の心配し懸念して居た「實現的サディスト」になつて了つたのだろう。しかも相手のマゾヒストを、統御し得ない全く鼻持ちならない事になつた」

何時の間にか私は、肝腎の源さんをそこ除けにして、独り相撲して居る自分に気付きました。咽喉が渴いて、カラ／＼なのでした。「まア……源さん。何時迄、こう理窟ばかり並べ立てゝ居ても、仕方があるまい……。

もうこの辺で、ソロ／＼結論を出し度いものだ。——と言つてもこんな事は、いくら私でもそう／＼易々と結論が出せる訳は無い。

先刻も言つた様に、夫婦間の閨房生活は他人の関知せぬところだから……。

兎に角私は、咽喉が渴いた。

「こいつ（葡萄酒）でもやり乍ら、今度は一つゆつくりと、お互いにもう少し、対談的に行うじやないか?……どうだ……」

そう言い乍ら私は、彼が先程から用意して呉れていた真赤な液体の満ちたグラスカップを、彼にも奨め乍ら、自分の唇に運びました。何せこの日の病室は、彼と私の二人限り。——長い廊下の隅の、それも一番奥まつたこ

の室に等訪ねて来る人の影さえ見えません。

やがて、お互いの身内が、ホンノリと温まつてくると、先程迄の何かしら焦々とした気持も、少しは落着いて来た様です。今度は源さんが始めました。

「ねえ……先生。あつしや先刻からの、あんさんの御意見を伺つて居りやすと、何だかこう、判つた様な、判ら無え様な——というのはつまり、——あつしが永え間の「想像的サジイズム」から「實現的サジイズム」に移つたツてえ事は、納得が行きやすが……。然しそう致しやすと、あつしが始めて先生にお会いして、その時に嬢アの奴の事を——例の泣いて欣びやがつての一件でさア。去年の秋でしたねえ。アレからずつと今年の一月——つまり先生をあつしの宅へお招びして、第二回変の字問答をやりやしたアノ夜迄は、あつしに縛られて結構欣びやがつた嬢アの奴が、又、どうしてその翌晩あたりから、あつしを嫌い出したのか?……そこんところがもう薩張り判りませんや……。

先生ツ——その処を一つ……どうなんです?——焦らさ無えで、早いとこ教えてお呉んなせえな……。

「おい／＼源さん——。何だ君らしくも無い

——変な声を出すなよ情無い声を……。

では——私のこれから言う事を、よッく噛み分けて、感違ひせぬ様に聴いてお呉れ。……

私はいま、あんたの内儀さんを、仮にたとえて病人とした。——いゝかね、仮定だよ。

だが、私はこの病人を、直接診察出来無いので、御亭主たるあんたから、是迄に伺つた大体の様子から推量して、三通り計りお話する。——言うなれば「原因」——だね。

それから、その三通りの「原因」に配するに、同じく三通りの「薬の名」をも教えようところで、この薬を実際に調合するのは、私でなくて、君という亭主が「調合」しなければならぬ。私の教えた薬を君の技巧と調合して「病氣の原因」にピッタリ当嵌る薬を与えた時——否、与え得た時。——そこに始めて病人の恢復がある。判つたね？。それでは、あんたの内儀さんの、病氣の原因に就て、私の推量した三通りを、これから述べよう。

先ず第一——君は「新年号奇譚クラブ」を——私が第二回問答の帰り際に貸した、変の字問答第一回掲載誌だよ……その奇クを、何処へ藏つて置いたか？……つまり内儀さんが読んだんじや無いか？……とこれ一つ……。

次に第二——君の宅で行つた、彼の第二回

変の字問答の折の、あ

んたの高声なり其他が禍して、若しや階下の人に、あんた達夫婦の私生活に対する「疑念」を抱かしめ無かつたか？——つまり、君達夫婦に対して「好奇的関心」を寄せ、或は何等かの方法に依つて「窺視」して居ぬものでも無い。——無論この場合。あんたはそれを感じ付いていないで、内儀さん丈が知つた。——

これ原因の二つ目だ。——

第三——君は、始めて内儀さんの身体を、縛り上げてみて、内儀さんの欣ぶのを知つて以来——アレからずつと、第二回問答のその夜まで、毎夜の様に——それも始めと同じ麻縄ばかりを用いて、何の変化も無い緊縛方法ばかりを繰返して居たのでは、あるまいか？。若し、そうだとすれば、それは内儀さんの症状は、次に例える様な原因に依る。

人間——毎日同じ物を食つて、同じ遊びば



三太郎

一

かりに耽つて居ると、……偶には違つたものが食い度くもなり、又、変つた遊びもしてみたくなる……。従つて、あんたの内儀さんはより以上の「刺激」を求めて居るのだが、あんたは又それに気付いてやらねば成らぬのを残念乍ら——ボサツ——として居る。……とまあ是れが、三つ目。だ。

どうだ源さん——内儀さんの病氣は、今、私が言つた三つの原因の、そのどの症状に当嵌るか？を、よッく考えてみる事だ。

まそう慌てなくツたツて、いいんだよ。よく落着いて考えて御覧。

で、それでは先刻約束しておいた——今言
つた三通りの症状に、それぞれ適応しそうな
三通りの薬品名を教えよう……。

先ず、一つ目の症状に思い当る場合。――
これには、既刊各月号の奇ク二三冊もあれば
それで事足りるだろう。

まア序でに用法も、一寸教えて置こう。

君は右の〃奇ク二三冊を、今度は自ら進んで内儀さんに見せ、そして言うのだ。

「これこの通り、自分達夫婦と同様な、否もつと強烈なこの術の遊びを愉しんで居る人達が、今の世の中には、いくらでもあるんだ。」とそういう風に用いるんだ。いいかね。」

素々新年号掲載の変の字問答中では、源さん〃という名前も出て居ないし、勿論職業だつて書いて無い。それに又、アノ時の挿画も実物には似せて無いんだから、その辺で何とか、内儀さんの機嫌は直る筈だ。

次に、二つ目の症状に思い当る場合――。

これには「転宅」と謂う藥しか無い。――

では、三つ目の症状の場合はだ——。これ
はもう……〃言わずもがな〃だ。——君自身
の技巧発案に依る。努力の誘導だ……。

これにも少し、言葉を足しておこう……。毎晩々々……同じ様な事をやらないで、偶

には変つた刺激も与えてやるんだ。

何も縛るものは麻縄より他、無いと決つた訳でもあるまい……。肌融りの柔かな、それでいて、キューツと気持よく締るものだつてあるんだ！。又、縛るばかりが能でも勿論無いんだ。――がまアこの辺で、あとは想像に委せよう。何せもう、薬剤師は？ 〃源さん〃そツちなんだぜ。――こつちは只〃こんな薬は要りませんか？ 〃と原料を紹介した丈なんだからな。

さア……此処迄教えれば、後はあんたの、判断と技倆に俟つより外仕方あるまい……。どうだ、源さん。——この辺でもう、勘弁して貰おうかな——ハッハ、ハ、」

（一体私という人間は、どうしてこう、独りよがりの癖なんだ。――私は又しても彼をこのけに、得々として喋つて居る自分を見出して、いさゝかテレ臭くなつた。そこで仕方なく、無理にも豪傑笑いに紛らした積りだつたが、それは極めて貧弱な表現に終つた）

私は、シガレット・ケースから「光」を一
本抜き取つて、ライターで火を点じ、そして
彼にもケースを押し遣りました。

「なる程ねえ……。いや、相も変らぬ先生
あんさんの御達識。——あつしあつくづくと
感じ入りやした。それに旨えとこ、例え話に
なさいやしたもんだ。……なる程。そう仰有
りや……。あつしにもちつたア思い当る節々が
感じられやす。——

でも先生？。いくらなんでも、そいじやア
今、茲でどの症状だツてえ事迄は、確信がつ
き兼ねやすし、従つて口外する訳にも、参り
やせん。まア一つ、どの症状でどの薬を、ど
ういう風に用いて、あつし達夫婦が元通りの
円満を取り戻せたか取り戻せ無かつたかてえ
事は、この次、又お会いしました時に、何も
彼も委しく申し上げる事に致しやす。あつし
も是から宅に帰り、——いえなアにこゝ二三
日都合で、夜業の方に廻つて居りやすんで……
……ま、何れにしましても、あつしも一度よお
ツく念を入れて、周囲を観察してみてから致
し度いと存じやす。

その方が又先生にしても、一変の字問答第四話——が出来ると謂うもんで、へッへへ」

「と、こいつ。うわッハハハ……」

私は漸く、心の底からの笑を、爆発させる事が出来ました。

——完——

曙 書 房 代 理 部
振替大阪第34956番

磔になつたお姫様

毛利綾子

始めてお便り申上ます。編集部の皆様方御元気でいらつしやいますか。私の可愛い妹、由紀ちゃんが差上げた記録お読み下さいましたか。私あの中の綾子で御座居ます。

先日、由紀子あのお原稿持つて参りました。酷い由紀子、私達の秘密すっかりお話ししてしまいましたわ。わたくしお恥かしう御座居ます。いゝえ、でも私怒つてなんか居りません。唯ね、その罰で由紀子は物凄くお仕置受けましたのよ。だから私もこのお便り出したら同罪ですから、今度は私が処刑されねばなりませんの。覚悟を決めて書いて居りますのよ。由紀子のお便りで、私をひどいサジストとお考えでしょう。わたくし悪い女ですわ。だけど本当は私もマゾですの。唯、思いがけなく由紀ちゃんが私以上に完全なマゾになりましたので、ついあんな事になりましたの。由紀

子には済まなく思つて居ります。私の悪癖から由紀ちゃんまで道連れにしてしまつて。

でも私のpetが無惨なお仕置にされて喜んでくれますと、こんな殊勝な気持ちなんか吹飛んでいつくまでも続けたくなりますの。

私は今年二二才、petは二十才ですの。二人の関係は御存知でしょう。あの最切の発端までの事、少し書きますと、私生れつきマゾでしょう。色んな機会に例の写真や挿絵を集め一人で楽しんで居たのです。そして自虐の空想にふけつて居りました。扱帯で自分を縛つて見たり、寝る時も、足、膝、胸を縛り、目隠ししたまゝにして胸の圧迫で怖い夢を見たい等と願つたりしたので御在居ます。

二級下の由紀子をpetにした時から、初めは単にSとして楽しく遊び、こんな悪癖から逃れようとして居りましたのに逆になつ

てしまつたのです。私の自虐の不満足を由紀ちゃんによつて達したら、等考えて居た矢先あの日偶然私の仕舞い忘れたアルバムを夢中になつて見て居る由紀ちゃんに思わず発作的に無理やり縛り上げてしまつたので泣き出すか、怒るかと思つた由紀子が案に相違して興奮して悲しがる様子もないのに、私と云う悪魔は同志を得た様な喜びで由紀子の縄を解くのも忘れて抱擁したのでした。

次の日に約束通り来て呉れました由紀子に「お姉様の思い通りに又縛つてもいゝの。」と云われた時私達二人の間は固く結ばれてその運命に乗出したのでした。私の願い通り由紀子は私を縛つたり、吊したり、責めて呉れました。でも由紀子はその後で更に／＼酷く自分を責めさせるのです。その内に私は可愛い由紀子が責められて苦しむ姿の中に自分

を見出し、最早や二人とも責める方、責められる方の区別なく一心同体となつてこの麗の饗宴に浸る様になつたので御座居ます。私が由紀子を拷問にかけて居る時は、私自身も拷問にうめき、又私が死刑になる時は同時に由紀子も処刑されて居るのです。

未だ屋外に刑場を作らなかつた時、二人で梁の両側に井戸の釣籠の様に縛り合つて吊り下つた時本当に嬉しかつたですわ。恥かしい事ですが由紀子が私の宅に泊つて行く時、私は素裸で抱合い扱帯で縛つたまゝ寝るのですの。でもね、二人が心中等する事は決してありませんから御心配なく。二人共案外現実派ですから、それと二人とも此の世にこんな悦楽を持つて居るんですもの。お仕置の事、何時も無実の罪を拷問による自由に依るのでもありません、時々必然性のある筋書をこしらえて神妙に罰を受ける事として居ります。

二つ、三つ申上げまゝ、本物の切支丹となつた時は捕えられると直ぐ拷問を受けずに自白しますので直ちに処刑してしまいます。

又、お手打になつたり、自害を命ぜられた時は、私のお部屋の直ぐ前のお庭に荒蓆を敷き着物を着更えて来た受刑者は其の上に座つてお念仏を称えた上、太腿を扱帯で縛つただけ

で、両手について首斬られたり、短刀でお乳を突いた上、介錯をお願いします。簡単に直ぐ出来るのと時間も短いので、時間の無い日等行います。由紀子、そんな時二回も三回も続けてせがみますのよ。面白い由紀子。少し長くなりますけど私達の大好きな筋書を申しましょう。

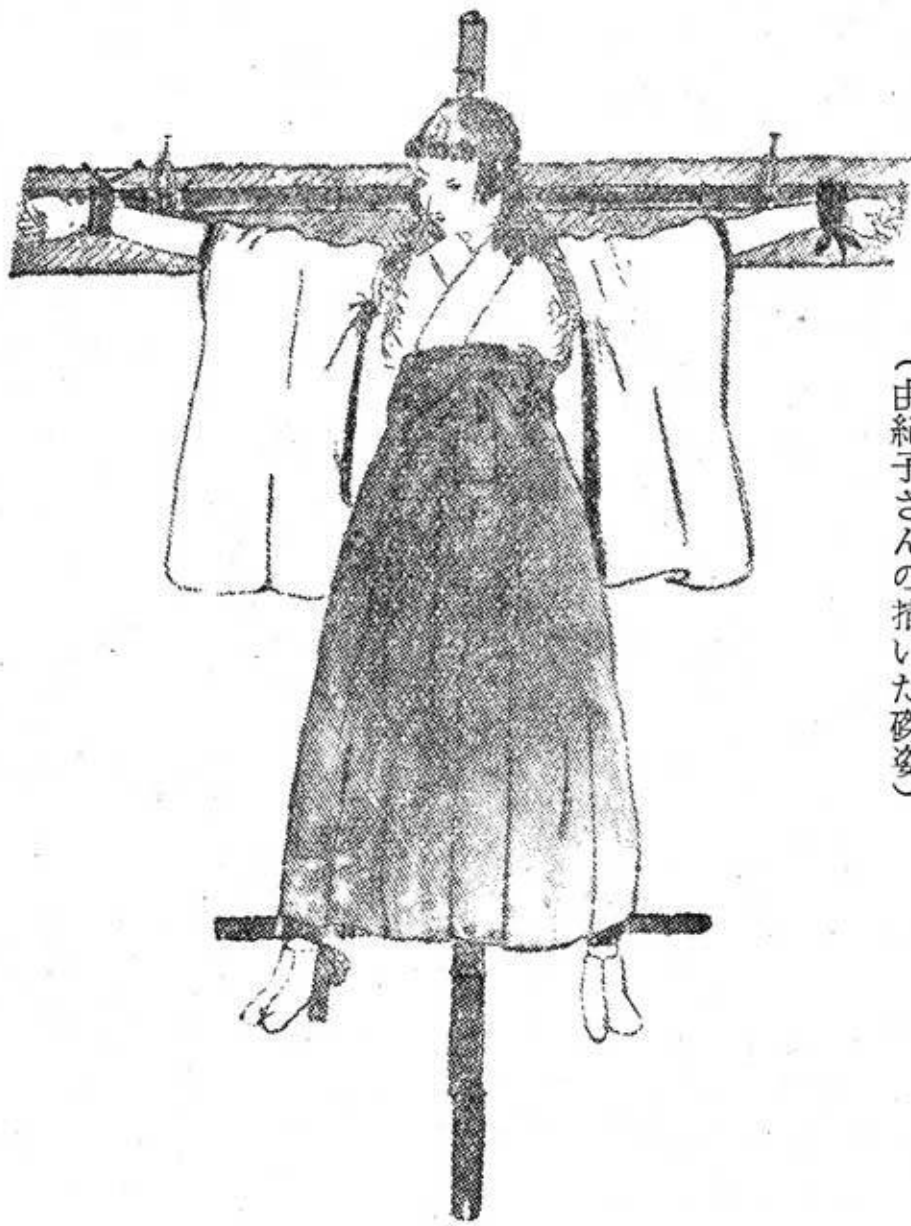
戦国時代の事、隣国と交戦中の大名の娘、鶴姫様になつた由紀子は田舎娘に身をやつして逃れますが遂に敵に捕えられ、種々拷問を受けて牢に入つて居ります。敵の方の姫君になつた私、綾子は或る日牢の中の鶴姫を見て同情し許される様手配してやりますが、其のうち、味方の敗北を知つた鶴姫は、続々捕えられて来る味方の人達の命乞いの為、鶴姫だと名乗つて出て自害をしたいと願ひ出ますが私はそれを止め、私の妹分としてお部屋へ連れて来させ、衣裳を与えて大切に取扱いますのです。が鶴姫の決意は固く自分を処刑して多くの将兵を助けよと歎願し、遂に姫の望み通りの刑で死に就く事を許されます。そこで姫は大名の娘として首を刎られるのを嫌つて極刑の磔を望みます。姫を愛する私が必死に止めるのも及ばず、遂に姫の磔に依るお仕置が決り其の時がやつて参りました。

姫の願ひで綾子直々に姫の処刑を執行する事となりました。最後の時、綾姫の部屋で夜具の上に静かに端座して刑の時間を待つて居る鶴姫のもとへ綾姫は心尽しの白無垢の死装束を持つて参ります。

「鶴姫どの、では用意も出来た故、身体を清めてお着更えなされては」

「姉君、有難う御座居ます、では御案内下さいます。」

そこで姫は御不浄から御湯殿へ行き裸になつてお湯で身体を清めます。終つて綾姫も手伝つて白装束姿になり丁寧にお化粧した上、再び部屋へ、そして辞世の歌を認めた後、二人は抱合つて最後の別れを惜しみます。そして連立つて刑場へ、勿論繩は掛けません。磔柱の処に来て綾姫は手ずから鶴姫柱に縛ります。慇々執行となつて鶴姫は十字架の上より「綾姫様、お世話になりました有難う御座居ました。姫の髪をせめてもの形見にして下さいませ。では時刻も立ちます程に、執行をお願い致します。あなた様のお手でお仕置を受けられるのを姫は本当に嬉しく思つて居ります。お手にあの血がかかるのをお許し下さいませ、さ早く、此処を、此のお乳の下を」と云いますと、綾子は



(由紀子さんの描いた磔姿)

「鶴どの、お許し。」

と泣き乍ら槍を取直し、面をそむけて姫の身体に槍を通します。お姫様らしく由紀子は苦痛をこらえて可憐な微笑を浮べ乍らガックリとうなだれました。綾姫は鶴姫を磔柱に晒して置けぬと、血の止るのも待たずに姫の亡骸を下し、自分の部屋の夜具の上に寝かし、いつまでもく抱き続けるのでした。

此の筋書は私達二人に最もびつたりして居

りますので姫を交互に演じて十数回も繰返して居ります。この時の衣裳には二人の裾模様のお振袖を用いる事にして居ります。由紀ちゃん、もうすつかりお仕置ファンで途中の責めなんかどうでも良い位で処刑の一刹那の快感ばかり求めて居ります。私達惨酷な死刑はなんとも思わないのですけど、余り責めの酷いのは嫌いです。だからムチは絶対に用いません。

せん。

唯、色々な拷問を受けますのは、若し此の拷問に耐えられずに悲鳴をあげて自白すると次は必ず刑場で多勢の見物人の前でお仕置を受けて死なねばならなと云う。恐怖と羞恥心そして拷問も苦しく耐えられないと云う激しいジレンマを味わいたい

ので、最後には何うしてもこんな責苦を受けようと云う、あきらめを持つ様になる程度の責めにかかけられます。刑場で刑につく前に御不浄へ行く時、始めは後手のまゝで手伝ってもらつて御小用を足したのですけど、二人の間からでも、とても恥かしいものですわ。由紀ちゃん、とても嫌がります。それで縄を解くのですけれど、重罪人の時には許されません。由紀子磔が一番好きですの、私も大好きだけど縛首の時、首斬台の上でおとなしくじつと観念して座つて居るのも良いものですわ、又判決を受けてからお牢の中でお仕置の時を待つ心地、木馬に跨つての引廻しの時、忘れられぬ悦びに胸が疼きます。よく由紀子私を馬に乗せて引張り乍ら、

「お姉様、どんな心地して、きつと私と同じ心持していらしやるでしょう。」

と云えば、私は「由紀ちゃん、綾子もうたまらない、早くお仕置に掛けて」

と叫ばずには居れません。執行の途中、お乳をもまれたり、太股を撫ぜたり、極端な場合裾をまくつたりされますと、もう身も心も痺れて遂には失神します。しかし、仲間なりたくても、人間て失神しないものですね。

十字架の上で身動きも出来ぬ私の目の前に槍が交叉します。そして掛声諸共、私の右脇に鎗槍が鈍い音を立て、グサツと突き入りました。始め「チカツ」とした衝撃そして「ジン」と身体にしみわたる疼痛、私は苦痛にのけぞります。次で左の胸にも、「あゝ、あゝッ」とうめいて身をもがきます。又右脇にそして今度は肩まで穂先が抜けた様です。槍を引抜かれる時の痛さ、生暖いものが胸を濡らし、次で腹部の方へ、もう次の槍の入るのには判りません。何だか目の前が暗くなりました。痛みは段々薄らぎました。落入る様な気を励して、うなだれた顔を起して自分の胸のあたりに目をやります。先程まで純白の白無垢に包まれた胸のあたり、そして両袖もどうやら裾の方まで真赤に彩どられて居ます。又左胸に槍が入りました。もう痛みは感じません。唯、引抜かれた後から、私の汚れなき血潮が勢よく飛び散ります。もうあたりが暗くなつて参りました。目を閉じると七色の光が見えて参ります。私は天国へ迎えられるのでしょうか。もう私の処刑は終つた様です。竹矢来を遁して多勢の人達が私を見守つて居るのがぼんやり見えます。あゝもう判らなくなりました。身体が深く、落ちて行く様です。

必死にほゝ笑もうと努めますがほゝ笑みの顔になりましたかどうか？私はガツクリうなだれて仕舞いました。

磔の時はいつもこう考えて居りますの。玲子お姉様。由紀子、この前お姉様にお仕置に掛けて戴きたいつてお願い致しましたわね。お姉様、お願い！私も是非一緒にどうぞ処刑して下さいませ。

多奈子お姉様、こう呼ばせて下さいね。貴女の御写真沢山拝見致しましたわ。私達のアルバムに加えさせて戴いて居ります。多奈子様随分酷いお姿で責められますのね。痛くございません事？綾子も由紀子もお姉様のお姿を真似て責められて居ります。

でも羽村京子様の「妖花」の中の明子さん様に股裂きのような恰好で逆吊りになつて居られますの拝見して、本当に素晴しく感じましたわ。あら、御免して下さいませね。

でも私達二人ではあんなようになんたくても出来ないのですの、綾子、多奈子様が羨しいんですのよ。失礼ですけど多奈子様、お裸での責めが多いんですのね。でも何時見てもお姉様お美しいわ、綾子も由紀子もお姉様、大好きです。長襦袢のお姿、一層あでやかですわ。一度私達のように白装束でお写しになり

ません事？又一段とお姉様素敵だと思えますわ。KK通信に絞首台と出て居ますけどお姉様も処刑のお姿なさいまして？是非見せて戴きたいわ。

玲子お姉様が私達のお願ひ叶えて下さいましたら、多奈子お姉様も綾子と由紀子と一緒に処刑されて下さいませ。綾子、多奈子様と由紀子と一緒にならどんな責めでもお仕置でも喜んで受けますわ。裸でも構いません。唯ね、そちらの男の方々に悪いけど、私達一寸恥かしいんですのよ。玲子お姉様だけでね、お願い致します。何日か、都合が好かつたらお二人で私達の刑場へ来て戴いたら、とも考えて居ますの。そして多奈子様と三人並んで磔や逆吊りになつたら楽しい事でしようね。では、お返事お待ちしておりますわ、綾子も又お便り致します。

◎有名書店へ御予約下さい

全国書店各位からの御申込みには極力配本に努めて居りますから、最寄りの有名書店へ毎月御予約下されば本誌を確実に御入手することが出来ます。何卒書店へ御遠慮なく御予約下さるようお願い申し上げます。

魔都上海の思い出から

四^ス馬^マ路^ロ界^{かい}隈^{わい}

——魔都上海の思い出から——

姫 宮 四 郎

壹

上海の街を探訪する際に、私が最もよく利用したものは、電車とバス、それに黄^{ワンプオウ}包^{オウ}車でありました。日本の大都市を見馴れた者が、曾ての中国に於ける都市へ来てめずらしく感ずることは、タクシーが非常に少ないことと、その代りに黄包車と呼ばれる（華北及び満洲では洋^{ヤンチン}車と言います）人力車が実に多く見られることでありましょう。自動車が少ないということは、余りにも多い。従つて極く低廉な労働力による。こうした人力車の洪水の為もあることと考えられますが、これらの黄包車は誠に上海のような街を行くのに便利なものでありました。何故かと申しますと、大通

りから少し入ればすぐにごみごみした狭い道路が多く、それにどこへ行つても沢山の人間が街路に溢れておりますので、このような場所では、人力車が至極都合のよい足の代りをするのであります。

街を流しているタクシーは殆んど見受けられませんが、それらが必要な時には、直接に営業所へ電話をかけますと、直ちにそこから車をよこして来るシステムになっていきます。

上海の電話は二つの区域に分れていて、共に五桁の番号になつており、一方はそのまゝでダイヤルを廻しますが、片一方は五桁の上に（〇二）がつくのであります。タクシー会社は業の必要から、いずれも競つてわかり易い電話番号を持つておりまして、例えば、40

000、12321、88888と、いうように、それぞれの所属車の車体に、これらの数字を大きく書いているのが、その特徴になつていました。

バスは、虹口地区にある日本人経営のものを除いて、英米租界のものは薄い黄色、フランス租界は小豆色に車体を塗つたもので、共に統一せられており、これらの内、英米租界では南京路其他のルートに二階バスが走つていました。聞く所によりますと、ロンドンにあるものは二階席には天井が無いそうですが上海のものは屋根がある代りに、外観はひよろ長くてずいぶん危つかしい恰好をしております。然し、その二階席からガラス窓越しに見おろす街の眺めは、またちよつと変つて

趣きのあるものであります。

街の交又点に交通巡査が立つてゐるのは、日本と同じような風景ですが、上海に於てこの交通巡査は、印度人の専売特許のような形になっていました。どこの四つ角でも、交通巡査が居ればそれは必ず印度人であり、また印度人の職業は、それだけに限られていたような感があります。彼等はいずれも六尺豊かな堂々たる体軀をもち、ターバンを頭に巻いてそれに申し合せたように、見事なごひげを蓄えておりますが、その表情はいつも



無感動で沈んだ暗いかげがあります。私は、曾て彼等の笑顔をというものを見たことはありませんがそれは過去数世紀に亘る英国の搾取の下に呻吟した。民族の固定化せる表情であつたのかも知れません。

バスや電車の切符で日本と違つてゐるのは、区間ごとに色の異つた紙に、料金の数字が大きく示されてゐてそれにいずれも1から始まつて32くらいまで、小さな数字が一樣に印刷されてゐることです。これは何のためかと言いますと最初の停留場を出る時に、毎回それぞれ適宜の番号を指定せられ、例えばそれが18であるとすれば、その回の乗客にはすべて18の所に車掌がパンチを入れます。そして、途中で検札係（これには車掌よりも上級の職員が当ります）が乗り込んで来て検査をする際に

旧切符を使用したり、或は全然切符を渡さなかつたりする。車掌の猫ババを主として警戒し、同時に乗客の無賃乗車も防ごうという訳なのであります。

次に電車について申しますと、上海には地下鉄は無く、殆んどが普通の路面電車なのですが、一部にはバスと同じような、タイヤの車輪で走る無軌道電車もありました。ところが、これらの電車はいずれも誠にお粗末なもので、外観内部共に至つて貧弱なものであります。乗降口はまるで刑務所にもあるような、屈伸開閉する鉄柵の扉でありますし、それに運転台の周囲には全然窓ガラスがありません。客席との間には勿論ドアがありますので、内部の乗客に被害は無いものの、運転手自身は如何なる天候の時にも常に吹きさらしでありまして、冬の風が強い日などは、外套だけの実に寒そうな恰好で運転しているのがいささか可哀相なくらいでした。

バスと違つて、電車では客席が二つに分れておりまして、一つの車で三分の一ほどの部分が一等席（一等のことを「頭等」と言います。）残りは三等席になつてゐます。その境

魔都上海の思い出から

界にはドアがあつて、鍵がかかるようになっており、内部の坐席も、一等の方は籐を編んだものですが、三等では板張りの粗末なものであります。そして、出入口は両端に一つづつあり、車体の外側も、それぞれ緑色と銀白色とに塗り分けられていました。

このような客席の区分を、一等と二等という風にしないで一等と三等にした所は、例の「犬と中国人は入るべからず」という、有名な立入禁止文句によつても知られる如き、アングロサクソンの極東に於ける植民地統治方式の一端が、あらわれているものと考えられます。もつとも、一般的な交通機関である電車の場合は、一等席は外国人専用という訳ではなくて、中流以上の中国人も勿論乗つて居りました。三等の利用者は、即ち中国の庶民階級でありまして、彼等は、料金が電車の一等並みであるバスに乗ることは、ほとんど無かつたのであります。

貳

さて、本題に入ることとして、四馬路と言へば、中国を一度も訪れたことの無い日本人にとつても、全然耳新しい地名ではあります

まい。曰く、「霧の四馬路で別れた人は……」「泣いているよな四馬路の月に……」「夢の四馬路が忘らりよか……」等々、上海を主題とした日本の流行歌にとつて、四馬路は実に切り離すことのできない存在となつてゐるからであります。

思うに、我国では船や港や船乗りと言へば必ずそれをロマンチックなものにせずにはおかない風潮がありまして、最近には淡路島の港までが一役買わされてゐるような状態ですから、国際都市上海が歌謡曲で美化されないことは、かえつて不思議なことかも知れないのですが、私が少し疑問をいだくのは、何故に四馬路が特に上海の代表的なものとして、取り上げられるのであろうかということであります。

元来、四馬路という名の来る所以は、それが上海のメインストリートである南京路から南へ四番目に当るからであります。即ち、南京路を別名「太馬路」と呼び、それと平行して同じく東西に走つてゐる道路を、南へ順に「二馬路」「三馬路」「四馬路」と言うのですが、「馬路」とは、中国語で単に大きな通りという意味に過ぎません。従つて、これら

の路にはいずれも本来の名称があり、四馬路の名は「福州路」と言います。この四馬路が太馬路である南京路以上に有名となつた原因としては、おそらくその「スマロ」という、何かエキゾチックな言葉の感じにあるのではないかと思われまゝす。

何故ならば、流行歌の文句から一般の日本人が想像する所は、たぶん、バーやキャバレー、それに映画館などの、ネオンサインに彩られた街の様子でありましょうが、実際にはこうしたものは一つとして発見することはできず、それどころか喫茶店さえ無いのであります（正確には、私の記憶する限りに於て、路の西端に近い南側に小さなものが一つあつただけです。）「霧の四馬路」に至つては、私の数年に亘る在住期間中、上海で霧らしいものを見たことは殆んどありませんでした。現実の四馬路を特色づけるものは、薬屋と書店の多いことでありまして、上海の主要なるものはすべて此所に集まつて居ります。この両者は、どう考えても歌謡曲の題材になり得る代物ではありませんが、この外にやゝ浪漫的なものに近いものとしては、中華料理店があります。要するに四馬路とは、薬屋と書

店と菜館（中国では料理店のことをこう言います）という。ちよつと奇妙な組合せの街なのであります。

これらの内、菜館について説明致しますと四馬路に在るそれは純粹に中国式のものでありまして、決して一般の日本人の嗜好にアツピールするものではありません。中国の菜館の第一の特徴は、何よりも味覚本位の実質主義で、それ以外のなりふりを構わないことでありましょう。手つ取り早く言えば、建物や設備が粗末で且つ余り清潔でないことでありまして、部屋と言つてもはつきり独立したもののは少くて、殆んどが、広間をベニヤ板のよなもので囲いをして区劃を設けた程度のもので壁はうす汚れたまゝ、窓の外側の所には一ぱい塵芥がたまつてゐるといつた状態で、これが名の通つた一流の菜館かと、いささかあきれる程であります。手洗所をたずねて裏の方へ行きますと、ごみごみした所の片隅に申し訳ばかりの簡単なものがあつて、すぐその傍らの調理場では、客へ出す料理を作つてゐるのですから、全くどうも辟易せざるを得ません。

その代りに、料理そのものは本場のコクの

あるものを出してくれるのですが、何としても日本人にとつては、そのような場所は苦手でありますから、同じ中華料理を食べるのも、矢張り南京路や霞飛路あたりの、多分に西洋化された店へ足が向くことは、やむを得ないところであります。従つて、私が四馬路に於て日本人の姿を見かけたことは、ごく稀れにしかありませんでしたから何が故にかくもこの通りが有名であるのか怪しむと言つた訳であり、それが「スマロ」という言葉のひびきに、多く負うものであらうと考えた次第なのであります。

しかしながら、然らば、四馬路は遂に何ら私等の興味をひくことのない、無味乾燥な街に過ぎないのかと

言いますと、この答は必ずしもイエスではないのであります。私は以上に於て、日本に伝えられてゐる四馬路が、実際とは大ぶ異なるものであることを述べました。事実、此所を訪れて、予想に反した印象を受けなかつた日本人は、至つて少いことでありましょう。四馬路の外観はそれ程至極平凡なものでありますが、しかし、上海最大の繁華街南京路に近接

無軌道電車



魔都上海の思い出から

した此の周辺一帯は、つぶさに観察した場合
やはり歓楽の街にふさわしい様相を具えてい
るのであります。



南京路とは違つて
四馬路には電車もバ
スも走つていません
ので、街の騒音が少
い上に人通りもそれ
程多くはありません
から、昼間は比較的
のんびりとして、閑
散な趣きがあります
割合に客が多く見ら
れるのは、書店くら
いのもので、この書
店も東京の神田のよ
うに、あんなに沢山
ある訳ではなく、大
小合せて二十軒くら
いのものでしょうか
そこで売っている
ものは、勿論殆んど

魔都上海の思い出から

が中国の書物であります、その他には西洋
のもの、中でも英語の本が圧倒的に多かつた
ようです。

その頃、これらの書店に入つて特に気のつ
くことは、抗日的な書物やそれらの宣伝が、

騎馬の印度人巡査



堂々と店頭に大きく
飾られていることと
それに、制約とい
うものを知らない大
胆極まる風俗出版物
が、至る所で見られ
たことであります。

まず前者について
申しますと、当時日
本軍の占領を免れて
いた唯一の地点であ
る、この租界地区を
根拠にして、重慶政
府や英米側の宣伝活
動が猛烈に行われて
いました。新聞では
曾て日本の憲兵隊が
目の敵にしていた「
大美晩報」をはじめ

として「美」とはアメリカを意味し、この
新聞名はAMERICAN EVENING
NEWSに当ります、「新聞報」「申報」
(申は上海をあらわす字)等の抗日紙が大
きな勢力を持つて居り、後になつて、日本側
がこれらに対抗して発行した「新申報」とい
う中国語新聞は、ごく一部の限られた人が読
むに過ぎませんでした。其の他、雑誌、単行
本、パンフレットの類でも、政治に関するも
のはすべて抗日を主眼として、こうした街に
氾濫していたのであります。

次に、風俗関係の出版については、これま
たそれに対する取締りといったものは、全然
無かつたようであります。商務印書館其の他
の一流書店から、街頭で雑誌などを並べてい
る小さな露店に至るまで、この方面の出版物
も数多く見受けられますが、中にはいわゆる
Y本に等しいものまでも、公然と店頭に陳列
して売られておりました。それらは、少数の
英文のものを除いて、何と言つても最も簡単
に目につくのは中国語のものですが、日本の
カストリ雑誌とは違つて、ケバケバしい絵が
表紙に大きく画かれているようなことはあり
ません。第一、そうした書物が雑誌の形態を

とつてゐることは余りなかつたようで、ほとんどが単行本の形式——と言つても、多くは紙の表紙の簡単なものでありました。

その表題には、「惜別」「青春」或いは「王家的喜帖」(王家の結婚案内状)というように、何の変哲もない文句がついてゐるだけです。その内容たるや、語学を解する者が見れば、まことに以てオドロキ入る代物なのであります。古来(へと言え)ちよつと大げさですが、外国語を勉強するのに一番手つ取り早い方法として、こうした種類の書物を見つけて読むことが推奨(?)せられておりますが私の経験からしても、これは実に効果的な便法と思われず。普通の本であればすぐに退屈して、辞書を引くのがめんどろになるものですが、このような本では、いつまでも興味津々として飽くことを知らず、一瀉千里で読破することができからであります。

お蔭を蒙つて、私もいろんな俗語の知識を広めたのですが、茲に記憶の中から差し障りのない範圍で二三御紹介しますと、中国に於て男女の生殖器を意味する、最も一般的な言葉は「東西」と書きます。発音は、マージャンをやつておられる方ならご存じの通り、

大体それに近いものです。元来、此の語の意味は「品物」ということなのですが、通俗的にはこれによつて、性の象徴物を表理する訳であります。女性の場合を「陰門」と言うことは我国と同様ですが、男性のものを「陽物」と称するのは、ちよつと面白い言い方だと思ひます。(英語の書物では、よくそのことをSHAF Tと呼んでおりました)

女体の俗に「ヴィナスの丘」と称される部分の形容詞として、よくお目にかかつたものは「饅頭のように盛り上つた」という文句であります。饅頭とは日本のように甘い菓子ではなくて、普通中国で単にこう言う時は、中へ豚肉などをつめたものを指し、中国人にとつては主食に近い最も親しみ深いものですから、自然こうした言葉が好んで用いられたのであります。そしてこの場合に、前にも申しました如く、中国人女性には無毛の者が多いということを思い起されると、右の形容の適切であることがよく理解せられると考へます。

更にもう一つ、私が閨房の描写に於て、万国共通であるらしいと感じたものに、「死ぬ」という言葉があります。日本でそれがそ

のまま、もしくは他の表わしによつて、よく用いられることは御承知の通りですが、中国でもクライマックスに至つた場合に、さかんに「要快死了!」と言つております。そして英語の書物では、同じことが、I AM DYING! として表理されてゐるのです。(もちろん、I AM GOING! とは申しません)

四

街に灯がとると、ようやく四馬路にふさわしい情緒が感じられるようになります。華やかなネオンやジャズが無い代りに、あちこちの菜館の窓から、中国的な絃歌のひびきが洩れてくるのです。日本ならば三昧の音という所でしょうが、此所では胡弓のものの悲しい調べがそれに代ります。そしてまた、我國の芸者に相当する女性の存在することも、申すまでもありません。

夕方以後にそれらの菜館へ入りますと、ボーイが料理の注文を聞きに来る時に、一枚の紙を持つて参りますが、それには多数の中国人女性の写真と、それぞれの名が印刷してあるのです。彼女等が即ち「妓女」「歌妓」或

魔都上海の思い出から

いは「校書」などと呼ばれる職業婦人なのでありまして、その司る所は、酒席に於て客と談笑しながらそのとりなしをしたり、或は歌を唱うことが主要な職務であり、本来は単にそれのみであつたことは、日本の芸者と同様であります。

然るに、こうした場所における、こうした職業の女性の常として、結局は唯そのような業務だけに止まり得ないものであることも、これまた日本の芸者や、朝鮮における妓生^{キサン}の場合と、軌を一にしていたようであります。

勿論、そうは言うものの、彼女等は単なる売笑婦とは異りますから、酒席へ招いて直ちにセックスの取引を交渉するというようなことは行われません。それは彼女等の面子^{メンツ}をいぢるしく損うことであり、且つ彼女等の本業は、あくまで酒席の司会にあるからであります。従つて客に若しその希望がある場合には、あらかじめ菜館のボーイを通じて、彼女等の所属する店と交渉を進めなければなりません。

一部には、そうした店の連絡員が、菜館にまで出張して来ているような所もあつて、曾てはよほどなじみの客でないと、そのような

機会が容易には与えられない立て前であつたものが、既に相当ルーズになつてゐる模様でしたが、それでも客が日本人であるということが知れた場合には、目的を達するのにまだ大ぶ困難があつたようであります。

酒席に於ける彼女等は、概していずれもとやかであり、多数の者が標準語である北京官話を解します。(前にも申しましたように普通華北以外の地方で標準語を解するのは一応の教育を受けた者に限られていました)衣服は、勿論すべて中国服であります。身なりはキチンと整つていて、容貌もすぐれた者が選ばれております。彼女等に対して、型の如くにその出生地をたずねますと、大抵の者が蘇州もしくは杭州と答えるのが、おきまりのようになつていました。

申し上げるまでもなく、これらの場所は、共に美人の多い所として有名なのであります。が、私の経験によつても、此の定評は余りはずれてゐると思いません。但し、風景の方は喧伝される程のことではなく、特に蘇州はお粗末でありまして、まだしも杭州の方が大ぶ優つております。彼女等の中にも、実際にこうした地方から来ている者はあるのでしようが

仮りにそうでない場合にも、好んでこれらの地名を口にしたものと考えられます。

一体に、中国の花柳界の女には小柄な者が多いのですが、これは、古来この国の女性美に対する要求が「窈窕タル淑女ハ君子ノ好述」という言葉からもうかがわれる如く、なよなよとして寧ろ弱々しい感じのものを佳しとしたことによるのでありまして、このような中国人の嗜好が、曾て婦人に纏足を強制することにより、加虐的な満足をさえ得ていたものでありましよう。

私が招いた一人もそうした例外ではなく、五尺に大ぶ足りないほつそりした身体つきで、色はすき透るように白く近くで見ると実に美しい肌をしていました。酒は殆んど飲みませんが、それでも「給我賞臉」(私の顔を立てて……)と言いますと、無理に一二杯受けて、すぐに顔を紅潮させてしまいました。

(中国人が非常に体面というものを重んずることは、御承知のことと思ひます)

その時は、あいにく伴奏がなかつたのですが、私の需めに応じて、彼女は数曲の歌を唱つてくれました。その中で私の知つていたものは、日本でも譚詠されいる「何日君再来」

好花不常開
好景不常在

今宵離別後
何日君再來

というように、
所々しかわかり
ません。

此の歌の大体の意味は——彼女から聞いた所によりますと——

相愛の男女二人
が別れに臨んで

小宴を開き、いつ再びあえるかという。綿々たる思いを述べあつてゐるもので、これが日本のお座敷なら、随分しめつぽいものになるのでしようが、このような純粹の中国菜館で聞きますと、何とも言えない味わいが満喫で

A black and white photograph of a long, covered walkway or promenade. The walkway is flanked by buildings with large windows and balconies. People are walking along the path, and there are some small structures or kiosks on the left side. The perspective is looking down the length of the walkway.

きした。

このようにして、四馬路界隈の実態を御紹介する場合に、次にどうしても言及しなければ

るのであります
去るに當つて
彼女は丁寧な礼
を述べ、金でふ
ちどりをした小
さな名刺を手渡
してくれました
が、残念ながら
その名前を失念
して、今ここに
思い出すことは
できません。そ
の時に、私の欲
求を容れて、接
吻することを肯
んじたのですが
私はそれ以上に
彼女を求めるこ
とはしませんで

ばならないことが一つあります。それは、右に述べました如く、菜館から一ぱい気嫌で出た時などには、必ずと言つてよい程よく誘いをかけられるもので、主として夜間に多いのですが、昼間でも決して珍しいことではありません。街をそぞろ歩きしておりますと、怪しげな男が近寄つて来て「先生、シーサンオトコオンナ見ナイカ？」と言つて呼びかけるのが、即ちそれなのであります。

私の場合を例にとつて申しますと、最初は友人と二人で昼間南京路を歩いている時に出くわしました。私等は明らかに日本人とわかる恰好をしていましたので、右のような言葉で話しかけられた訳です。友人にどうするかと相談しますと、別にあてもなくぶらついている時でしたから、何なら一度見物してもよいと言います。そこで私等は、その男の後について行くことにしました。

歩きながら値段の交渉をしたのですが、上海の物価はその後次第にインフレの傾向を示し、しばしば変動があつた為に、その時それがいくらであつたかは、記憶しておりません。とに角、初めの言い値が半分近くになつたことは確かであります。好看（ホカン別びん）が居

魔都上海の思い出から

魔都上海の思い出から

るかたずおますと、無論好看だし、それに身体つきも非常によいと言つて、あらかじめ宣伝にぬかりはありません。

南京路からはずれて、裏通りのごみごみした狭い路へ入り、やがて、一軒の二階建になつてゐる家の前へ来ました。それは、別に附近にある家と何も変つた所はありません。男は入口の扉を開いて、私等をその中へ導き入れます。入つた所はすぐ階段になつていて、それで二階へ上り、日当りが悪くて薄暗い一室へ通されるのであります。

その男は私等を椅子に掛けさせると、しばらく待つようにと言い残して立ち去りました。部屋の広さはまず六畳の間くらい、テーブルの周囲には私等の掛けてゐるものも含めて椅子が四つ、それに、片隅に余り上等でない鉄製のシングルベッドが置かれてゐます。壁には裸の西洋人の女の写真が一つ、額ぶちに入れたかかつてゐるだけで、其の他には何も裝飾らしいものはありません。

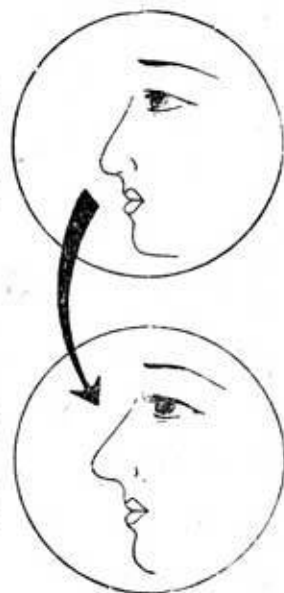
間もなく、先程の男が中国人の男女二人を伴つて現われました。その二人は全く無表情で、私等にろくろく挨拶もしないまま、早速着ている物を脱ぎはじめます。見ております

と、脱いだ服や下着をベッドの枕もとにある小さな木の台の上に置き、やがて女の方がズロース一つだけになつた時に、彼女は私等のそばにゐる例の男の方を、何やら意味ありげにちよつと振り返りました。すると、男は私等に向つてついでにうしろ笑いしながら、そこでチップを要求するのです。

中国語でチップのことは「人情」とも言いますが、この場合、女の最後の物であるズロースを脱ぐのに当り、私等の人情に訴えてチップを請求しようというのであります。これには、私もいささか驚いたり感心したり致しました。或る本で見た所によりますと、西洋の娼婦が、シユミーズを脱ぐのにいくら、ストッキングにいくら、ブラジャーにいくらという具合に、だんだん金額を上げながら裸になつてゆくという話がありました。が、さしずめそれと同様の手段でありましょう。

私等が承諾を与えますと、女は惜しげもなくズロースを脱いで、文字通りの全裸体になります。彼女の顔は特に好看と申せる程ではないのですが、身体の方はさすがに普通以上の体格をしております。但し背は少し低くてどちらかと言へばずんぐりした恰好ですが、

美容整形の榮呈



術前

術後

永久不変

・内容・

隆鼻、短身、豊頬、二重瞼、わきが、キズアト、はげ、シワ若返り、肥り過ぎ、やせ過ぎ、過小乳房、不妊症、更年期障害、脳下垂体移植

大阪市梅田新道交叉点

東一丁電車道

三山醫院

こんな時に、ぜいたくを言つたところではじまりません。

片一方の男も直ちに裸になりますが、さてそこに於て、またもやチップが必要となるのであります。と申しますのは、これからいよいよ………始まることになるのですが、その期に及んで、………もつともこれは無理のない話なので、見物人の立会つてゐる場所に於ては、いつころにそうした感興が湧かないのも当然でありましよう。

従つて、彼を………せしめるために、もう一度チップをはずんでくれと言うのでありますが、こうなつてはこちらも乗りかかつた船なので、今さら応じない訳にも参りませんすると、女が………彼に近寄つて、手で………与えるのです。私はその時にふと野球などでよく使われる、ウォーミングアップという言葉を出しました。かくして彼がOKになりますと、そこでようやく準備がすべて完了するのであります――

陸

二度目に私がそれを経験した時は、前回と

は少し様子が違つていました。二三箇月ばかり後に、一人で中国服を着て、まだ宵の口の四馬路を歩いておりますと、一人の男が上海語で話しかけて来ました。よくわからないので北京語で返事をしますと、こんどは向うも大ぶなまりのある北京語で、満洲人かと言つてたずねます。いや天津から来たのだと言いますと、いい女が居るがどうだと誘うのです。私が、今日は元気が無いからダメだと答えると、それじゃ面白いものを見せるから、一しよに来ないかという訳です。その時は、私も少しアルコールが入つていましたので、試しに値段を問いますと、確か前に見た時と比べて、はるかに安いのであります。彼等は外国人と見ると、やはり足もとを見て吹つかけるのであります。私は、そこで何となく食指が動いたので、その男の後に従つて行きますと、横丁へ入つてしばらく歩き、或る五六階ほどの建物の裏側へ出て、その非常階段から上つて行きます。

ちようど日の暮れではあるし、こんな所で何をされてもわかりつこないの、少からず不安に思いましたが、それでも度胸をきめてついて上りますと、三階か四階あたりの所で

内部の廊下へ入りました。建物の様子は、どうやら一階だけが店舗で、二階以上は余り上等でないアパートのようになつてゐるらしく廊下のあちこちには、バケツなどがだらしく置かれていて、どこを見てもうすよごれた感じのする所です。或る一つの部屋の前へ来ますと、男はノックをして自分だけ中へ入ります。すぐにまた出て来て、こんどは私に、中へ入つてしばらく待つていてくれと言つたまま、どこかへ行つてしまいました。

部屋へ入りますと、割合にきれいな女が、一人で椅子にかけていましたが、私を見て傍らの椅子をすすめ、北京語と上海語のチャンポンのような言葉で、どうして遊ばないのかと言つて話しかけます。今日は疲れているのだと答えますと、北の方の女はどんな風であるかというようなことを、私に向つて問ひかけるのです。その女の年令は二十四で、上海で生れて上海以外へは一步も出たことがなく五年ほど前から今のような商売をしていると言います。

そうしている所へ、先刻の案内役の男が一人の中国人の男をつれて入つて来ました。すると、女はやおら椅子から立ち上り、私の

魔都上海の思い出から

魔都上海の思い出から

方を向いてニヤニヤ笑いながら裸になり始めます。まず中国服を脱ぎ、次に中国風の白い木綿のシャツと靴下を脱ぎますと、その下はビツタリと身体にそつた、メリヤスの薄い肌着とズロースだけであります。

その肌着を取り去り、更に………も脱ぎ棄てて全裸となつた彼女の肉体は、やや肥り気味ながらその肉はよくしまつていて、乳房も東洋人としては立派に發育して、大きく盛り上つていました。

彼女は、そのままの恰好で私の前に立ちはだかり、どう？いい身体でしょ、これでも一しよに寝たくないの？バカだね———というような意味の冗談を言つて、至つて陽気に傍らの………。パー トナーである男も………上りますと、そこでややしばらく………うちに………に………に

なります。

こうして、私の………くりひろげられるのでありますが、対象である二人が第三者を意識している上に、彼等にとつてはそれがビジネスでありますからお互いの気魄が乏しいことは、けだし当然としなければなりません。しかしながら、私も初めての時とは違つて、相当図々しくなつておりますから、その時には、彼等に対していろんな注文をつけたものです。

即ち、こちらから進んでチップを申し出てその代りにあらゆるSTYLEを要求しました。彼等は極めて事務的に行動しているに過ぎないのですが、命ぜられるままに次から次へ………いるうちに、自然と………参ります。私はそれらを仔細に見た上で、最後に、約束の料金の二倍を支払うことを条件として、彼等に………を希望

したのです。すると、彼等も勢いのおもむくところ遂にそれを承諾して、やがてさすがの私も相当なSHOCKを受ける程に、大きな………に………が二人の………であります———。

このようなことは、然し、私も前後を通じて唯一回経験しただけで、大抵の場合は、男の方もEJACULATEするようなことはなく、単なる形式的な手続きを見せるのに過ぎませんから、それはどちらかと言えば、エロよりも寧ろグロの方が勝っているものなのです。従つて、これに比較しますと、前に述べました裸踊りの方が、まだしも公明正大で且つ健康的であり、更にもつと進んだものはまた別に見ることができましたので、右のような私の体験は、一時的な好奇心によるものと申せるのであります。(未完)

升岡金吾氏の「縛られた女優たち」は資料としても非常に面白く参考になるが、ただおなじ縛つた場面が出る映画にしてもピンからキリまであるので、その点を等級をつけて下さると尚よかつたと思う。私は日本の時代物

はあまり見ないが、洋画は氏のあげたものを大体見ているので、それら及び氏の記載洩れのものをも含めて、もつと印象に残つたものをあげてみたい。それは「巖窟の野獣」(原名ジャマイカ・イン)のモーリン・オハラ

だ。これは真の意味でサジステイックなのでただ縛る場面があるというようなものではない。第一に、この映画は筋そのものが陰惨で、雰囲気も暗い。オハラを誘拐する知事は遣伝

新しい「サディズム」

吾妻

新

的変質者で、最後には発狂する。しかもこの男を唯一の保護者だと信じて彼女がワナにおちてゆくという構成がそもそも嗜虐的である。第二には肉体的条件がある。この裁判官はみるからに脂肪の塊りで（チャールス・ロートン）しかも冷静残忍、一方のモーリン・オハラという女優がまた愁いをおびたすばらしい美貌なのだ。この対照がおそろしくモノを言っている。

第三には縛るときの場面設定である。彼女のためよるタッター一人の伯母が、見ているまゝで男に射殺される。茫然としたところに、男は姿をあらわす。はじめて憎むべき敵だということに気づくが、もうおそい。その無残な情景のなかで、彼は彼女を連れて外国にゆくことを宣言する。

逃げようとするメリイ（オハラ）は入口で

捕えられ、白い布でいきなり猿轡される。その猿轡は私のあまり好かない歯と歯の間に布をはさんでしぼる式だが、この場合にかぎつてそれがじつにすばらしい。口から両頬にかゝった布が柔かな美しい頬にむざんなほど食いこみ、あれでは確実に口がきけない。さだめしオハラは辛かつたろうと思うほどリアルな効果がでている。しかも彼女は両手で外そうともがくのだが、逞ましい男の手はビクともせず、「痛い。だが縛らねばならん」と言いつゝ、ユツクリと後頭部でじばつてゆくそれからグイと腕をねじあげ、悠と後ろ手にしぼり、「カゼをひかぬように、外は寒いからな」と外套をきせ、「顔は見られぬほうがよい」とスッポリ頭布をかむせる。いよいよ連れ出される刹那、メリイは伯母の死体にかけるが、声も出せず、手もかせず、膝をつ

いてすすり泣くばかり。そしてむりに引き立てられてゆく。

やがて馬車の中。知事は外国で一緒に暮すことをしやべりつゞけるが、猿轡をかけられたメリイの大きな眼が恨めしげに視線を投げたのみ。この場面がなかなか長いので、心理的サジズムは十分タンノウさせられる。次は港。外套の上からうしろ手をつかまれ、抱かれるようにして特別船室に連れ込まれるが、人々の怪しげに見送るのにサインすることもできぬ哀れさ。さて船室では、縛られたうしろ手でドアの鍵をそつと廻しかける。だが、それも空しく男に抱きよせられる。しばらくしてやつと猿轡だけ外されるが、両手は尙縛られたまゝである。ついに耐えかねて嗚咽すると、「泣くと美しさが失われる！」と怒鳴られるのである。

このような構成、男の残忍さと哀愁の美、いたましいほどの猿轡、そしてその後助かるまでの場面の長さ、いづれをとつてもこれに匹敵する映画は見たことがない。たとえば女を拷問柱に縛つて焼きゴテをあてるベトナムの深さがちがう。これが私の主張するあたらしいサディズムなのだ。

奇譚クラブ最近号

主要目次

- 九月号 特集倒錯の告白○
- 十月号 特集切支丹迫害史○
- 十一月号 宗教刑罰戦慄画譜
- 口絵 宗教刑罰戦慄画集
- 風俗便所考 淫書開好記
- 緊縛の受難(縛られた女の写真)
- 悲恋の答刑……………松井 籟子
- 局部装飾としての文身……………高野 雅和
- 続・へばきうり……………鬼山 紬策
- ストリップ変態記……………朝見 速夫
- 現代陰間茶屋談義……………染田 玄
- 続・変態艶書……………岡田 咲子
- 少年矯正院体験記……………獄 牧一
- 桃色の地獄……………藤安 節子
- 夢性の美少年……………三村 幾夫
- 堕胎と出産風俗……………阿久津 猛
- 都会の異態交響楽……………中河津規男
- 悪魔と口紅……………桂 牧次郎
- 癡狂文学者の研究……………杉山 清詩
- ジャンベルネル夫人の狂業シヤルロット
- 男色魔の虜……………井口 正憲
- 性愛描写の文学……………紀市 郁栄
- 切支丹迫害史……………漆島 迫平
- 反戦論者の弁……………三富 浩生

○十二月号 惑溺の愉悅特集号

口絵 フランス貴婦人の変態性生活

扉 甘き飲菓の後

耽美派小説名場面集 潤一郎の巻

折込口繪写真 縛った女を写す辻村 隆

濁れる愛慕……………松井 籟子

切 夜……………笹田 暁

奴隷妻……………片矢 薫

指の秘密……………武山 武彦

男夢龍姫伝……………龜岡絃七郎

孤獨なファンタジー……………芳野 眉美

モンテカルロの佝僂男……………モリス・ブルウシェ

中国艶話毛のない女の物語……………赤塚与志夫

女性器崇拜……………雨森 順一

糊と泥と砂……………長岡愛一郎

4Sクラブ探訪記……………二俣志津子

非公開映画世界の闇房……………藤安 節子

囚衣或る人妻の生活記録……………古川 裕子

墮に關する怪奇な報告……………村田 生

SODMIEの珍裁判……………鳴尾 善治

ロマンチックなサディズム……………森山 美歌

香具師放談……………浮家 鷹三

女囚私刑体験記……………小坂多美枝

セックスの記憶……………綾 久江

錯乱の倫理……………近東規矩也

夕映え燕の教訓……………丘 正雪

狂い咲くカンナ其の後の告白……………羽村京子

○新年号 縛った女を描く○

口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子

中世紀の宗教刑罰画集

扉 愛の使徒 色刷口繪 椋鳥

口繪写真 縛った女を描く

アブニストの記・らぶすれいぶ鬼山紬策

脱落者……………小森 原平

徳川閨門痴情録……………的場 通

淫火(みだらび)……………松井 籟子

戦争処女の手記……………藤安 節子

長崎らしやめん考……………花山 剣作

お国自慢・好色民謡……………七条美樹子

人妻告白記・妻の復讐……………辻 佳月子

桃色のベールに包まれて……………川端多奈子

読者座談会交悦に伴う責めの衝動心理

マゾヒストの果て……………福田 英一

糊の執著……………長岡愛一郎

鼻腔礼讃……………升岡 金吉

変の字問答……………浮家 鷹三

告白記 僕の記録……………黒井 珍平

女の責場を描く時の心境……………伊藤 晴雨

少年の恋……………守田 雄二

貞操帯奇譚……………シヨルシュエフカルトル

あなたのムチの下に……………角田 平八

赤につかれた男……………上村秀久雄

男色の花道……………堤 行房

風変わりな作戦……………笹田 豊

○二月号 責めの小説特集号○

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)

口繪写真 恋に狂ったワン・カット

スペインの宗教裁判

妖 花(心の悪魔)……………羽村 京子

夜開く孤島……………岡 真史郎

淫 火(第二回)……………松井 籟子

若衆散華(同性愛欲史譚)……………戸崎 平馬

変の字問答(第二話)……………浮家 鷹三

らぶ・すれいぶ(第二回)……………鬼山 紬策

燐 光……………久留木 栄

女嫌いの種々相……………仁比山 等

アレキシナの日記……………鳥上 源一

女囚獄中記花井お梅さんげ談……………小町右近

糞尿崇拜とト・テム思想……………三瀬 淑朗

処女崇拜と宗教荒淫……………島影 映

比丘尼開眼……………久松 俊介

琉球の女達……………木之下白蘭

悩ましのサディズム……………森山 美歌

切支丹迫害史……………漆島 迫平

死刑執行奇談……………茂木 芳久

黒井珍平氏に答う……………伊藤 晴雨

しいたげられるよろこび……………林田 澄子

破つた日記帳……………川端多奈子

硝子便所……………芳野 眉美

つわもの哀史……………吉井 川洋

映画とサディズム……………雲井 彰

☆ 緊縛女体猿 ぐつゐ 五態 ☆
 の一表情

— 床柱のうしろ手 —



辻村 隆・構成
 塚本鉄三・撮映

(モデル) ・ 南 泰子嬢

(モデル)・高瀬 忍嬢



(モデル)・厚狭 春江嬢



(モデル)・村田那美子嬢



(モデル)・坂口利子嬢





—さるぐつわ

(モデル)・高瀬 忍嬢

〇三月号 東西拷問くらべ〇

口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子

口絵写真 東西拷問くらべ

サディズムの精髄……………吾妻 新

切腹史談……………中康 弘通

同性的男性愛の謎……………染田 玄

受難記(ある女の告白)……………岡田 咲子

妖異集第……………戸崎 平馬

らぶ・すれいぶ(第三回)……………鬼山 絢策

女囚私刑体験記(其の二)……………小坂多美枝

黒井珍平さんへ……………羽村 京子

艶書通信(喜多玲子さまへ) 高野すみ子

文学歴史に現れたるサディズム

悲痛と快楽……………仁比山 等

第七天国の夢想……………波多野 新

伊藤晴雨先生へ答えて……………梅井 清

屍 臭……………黒井 珍平

色情の価値……………丹波 太郎

猿 轡 雑 考……………角田 平八

白い便器の幻想……………千葉 三郎

伊藤晴雨氏の解答を読んで……………芳野 眉美

破つた日記帳……………和泉としを

緊縛女優列伝縛られた女優たち升岡金吉

アドニス灯……………川端多奈子

ジブシイの性的生活……………鷺巢 千芳

淫 火(第三回)……………有馬 正秋

松井 籟子

〇四月号 錯倒の告白特集〇

口絵 くすくすされる女 喜多 玲子

口絵写真 緊縛美の考察

後手と高手小手について

搾衣(続少年矯正院体験記) 獄 収一

神の酒を手に入れる方法……………沼 正三

肥満体への郷愁……………麻生津和夫

乗馬服と長靴と轡……………森本 愛造

不思議な拷問……………有馬 稲高

私の新婚生活……………島村 康雄

開花の契機……………信太 蒼子

キメラ愛好会……………岡田 咲子

妓 の 影……………泉 辰之助

交 感……………藤安 節子

支配者と被支配者……………波多野 新

責めの美的表現……………小此木蘭一

らぶ・すれいぶ(第四回)……………鬼山 絢策

春婦哀歌(飛田の娼婦たち) 花村 鶴二

新裸体狂奏論……………七条美樹子

続・囚 衣……………古川 裕子

地獄繪行脚……………長岡愛一郎

美少年の死……………岡 真史郎

恍惚境と法悦境……………高取 辰治

切腹史談(二)……………中康 弘通

縛られた女優たち(二)……………升岡 金吉

風流猿轡……………吾妻 新

人獣交婚談異婚抄……………山崎 浩平

或る家庭教師の告白……………角田 平八

淫 火(第四回)……………松井 籟子

〇五月号 特集男性MASOO

口絵 戦後の挿繪に現れた女の責め場

口絵写真 荒縄による緊縛感のスポット

塚本 鉄三

怪奇画集

(ドイツのグロテスク画集より)

マゾヒストの会……………沼正三・沢

風流責各態……………吾妻 新

捕縛難考……………獄 収一

僕の記録(完結篇)……………黒井 珍平

らぶ・すれいぶ(第五回)……………鬼山 絢策

家出の味……………牧 さち子

雌獣の手記……………近見 啓

女王様ごっこ……………飛田 良二

偽られる殉教者……………成瀬 亮

続・硝子便所……………芳野 眉美

道徳的な物語……………笹田 豊

私の欲び……………瓜生 珠子

少年及び女性の切腹……………中康 弘通

実験室にて……………角田 平八

淫 火(第五回)……………松井 籟子

吊られた白鳥……………川端多奈子

魔都上海の思い出から……………姫宮 四郎

奴隷の安の記……………中野安太郎

縛られた妻以前……………早川新一郎

盲いたる手……………藤安 節子

真空地帯の挿話……………養 六平

暴帝イワン罪悪史……………高取 辰治

〇六月号

口絵 お小夜嵐 喜多玲子・画

緊縛による一表情 塚本鉄三撮影

扉 夢はスカートの下に

口絵 地獄物語(往生要集)

クリスチーヌの受難……………吾妻新・沢

虹の階段……………泉 辰之助

ヴァンプ女優列伝……………朝見 速夫

アブノーマル・ファンタジー……………岡田 咲子

責 苦……………竹谷 十三

拷問と倒錯の根源探求……………翁 要和

静安劇場後日譚……………姫宮 四郎

廊の灯影……………片矢 薫

出獄(少年矯正院体験記)……………獄 収一

縛られた女優たち(三)

切腹問答(中康弘通氏へ)

淫火(第六回)……………松井 籟子

由紀子のお仕置……………大川由紀子

若衆武士道……………戸崎 平馬

らぶ・すれいぶ(第六回)……………鬼山 絢策

暴帝イワン罪悪史(二)……………高取 辰治

あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三

其頃を語る(二)新派劇の賣場伊藤 晴雨

自殺の手段としての女性の切腹に

ついて……………池田 敏夫

文芸に於ける切腹描写……………中康 弘通

我が告白の断章……………須藤 律夫

第二回読者座談会

松井籟子女史を囲んで



らぶ・すれいぶ (七)

鬼 山 絢 策

一

私は幼ない時から一つの不満や不平にぶつかると、その不満を直接取除く事を考えずに、考え方を変えて諦める事に依つて、その不満を拭い去ろうとする癖がありました。

努力すればどうにかなる事でも、どうにもならぬと諦めてしまうのです。然し所謂「泣き寝入り」式に不平を不平としてそのまゝ諦めるのでなしに、何とかか何とか、自分流に理窟をつけて、考え方を変える事に依つて、不平を不平でなくするように精神的に努力するのです。

今度の場合でもそうでした。

妻の不貞を夫としての立場から見たら、大きな不満であり否不満どころではなく許すべからざる行為として、直ちに何等かの方法をとるべきでありましょう。

然し私は春美の夫ではないのだ、世間体は夫の位置にあつても内実は、一匹の奴隷に過ぎないのだ。自分は奴隷であり春美は主人なのだ、主人が何をしようと、奴隷の分際でとかく言う筋合はない。

と考えを変えれば、不満も憤りも消滅するのです。

春美の肉体を汚いと思つたのも、それは夫としての感覚から来るものなのだ。

主人の肉体を永久に聖い貴いものであれかしと希うのは、自分勝手な理想なのだ。寧ろ主人の肉体の一部が汚れに汚れても、然もそれでさえ自分にとつては益々貴い美しいものであると考えるのが、私の主義に合致するのではないか？

いやこれからはそう考えなくてはならない。

そう言う考えに到達した時、私は春美に対しても池崎に対しても不満も怒りもなくなりました。もう一人の男に対して



もー。

然し池崎やもう一人の男に春美を奪い去られる不安が大き
く募つて来ました。

これだけは何としても守らなければならない。

私は兎に角もう一人の男の正体を突き止める事と、池崎と
その男とが、春美に対して、どの程度の交渉を続けて居るか
を調べる必要を感じました。

それにはこの前のようにベッドの下から観察するのが一番
適当だと思いました。然し一旦家を出てから春美の隙を窺つ
て、ベッドの下へ潜り込むと言う芸当は、なか／＼簡単には
出来ません。

そこで一計を案じました。

「暫らくうまいお菓子を食べないね」

「洋菓子？和菓子？」

「洋菓子は食べてるけど和菓子の方さ、〃風月〃の洋かんが
食べたいね」

「妾も食べたいわ」

「じゃ、明日済まないけど、銀座迄行つて買つて来てくれな
いか」

「いゝわ」

こんな風に言つて、翌日会社へ出かけに又頼んでおいて、
いつもの場所から家の玄関を見張つて居ました。

春美はきつと秘密の悦楽の時間を少しでも長くするため
午前中に出かけるに相違ないと思いました。

案の定、三十分も待たぬ間に紺のスーツに着替えた春美が

すまして出かけて行きました。

私は会社に電話をかけて今日は休む事を告げ、家に入つて
靴を台所のあげ蓋の中に隠し、傍に転がつて居たビールの空
壺を水道で洗つて寝室に持つて入りました。

この前尿意を催して来て困つたので、これを即製のしびん
に使用するつもりなのです。

ベッドの下に潜つて、枕の位置を決めて、其処に靴を置き
ビール壺を奥の方へ立て、後はいつでも直ぐ這いこめるよう
にして、私はベッドの上に寝転んで、

(今日来る男は誰かな？)

といろ／＼な想像をめぐらして居ました。

二

「いゝから入んなさいよ」

春美が帰つて来たのは四時頃でした。手早くスーツを脱い
でブラウスもクシャ／＼と脱ぎ捨て、洋服ダンスに押し込む
と私の頭の上にデンと腰をおろしました。

男は躊躇してなか／＼部屋へ入つて来ませんでした。春
美に促がされて、黒いよく磨かれた靴が足を踏み入れて来ま
した。

「兎に角、僕は此の家へ帰つてくるのはイヤなんだよ」

「どうして？構わないわよ」

「もう四時過ぎじゃないか。間もなく帰つてくるんだらう」

「大丈夫よ。七時過ぎでないと此の頃帰つて来ないのよ」

男は声を聞いて直ぐ分りました。霧塚徹なのです。勿論最



初の「サブ」と呼ばれた男ではありません。私の知る限りでは春美の第三の男が、彼女が遠縁の者だと言つて居るあの蒼白い顔をした徹だとは意外でした。

「他の人が訪ねて来る場合もあるんじゃないの」

徹はオーバーも脱がずに部屋に立つたまゝあたりを見廻して居るようでした。

「フ、あんた案外臆病なのね、可愛いトコあるわ」

「うちのオヤジでも来たひにやアことだからな」

「大丈夫、先刻電話かけたら今夜会合があるんだつてさ、あんた知らないの」

「オヤジの「会合」はアテにならないんだよ。君との会合の場合も往々あるんだからね」

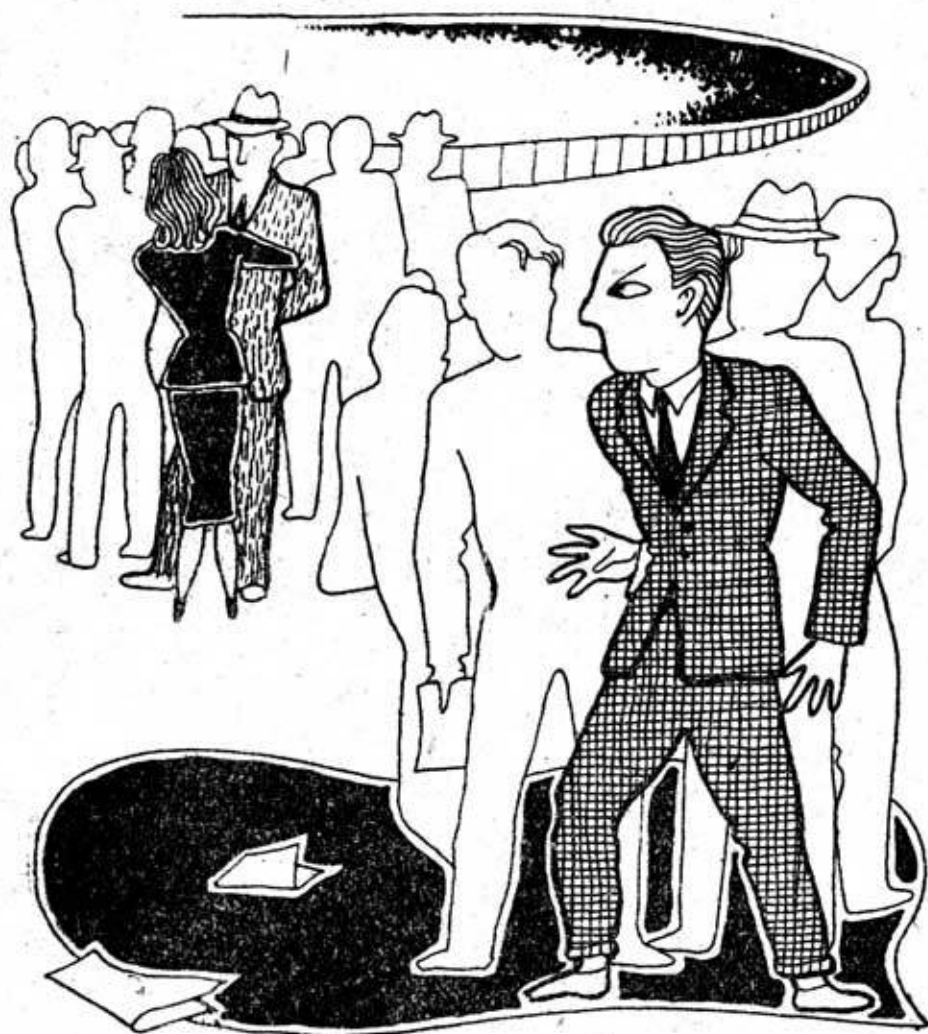
「あんたうちの人より池崎の方がコワイの」

「そりやコワイさ。分れば忽ちチミンだからね」

「妾、池崎なんかちつともコワくない。あんたのクビ位繋いでやるわよ、妾が」

私は男が徹だと分ると又抑えて居た憤怒がこみあげて来ました。

他の男なら兎も角、徹と言う男は私が面倒を見て、池崎の出版社へ、私が坐つて居た椅子を与えて



やつた男です。

其の後私は職を再び求める時、彼に私の位置を与えた事を後悔しましたが、春美の親戚の者だし、一度与えたものを取返すのも可哀想だと思つて諦めたのです。それ程恩をかけてやつた男が、妻迄盗んで居るとは、いくら私が甲斐性なしでも、お人好しでも、これが怒らずに居られましょうか。

然も彼と春美との情痴は、前の二人よりも濃厚で粘つこいものでした。例えその場が眼に映らなくとも、頭の直ぐ上で行なわれる情痴の数々は、その気配なり、時々洩れる二人の呼吸や、短かい言葉で、手にとるように分るのです。

私は今度こそ躍り出てやろうかと思ひました。いかに恋愛は自由であると言つても、私と徹の立場からいえば、義理にも春美に触れられる筈はないでしょう。

然も春美の旧姓は霧塚ですから、徹とは多かれ少なかれ血の繋がりのある仲ではありませんか。徹は私の前ではいかにも弱々しい、温順しいインテリ青年なのに蔭ではこんな畜生にも劣つた行為をして居るのです



あゝ然し私はどこまでだらしない男なのでしょう。二時間近い間、憤怒と嫉妬に身悶えしながら、私は遂々、徹をそのまゝ帰してしまいました。

一体春美には何人情夫があるのでしよう。

然も今迄の三人の話し合を聞けば、昨日や今日のつき合いでない事は判然して居ます。どこまで私と言う人間はあまく出来て居るのか、命迄も換え難い最愛の妻を、こんなにも多数の男に寝取られて居るのを知らずに居るとは……

「町内で知らぬは亭主ばかりなり」と言う川柳があります。が近所の人達は蔭で春美の行跡を噂して居るかも知れません。私の事も嗤つて居ることでしょう。

春美が徹を玄関迄送つて居る隙に、私はコッソリ裏口から外へ出ました。

三

私は会社の編集長の家に行つて、家庭の事情で暫らくの間休ませてくれと頼み、その間もし会社へ私宛に電話がかゝつて来た場合は、出張して留守だと言つておいてくれと、頼んでおきました。

それからの私の行動は、朝会社へ行く振りをして、家を出ると、秘かに春美が外出するか、又は訪問する者があるかを監視して居ました。

春美は、私が出かけると直ぐ、電話をかけに行つたり、外出着に着替えて出かけることもありましたが、なか／＼外へ出ず、午後になつて出かけることも、又一日中出かけずに

居ることもありました。

そんな時には、イラ／＼して来て「早く出かければいゝ」と思ふようなことさえあつて、かえつて私には苦痛でした。

一日中、表に立ちつくして居る訳にも行かないので、私は家の物置の裏に醬油樽を持出して来て、それに腰かけ、本を読みながら、玄関の様子をそれとなく注意することにしました。

春美が外出する時には、秘かに尾行しました。

尾行の如何に難かしいものであるかと言うことも、この時つく／＼悟りました。古着屋でジャンパーを買つて、それに差替えて見たり、マスクをしたり、色々簡単な変装を試みしました。

最初の尾行の日には池崎と会いました。

池崎の会社の近くの喫茶店で落ち合つて、直ぐ車で代々木の温泉マークのホテルへ午前中から乗りつけました。

宿屋へ入られたのでは、中の様子を窺うことは困難なので私は断念して帰りました。

二度目に外出した時は、土曜日でしたが、彼女は朝直ぐとび出して行つて、府中の競馬場へ出かけて行きました。

馬見所の隅で春美を待受けて居た男、それを人の蔭から見ると、私は思わず息を飲みました。大槻だったのです。

学生時代に、彼女と最も親しかったあの大槻、私はテツキリ彼と春美が結婚したものと諦めて出征したのですが、終戦後に春美と会つて、彼と結婚しなかつたことを聞かされても



すくなくとも肉體關係はあつたものと思つて居ました。

春美と同棲してから私の眼の前には一度も姿を現したこ
とない大槻でしたが、今にして思えば、春美は彼の悪口を言
いながらも、私にかくれてかなり以前から会つて居たよう
です。

彼のズボンを見た時、彼がベッドの下から見た最初の男で
あることが分りました。

それにしても彼の変わりようは、かなり甚だしいものがあ
りました。

学生時代の彼は、一寸ニヤけた美男子で、キザな所もあり
ましたが、上品な智的な所もある才子型の青年でした。

それが今見る彼の姿は、こげ茶のダブルの背広に、紺の格
子のズボン、青いシャツに真赤なネクタイを膨らませた姿は
どこから見ても与太者風の恰好です。髪をリーゼントまがい
にして、その人相は、昔のニヤけた面影はなく、眼つきは妙
に鋭くなつて、よく言えば苦味走つた男振りと言うのでし
うが、その表情には物欲しそうな下品さが見えました。

(お前の亭主は日本中に俺の他にはねえ)

と言つた彼、そして、春美から今日も幾枚かの札をせびつ
て馬券売場に急ぐ彼の様子は、すっかり春美の間夫気取りで
居るのです。

私の学生時代の恋敵大槻、一度は彼に完全に負けたと思つ
て春美を諦めたこともあつた私でした。

どんな事があつても大槻だけには負けたくない、大槻の腕
に春美を渡すまい、と思つたこともありました。

どうして春美の蔭の男が、どいつも此奴も私の憎悪をたか
める男達ばかりなのでしょう。

私は自分の考え方を変えることに依つて、春美の自由な恋
愛を黙認しようと思つて来たのに、その相手が、私の全然見
知らぬ男なら、よいのですが、霧塚徹と知つた時も、今大槻
を見た時も、私の諦めかけた心に憎悪の炎を燃え立たせる人
物ばかりでした。

二人は三四レース買うちちに、忽ちお手つぱらいになつた
と見えて、二人共消気た様子で競馬場を出て行きます。

私は途中で先廻りして家に一足先に帰つてベッドの下で待
つて居ました。

金がなければどこへも行く筈がない、必らず此処へ戻つて
くると思つたからです。

案の定、二人は重い足どりで部屋へ入つて来ました。

「だから最初の予定通りライトフrintを買つときやよかつ
たんだよ。おめえがトヨタカがいゝつてもんだから、マガツ
ちまつたんだ。ハナに勘を狂わすと次々とケチがつくんだよ
あの時迷わずに……」

「何をクヨクヨ言つてゐるのさ。落んじやつたこと仕様がな
いじゃないか。ま、ヤケ酒でも飲もうよ」

いつ迄も女々しく口説いてるのが大槻で、存外サツパリ諦
めてるのが春美の方なので、私はおかしくなりました。

もつとも春美に見れば、競馬はつけたりで、これから
が本仕事なので、そんなにクサることもない訳です。
二人は空腹だつたと見えて、ウイスキーも早々にかたづけ



て、お茶漬を掻込んで居るようでした。私も腹はベコ／＼なので、二人が美味しそうにサラ／＼と食べて居る音を聞くと腹の虫がグウ／＼鳴つて、それが聞えやしないかと心配した位でした。

「おや、もう六時ね」

「もうそろ／＼御帰館の時刻じやないのかい」

「まだ大丈夫よ」

それからの三十分。私には二人の………にとるように分ります。そして断続的な妄想がぎれ／＼に点滅するのです。

静寂の三十分。

「ねえサブ、ワンスモアー。」

「もう時間だろう」

「いゝじやないの、帰つて来たつて。其処へエンコさせて、拝観させてやるわよ」

「俺のせりふを覚えたな。可愛い、春美！」

粘つこい情痴の泡が、あとから／＼と二人の心をかき立て、行きます。

その泡の間からかわされる愛のさゝやきの中には、二人の間柄が、相当古いものであり、大槻は或る一つのプランのもとに、春美を一時私に与えたのだと言うことが分りました。

与えておいて盗む。

そしていつでも適当な時機に根こそぎ、春美の身体も心も私から奪い去ることの出来るようにして、一定のプランを進めて行つて居るのです。そのプランの中には慾にからんだ

ものが多分にありました。

大槻は、私の財産が既に乏しくなつて居ることを知つて居ました。そして残るは此の家のみであること、この家も私の留守の間に、適当な買い手を見つけて来て、処分するつもりらしく、その決行を春美に催促して居ました。

「だつて権利書がなくちやだめでしょ。その権利書がどこ探しても見つからないのよ」

「おかしいな。まさか秘密のかくし場所へかくすつてえしろものじやねえんだから、もう一ペンその辺よく探して見ろよ必らずあるに決つてゐるぜ」

「それがどこ探してもないのよ。聞いて見てやろうかしら」

「下手に聞くと警戒されるぜ」

「大丈夫よ。妾のことは絶対服従なんだから」

「金のことになる、下条は別人になるぜ」

「そんな仕込みかたはしてないわよ」

「ハ、どうだかね。ところで明日の資金を頼むぜ」

「冗談じやないわ、いくら何だつてそう／＼ないわよ」

「お前何だかこの頃冷たくなつたな。あのいつかの若僧に熱をあげ出したんだろう」

「変なやきもちやくんじやないの。お金あげないとやきもちやくんだから、あんたの悪い癖よ」

「兎に角ふり×一本じやどうにもならねえ。女を相手にするんならこれで充分だけだな。相手が馬じやそうは行かねえんだ。二枚でいゝや、二枚出してくれよ」

「もうないつたら。それとも明日競馬が終つたら又此処へ来



てくれる？」

「来れば、今よこすのか」

「うゝん。今日はもうほんとにないの」

「じやあ他で算段する事にしよう。明日は来られねえぜ」

「フン、お金の顔見れば、来やしないんだから」

「俺は今迄に約束破つた覚えはないぜ」

「こんどはいっ？」

「そりや此方で聞くこつたよ。いつ頃貯るんだい。貯つた頃に来ようじやねえか」

「水曜日にあすこへ電話するわ」

「おい電車賃もねえんだ、小さいの二三枚出せよ」

「仕様のないオケラだねえ。……そら、その代り此処へ接吻して」

「俺あ下条じやねえぜ。そんな処へ……」

「いゝからしなさいよ。でなきやくれてやらないよ」

「あ、あ、乱暴すんな、らんぼ——」

「フ、フ、………。てよ。その唇なら………。たつていゝわよ」

その晩おそく帰つた私は、帰りがおそいと言つて、春美の仕置きを受けました。

春美が私を馬にして、部屋中を這いずり廻らせたのは、昼間の競馬の追憶なのでしょう。鞭がピシ／＼と尻へ喰いこみ私がバテ潰れる迄、乗り廻しました。

今夜の「愛のリンチ」は特に執拗で粘つこいものがありま

した。

曉方近く迄責められる間、私は彼女がこの家の権利書のことをいつ口に出すかと、秘かに期待して居たのでした。

権利書はこの家にはないのです。池崎が、会社の金庫へ保管して居るのです。

私はもし聞かれたら正直にそう言うつもりで居たのでしたが、春美はとう／＼それを言い出しませんでした。

私は三人の春美の恋人の輪廓が朧ろ気ながら、分つて来ました。

池崎は単なる猥奇的な好色男で、女には手の早い男ですから、春美の何か満ち足りぬものゝある気配を巧みに攪んで、どちらから持ちかけたかは知りませんが、何となく出来合つた仲だと思ひます。彼は、私の知る三人の男の中では、恐らく二番目の男だと思ひます。

徹は、一番新しい男で、春美が池崎の出版社へ世話してやつたりして情が移るまゝに、春美の方から誘惑したのかも知れません。私が学生時代に春美の家に遊びに行つた時、かつて一度も徹の名を聞いたことがなかつたのですから、縁戚と言つても、田舎の者で、今まではあまり交際もなく、春美より年も下なので、春美の方で眼中においてなかつたのでしよう。

一番恐しいのは大槻です。彼の学生時代は、家もそう悪くはなかつたようですし、どこかお坊ちゃんじみた所があつて明朗な、すくなくとも私以外の多くの人が見たら快活純真な好青年に見えたでしょう。私はライヴアルの立場から見まし



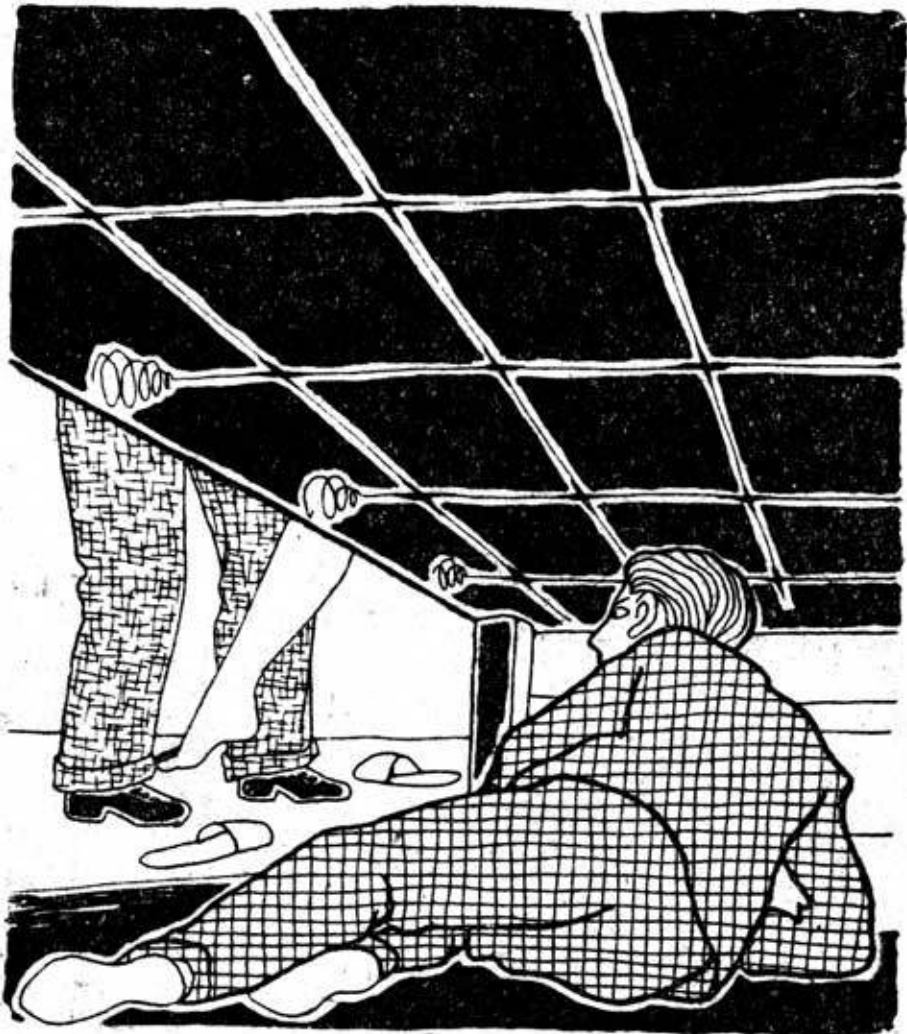
たから、今にして思えば、既にその頃から色魔の片鱗が見えたように思いますが、いずれにしてもアプレのデカダンスな渦巻に捲き込まれて、あゝなつてしまったのだと思います。彼女との肉体的交渉は、私と同棲する以前、もつとさかのぼつて、私の出征する以前からあつたに違いありません。

春美も相当我が儘な性格ですから、二人の間は、くつゝいたり離れたりして居たのでしよう。私と結婚後間もなく、焼捧杭に火がついたに相違ありません。然し彼の行為には多分に慾が絡つて居り、然もそれが非常に綿密に計画性を含んで春美をリードして行つて居る点が、私に恐怖を感じさせました。

春美から見れば、徹はほんの一時の気紛れであり、池崎は小使錢稼ぎが半分目的なのでしよう。やはり大槻のことを貶しながらも、彼を一番愛して居るのです。

そこで、春美が現在私に対してはどう言う感情を持つて居るのでしよう。

私は自惚れでなく、私にも相当深い愛情をもつてくれて居ると今でも思つて居ます。



寝言でのさまぐゝな行為は自ら誘つた畑であり、別ものとして、日常の夫婦生活としては決して冷たい妻ではありません。

夫婦の愛情に、セックスの融和と言うことは、勿論第一条件かも知れませんがそれ以外にも生活に溶けこんだ愛情と言うものが、相当強い力を持つて居ると思います。

私は元来冷たい人間です。事業にばかり夢中になつて居た父と継母との間に育つて屈辱に堪えて来た少青年時代の心根が、自然と冷たくならざるを得なかつたのだと思います。

それが、あさ子と言う女を妻としてから、大分変つたように思います。

今、思えばあさ子はほんとうに良い女性でした。私の冷たい性格を太陽のような暖かさでいつも包んでくれたのです。あさ子のお蔭で、私も人間の情味と言うものを知り、夫婦の愛情の一部を知つたのでした。彼女の私に接する態度は、蔭も日なたも総べて「まごころ」の一語に尽きました。



戦後の荒波五年間も空闘を守つて貞節を守り通したあさ子！

あの引きあげて来て、祖国の地を踏んだその時に涙を流して出迎えてくれたあさ子！ それからの幸福で健全な生活。私が別れ話を持出した時、彼女は気も狂わんばかりに悲しみのどん底に沈んで行つたあの時の涙の顔。それでも私に対しては怨みがましい言葉も、態度も見せなかつたあさ子！

私はどうしてあれ程の女を捨てゝしまつたのでしょうか。

下条清二よ！

お前はもつとく苦しむべきだ。

彼女への贖罪のためにも。

いやこれは筆がそれてしまいました。私はいま春美の私に對する愛情の測定をして居るのでした。あさ子によつて教えられた夫婦の愛情を、私はそのまゝ春美に置き替えたつもりです。その私の「まごころ」が春美の心のどこかに多少なりとも喰い込んで居ると私は信じて居るのです。

勿論それだけで夫婦生活が保てぬ証拠には、私のような馬鹿者が居るのでから、ましてセックスには男より根強い執着を持つ女の春美が、私だけで満足出来なかつたのは仕方ないとして、大槻と春美とはセックスを引去れば、後は嫌悪が残るばかりと言う状態なのですから、必らずしも私の方が弱い存在とは言いきれぬと思います。

それとも春美のように慾情の強い女性には、何はおいても先ずセックスファーストなのでしょうか。やはり私の負けでしょうか。

否、セックスを根底とした大槻への愛慕が、他のマイナス面を一切差引いてもなお私より強いとすれば、池崎や、微かに手は出さぬ筈です。池崎は金を得るためとしても、微にまで手を出さなくともよい筈です。

やはり春美と大槻の仲は「くされ縁」なのです。

私は大槻には負けない。大槻は機会を見て、春美を身ぐる

【読者通信】

貴誌のこの二年間程の素晴らしい充実を讚美し関係者の御努力に感謝致します。元来貴誌の目的でもあり特徴でもあるのは不当に世間から白眼視され増悪さえされる所謂変態性欲というものを極めて特異性のある正当なる性欲の一類型として認められる世界を創造することにあると思います。一般社会がそこまで進歩的な性欲観を持つようになるのが理想とはいえ、現段階に於ては我々の限られた社会の中で此の特異な性欲を解放し享樂し得る世界を現実に求めてゆきたいと思うのです。第一の出発が我々の特異性の主張であり解放である。それ故我々相互の特

異性を理解しあわねば我々の社会は成り立ち得ぬし、成り立つても非常に狭められて価値少きものになつてしまふ。私は男性マゾヒストであるが縛られた女の写真、その他同性愛、男性サド或はウロラグニーでも自分の持つていない傾向の記事でも一応興味を持つて通読しています。然るに五月号読者通信の静岡の磐田氏の言の如く自分の趣好にのみ偏して他を排せんとするのは全く我々個々の特異性を無視する独善的主張であり貴誌の生命の一半を失わしめる結果となりかねない。幸いM氏の御返事にも「一つのものに固定するのは面白くない」とあり一応安心致しましたが今後共広く各種



み私から奪い去つてしまおうとプランを立て、居るようだが春美にはその気がないのだ。だから権利書のことにも私に聞かなかったではないか。

私は漸やく安住の地をみつけた思いで、そうなる今迄の疲労が一時に出て、グツスリと深い眠りに入ることができました。

昼近くなつて眼をさまし、柔らかなスプリングの触感を楽しむと同時に、

今日も又ベットの下の生活を半日以上もしなければならぬ。一体いつになつたらこの生活から脱け出すことが出来るのだろう。

と我ながら情けなくなり、又その一面でこの穴ごもりがなくなつたら退屈至極なものになつてしまうのではないかと、一種の寂寞感も起きるのでした。がこの破局は存外早くやつて来ました。

その日も私は例に依つてベッドの下から、今日の「来客」が誰であるかを想像しながら寝そべつて居ました。

春美が化粧して居る所へ現れたのは徹でした。

「何だか空気が悪いね。この部屋」

徹は此処へくるといつも必らず何かしら文句をつけましたこの部屋で春美と会いたくないらしいのです。

「じゃカーテン引いて窓開けなさいよ」

「冗談じやない。外から見られたら大変だ」

「フ、意気地がないのね。徹ちゃん」

その時徹がもし窓を開けて外を見て居たら、大変は起らな

の珍奇なる記事を集められるよう期待致します。

(横浜 姫馬痴人)

○

吾妻新氏の風流猿轡をはじめ、最近では誌上にサルグツワを取扱つたものが多くなつてきたのは誠に有難い。猿轡のアルナシでは汁粉に塩が入るか入らぬか位の味わいに大影響があると信じます。故鈴木泉三郎氏も名作「火あぶり」の中で「女は縛られて居る時が一番美しい」と云つています。が全くで、更に美を求めるなら猿轡つわをはめて何倍かの効果のあがるものとなります。猿轡つわもリアルな点から見れば中々取扱いも

ヤカマシイと思われすが只観て美しさと魅力を感じるの鼻の下、口一ぱいにかゝつたものでしょう。鼻の上までかくしてしまふと肝心の顔が半分かくれてしまつてツマラナイ気がするものです。よく撮れているだけに惜しいのは六月号の折込み口絵の写真の中の猿轡つわで黒い布で娘さんの顔半分以上をかくしてしまつて居ることです。女は縛つたら必ず猿轡つわをはめるべきです。それは彼女達を一層美しくするからです。憎くては縛れない！愛するが故に彼女達を美しくしておきたいものです。(東京・小原良)

かつたのでしようが、世の中は皮肉なものです。

徹は上衣もネクタイも脱つて、シユミーズ一つで鏡台に向つて居る春美の後から裸の肩を抱きしめた時でした。

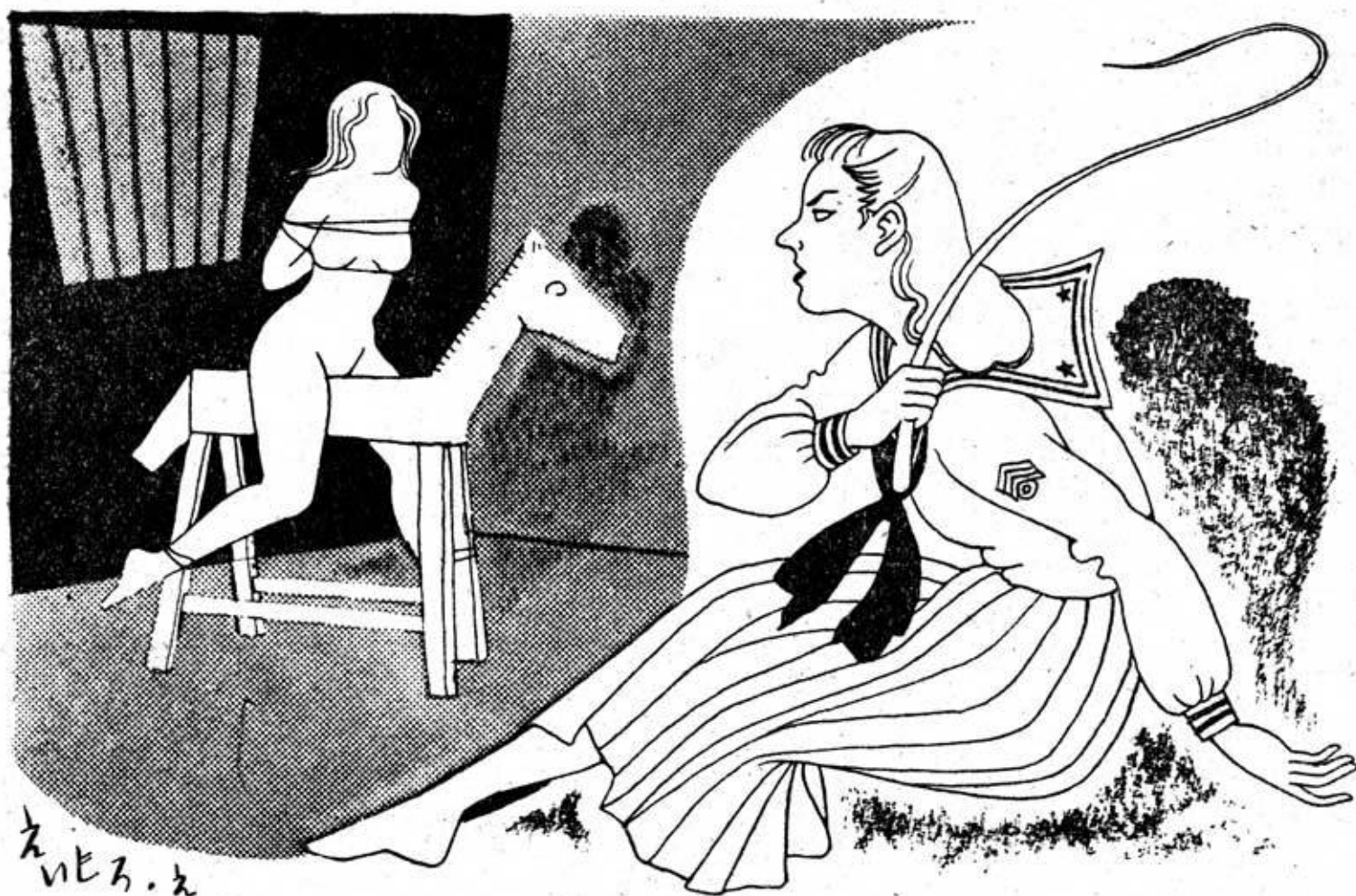
扉のノツプがキイツと鳴つて、静かに開かれました。

鏡にそれが映つたのでしよう。徹は弾かれたように春美から飛び退つて扉を振向きしました。扉の外には見覚えのある紺色の格子のズボンが、大きく足を踏張つて立つて居ました。

(続く)

私 の 主 題

岡 田 咲 子



「なぜ貴女は女が女を責める小説にだけ興味を、お持ちになるのですか？そしてなぜ男女の責めを主題にした小説は、お書きにならないのでしょうか？」

私は奇譚クラブの愛読者だと言う、ある女の人からこんな質問のお手紙をいただきました。

こう、はつきりと尋ねられると、一寸即答しかねるもので私もこまつて今まで御返事を出さずに居りました。でもなんとかお答えしなければならず、奇譚クラブの誌上でお答えしようと決心して、私のつたない文章を綴ってみることに致しました。

けれど責めに興味を持つと言うこと自体そうはつきりと、こうなのでこうなのだと割切った理論でお答え出来るものではないと思います。

ですから、なぜ私が同性である女の責めを主題にしたものばかり書くのかと言うことも御満足のゆくようにはお答え出来ないでしょう。でも書く以上は矢張り少しでも、私の気持もお伝えして判つていただければと本当は思っているのです。

2

私が女学生であつた頃、こんなことがありました。

私のクラスに秋子さんという、特に親しいお友達がありました。私は一年二年三年と同じ教室で勉強して居た秋子さんだったので、三年の学期末までは、それほど仲の良い友達ではありませんでした。

それがその三年の学期末試験も終り、四年生になる喜びで胸が一杯になつていた時でした。ある日、私は秋子さんから便りをもらったのです。お便りには

「是非、お二人だけで一度、お話がしたいの。学校の榎木の下で待つて居ります―」そしてその日附、時間などが書いてあつたのです。

今の私なら、さつそく出かけて行つたでしょう。でもその頃は、とつても変に思いました。だから私にとつてもこの頃が一番正常で純な時だったのでしよう。

なにか知ら？と考えるながらその日になつても行こうか行くまいかと迷つて居りましたが、その便りの向う側にある未知のものへの興味を、私は心の底に不図感じたので

す。

今思えばこの時に感じた、スリルが、現在の異常な喜びだけを追求する私に仕上げて呉れた糸口にもなつたのでした。遂に私は、その約束の日、秋子さんに会つて見ることに決めたのです。

3

秋子さんは、それまで私たちが余りおつき合いしなかつた様に、美しいと言う人ではなく、勉強の点も良く出来る方でもなく無口で陰気な性質は、クラスの中でも親しくおつき合いをする人もない、早く言えばクラスの邪魔者にされ勝ちで、何時も校庭の榎木の下でなにか本を読んで居る秋子さんに、だれも同情もしなければ、邪魔する人もありませんでした。

秋子さんに私は会いました、休暇の静かな校庭の榎木の下に待つていて呉れた秋子さんの細い骨張つた顔が、あんなにうれしそうに微笑して居たのを、その時まで一度も見ることがなかつたのです。

秋子さんは私の姿を見ると、走りよつて来て

「貴女は来て下さつたわね。私、必ず来て

下さるだろうと信じて居たわ。」

私の言葉も聞かず、私の両手をにぎりしめた秋子さんの細い指のネットリ汗ばんだ掌の感触を私は今でも覚えています。なにかしら生温かい、いくら振りはらつてもべソトリ吸いついてはなれない様な秋子さんの両手に引ずられながら、私は秋子さんの家を訪れることになつてしまつたのでした。

4

秋子さんのお家は山の手の、坂を上り本道路から横道にそれた、四方を林で囲まれた大きな古いお屋敷でした。

その立派な門の表で秋子さんは「遠いのでびつくりしたでしょう？。こんなさみしい家なんか誰も来て下さるお友達は居なかつたの。でも咲子さんだけは来て下さつた。」

うれしそうに言つて、私を導いて長い廊下を通りぬけて、また庭下駄をはいて古いお倉を改造した建物の前へ出ました。

「これが私の部屋よ。おどろいた？」

私は言われるまでもなく最初から、おどろき通しだつた。じめじめした廊下を通つ

ている時だつて、誰にも会わず、人声一つしない空家の様な不気味な雰囲気、来たことを後悔している私でした。

そして秋子さんのお部屋だという倉の入口が暗い洞窟の様に思えて、あの時秋子さんが私を引つ張るようにして入れて呉れなければ、私はきつと何時までも中へは入らなかつただろうと思います。なぜ表からそのまま帰らなかつたのでしょうか。

それは、私が自分自身気がつかない心の底の異常なこうふんが、私を嫌々ながらもそのお部屋へ入らしてしまつたのです。知らず知らずの間に、私はその雰囲気の中へ次第に同化し、溶け込んで行つたのだともいえるでしょう。

5

通されたお倉の中のドアで仕切られた部屋、窓はただ一ツ。でも女の子の部屋らしく床には厚いじゆうたん、フンワリとしたソファ。机の上の花瓶と、そのお部屋は案外温かく、何処かなまめかしくさえ感じられました。

秋子さんは

「一寸、お待ちになつてね。私着換えをし

てしまいますから——」

と机の上のベルを軽くおして振向くと

「今、お茶を持つて来ますから——」

と笑つてドアの外へ出て行つた秋子さんの後姿を見送つて、私はやつと解放されたように改めて一息つく、と部屋の中を見廻して、女中も居るんだな、と判ると気持ちもおちつき安心することが出来たのです。

しばらくして外にかすかな足音がしてドアをノックして入つて来たのは、女中ではなく、男の人で一目で書生さんだと判る立派な体格の青年が、お茶とお菓子を運んで来たのを見て私は、再び、びつくりしてしまつたのです。それは、このジメジメした屋敷には全く不調和だと言いたくなるほど、二枚目型の青年だつたからでした。

青年は無表情のまま私に軽く頭を下げると机の上へ、お茶とお菓子を静かに置こうとした時でした。

うつむいて照れくさいのを見せまいとする私の前に、青年の腕が出た時、私ははつきり見たのです。その青年の両手首に、赤く張れ上つた様になつてついているミミズ張れを——。

私はハッとして青年の顔を見ました。

青年も、私を見ました。

すると突然その青年の美しい顔が、悪いものでも見られたように苦しげにゆがむと顔をそむけるようにして、早足に外へ出て行つてしまつたのです。

びつくりして彼を見送る私のうしろで突然秋子さんの笑声が、部屋に反キョウして私の耳をうちました。

驚いて顧ると、何時の間に入つて来たのか秋子さんが、和服でさも面白そうに「どう？あれうちの書生よ。本当にあつてものでしょ？」

と言いながら、私の前のソファに腰をおろして座つた秋子さんに、私はまたまた物も言えないほどに、おどろいてしまいました。

着物に真紅な兵児帯をしめ、素足のままスリッパもはかず、横座りにソファの上へ座つた秋子さんは、なんと言う美しさなのでしよう。あの骨ばつた顔は、高い窓から差す光線と机上の螢光燈に、するどさをなくし細い首すじから、やわらかいウェーブを見せている毛髪、そして制服の時にはスカートの下にかくれて居る腰線が、今は丸々と着物の下につつまれて、すそから下へ、

横座りになつた素足の白い足首が、その臀部にしかれて無惨ななまめかしさを匂わせている。一体私は夢でも見ているのか知ら？現実の出来ごととは、どうしても考えられず目を丸くして、秋子さんを見つめていたのでしょうか。秋子さんは微笑して「嫌よ、そんなお顔しちやあ。でもうれしいわ私。今日はゆつくり遊んで行つて下さいね。お話したり遊んだりしてね。」

6

もうこれ以上続けなくても、秋子さんが私にどんなことを話して呉れ、どんな遊びを教えて呉れたのか。そして、その日から以後私と秋子さんが特別に親しいお友達になつたと言うだけでお判りになりますでしょう。でも、どうして私が女同志の責めばかりを書く女になつたのかを、もう少し詳しくわしくお話し致しましょう。

それには矢張り順々に書いて綴らないと判らないのじゃあないかと思ひます。蛇足になるかも知れませんが、お話することに致します。

それから学校の話やお屋敷の話。秋子さ

んは早く両親に亡くなられ、このお家敷の持主である親戚の人に世話になつてゐる話などとして一段落した時秋子さんは

「貴女、何が一番お好き？遊ぶこと——トランプ？それともダイヤモンドゲームか知ら？じゃ私の好きな遊び、当てて？何んだか判るか知らん。きつと判らないでしょう。私、ずつと前だつたけれど、クラスの人達が、校庭でワアワアさわいでゐるのを見たことが有るの。私は何時もの様にのけ者にされて、あの榎の下で本をよんでいた時だつたわ。テニスコートのまわりを、皆んなにキヤーキヤー言われて追いかけられ、逃げていたのは、咲子さん貴女だつたわ。とうとう貴女は皆に捕まつてワイワイ言いながら、コート横の藤棚まで連れられて来るとだれだつたか、大声で——早く早く捕まえてるから、この棚へ結えつけてしまおう——とさげふと、他の二三人が、テニスコートの周囲の麻縄を持つてきて——さア白状するかと茶目の子が、貴女の体を、あの棚へ縛りつけ、ぐるぐる胸から足まで麻縄で結えて騒いでいたことがあつたわ——苦しい。ごめんなさい。もう悪いことは致しません——

と貴女はお芝居気たつぷりでもがいていた。ねえ咲子さん、私じつと見ていたわ。貴女の縛られた姿を——。貴女の運動服には麻縄が巻きつき、その貴女のテニスできたえた、美しい体を縄がしめつけ、ショーツパンツの下の素肌にも麻縄がくいつ込んでいたつけあの時以来、私、咲子さんにお話するのも恥かしいほど、お友達になつてはしくて、何度、貴女のお帰りを待つていたか分らないわ。でも今日まで、そのチャンスがなかったし、私も言う元気がなかったの。あれから今日まで、毎晩のように貴女の夢を見た。あのテニスコートで縛られている貴女の姿を——。ねえ咲子さん、私に一度で良い。たつた一度で良い、貴女を縛らせて呉れない？ねえ？」

秋子さんは私の膝によりかかると、涙を目に一杯ためて哀願するのでした。私、その時、とつても何故か秋子さんが可哀そうになり我れ知らず承知してしまいました。私は「良いわ。でもすぐほめてね。」と言うと秋子さんは、うれしそうにうなづき「じゃ一寸待つて——」

と言つて机の引出しから、白い麻縄を一

束取り出して、私をじゆうたんの上にじかに座らせると

「でも、それじゃあよごれるわ制服が——私のこの運動服きてね。厭じやないか知ら？ だつたら着て、私の夢にまでみた運動服姿に——」

私にもものも言わせず、制服を脱がし始めました。その時、どうして断われなかつたのか私も判らないのです。ただあやつり人形の様にその運動服に着がえさせられると私の肥つた体に秋子さんの小さい運動服がピッタリ体にしまり、あの頃、クラスでも一番広かつた私の胸は、まるでピッタリ身に合つたドレスの様に、乳房が張り出し、ショートパンツは固く腰をしめ、人一倍大きなお尻が一層大きくはみ出して、なんだか全裸体を見られて居る様に恥かしく真赤になつてしまいました。

「両手をうしろへ、まア！ なんと美しい胸でしょう。素晴らしいわ秋子さん——」

と言う秋子さんの声の終わらない中に、私は両腕を縛られ、突き出た胸を縛られるとそのまま部屋の柱の前まで連れて行かれて別の麻縄で柱に固く結えられてしまいました。

秋子さんは前にしやがんで、私の両肩に手をかけ、抱くようにして

「うれしい。夢だとあきらめていたことがこんなに早く実現するなんてうそみたいだわ。ねえお厭？ こんなことされて？。でももう駄目。今日はお帰し出来ないわお宅へは、おとめすると女中を行かせるから安心して。」

私は、はじめて大変なことになつたと思つた。けれど、体や腕にくい込む縄の痛さが非常に苦しいものではなく、なんとも言えない気持になつている自分に気がついたのです。きつと私の体内には生まれる前から、異常な楽しみを知る血がすでに流れていたのでしょうか。でも私は、

「嫌、もう止めて、ほどこいてよ縄を、」と声を高くして叫ぶと、秋子さんは本当に楽しそうに笑つて首をふり

「駄目駄目、もう貴女は私のものよ。大きな声を出したら、お口しばつちやうわよ——し言うことを聞かないと——」

と言つて、そこからハンカチーフを取出してまるくまるめると

「お口をあけて、厭なら良いわ。こうしたら自然に開くんだから——」

私は鼻をつままれ、ハンカチーフを口の中へおし込まれると、秋子さんはもたえる私の絹の靴下を片方、手早くぬがし、それで私が舌で押し出そうとしているハンカチーフの上からおさえると、口へぐるぐるなん重にもかませて強くうしろで結んでしまいました。

私は体の自由をうばわれたただ呻き声をかすかに上げる以外どうすることも、出来ない自分に、なぜかとても口惜しく腹が立つて、おもわず、まだ自由な両足をばたばたさせもたえる私を見て秋子さんはもう片方の靴下も、ずり下げて脱がし、それで、私のあばれる両足首をギリギリ縛りつけました。柱に縛られ、両足を縛られ、なげ出した私の素足を見て、足首をなぜながら「なんてきれいなんだろう。秋子さんの素足に比べたら、私のなんかまるでブヨブヨしてて病人の足みたい。ねえ秋子さん秋子はこんな娘なの。お判りになつたでしょ。秋子は仕様のない女なの。こんな遊びが大好きなのよ。今日は貴女に来ていただいたお礼に、私が教えて上げる、いろんな楽しい遊びを——。そしていろんな面白いお話をして上げるわ。でもね

これだけは本当よ。今でも、私は同じ女同志でこんな遊びは今日まで一度もなかったの。私は小さい時から、探偵ごっこや、泥棒ごっこが大好きだったわ。何時も男の子を捕えて縛るのは私だったわ。そして耳を引っぱったりつねつたりして最後には泣かして叱られるのも私だった。お転婆だったのよ私。そして小学校へ行くようになると土曜日毎に、チャンバラ映画を見に行つたわ。けれど表の写真を見て、悪漢や武士が町娘をかくわかし、丁度今、咲子さんがされてるように、町娘が縛られている場面がないと、つまらなかつた。私があんな娘さんをいじめてみたい。と思う様になつたのはその頃らだった。でも私はか小学校を卒業の年、お父さんもお母さんも伝染病で死ぬと、私はこの家に引取られたの。するとある夜のこと、母屋から誰かの呻く声が聞えて来た



の。私は足音を忍ばせて、呻き声のする方へ、行くとそれは叔母のお部屋から聞えて来る声だったの。叔父は毎月半分は出張で留守。私は障子の破れ目からみると、その叔母がねまき姿で五尺差しを振上げてビシビシなぐっているじゃないの。そして裸体を、まるで荷物のように縛り上げられ、猿ぐつわをはめられ、なぐられているのは、ほら、さつきの書生だったのよ。それまで

忘れていた、こうふんを私はまた想い出してしまつたの。そして書生が責められるのが好きな男と知り、生意気に強迫したのよ。叔父が帰つたらあの晩のこのを言いつけるぞ、とおどかしたの。あの青年青くなつて謝まつたわ、それ以後は、私の命令にはぜつたいに服従よ。後程よぶわ。ここへ。そして私は男をいじめること以外に興味がなくなつてしまつたのよ。勉強まで、つまらなくなつてしまつたのよ。駄目。きかなくちやあこれからのよ本筋は——。でも一寸苦しうねこのままじゃあ——。じゃこうしよう。いくらもがいたつて駄目よ。」

秋子さんは私の縄をほどくと、そのまま抱き上げソファアーの上へおろすと

「おとなしく聞くのよ。ある日、私が学校から帰つて来ると、この部屋の二階から叔母の声がして、ビシビシ叩く音と一緒に女中のヒューヒューという声がするのどうしたのかと、上つて見ると、女中を裸にし縛り上げて竹の棒で叩いたり突いたり、しているのは叔母だったの。男ばかりいじめて喜こんでいた私は、女の縛られた姿を本当に見たの始めてだったのよ。白い肌にくい

込だ荒縄、ふるえる乳房。女の責められる姿には、男とちがつたみりよくがあることを知つたのよ。そして私の毎日のはあの書生だけでは満足出来なくなつたの。そして今日、貴女のお蔭でこれがかえられたわ。」

秋子さんはうれしそうに、私の縛られたままねかされているソファアの所へ来ると両足首を持上げて、私の素足に頼すりして呉れたのです。

そして私を見て、

「でも私は叔母の様に変態性で人を無やみに叩いたりつねつたりはしやアしない。もつと楽しむの。貴女も私もクタクタになるまで。例えば——」

秋子さんは私の運動服の前ボタンを外し縄の間から縄がくい込んで、ひようたんのようになつてゐる私の乳房を、つかんで引出しました。私は苦しいでもないと言つて痛いと言う程でもない、今までに一度も経験したことがない様なうずきを感じましたでも私のその表現は、猿ぐつわのためにかすかな呻き声でそれに応じられたのが精一杯の私の表現だつたのです。

7

それから後は私は何かにつかれた人間様になり毎週土曜日になると、秋子さんの家へ行きました。そして全裸体に引きむかれ、縛り上げられある時は指で、ある時は舌で、そして毛筆で、鷹の羽で、くすぐられ、つねられ、かまれ、素足でふまれ秋子さんのお倉の二階の私たちの遊び場は私たちの汗と脂とむせかえる様な体臭が充滿しその中で、私は責められる喜びを、十二分に味わふされたのでした。それから一年の後、私達女学生最上級の五年生も残りわずかになつた、年の暮のある土曜日でした。

何時になく秋子さんは不愉快な顔で私にこう言いました。

「ねえ咲子さん、あなた一遍男にいじめられたくない。良いことを私、思いついたの。私と貴女だけの楽しみには私いささか食傷気味なの。ねえ——あの書生ね。いじめられては喜んでゐる男なんだけど一度人をいじめさしたら如何うか知ら？そのいじめ方が悪かつたら、また責めたてもつといじ

めさせるのよ。どう厭？男にいじめられるの？」

男に？！私はその声を聞いただけで、寒けがしました。——厭よ。いくら秋子さんの命令でもそれだけは厭。と私は立上りさけびました。私はその時始めて本当の恐怖を感じたのです。でも秋子さんは笑つて「厭？厭でも良いわ。もうこれで私と貴女のおつき合いが終つても仕方のないことよ。でも私は貴女を必ず思い通りにしてよ。」

秋子さんの楽しみがもうここまで来てしまつては楽しみは狂喜になり、責めは楽しみは苦痛をあたえる喜びになりはててしまふのです。私は本気であばれる腹をきめるとこの家から飛び出そうとしたのでした。

私が出て行こうとするのを、うしろから秋子さんは

「お待なさいよ。帰ろうと言つたつて帰しやしないから。早くおいでつたら、なにしてるのよ。早く捕まえるのよ咲子さんを早く、早く——」

その声に書生がとび出して来て、逃げる私を二人がかりで全裸に引きむき、縛り上

げると、秋子さんは書生に、ころがされて
いる私を指さして

「さアお前も今日は一度いじめてみるんだ
よ。さアこの人を好きなようにしてごら
ん。私はみているわ。駄目な人ね、ふるえ
ずに責めるんだ。出来ないのかい。じゃ私
が言う通りにするのよ。いいわね。じゃあ
そのまま二階へ連れてお行きね」

書生に抱かれた私は二階へ運ばれて行き
ました。

「そこへねかして舌をかまないように何時
もお前がされるように、この細紐を口へく
わえさせるのよ。そう、それで大丈夫その
まま、お前のその油くさい足の裏で体中く
すぐつておあげ。顔も乳もお腹もお前の好
きな所をふんでごらん。」

私は口を割られている細紐の間から悲鳴
を上げ、さけびもだえました。次第に迫る
書生のよごれた足の裏から逃げようとしま
した。でも駄目でした。私は泣きそうな顔
で私をふみつけようとする書生の毛深い足
が迫つて来て、一種異様な、むれたくさみ
のする足の裏で、私は顔をふみにじられ、
乳房を腹を、下腹をと命令する秋子さんの
声に続いて私の体はグリグリ至る所をふみ

つけられて行きました。

「さア、次は木馬の上へ縛りつけるんだよ
ねえ、貴女と私が楽しみ合つたこの木馬の
上で今日は男に責められるのよ。もし気を
失つたら、許して上げるわ。女が男に苦し
められて居るのを見るのも、また面白い
わ。だけど安心して、体にきずをつけたり
操をけがしたりなんかは、ぜつたいにさせ
ないから大丈夫よ。要するに私は自分だけ
満足出来ればそれで良いんだもの。思つた
だけでも、たまらない、貴女が苦しむ姿
を、私は一生忘れないわきつと——。さ
あ、良いかい。いじめめるのよ。いじめて
いじめて、いじめぬくのよ。さアおや
り——」

8

それから私は異性である男に、夜おそく
まで責めつづけられました。

でももうそこには秋子さんの手で責めら
れた時の様な楽しみも喜びもなく、あの
気弱な書生が私を責めている間に、次第に
おそろしい野獣の様な姿に変わりはじめ、秋
子さんの命令もたまらず、狂的な顔を体を私
の上におしかぶせて来たのです。

私は悲鳴を上げ、そのまま気を失つてし
まいました。

でも最後まで私の臉から消えなかつたの
は矢張り秋子さんのあの白い素足だつたの
です。

気がついた時には私は私の部屋にねかさ
れて居りました。

その日、秋子さんは退学され、再度その
お顔は私の視野から永久に消え去つてしま
いました。しかし私は今もなおあの秋子さ
んから教えられた、責めの喜び、女同志の
楽しみを忘れられない人間になつてしまつ
たのです。

9

私の綴つた、お話はこれで終わります。そ
してこれが、私の出来る最大の御返答なの
です。如何がですか？少々でも私のお話お
分りになつていただけたでしょうか。
それからすぐ大平洋戦争が始まり、あの秋
子さんの古いお屋敷も、他の例にもれず焼
けてしまいました。

でも私は今でも小説を書くとき、秋子さ
んは必ず何処かに生きておいでになるに違
いないと思うのです。そのためか私はあえて

本名にせず、ただ秋子さんとだけ書いたのです。今後も私は男女を主題にした、責める小説はぜつたいに書きません。

よしそれが私の行きづまりであつたとしても、私はあいも変わらず、女が女を責める楽しさ喜びを求めて小説を書いて行こうと

思つております。

(おわり)

一 清教徒の日記

(二)

栗 島 洋

○月○日

箱根の温泉に友達と遊ぶ。昨夜の酒が未だすつかり抜け切れないで少し頭痛がするが、ガラス窓から差し込む日の光で皆目をさましているが誰も起き上ろうとする人はいない。勝手に話をしたり煙草を吸つたりしている。ふと誰かが枕を投げつけたのをきつかけとして忽ち若い者同志の無邪気の乱闘が始まつた。そこゝで取組合が始められる。部屋の中は再び昨夜の賑やかな雰囲気陥つて行く僕はやにわにTに腕を取られると押えつけ

られた。しばらく組みつほぐれつの格闘を演じている内に、とう／＼大きな体のTに押えつけられてしまった。ぐつたりと全身の力を抜いて息をつき気がつく、互の寝間着は乱れ、Tの巾広い胸が目の前に蔽い被さりむき出しの両脚は強く僕の下半身を締めつけているではないか。苦しさに息をはずませていると突然僕の全身に異様な感覚が起つた。何と云うことだろう。Tのたくましい肉体に抱きしめられたまま、……たかと思うと忽ち…………感じた。はつとしてT

をはねのけると思わず顔が紅潮し、Tの様子をうかがう。気がついたであろうか。しかし彼はそんな事は気がつかぬ風にすぐ他の仲間に入つてたわむれ始めた。僕は独りぼんやりとしたまゝ、つい今しがたの出来事について考える。まるで夢の様なことであつたが、現実には明かに証拠が残っているのだ。

Tは僕の好きなタイプの青年である。僕より二つ年上ではあるけれど、朗かな性質と立派な肉体のためにずつと若々しく見え、女性にも好かれるようだ。僕が彼に好意を持つていたことは事実であるが、今までそれ以上のことを考えたことはなかった。それなのに今日のような事になつたのはやはり知らず／＼の中に彼の肉体に対する思慕の情が心の中に芽生えていたのに相違ない。僕は異常な心の持ち主なのだろうか。

○月○日

Kクラブと云う雑誌を初めて手に入れた。

こんな本があることは知らず、また探し求めようとする考えも無かったが、この頃の僕の自分自身に対する不安な気持は押えることが出来ず、何かしら求めようと努力していたのだ。しかし手に入つてよかつた。自分の何であるかはつきり知り驚くと共に、数多くの友がこの世の中に居るのを知り安心とよろこびを覚えた。むさぼるように一気に読み通すもう夜は更けて家の中はひっそりとしていて、独りスタンドの灯の下に何度も読み返す。すると次第に同性への思いが高まり押えることは出来ず、もたえ苦しむのだつた。



私がこのようにして自分の姿をはつきりと知つてからの行動は一層はつきりとして来た。今までは女友達を得ようと、それ程進まない心を無理に励してその機会を掴むことに努力もしていたが、もうそんな事に頓着することも無かつた。電車の中で、また街路に私の眼は何よりも男の姿を求めてさまようのである。行き交う人の中にふと男の姿を見ると、しばらくはその姿をまぶたに浮べてはぼんやりと空想にふけるのだつた。

【読者通信】

また家人の目を忍んでは買い求めた本を読み、少しでも知識を得ようとも努力したが、ただそれだけで満たされる心ではない。知るこゝとが多くなればなる程私の心はそれ以上の実際の行動に向つてかり立てられるのである。しかし思い立つても私の持ち前の性質は仲々積極的な行動を許さなかつた。未だに私は満たされぬまゝに苦しい日々を送っているのである。男が同性の肉体に心を牽かれるのは、自分の肉体に引け目を感じる者の一時的な現象で、性の発達の一段階に過ぎないものでやがては平常に立ち至るものであると、ある本

六月号隔から隔まで何遍も読み返えして居ります。これ程迄僕の好みにびつたりした読物を揃えて下さる編集係の方々に何んと御礼申し上げてよいやら、深く感謝致します。さて竹谷十三氏作の「責苦」僕のも気に入りつたものゝ一つです。昨夜で五回読み返えしました。「臨月の腹に灸をすえ始めた」というところは自分自身が灸をすえられて様に感じた程です。僕は嘗て自分で太股と腹と足に数ヶ所灸をすえた事がありますが、その時の腹にすえた灸の熱かつた事は今でもはつきりと覚えています。まして臨月の腹にすえられた「スミ」はどんなに熱く苦しかつた事だろう

に書いてある。しかし私は自分は一人の男として何の引け目をも感じないし、性の発達がそれ程遅いとも思わない。私の同性への思いは今から考えれば長い間のことである。とに角私はただたくましい男の姿体へのみ心を引かれることが厳然とした事実となつて

いるのだ。
私には未だに自分の本当の姿が分らないでいるが、とに角私が楽しい日々を送ることが出来るようになる日が早く来ることを願う丈である。
(終)

かと想像したからです。(福岡、昼行燈)



一昨日御誌六月号を手にしまして今朝から綾子お姉様をお訪ねして二人で拝見致しました。私の拙い文章が皆様の立派な記事の中にはさまれて八頁にも亘つて載っているなんて本当に恐縮しましたわ、それに綾子お姉様のお便りが次号に出るんですつて、綾子様、びつくりして居られましたわ、私のお出しした記録の補充にして頂くつもりだったのですつて、でも、これで二人仲よく御誌に出して戴いて光栄ですわ、綾子様、いっかお便りするけど、とりあえず私からお礼申し上げて下さ

いってことです。よろしく (小川由紀子)

時 代 小 説

片 耳 傳 奇

三條春彦・畫

窪 村 弘

山 王 祭 り

まず、江戸の御用祭は――。

神田明神。

山王神社。

――神田祭りは、五月十五日だが、山王神社の祭りは六月十五日
とりわけ山王神社の祭礼は、神田明神の祭礼の山車三十六本に比
べて、四十本出る。

踊屋台、地走り。

手古舞。

獅子。

と、あつて、踊屋台は可愛い女の子の踊り。地走りはお囃子。山
車に付く手古舞は芸妓。獅子に付く手古舞は芸者が男姿に紛したも
のだ。

江都第一の大祭。

神輿の通り筋は往来を禁じ、脇小路は矢来にて仕切り、三宅阪に



春彦 畫



は將軍家の御機敷が造られる。

青葉、若葉。

からやかな初夏の街——。

青あらしは、柳の枝も吹けば、女の裾もなぶる。

六月なかば、まさに江戸は、産土神の大祭に湧きたつていた。

——心秘かに慕う人、八丁堀同心、風来坊と綽名のある大村右近さまも、何処か警護の士の中に雑つて、此の変つた化粧姿を見てい
るであろう！と、思うと、お篠は妙にうらはずかしく、胸が騒いだ
獅子の手古舞は、芸者と決つてはいたが、柳原、柳の森稻荷前の
小ツボケな屋台店の主人、屋台小町と評判の高い美貌を買われて、
是非共芸者衆の中に加わつて——と、無理に手古舞の仲間に加えら
れたお篠であつた。

化粧姿は、頭は若衆。

白絹に水墨で雲龍を画いた帷子の着衣。

萌黄博多の帯。盲目縞の股引に同じ足袋。散緒の草履に、黒天鷲

絨の腹掛け。銀鎖のついた守りを首から斜めにかけて、金棒をつい
だお篠。

一ときわ目立つ美しさに、風来坊同心、大村右近も、警護の人数
の中に雑つて、驚異の眼を見張つていた。

三宅阪は、將軍家上覧の御座所。愛妾三十有余人を持つて、好色
の聞えも高く、時はまさに、うみきつた泰平の、徳川十一代將軍家
斉の治世。警護の武士の詰めきつた御物見にあつて、家斉は御簾の
内から、賑かな祭りを見物していた。

勇と、きおいに湧きたつ趣向の諸々の物が眼下を横切つて、獅子
がやがて通りかゝる。

獅子付の仮装の芸者達——と聞かされて、殊更興味深く眸を凝し
た家斉だつたが、その中に一段と美しいお篠の姿を発見したのであ
る。

(雲龍を描いた帷子の着衣の女！)

家斉は心に刻みつけるように頷くと、無言の儘、離すことなくお
篠の姿を見つめていた。

片 耳 の 包 み

何時もより早く、塹へ急ぐ夕鴉が翅の音も低く木々の梢の彼方に
消え去つてしまふと、急に、思い出したように降り出した霧雨が
江戸の街をしめやかに濡らし始めた。おでん。酒と書いた、灯のな
いブラ提灯の脇から、お篠は当惑したように、霧雨の降る夕空を振

仰いだ。十九娘の美しさ。

足止め屋台。足止め小町——と云う呼名の他に、今度、新しく誰がつけたのか手古舞小町と呼名されて、あの山王神社の祭礼以後はおびたらしい人気を集め、此の小ッポケな屋台店が、江戸の好色者達で、何時も賑わつていた。

飲んで酔うなら

足止め屋台

トロリえくぼの

コボレ酒

誰が貼り出したか、物好き達の此の貼り紙が、街の其処此処に貼り出されてから、一としお客足の繁くなつた神田柳原、柳の森稲荷前の屋台店小梅屋。

古着買うなら、品見てお買い

せめてあの娘の移り香袖を。

富沢町から、此の柳原の土堤へかけて、ブツ通しの葦簀張りの古着の出店の人気さえ引さらつて、足止め小町お篠の姿は、極立つて美しかった。

住居は佐久間町で、病の父を抱えて、けなげにも生活と戦つてゐるのだときく。

が、今宵は、雨模様の空を怖れてか、夕刻時の忙しさの為か、珍らしく客足が吐絶えて、名代の屋台店、小梅屋の前もヒツソリ閑としている。

もう引け刻、お父つあんが待つてゐるだろう、と呟いたお篠が、店終いの仕度に取りかかろうとすると、

「もし——」

と、だしぬけに、背後から声をかけた者があつた。

振向くと、意外にも、身近な其処に、お高祖頭巾をした見知らぬ女が佇んでいた。

「私でございましょうか？」

「卒爾乍ら、お願いがございしますが——」

女は何気ない風に辺りを見まわしたが、お篠の傍へ、ツと身を寄せてきた。

「願ひ、と申しますと？」

不審の眉を曇らせたお篠へ、

「此の品なのでござりますが——」

と、女は懷中から小さな紙包みを取り出した。

「此れを——？」

「御存知でもございしますが、鼠使いの藤吉と云う者にお届け願ひ度いと存じまして」

「鼠使いの藤吉——？」

お篠はハツとして目を見張つた。

鼠使いの藤吉と云えば、今こそ、病の身を娘の細腕一本にゆだねてはいるが、嘗ては大道において、鼠に珍芸をさせて人気の高かつた、お篠のたつた一人の父親なのだ。

「あのう、その中は、何んでございましょうか？」

恐る恐る訊ね返したお篠の目を、真ッ直ぐに見返したお高祖頭巾の女は、

「此の中には——」

と、云いかけたが、何を見、何を感じたのか、不意に紙包みを自分の懷中へ押込んだ。

その顔には、颯と狼狽の影が漂つたと見ると、

「失礼致しました」

呆氣にとられてゐるお篠の視界から、驚くべき速さで走り出したと思うと、柳の木蔭を巧みに縫つて、夕暮れの霧雨の中に忽ち見えなくなつてしまつた。

（一体、どうなさつたと云うのだろうか？）

お篠は、暫く女の消え去つた方角を見送つていたが、

「此れお篠何をボンヤリしているのだ？」

不意に、ボーンと肩を叩かれて、ハツとして振り向いた。

「あら、曾根の旦那様！」

「流石の屋台店も、今日は大分暇ひまそうだな」

ニヤツと蛇のような目に冷い笑いを浮かべて立つたのは、八丁堀同心で、曾根権三という中年者。冷酷で陰険、自米自達の為には、血も涙もなく、世間の者から毛虫の如く嫌われている荒同心である。「はい、でも暮刻ですし、もう店終いにしようかと思つて居りました」

ニツコリ愛想笑いを投げたお篠へ、

「一本だけつけて貰おうか、少し話したいことがある」

「はい、有難うございます。でも、もうお父つあんも待つて居るところだと思いますので、今日は御勘弁願います」

「逃げるか？」

「いえ、そのような——」

「それなら、つける。世間から嫌われ者の曾根権三、屋台小町にも大して縁はなさそうだな」

権三は、しようことなしに、徳利を銅壺へ落し込んだお篠の姿を

ジロ／＼眺め廻し乍ら、ニヤツと笑いを浮かべた。

「お篠、お前、天下の將軍家を見事に振つたそうだな。当今の娘には珍らしいと、太田築前守様も、本郷の根岸の御前も、大分感心せられていたぞ」

「——」

「こうして、屋台店を張つてゐる姿も、流石に小町の名に恥じぬが手古舞の姿は、一段と綺麗だつたよ。あれでは、將軍家がお目をつけられるのも無理はあるまい。ハツハハ」

「あの、お燭が出来ましたけれど——」

本当に厭な奴と、権三の言葉を聞えぬ振りに、お篠は盃の水をきつて差出した。

「御簾中なら、いざ知らず、相手が如何に將軍家であろうと、側妾は側妾。死んだつてそんな事は真ツ平だ」

お篠は判然そう決心していた。

三日程前は、太田築前守の使者が——。昨日は、築前守とは親交の間にある本郷の旗本で五千石の本身、根岸武太夫が、わざ／＼自身、佐久間町のみすばらしいお篠の住居を訪れて、

「町人の娘としては、此の上ない出世だと思ふ。上様には、山王神社の祭礼の当日より、強い御執心、どうだ、心を決して上つて見る気にならぬか？」

「御言葉有難うございますが、何一ツ心得ぬ私風情が、上様のお氣に召すとは思えません。それに御覧のように、病の父を抱える体、父を見捨て、自分だけが幸福になろうとは思いません」

「父の事など心配はいらぬ。お前の決心一ツで、如何なる名医も望みの儘だ」

「ではお伺い致しますが、大奥へ上りましても、父と一諸に暮すことが出来ましようか？」

「それは出来ぬ」

「今の私の望みは、一人々々の親娘が、優しく手を握り合つて一緒に暮してゆくと言うことだけです。たとえ、家は貧しくとも、天にも地にも、たつた一人づみの親娘が、一ツ家に寝起して暮してゆける程、大きな幸福はないと思います」

相手の感情を害せぬ儘に断るのには、今のお篠には、此の言葉より他にはなかつたのだ。大奥において、父と娘と一緒に暮すことなど、如何なる理由があつても絶対許されぬことである。

「父と一緒に暮せますれば——」

と、その言葉を楯にとつて、お篠は首を堅に振らなかつた。

「気強な娘だ。ま、兎に角、今一度良く考えておくことだな」

苦笑を浮かべて、武太夫が帰つていつた後、思うともなく、風来坊と緯名のある、八丁堀同心、大村右近の顔を臉のうちに浮かべていた。

ろくに奉行所へも出仕せず、酒を追つて巷に遊ぶ風来坊右近。嘗て、江戸市民を恐怖のドン底に突落した怪事件、「風雲綾取りの秘縄」と、「蟻地獄」を、怪刀乱麻を断つ如く見事に解決し去つた手腕を謳歌されている右近。右近の気持はどうあるか判らぬが、自分の小ッポケな屋台店へも、度々顔を見せる右近を、心秘かに慕うお篠なのだ。

「何をボンヤリしているのだ——」

曾根権三は、空の盃をグイと突出して、

「話は別だが、今此処へ立寄つた女があつたな。何か頼んで行つた

様子だが——」

冷い目が、ジロツとお篠の胸許に注がれた。

(さつきの、お高祖頭巾をした女の事なのだ！)

「いゝえ、別に何も——」

お篠は思わず胸を弾ませた。

「隠すな。此の目でちゃんと見ていたのだ」

「でも、本当に、別に——」

「裸になつて見せる勇氣があるのか？」

「旦那さま、それは御無態でございます。何も頼まれも、預りも致しませんものを——」

「と、まで意地を張られると、せめて懐ぐらい探して見たくなるものだ。屋台小町の肌に触れて見られると云うのも、此れも役得だなお篠——」

権三はみだらな笑いを唇許に漂わせて、屋台を廻つて近付くと、多少の冗談も手伝つていたのであるが、いきなりお篠の手首をムズと掴んだ。

「あれ、御冗談を——」

慌てゝ、その手を振離そうとすると、

「お篠、上様とは比較にならぬが、此の曾根権三も、まんざらではないぞ！」

手首を引寄せて、背を抱えてのしかゝるような権三の両眼が、妖しく燃えて来た。

「は、離して——」

「離さぬ。色良い返事をきくまではな」

冗談めいた言葉にことよせ乍ら、その実、誠の煩惱は、権三の血

を渡だたせた。

此の時である。

「曾根氏、まあ、御手荒はやめられるがいゝ」

不意に横合からツカ／＼と近寄つて来た若い侍が声をかけた。

「何ッ？」

権三は噛みつくように振向いたが、

「何んだ貴公、風来坊殿ではないか！」

さげすむような冷笑が、権三の唇の辺りを横切つた。

「曾根氏がお目をつけられた品、此れではございませんな。事ありと見て、あのお高祖頭巾の女から奪つて参つたのですが——」

大して気にもかけぬらしく、同じ八丁堀同心、風来坊右近が差出した小さな紙包み。

「何んと？」

「流石曾根氏がお目をつけられるだけあつて、意外に事件は大きいらしゆうござる。一応内部^{なか}をお改め下さい」

お篠の手から手を離れた権三は、右近が差出した紙包みを、まるで奪い取るように受取つて、手早くひろげた。

同時に権三の面上に、隠し蔽わすことの出来ぬ激しい驚きが閃めき過ぎた。

(耳?)

それも、人間の左の耳が二ツ。既に紫色に変色しているのは、少くとも、斬り取つてから三、四日の日数は経ているであろう。

「貴公、間違ひなく、此れを、あの女から？」

「お疑ひですか？ 無理もござらんが、確と——」

きくより早く、権三は、いきなりその耳を、元通り紙に包んで袂

に落すと、早足に歩き出した。

「どちらへ——？」

と、右近が声をかけると

「あの女、まだ遠くへ行くまい」

呻くように云つて、権三は俄に走り出した。もとより、今更後を追つても、無駄な事は判りきつてゐる。が、妙な所を右近に見られた気まずさから逃がれる為の行動でもあつたらう。

「困つた御人だ」

右近は、その後姿を見送つて、微笑した。

「大村さま、あ、有難うございます。もし大村さまでもお出でなかつたら、私どうなつたか——」

慌くて胸許を掻合せ乍ら、正視も出来ず、もう赧くなるお篠だ。

「客足のない夕暮刻は、えてして、変な虫が着きたがるものだよ。

早く帰れよ。親父が心配するぞ」

と云いかけたが、

「待てお篠、お前の襟の所に妙な虫がたかつてゐるぞ」

いきなりお篠の左頬を押えると、右近は懷紙を取出して、一匹の小さな昆虫をはさみ取つた。

(おッ、此れはあかむし！)

覗き込んだ右近の眉宇にサツと緊張の影が走る。

アカムシ——それは一名つつが虫とも呼ばれ背腹共に毛が密生し一度此れに螫されば、一種の熱性病を起さしめ、やがては苦悶の中に死んでゆく云う——その害毒は恐るべきものなのだ。

(麻布の昆虫蒐集家、細田江陽殿の宅で一度見たことがあるが、話にきけば、此のあかむしは江戸には居ないと云う。此の虫は出羽越後

辺りの鼠の耳介内に寄生すると云うが、どうしてお篠の体に？
右近は鋭く眉を寄せた。

「あの、大村さま、虫！と仰有いますと——？」

不審想に覗き込むお篠へ、

「いや、何でもなし。たゞのてんとう虫だ」

右近は何気なくそう云つて、大地へ捨てると、足下に踏みにじつてしまつた。

「氣をつけて帰れよ、又、うるさいのに、からみつかれるといかんからなア」

「あの、一本おつけ致しましたようか？」

縋るようなお篠の目を、笑い乍ら見返して、

「いや今日は遅い。又、明日でも、ゆつくりとやらして貰おう」

右近は言葉を残して、もうスタ／＼と歩き出していった。

鼠使いの父

「お父つあん、只今——」

「お篠か。今日は大分遅かつたな」

「え、一寸——」

「隣のお神さんの話では、お前の店は大層はやるんだつてなア。一人で何かと大変だろうが、お蔭でお父つあんは助かるよ」

父親の藤吉は、まだ四十五六の年配なのだが、中風と云う病の心労からか、ひどくふけて見えていた。

床の上に起きなおつた藤吉の前には、行燈と、二尺四方の方形の細い鉄の檻箱が置かれてある。

藤吉は、行燈から、その檻の鉄に、細い紅白の糸を結びつけ、さ

つきから、一心に不思議なことをしているのだ。

全身茶褐色の肥大な二匹の鼠に、不思議な踊りを踊らせているのである。

「ホッ、ホッ！」と云う口笛に似た言葉を掛けると、二匹の鼠は、竹しごで造つた小さな日傘を持つて、器用に糸を渡つて、中程迄来たと思うと、世にも奇怪な踊りを踊り始めた。

もとより鼠の芸は数多く他に用意されて居るのであるが、此れが、嘗ての大道芸人、鼠使いの藤吉の、自慢の一ツの呼吸でもあつた。

「またお父つあんてば、そんな事をしていて——！」

悲しそうなお篠の目だつた。

いやしい大道芸人などに、再びならなくとも、今の私の商売で、二人立派に暮してゆける——そう云うお篠の心なのだ。

大道に粗むしろを敷いて、客の投げ銭に生きる生活が、今のお篠には、たまらなく嫌だつた。

右近さまに、そんな悲しい所を見せたくない！と、フツと芽生えた恋心が、娘らしい、小さな虚栄を、かざるのである。

でも、思えば、母亡き後、それより以外無能な父が、幼い自分を今日迄に育て、来てくれたのも、今の芸のお蔭である。

ましてや、病の父が、今尙、不思議な鼠の芸の執着を断ち切れず暗い灯影に、必死の面持を見せているのを見れば、強く責め得る何物がある。

「ね、やめてお父つあん。昔を思えば、その芸も、どんなに大事なものの判りませんが、私の今の商売で、お父つあんにも不自由はさせはしません。お父つあんの病気が治れば、二人で一緒にお店をや

りましょう」

「済まん、済まん、遂、昔が懐しくつてな。わしだつて、此んな事をして暮すより、お前と一緒に店をやつた方が、どんなにいいか判りやしない。——サア、檻へ入つて」

藤吉が、トン／＼と檻を叩くと、二匹の鼠は、傘を其の場へ置いて、チヨロ／＼と檻の中へ這い込んでしまつた。

「仲良くお休み——」

藤吉は、人に物云うように、そう云つて、檻を傍へ押やると、

「あゝお前、お湯はまだだつたな？ 行つてお出で。余り遅くなつてはいかん。夕飯は帰つて来てからでいいからね。」

「そう。じゃア済みませんけど、私、急いで行つて来ますから——」

「あゝそうしなさい」

お篠は立ち上つたが、

「あゝそう／＼——」

と、急に思い出したように、

「あのネお父つあん、夕方、丁度私ぐらいの頭巾をした女の人が見えて、此れを鼠使いの藤吉に渡して貰いたいつて、何んか紙包みを出しましたけど——」

「お前ぐらいの娘が、わしに渡してくれろ、と云つて？ どれ、それは何んだが、一寸お見せ！」

「いえ、それが、あの、八丁堀の曾根の旦那が見えましたものですから、その紙包みは、私に渡さず、急いで逃げるように行つてしましました」

「ほう。で、お前、その娘を知らないんだね？」

「えゝ、少しも。でも、後からおいになつた大村右近さまが、そ



の方から、その紙包みを奪い取つたとかで、開けて見ますと——お父つあん——」

「一体何が入つていたと云うんだい？」

「耳です。それも、人間の左の方の耳が二ツ——」

「何ッ？人間の耳！——」

藤吉の顔に、激しい驚きが漲つた。が、殊更何気なく、

「何を馬鹿な。わしは、そんな娘も知らんし第一、人間の耳など貰う理由はない。鼠使いの藤吉と云つても、わしは此の通りの体で、そんな事もして居らん。鼠使いも昔のことで、わしが鼠使いであつた事を、知つてゐる人も、極くまれな事だ。何んかの間違いだらう。江戸は広い。わしと同名の鼠使いが居らぬとも限らんからなさ、つまらん事にこだわつていず、早く湯へ行つておいで」

「そうかしら——？」

「そうだとも。そうだとも。心配はいらん。ハッハハハ」

藤吉の明るい笑い声を後に聞いて、湯道具を抱えて外へ出たお篠だが、何か氷解出来ぬ疑問が萍のように胸の底に淀んでいた。

桜湯と云う銭湯はすぐ近くだった。

（人間の耳と、鼠使いの藤吉？ 本当にお父つあんと、何んの関係もなければよいけれど）そう思い乍ら、薄暗い路地を出た途端、お篠は、身近に迫つた人の気配を感じて、ハッとして目を上げた。

「あッ！」

だが、それは、叫びを上げる間のない速さであつた。覆いかぶさるように、のしかかつて来た男の重圧と、脾腹へ微かな痛みを意識しただけで、お篠は夢の底へ引入られるように、グツタリと体を男の腕の中に凭せかけていた。

どの位の時間が経過したか、もとより知ろう筈はない。フツと意識を取戻して見廻すと、

（此処は何処だろう？）

丸い絹張りの行燈が、青畳の上に、灯影を揺れ投げて、お篠はその傍に横たえられていたのだ。

お篠は、まだ脾腹に残る僅かな痛みを押えて、立上つた。

（何んの為に、私を拉して——？）

解けぬ謎であつたが、何かしら此の身の上にのしかゝつて来る不吉な物を意識して、お篠は、恐怖に、ゾツと身を震わせた。

（お父つあんは、どうしたろう、まだ夕飯もたべず、遅い私の帰りを待ちわびてゐるだろう）

と思うと、矢も楯もたまらなかつた。

見廻したが、幸い人影はなかつた。

此処が何者の邸であろうと、拉して来たのが何者であろうと、一ツ刻も早く此処を逃がれて、父の許へ帰らなければならぬ。

思わず、襖へ手がかゝつた途端、それに応ずるように、向う側から襖がサラツと引あけられて、お篠の体を押返すように、ヌツと立はだかつたのは、

（アッ、根岸武太夫！）

煩悩の血

「お篠、手荒をして、落まなかつたな」

細い、すわつたような両眼——豊かな頬に笑いを湛えて、武太夫は、後手に襖をたてきると、ゆつくりと二、三步近寄つた。

五千石の大身と云う威厳よりも、不気味な威圧を湛えた人物であ

る。

「何んの御用か知りませんが、私は帰らせて頂きます」

お篠は、武太夫の横を廻つて、真ッ直ぐに襖の方に進みよつた。

「ならぬ！」

武太夫は軽くお篠の手を払うと、その肩先を突いた。

「アッ、何をするのです！」

お篠は裾を乱して、ヨロ／＼と行燈の傍へ崩折れた。

「成程、大勢の男客を相手にしているだけに仲々気強い娘だのう」

武太夫は更に一步近寄ると、

「お篠、度々の話だが、大奥へ上る旨、承知してはくれまいかのう」

急に声を低くした。

「老中水野美濃守殿はもとより、太田築前守殿も、わしを介して、

是非お篠を將軍家のお側に差出すよう、とのたつての頼みだ。父藤

吉共々、悪いようには計らわぬ、どうだ、承服してくれぬか？」

「卑法でございましょう根岸の御前様、例えいやしい商売はして居

りましよう、私に二心はありません。あれ程、あの折、きつぱり

お断り致した筈でございます。それを、手ごめ同様にお邸へ連れて

参るなど、五千石の殿様のなされる仕業でございましょうか」

相手の人物と、意中が判ると、お篠の心は落付いて来た。

「ホウ、大分手厳しいな」

武太夫は肥満した体を僅かにゆすつて低く笑つたが、

「どうじゃ、今一度、考え直して見ては——」

と、悟すように云つた。

「何度考えましよう、結果は同じでございます。私帰らせて頂きます」

「そうか。なら致し方ない。では早速送り届けてやろう」

武太夫が襖を開くと、その場に、何時ともなく来てうずくまつていたのは、八丁堀の悪同心、陰險冷酷の曾根権三であつた。

「曾根、お篠はどうでも嫌だと申す、致し方ない、やがて心の変る

まで住居へ送り届けてつかわせ。氣に染まぬものを、無理に將軍家のお側に上げて、万一反返しのお出来ぬ事でも出来れば、余の腹切りものだ」

「全くにございます」

「住居へ送り届けてから、お前からも、今一度、心の裡を訊いて見してくれぬか。かまわぬ、遠慮なくのう」

「はッ、いさい承知仕りました」

見合せた権三と武太夫の眼が笑つている。

「こいお篠、俺がお前の家まで、送り届けてやる」

権三はお篠の手首を掴んで、グイと引ッ立てるのだ。

「離して下さい、帰して頂くのでしたら、私一人で帰れます」

「女子の夜道は物騒ときく。おとなしく送らせるものだ」

権三の手には、握りつぶされるのではないかと思う程、力が加わつていた。

「離して下さい。離して——」

振離そうともがいたが、権三の手には容赦がない。

「静かにせい。邸の者が迷惑する」

権三は、まるでお篠を引摺るようにして、廊下を歩き出した。が三ツ程角を曲つたと思うと、厳重な粗格子の前に足を止めた。

「それ、此処がお前の家だ！」

片手業に、錠を外して、太い角格子の戸を開けるや、自分も一緒

に内部^{なか}に入つて、お篠の体を、ドンと突放した。

其処は座敷牢のような造りだが、畳もない板敷きで、隅の方に角行燈がボンヤリ灯つている。

お篠はよろめいた。よろめき乍ら、何かに激しく躓いた。

死んだように、グツタリとなつてゐる男の体だつた。

「見ろお篠、お前の父親の藤吉だ。お前の身を案じて、わき／＼斯うして待つていたのだ」

権三は顎をしやくつて、冷笑するように云うのだ。

「えッ！お父つあん？」

お篠は愕然として、男の顔を覗き込んだ。

「あッ、お父つあん！」

紛れがあるうか、佐久間町の我が家で、娘の湯帰りを待ち詫びてゐる筈の父藤吉だつた。

「お父つあん、お父つあんでば——」

狂気のように抱き起した腕の中に、

「お篠か？」

藤吉は疲れきつてゐるらしい顔を上げた。

だが、その眼は、心配するな、と云うように瞬いてゐる。

「悪魔！ 私に云う事をきかせる為に、関係のないお父つあんまでを——」

お篠の目は血走つて来た。

「悪魔か？ そうか、その悪魔が、お前に云う事をきかせる為に、面白い事を見せてやる」

権三は懷から麻繩を取出すと、お篠を蹴倒すように、無残に後手に縛り上げた。

「良く見ていろお篠、悪魔の芸を——」

権三は大刀を鞘ごと抜き取ると、後手に縛つた藤吉の腕の中に、それを差入れて、グイと捻つた。

「ウウッ！」

藤吉は鋭く呻いて、たまり兼ねたように、板敷の上にドウと横たおしに倒れる。

「あッ、お父つあん！」

走り寄ろうとしても、自由の利かぬお篠だ。

「やめて。そんな無慈悲な事はやめて」

「やめましょう。だが、それも、お前の言葉一ツだ！」

「心配するなお篠、お前の気持は、一番お父つあんが良く知つてゐる。どんな事があつても心にならない返事なんかするもんじやアない」

藤吉は横倒れに倒れた姿の儘、励すように云うのだつた。

「お父つあん！」

思わず膝で這い寄るお篠の胸を、

「寄るな、傍へ——」

権三は、大刀の鐙^{こじり}で、強かお篠の胸を突いた。お篠は仰向けに倒れた。赤い蹴出しが花のように開いて、真ッ白な足が、すねが、露に覗けるのだ。

「あ、大村さま、右近さま！」

知らず、お篠の唇が、そう小さく叫ぶ。

救いを求めての言葉ではない、唯、訳のわからぬ、縋りたいような衝動から来た叫びであつた。

「何ッ、右近？」

権三は、ギョツとしたように、素早く辺りを見廻したが、それが

お篠の、幻覚を求める言葉だと判ると、急にその顔に嫉妬に以た紫の炎が燃え拡がった。

(あの風来坊右近と、お篠が――)

と思うと、権三の心は、激しい嫉妬に、塗りつぶされる。

お篠は起き上ろうと、もがいている。体は横にねじ向けたが、裾は乱れるばかりで、縛られた体は自由が利かないのだ。

権三の目は、じつと、お篠の露出した肉体へ注がれた。白い柔い処女の、清浄な肉が悶えてゐるのだ。

権三の喉を鳴らして、幾度か固唾が走った。

煩悩の血が、脳天へドツと吹き上げて来て、大刀を握んでいる手が、わな／＼と震えて来た。

【読者通信】(投稿歓迎)

号を追うて益々貴誌の発展される事は全く同慶に堪えません。特に五月号の沼正三氏訳のフランス物翻訳は正に圧巻ともいふべきで同氏の前置にある如く今後どしどし此の種マゾヒスチック・ノーベルが貴社に於いて紹介若くは単行本として発売されることを切望致します。ソフィア著「マゾヒストの会」はその内容の一端として抄訳された丈で全く物足りません。外国人の持つ芳香溢るゝが如き女性崇拜の徹底した蜜よりも甘い屈

辱のフンイキは沼正三氏の抄訳によつて我々を恍惚たらしめました。更にこれが全訳であつたならどんなに素晴らしいであろうという心残りを禁じえないのです。

それから五月号の磐田氏の御意見には全く反対です。貴誌の特色は色々ありますが、中でも最も特色とする所は男性マゾヒスティックな面を多分に取入れている点にあるのです。他の三文エロ雑誌にはこれがありません。マゾヒストは一体にインテリゲンチヤに多く概して内気なため、貴誌の特別会員になるとか、意見を述べるとか

それは心の奥底から燃え上つてくる激しい憤怒といつてもよかつた。相手が男であれば満身の力をこめて叩き斬つていたかも知れない。それがひそかに愛を抱く女――

しかも身動きも出来ずに裾もあらわに身悶えしている女、お篠、その女が思わず救いを求める言葉に出した男の名、

権三の嗜虐的な思念は、嫉妬と憤怒に油を注がれて今や止めどもなく燃えさかつてしまつていた。起き上ろうともがくお篠の顎へ刀の鞘を当てると、力まかせにそれを払つた。

「あ、あッムム」

お篠の悲鳴を残して、白い花びらのような二本の足が宙に躍つた

(つづく)

はサディストに比して非常に少ないのですが貴誌を愛読している数に於ては決してサディストに劣らないと思ひます。マゾヒズムは自己反省、内攻的な芸術的なデリケートな神経の持主に起る症状であり谷崎潤一郎先生を始めとして芸術の香り豊かな、女性を純化神聖化せんとする実に人間性の美しい面の極端なる耽溺の現れであり、この傾向を本邦唯一の理解誌であるK誌から排除せんとする磐田氏の意見は全く独善的な且つ最も野卑な非民主性の権化であり、日本民族を現在の不幸に陥れた彼の独善

的な軍国思想と歸を一にする言語同断なる暴言であると思ひます。こんな愚見に引ずられることなく男性マゾヒストの為唯一の友としての貴誌を充実して下さい。勿論男性Sの特色を没却せよというのではありません。そんな非民主的な独善性は我々マゾヒストは持ち合せて居りません。然し控え目な持者として我々同好者は保証できる読者数を占めていることを断言してはばからないものであります

(S・H・R生)



我が告白の

断章 (二)

須藤 律夫

開け放たれた窓からは栗の花が静かに匂つて来て、何事かを連想させます。その頃（約二十年前）の図書館は、現在とは比較にならぬ位空いていて通勤の余暇、私は毎日のように立ち寄るのが常でした。そして窓際の机に席を占めると時には犯罪科学、自虐に関する絵画、或は精神分析、変態性慾心理等も読み耽りましたが主として臍に関する様々なものを読み漁りました。私は其処で医学、美術、

文学、易学等の面から臍の研究を始め就中、
「臍相学」文には限らない興味を覚えました
が唯困った事に研究の対象はそう易々とは見
られず、今と違つてストリップ等勿論無く、
極く限られた特定の場所でも特定の人々で
す。そんな訳で海水浴場は勿論、両国の毎場
所、熱海等の温泉場、或は銭湯等機会ある度
に私は観察の眼を注ぐのでした。
何年かの間私独自の熱心な観察や研究が続
けられて行く中に私の興味は益々深まり、諸
説紛々たる裡にも段々「臍相学」に或る程度

の信頼性を抱く様になりました。更に臍紋は
指紋等と同じく万人不同であり又生涯不変で
あるとの説が抬頭するに到り、私の抱く興味
は一層深まつて行くのでした。

扱、そんな生活が続いて行く裡に一人の姉
も嫁ぎ、十八才の春私は草深い代々木の一隅
に文字通り独り取り残されて自活を始めたの
でした。

二

昭和十五年夏、私の勤務先は変わりませんで
したが職場は變つて当時上野公園の近くの或
る映画館に勤務して居りました。その間の九
年間、生活に追われて居た私には性来の変質
的な私の嗜好や、趣味研究に余り耽溺する事
もなく（勿論私はそれ等の事を夢寝の間も忘
れた事はなかつたのでしたが）極めて平凡な
年月を送つて仕舞いました。その間の出来事
の中で私の一生を大きく転換させたものは、
椿咲く伊豆の大島を学友と共に訪ねた時、千
二百噸の菊丸の中で偶然にも知り合つた一女
性と、様々なトラブルを重ねて約二年、その
儘結婚生活に入つた事でしよう。

話は戻りますが映画館事務所の勤務は最初
の中こそ転勤早々で閑ですが、慣れて来ると

仲々に忙しく、館内様々の連絡事項や宣伝関係の仕事、或は企画の打合せ、来客の応接など結構雑務に忙殺されるのでした。私が其処に転勤したのは真夏の七月廿五日（それ迄は江東方面の某映画館に居りました）灼熱の太陽は道のアスファルトをすら溶し、狭い事務所の中はまるでトルコ風呂の様な暑さでした。更に二階の映写室に入ると其処には強烈な内光と共に激しく放熱するアークランプがあります。冷房装置の無かつた其の頃の映画館は全く文字通りの炎熱地獄でした。でもそうした暑さに引き比べて、夕景ともなれば舗道の熱も次第に冷めて行き不忍の池の面を渡つて来る涼風が柔かく懷に流れ込むのでした。暮れ悩む夏の夕暮とは言え八時頃ともなれば辺りは薄暗いヴェールに音もなく包まれて行きます。其の頃から近くの上野公園には涼を求めて夕涼みの都人士が三々伍々と遡り、又池の畔のベンチには青葉の下、若人の楽し気な風景が随所に見られるのでした。私も夕食後の一時はよく涼みがてらに僅かの散歩を試み広い公園の地理事情にも多少通じて来た頃それは或る日の夕方でした。

広小路方面から公園の入口を入ると直ぐ水呑場があり、その少し先、左手に男子便所があり、その右手稍手前に、青葉若葉の植込を

背にしてベンチがあり、私は其処に腰を下すと西の方、幽かな夕映えを残す本郷の高台辺りを眺め乍ら、様々な空想に耽るのでした。夕涼みの人通りは絶え間もなく、忍ヶ丘高女の方から流れて来る涼風はとても心地よく、昼間の炎熱を忘れさせて呉れるに充分でした。私は何の気なく眺めて居たのですがふと気がつくとな側の男子便所に、静かに吸い込まれて行く人は頻繁なのですが、出て来る人が僅かなのです。更に気を付けて居ると、適に出来た中の一人は傍の水呑場で含嗽をする。と其の儘闇の彼方に消えて行きます。何れにせよ四、五人入つて二人位出て来たり、大して広くもない便所なので私は不思議に思いました。と言つて私には用もないのに自分が入つて行つて確める勇氣もありませんでした。何故なら其処は電灯が一つも点いて居らず全くの眞の闇だつたからです。

その儘館の事務所に戻つて来た私は、然し職業意識とでも言いましょうか、殊に人員数に就いては稍敏感でしたので、どうも不思議に思えてなりませんでした。

三

「やあ、今晚は、どうかね景気は」

それから二日程経つた夜、事務所を訪れて来たのは所轄S署の保安係桜井氏でした。「あゝ、いらつしやい、懷中電灯など持つてどちらへ？」

その頃映画興行は所轄署の保安係と密接な業務上の連絡もあり、すっかり顔馴染でしたので私は無遠慮に笑い乍ら問いかけるのでした。

「うむ、一緒に来るかね……」

そう言うとき桜井氏は唯薄笑いを浮べてばかりいるのです。彼はどちらかと言えはきさくな人でしたし、それにちよいと遊びに立寄つたり、又時には日、英、米間の軍事、政治事情等に就いて二人は議論を斗わしたりした事もありました。時間は夜の八時、懷中電灯など持つて……。然し私には何の事かさっぱり解りませんでした。

「一緒につて、どちら迄？」

「うむ、直ぐ其処だ、〇〇狩りなんだよ」

「〇〇狩り？」

瞬間私の脳裡には二日前の夜の事が閃めきました。男娼々それは其の時迄私は全然知らなかつた訳ではなかつたのですが、それ程深い関心も持たず、又それに就いて普通人以上の興味や嗜好も抱いて居なかつたのです。

勿論当時の男娼は戦後のそれと比較して、様々の角度から見て大分の隔りがあつたかも知れませんが。桜井氏の話によると、彼の立場としては定期的に取締らねばならぬし、殊にその附近の街路灯など、いくら電球をつけ替えても直ぐ取りはずすか、石を投げて割られてしまふとの事でした。私もその実態を聞いて多少驚きましたが、別の好奇心も湧いて来て事務所を他の者に任せると一緒にいて行く事に決めました。

その日も昼間の暑さに引きかえて外は涼しい夕風が吹いて居り、広小路の人通りは織るように賑やかでした。公園の入口を入ると二人は例の便所の見える位置のベンチに腰を下しじつと使用者の出入を看守つて居りました。が約十分もすると、

「じゃあ、出かけよう」桜井氏はそう云つて私を促すのでした。瞬間私の鼓動は一寸高鳴りました。それは猟奇と怖ろしさの混同した俗に言う「怖いもの見たさ」——と言つた感情でしようか。桜井氏は勿論私服、二人は普通の利用者と何の変りもなく便所の入口を入つた瞬間でした。桜井氏の手にした電池は写真班のフラッシュの様に一瞬輝き、其処には私の今迄想像もしなかつた情景が展開されて

いるのです。そう——その時中に居たのは六・七人だつたでしょうか、或る者は瞬間はた／＼と闇の彼方に消えて行きましたが、残つた者は只茫然と塑像の様に立ちすくんでいるのです。或る二人は………した儘向き合つて立つて居りました。恐らくはお互いに………する事により………楽しみ合つて居たのかも知れません。又或る者は………楽しんで居たのでしょうか、一人は絹の羽織に雪駄履きの優さ男でした。又或る者は………でしうか、ハンカチを取り出すと頻りに口の辺りを拭つています。私は二、三日前の夜一人の男が此処から出て水呑場で含嗽をし、闇の彼方に消えて行つたのをまぎ／＼と想い出しました。扱、桜井氏は一応全員を山下の交番に連れて行き説諭する事になりましたが、その夜の光景は仲々私の脳裡から去らず随分と悩まされました。殊に………された………や………がしつぽりと………いたのは何故かとても印象に残るのでした。この狩り込みは四、五回続いて行われましたが同じ事務所のY等少からず興味を引かれ、二回目からは毎回桜井氏と同行したり、時には彼自身単独で出かけ、猟奇的な雰囲気を楽しんでいる様子でした。と言うよりも或は彼自身、男娼の嗜好の対

象となつて自らも楽しみ、それが毎日に病的に進行していたのかも知れません。けれど之はYばかりではありませんでした。結局は私自身もアブノーマルな幻影の俘虜となり、夕暮れて街路灯の瞬く頃ともなると、閃光と共に展開されたあの夜の光景が網膜に映じ、狂える性への魅力に私の脳髓は妖しくも戦くのでした。——木乃伊取りが木乃伊になる——そんな馬鹿な！心の中では強く否定し乍ながらもそしてそれが一度踏み込めば抜き差しならぬ底知れぬ泥沼である事も解り乍ら、然しアブノーマルな本能の暴君の前に、私は力なく額づくのみでした。

私は眼に見えぬ不思議な糸に手繰らるゝものゝように石畳の径を歩いて行きます。あたりの鼻をつま／＼れても判らぬような真の闇、そして傍らの植込の中に佇むと何処からともなく近寄る黒い影、音もなく、声もなく、唯最初は軟弱な彼の手先のみが感じられるのです。熱い、然し幽かに震えている指先、じつとしていると、やがて………を受けます。………と共に私の………は軽く………され外気に………のも僅か次の瞬間には更に冷やかな………るのでした。

二人共無言の裡に然し彼のアクションは汗

次 号 (八月号) 豫 告

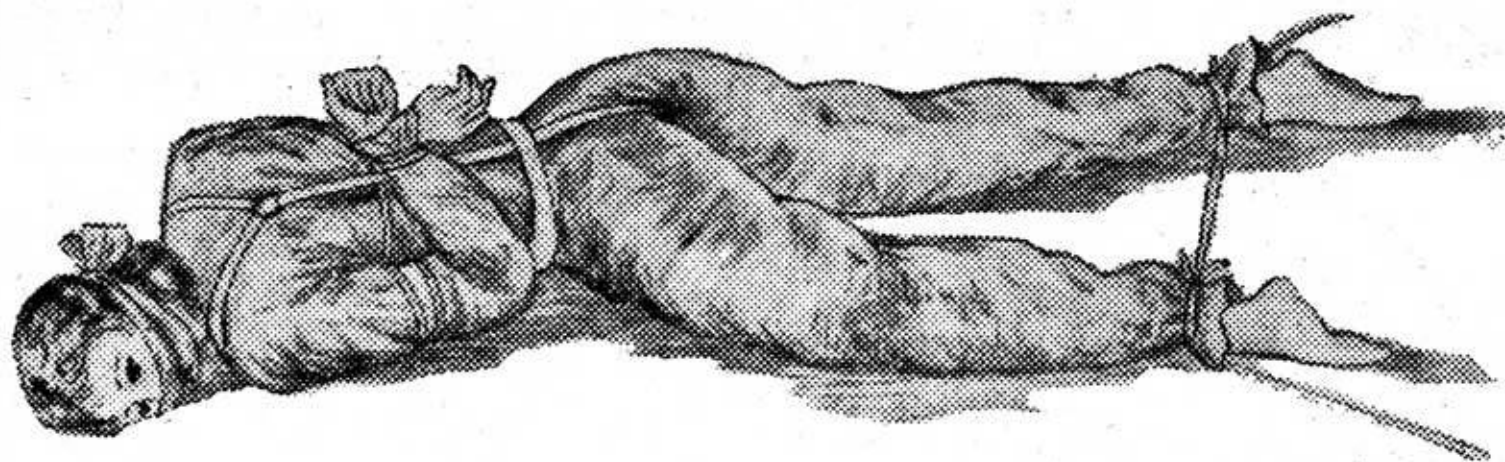
珍書
紹介

ロンドンにて秘密出版された流麗なる文章の堂々二百頁
に亘る豪華艶笑本

甘美なるアリスの降伏

或る被虐性愛者の手記より	天泥盛
時代小説片耳傳奇(後)	窪村
鞭うたれる外國の少女達	吾妻
黒のハイヒール	芳野眉
色狼	兎島
アブ・ノーマルプレイ	嶽収
あるマゾヒストの手帖から(三)	沼正
クリスチーヌの受難(三)	吾妻
女装男子の告白	篠原幸
淫(第八回) 火	松井籟
らぶ・すれいぶ(第8回)	鬼山絢
被虐の愛情	若林啓
続・悩ましのサディズム	森山美歌
アリスへの讃歌	住田弘志
明治期の被縛画家	伊藤晴
悦虐秘帖	信太蓉
マリイ・マドレーヌ	滝畑陽
女腹切の考察と女性の切腹例	田谷敬生

ばむ………さです。
「ねえ………も構わないわよ、妾………じやうから」
たとえ………したとて私には一寸出来そうにもありませんでした、快い冷やかさと共に何時か夢現の境に墮ち込んで行くのでした。二人はその後数回同じ様な事を重ねましたが、その結果私は次の様な事を知ったのです。
彼の本名は竹田秀男(当時二七才)住所は本郷元町、両親は既になく弟は戦死、一人の姉は嫁してT市に在住、最近横浜より都内転入との事でした。彼は横浜に居た頃英子と名乗り或高級船員の寵愛を受け、自由奔放な生活が続けて居りましたが船員のサディズムも次第に激しくなり、時には人の想像も出来ない様な凄惨な加虐に耐えかねて、遂に東京に逃げ出したとの事でした。凄惨なる加虐、彼の語る処によればそれは、錯倒せる性の饗宴——とも言いましようか、私が彼を永久に見失つたのはそれから間もなくでした。そして私の編歴も又一入変つた方向へと進んでゆくのでした。



くすぐられるよろこび

山 本 百 合

「ただ今」

元気のよい声が聞えた時にはもうお姉さまへと申しても本当のお姉さまではなく、そのいわゆるお姉さまなのです。が、は部屋の中へ入つて来ていました。

「あッ」

私はあわてて小型の雑誌を薄団の中にかくしました。

「まあ、赤い顔して、どうしたの、熱でもあるんじゃない」

私は昨夜買つて来た奇クにすっかり夢中になり、今日は頭痛がすると云つて学校を怠け一日中ベットに寝たまま読みにふけつて居たのでした。

「ところで百合ちゃん、今私が帰つた時、何かお蒲団の中に隠したわね、なにあれ、見せて」

あゝ、これを私の真面目な

お姉さまに見せたらもうおしまい。私、嫌われてしまう。そしてお姉さまに捨てられる。そんな事、そんな事、とてももたえられない。私は雑誌を胸の下に抱きしめました。

「百合ちゃん」

お姉さまは一寸改まつて恐い顔をしました。「前にお約束した事、まさか忘れやしないわね、二人は一心同体、何んでも打ち明ける、絶対に秘密は作らないつて、さあ見せて、ねそら」

私はいきなり跳び起きると机の抽出から睡眠薬のビンを取り出し口に持つて行きました。「バカッ何にするの」

お姉さまはあわててとびかかると薬ビンを取り上げようとしました。私はとられまいと必死にもがきました。けれどテニスの選手で身体も一廻り大きなお姉さまには敵いません。手を高く上げて取られまいとした腋の下を櫟られて薬ビンを取り落してしまいました。

「死なして、死なして」

私は半分狂つたようになつて叫びました。

「はなして！」

私は満身の力を振り絞るとお姉さまを突きとばし、今度はナイフに手を伸ばしましたがまだ手がそれに屈かぬ内にお姉さまの両手に

抱きすくめられてしまいました。

「死なして、死なして」

私は尙も暴れましたので、お姉さまは御自分の細いバンドをはずすと私の手を後ろにねじ上げぎゆうツと縛つてしまいました。それから舌を噛むのを恐れてか、短い鉛筆に脱脂綿をくるくると巻きつけ、私の口に押し込み更に手拭でしつかり猿ぐつわをしてしまいました。私はもうどうする事も出来ずただ涙で猿轡を濡らすばかりでした。お姉さまはそんな私を優しくそつと抱き上げるとベットの頭に横たえました。そしてさつき私が隠した雑誌を取り上げるとペラペラと頁を繰りました。あの写真が目についたのでしよう。お姉さまはハットしたようでした。しばらく息を呑んでじいつと見詰めて居ました。やがて雑誌を静かに下に置くと黙つて私の顔を見詰めました。私は恥しさと恐ろしさで目を伏せてしまいました。するとお姉さまは私の胸のあたりに手をやつて、私の身体を自分にもたせかけ私の長い髪の毛を手でまさぐりながら尙もしばらく黙つて居ました。

やがて、案外に落ち付いた調子で云いました。

「百合ちゃん、恥しかったの、怖かったの？」

この本、私に見られるのが、嫌われると思つたの？」

私はお姉さまの胸の上でこつくりしました。「そうよ、私怒つてよ、私に隠した事をね、それから、こう云うものを見てた事も。だけど、だけど………」

ふふん、物理、数学の秀才で、スポーツマンで、品行方正なお姉さまになんか私のこと解りやしないわ、私は落ち付いたお姉さまの口調になにか反抗したい氣持がしました。「怒らないわ、嫌いになんかならないわ、それどころかかえつて好きになつちやうかも知れない。」

助かつた、私はほつとしました。あゝお姉さま捨てないで、お姉さまに捨てられたら私は本当に死んじやう。そう云いたかつたのですが猿轡に消されてただうめくばかりでした。「だけど、約束を破つた罪は矢張り受けなくては駄目よ。そうね、これから土曜日毎にお仕置きにかけようかな」

ありがとう、お姉さま、お姉さま、私の事そんなに良く判つてくれて、うれしい。うれしいのお姉さま、私は縛られた体を懸命にお姉さまの胸にこすりつけました。お姉さまはぎゆうつと私を抱きしめると、猿轡の上から

接吻して下さいました。私の目からは又涙が溢れ、猿轡をびしょびしょにしました。

二

その土曜日

私は朝から胸がわくわくして、御飯も喉に通らない位でした。お姉さまも平静を装つて居られる表情の下に、何かいつもと異つたものがうかがわれました。そして夕方まで、あの事には全然ふれようとせず、かえつてスポーツの事、音楽の事、勉強の事などを立て続けに話しかけました。私にあの事を忘れさせよう、注意を外に向けさせようとしているお姉さまの優しい心持が痛い程よく解つて涙がこぼれそうでした。

でも駄目なのです。私の血がいう事をきかないのです。胸が、乳房が、早く縛つて、ぎゆうつと締めつけて、と大声で叫ぶのです。やつと夜になりました。

「お姉さま、お仕置きまだあ」

「ふふ、お仕置の催促ね、困つた百合」

「お姉さまのいじわる」

「そんなにあわてて、お馬鹿さん、じゃ始めるかな、百合はどんなお仕置きがいいの」

「余りひどいのは嫌、ね、ただ縛るだけで許

してエ」

私はあまつたれ声で云いながら服を脱いでズロースとシュミーズ一つになりました。それから用意して置いた縄を取り出しました。

「この縄で縛つてえ」

「まあ、縄まで用意して、あきれた百合、だけどこの縄じゃ、百合、痛くて我慢出来ないわよ、ね、しごきか何か、もつと柔らかい紐にしましょうよ」

「大丈夫、お姉さま、それで縛つて」

「じゃ、両手を後ろに廻して、そうそう」

「駄目よ、お姉さま。もつとぎゅつと、もつと、もつと、あつ痛い痛い」

「そら御覧なさい、ゆるめて上げるから一寸待つて」

「嫌、ゆるめちや嫌、もつときつく、もつともつと」

「ふん、それじゃ泣いても知らない」

私はわざとガサ／＼の細縄を選んで置いたので、お姉さまが一巻きしてぎゅつと締めつける度に、縄がこすれる痛さと、手首にくい込む痛さで思わず涙がこぼれてしまいました。それでもやせ我慢して、ゆるめて、とは云いませんでした。お姉さまは、私のぼろ／＼こぼれる涙を見ながら、も少しこらしめてやろ

うと思つたのか遠慮会釈なくぎゅ／＼と締め上げ、手首を固く縛つてしまふと縄尻を首に廻してぐいと手首を吊り上げました。

「痛い／＼、お姉さま許して、ゆるめて、少しゆるめて」

とう／＼我慢出来ずに悲鳴を上げてしまいました。お姉さまは手首を吊し上げるのは止めましたけれど、すぐにはゆるめてくれず、縄のくい込んだ手首をじつと見詰めて居るようでした。

「お姉さま、ゆるめて、一旦ほどこいて、ねえねえ」

私が痛さに身体をよじらせてもう一度頼むと、今度はすぐにほどこいてくれました。手首には縄の跡が紫色に凹んでいました。私はだまつてその手首を撫ぜました。

「どう、百合、縛られるつて百合の想像して居た程楽しいものじゃないつて、解つたでしよう。ね、だからもうこんな事、忘れておしまいなさい、よくつて」

「だつてお姉さま余りきつく縛るんですもの痛いわあ」

「あら、そんなにきつく縛りはしないわよ」

「そうだ、いい事考えた」

持つて来ました。

「ね、これをこうひろげて、手首や二の腕の縛る所に巻いて下されば、いくらぎゅつときつく縛つても平気よ。お姉さま、お願い。もう一度、ね、ね、いいでしょう」

「駄目／＼、もうお止めなさい」

「いやーん、縛つて下さらなきや私死んじやう」

「うん、しようがない百合。じゃ今度はいくら泣いてもほどこいてあげないわよ」

そう云うと、後ろに廻した私の両手首に巾広く脱脂綿を一巻き、二巻きしました。柔らかな脱脂綿の触感がとてもよい気持でした。その上からさつきの細縄がかけられました。

「お姉さま、もつとぎゅつと、もつと、もつと、大丈夫、もう悲鳴上げないから、まあお姉さま力がないのね」

私の余り勝手な言葉に怒つたのか、お姉さまは私をうつむけにベットのの上に押し倒すと私の手首を足でふんまえて、一巻きする毎に荷物でも作る時のように力一杯締め上げました。その度に細縄は脱脂綿を通して心地よく私の手を締めつけました。さつきのような飛び上がるような鋭い痛みではなく、何んとも云えぬ被圧迫感の喜びでした。五六回締めつ

けると、今度はそれと直角の方向に二、三回締め上げられ手首はもう一ミリも動かせないようになりました。次にお姉さまは、私のシユミーズをずり下げると乳房を露わにしました。私は一寸恥かしかったのですけれども、されるままにしてる外はありませんでした。何んでもされるまゝにしてるつてこんなに気持ちのよいものでしょうか。お姉さまは脱脂綿を四角に折つて両方の乳房の上に当て、ずり落ちないように縄で一卷きしてから、今度はあお向けに転がし、乳房を足でふんまえては胸に三巻、四巻と締め、次第に乳房、お腹、腰まで縛り、更に縄を肩から肘にかけて腕を吊り上げ、胸をぐるぐると締めつけて居る縄と連絡させて、両手を完全に固定して動けないようにしてしまいました。

それから足首とひざ頭にも脱脂綿を当つてその上から細縄で先程のように一々足でふんまえては締め上げられました。ひざから腿にかけては、特に念入りに縛つてくださいました。大腿は片方ずつ、それこそ縄が肌にくい込んで見えなくなる位ぎゅつと縛り更に両方合せてぐるぐると巻きにされました。私はだん／＼自分の身体がしつかりと締めつけられて行くのが何んとも云えぬ心持良さで

特に太もものつけ根の所を縛られる時には思わすうめき声を立ててしまいました。お姉さまはハツとした様に、急いで足を縛り終ると私の口の中に脱脂綿をつめ込み、残った綿を拡げて私の目も隠れる程に鼻と口の上に乗せ更にその上を真白な手拭でしつかりと覆つて後で結びました。これでやつと荷作りが完了したのです。お姉さまはほつとしたように、ベツトに腰を下し、私を抱き上げて下さいました。私は身体がびつたりと身動きも出来ず幸せが体の中に浸み込んで来るような気持ちでした。今度は本当に縛られる喜びを身体全体に味い、このまゝ死んでしまいたいと思えました。私はお姉さまに無限の感謝を込めた瞳を向けました。とお姉さまは何か悪い事をしてしまった後のような淋しそうな顔をして居ました。あゝお姉さまは矢張りこう云う事はお嫌いなのだ、私は捨てられるかも知れないと云う感じに襲われたので、ほとんど動かせない体を一生懸命お姉さまにすり寄せ出来るだけの媚を含めた甘い瞳を向けました。するとお姉さまは恐ろしいものを見るかのように私の目をそらし、私をはなしてついと立ち上がり私の上に頭から毛布や蒲団を掛けると一言も云わずにドアを開け、外から

鍵をかけてそのままどこかへ行つてしまいました。私はお姉さまの気を悪くしてしまつたのが不安でしたが、絶えず締めつける縄と脱脂綿の心地良さにすつかり夢見心地になつてしまいました。

三

それから毎週土曜日の夜はこのようにして縛つて頂きました。でもそれに使う縄は今までのがさ／＼の荒縄に代えて、糸ゴムを二十本程束ねて芯にし、その上を白い絹糸で織つた伸び縮みする紐で包んだ特別の縄を使うようになりました。これで縛られると、いつまでたつてもゆるまないどころか、だん／＼きつくさなつて来るのです。私はこの縄が大好きです。

私は土曜の夜がそれは／＼待ち遠しくて仕方がありませんでした。ただ一つ気がかりだったのはお姉さまのあの悲しそうな表情でした。ところが、つい先日お姉さまの日記帖を盗み読みして、やつと、あの表情の謎が解りました。

十月二十七日

思いがけぬ百合のマゾを発見して、どきりとした。困つた、弱つたと繰り返しながらも

あゝいけない、いけない声が耳の奥に、百合のマゾの芽を摘みとるのが私の義務だのに。

十一月三日

あゝ、駄目、私には百合のマゾは直せないあの目、あの乳房、あの体、百合の要求する程度を守るのさえ苦しくなる。あのふつくらした胸、青白い太もも、あゝ思い切り鞭をふるつてやりたい。だけど百合はそんなひどいマゾじゃない。ただ縛られるだけで満足して居る。この線は絶対に越えてはいけない。

一月十九日

自分ながらよくこれだけ我慢出来たと思う何んだか自分がいじらしくなる。だけどこの頃ではこの理性がうらめしくさえたつて来た。あゝ、あと幾日我慢出来るだろうか、早く学年末の試験が始まつてくれればよい。そうすれば少しは気がまぎれるかも知れない。

まあ、可愛そうなお姉さま、知らなかつたの、許して私一人良い気持ちになつて楽しんでいて、私、我まゝだつたの、だけど、革鞭で打たれるのなんて、とても／＼我慢出来ないでしょう。私は、我慢出来る範囲でお姉さまを楽しませて上げる方法を色々考えて居るうちに、ふとした事からスポンジの鞭を考え出しました。お姉さまに内証で上等のスポン

ジを加工して長さ一米近くもある鞭を作り上げました。試みに自分で自分の膝を叩いて見るとびつくりするような大きな音がする代りに少しも痛くありませんでした。

この鞭をその次の土曜日、お姉さまにプレゼントし、日記帖を盗み読んだ罰として力一杯打つてもらいました。柔らかいスポンジがシユツと胸に巻きつくのは悪い感じではありませんでした。お姉さまは大きな腫をぎら／＼させながら力一杯打ち続けました。

ところがこの頃のお姉さまはスポンジの鞭ではあきたりなくなつてしまつて居るようです。お姉さまの目はこの私をエビ責、吊し責、水責、ローソク、木馬等々思い切りいじめたくして燃えているようです。怖い、怖いのです。私はそんなにひどいマゾじゃないのです。脱脂綿を当て、縛られるだけで十分なのです。

四

その晩も、私はいつものように猿轡後手にされ例の鞭でビシ／＼と叩かれて居ました。突然ギイツと云う厚いドアの開く音に、はつとして戸口を見ると、小母さまがギョツとした様に立ちすくんで居りました。小母さまと

云うのは、亡くなつた御主人が私の父の友人であつた関係から、私がお姉さまと一緒に下宿させて頂いているこの家の女主人なのです。尚、私もお姉さまも或る大学の一年生ですが私は早生れなので十八、お姉さまは十九です二人は入学式の時から仲良しになり、間もなくこうして一緒に生活するようにまでなつたのです。

鍵を掛けて置いた積りでしたのに、掛つていなかったのでしょう。

「しまった」

と思つた時は私は水を浴びせられたように鳥肌立ちました。私は裸にされた体を出来るだけ締め顔を伏せました。体中から火が出るようでした。お姉さまはさすがに私よりは落ちついて居ました。小母さまを部屋の中へ引っ張り込むと素早くドアを閉め、鍵をかけてしまいました。所が、一時びつくりしたらしい小母さまも案外に落ち付いて、私の傍に坐り、手首や胸にくい込んで居る縄目を調べました。私は余り平静な小母さまに少し気味が悪くなりました。お姉さまも一寸あつけにとられて居るようでした。

「大分きつく縛つてあるけれど、急所々々脱脂綿が当ててあるし、この縄ならそんなに苦

しくないようね、どう百合ちゃん」

私はかすかにうなずきました。

「真理さん（お姉さまの名前）一寸その鞭を見せて」

小母さまは例のスポンジの鞭を感心した様に見て居ましたが、二、三回振ると私をハッシと力一杯打ち据えました。ゴムが胸に生きもののように巻き付きました。私は別段痛くはなかつたのですが何かぞく／＼として身震いしました。小母さまは尙も五、六回私を叩くと鞭をお姉さまに返しました。

「これなら大丈夫ね、私はまた本式にやつてるのかと思つてすつかりびつくりしちやつたわ。百合ちゃんのお父さまに監督を頼まれていたんですものね、だけどその鞭と縄と、縛り方を見て安心したわ、そんなうらめしそうな顔をしなくてもいいのよ、お父さまに内証にして置いて上げるから。ただし、一つ条件があるの、ね、私も仲間に入れてえ、真理さんいいでしょう、ねえ、あなたの百合ちゃん横取したりなんかしないから、いいでしょう私だつてまだ若いのよ、三十五で子供のない未亡人で、どんなものだか想像出来るでしょう。ね、お願い、ね、真理さん」

私はこの頃お姉さまと二人きりで縛られてゐるのが何んだか恐ろしくなつて居た矢先で

したので反対しませんでした。もつとも反対しようにも猿轡で声が立てられなかつたのですけれども。お姉さまは少し嫌な顔をしましたが、弱味も擱まれていますし、お姉さま自身私を本当に責めてしまひそうになるのを恐れる心もあつたので、小母さまの申し出は受け入れられました。

その夜はとう／＼徹夜でした。二人がかりで鞭を振り、疲れると、お姉さまは下半身、小母さまは上半身と分業で私の体をなでたりくすぐつたり、つねつたりしました。腋の下から太股、内股、足の裏、とお姉さまと小母さまの指が這い廻る度に、私は身体をエビのように曲げたり伸ばしたりして悶えました私の身体であつて自分の身体ではないのです自分の意志に反してベッドの上を跳ねまわりました。二人はそんな私を見下して目と目でうなずきあつてゐるのです。私はもう全く夢中でうめき続けました。

五

こうして毎週土曜日にはいつも二人に縛られ揉まれては楽しんでいました。最初は私からせがんで縛つて頂いたのに、この頃では土曜になるとまだ明るい内から嫌だに縛

られてしまいます。でも私の願いも入れて手首や乳房には脱脂綿を当ててくれますし、いじめるのも最大限、スポンジの鞭で叩くまでです。それでそれほど辛いものではありません。

お姉さまは小母さまが仲間に入つた為、私を独占出来ないのを随分残念に思つて居るようで、この前など水曜日でしたのに、お姉さまに來た葉書を読んだと云う口実で私を縛り上げ散々鞭打ちました。でも私は小母さまが仲間になつた事を余り残念には思つて居りません。だつて一人でも多くの人に愛されるのは誰だつてうれしいものでしょう。それに小母さま、ふふ、あの揉むという特別なテクニクを知つてらつしやるのですもの。私とお姉さま大好き、だけど小母さまも好きなのいいかしら。

そうこうする内に試験も終つて春休みになりました。お姉さまも、私も郷里へ研究で忙がしくて帰れないと嘘の手紙を出しました。所が休みになるとすぐ、お姉さまの郷里仙台から電報が來ました。

——チチャマイスグカエレ——

お姉さまは青くなつて取るものも取り敢えず、出發しました。でもそのあわただしい時間の中にも私と小母さまに、お姉さまの留守

中は絶対にゲームをしないと約束させました。私は折角思い切り楽しめると思つて居たのに肩すかしされたような気がし、私も京都の家へ帰りたくなりましたけれど、あゝいう手紙を出した後ですので、帰る決心がつきかねていました。

翌日は一日中、お友達を訪問したり映画を見たり、外で過しました。家で小母さまと顔を合せているとあの約束を破つてしまいそうで恐かつたからです。その日は無事に過ぎました。二日目も昼間は外で時間を過し燈りのつく頃に帰つて来ました。

「まあお帰りなさい。昨日も今日も一日中外へ出たきりで、どこへ行らしたの。御飯の支度もう出来てますわ。さあ、今日はこちらのお部屋で一緒に食べましょうよ」

私は自分の室で一人ボリ／＼食べるのは嫌でしたから小母さまのお部屋で頂きました。

「あらつ、小母さま日本髪結つたの」

「ふゝ、お正月でもないのにおかしい？、芸者見たいかしら」

「そんな事ないわ、とてもきれい。よく似合うわ」

「そう、どうもありがとう。私、百合ちゃん和服着たところ一度も見た事ないんだけど

お着物嫌い？」

「うゝん。別に嫌いでもないんだけど、こちらへ持つて来てないんですもの」

「百合ちゃんが和服を着て日本髪結つた姿一度見たいわ」

「じやあ今度お母さまに送つてもらうわ」

「えゝ、だけど、若し良かつたら私の若い時の着物差し上げましょうか。いゝのあるわよ一寸来てごらんなさい」

私は次の間に案内されました。小母さまは簞笥から素晴らしい振袖を出して来ました。

「まあ素敵！」

「どう気に入つて、気に入たら一寸着て見ない？」

そう云うとあらかじめ用意して置いたらしく、下着から帯から一揃い出して来ました。

「じやあこれは脱いで」

小母さまは私の洋服を一枚一枚剥して行きました。

「あら、それまでとるの、いやーん」

「これはいてちや着物は着られないわ」

小母さまはとう／＼ズロースまで脱がせ、

代りに赤い腰巻をはかせました。お正月でも滅多に和服を着た事のない私は、一枚着る毎に紐で結ばれるので、まるで縛られている

ような気持がしました。長い事かゝつて着付けが落むといつの間に用意したのか昔のお姫様のような大きなかつらをすつぱりとかぶせられました。

「はい、これで百合姫さまの出来上り、その鏡見て御覧なさい。素敵なお姫さまよ」

私は鏡に映る自分の姿にびっくりしてしました。自分が自分でないよう。何か昔の絵か芝居を見ているような心持でした。私は自分の姿にうつとりと見入つて居ました。

突然、小母さまは私の後の両手を後ろにねじあげました。

「あつ痛い。小母さま何になさるの、嫌、嫌よして駄目、駄目」

私はもがきましたが、何かお姫様が悪者に襲れて居るような錯覚に陥り、余り激しく抵抗出来ません。小母さまは難なく私を後手にしごきで縛り上げてしまいました。

「さあ、百合姫、あちらのお部屋へ」

小母さまは縄尻を取り私をとなりの部屋へ引き立てました。薄暗いボンボリのようなスタン드의光で見ると、そこは小母さまの寝間らしく、厚い絹の夜具が敷かれてありました。小母さまは私を床柱にもたせかけ、綱引きに使うような太い綱で胸から腰まで十数回ぐる

く巻きにしました。

「痛い、小母さま痛い。縄の間に乳がはさまつれちやつたの、痛い、ゆるめて」

小母さまはゆるめる代りに縄を私の口の中へ押し込むと上から白い手拭でしつかりと鼻まで覆つてしまいました。それから三・四尺もある青竹を取り出すと胸のあたりを力一杯打ちました。ピシッ、ピシッと大きな音がしました。が何しろ太い縄で一分のすきも無い位縛られて居ますのでそれほどの苦痛ではありませんでした。小母さまは続けざまにピシッと叩きました。竹の先の方は割れてささらのようになりました。そして遂には二ツに折れてしまいました。私は痛さよりもヒューヒュー鳴る青竹の音が怖くて身をよじりました。美しい着物がはだけて白い肩が出ました。裾も割れました。小母さまは折れた竹をほうり出すと今度はお座敷帯を持つて来ました。それを私の綱の間にさし込むとぐいとねじり上げました。胸の綱がきゆうつと締ると、息も出来なくなり、顔が見るく充血して赤くなりました。

「どう、いゝ気持でしょう。そらそら、どうふふふ」

余りの息苦しさにすうつと気が遠くなりか

けた途端小母さまは、帯の柄を抜きとつてくれたのではつとする間もなく今度は両股の間にさし込まれました。冷たい竹がひやりとしました。

「そら、もつともがいて、もがいて」

着物はすつかりはだけ、髪もこわれて垂れ下がつて来ました。やがて小母さまは帯を投げ出すと、太綱をほどき、着物を脱がせて桃色の長襦袢一枚にすると、今度は伊達巻きやらしごきやらで、それもしごかずに巾広いまゝぐるぐると足まで縛りました。ぐつたりしている私を蒲団の上に寝かすと、薄い長襦袢の上から、乳房、お腹、太腿などをなでたり擦ぐつたりしました。私はうめき、身をよじりました。やがて長襦袢も剥ぎ取ると体を縛つた紐も全部解き、手首だけ後ろにギュッと縛りました。小母さまも着物全部をぬぎ捨て腰巻一つになりました。私は今度は本当に怖くなり、全身の力を振り絞つて小母さまをはね除け起き上りました。

「ふふふ、いくら暴れてもだめ、もう百合は私のものよ」

私は懸命に逃れようとしたが、何しろ後手に縛られて居るので部屋の隅に追いつめられると、もうどうする事も出来ません。

「その眼、その眼、その眼があゝ、何んとも云えないの、さ、思切り可愛がつてあげるからおとなしくして、真理さんにいつもしてもらつてゐるんでしよう。そんなに怖がらなくてもいいじゃないの」

私は蒲団の上に抱え上げられて来ました。その時です。ガラツと唐紙が開くと、仙台に居るはずのお姉さまがとび込んで来ました。いきなり小母さまを突き倒すと、そばにちらばつて居た縄を手当り次第に拾つて小母さまを目茶苦茶に縛り上げ柱につながしました。それから私を抱き締めると、

「百合の馬鹿、百合の馬鹿」

と叫びながら体中に接吻したり、噛んだりしました。私も小母さまも意外なお姉さまの出現にびつくりしましたが、後で聞いた所によると、あの電報はお姉さまの顔を見たくなつてお姉さまのお父さまが打つた冗談の電報で、御病氣でも何んでもなかつたのでお姉さまは怒つてすぐに帰つて来てしまつたのだそうです。それはさて置き、その夜は大変でした。誓いを破つた裏切り者というわけで小母さまと二人、組み合されてエビ責めにされたり、足で乳房を踏みつけられたり、胸をお姉さまの股の間にはさまれて締め付けられたり

翌日の昼近くまで散々に責められた挙句小母さまは一切私に手を出さない。私はお姉さまの奴隷になると云う事で許して頂きました。お姉さまつて本当に怖い方ですわ、

その時から今日までずうつと一月以上の間私はお姉さまのオダリスクとして、縛られ、いじめられ通しです。しかも前のようには遠慮せず思い切り責めるのです。どんな風に責

められるかは又機会がありましたらお伝えしたいと思つて居ます。又小母さまについても面白いお話があります。それもその時一緒に書きたいと思つております。(終)

映画「暴帝イワン」その他

泉 辰之助

奇ク五月号で高取氏「暴帝イワン罪惡史」を拝見して、私の少年の日の事が思い出された。中学生時代だった大正七八年の頃、当時浅草の六区、池の前にキネマ倶楽部という洋画専門の映画館があつて、米画の帝国館に對抗して主として歐洲ものを上映し殊に弁士も(勿論トーキーなぞない時代)生駒雷遊だの杉浦市郎だの一流が揃つていた。

まだサジステイックの何ものたるかも知らなかった私は別にとり立てゝ云う程の理由もなく替り目毎にキネマ倶楽部に観に入つたの

であつた。その時の映画が「暴帝イワン」

石造りの刑場がファーストシーンで、上方の観覧席からイワン暴帝が見下ろしている中央に一本円柱があつて、半裸の女囚が獄卒に手取り足取り引立てられて来る。勿論髪は乱れ真白な肢体があらん限りの抵抗を試みるが、遂に中央の円柱を抱きかゝえる様に縛り付けられて了う。上半身をわずかに覆つていた布も引きはがされて殆んど全裸に近い女の美しさ。二人の刑吏が鋭い鎗を左右から女の丸い乳房の下目がけて突き立てる。のけぞ

る女の裸身、円柱を抱いたまゝグダツと崩れる最後のいたましさ、それを見下して堯爾と悦虐の微笑を洩らすイワン暴帝……

映画は暴帝が大軍をかつて四隣に攻め入り美しき王女を犯すが、其の娘は前に捕えられて来た王妃に生ませた我が子であつたという全く暴虐乱倫を極めたストーリーであつた。

又ヴィヴィアン・リイによつて最近好評であつた「美女ありき」と同じ材料を扱つた「ネルソンの恋」も同じ館で見たが、米国海軍の勝利に万歳を連呼する群衆に押し流されて行くレディ・ハミルトンの遂にもみ潰され了うモツブシーンのラストなど未だに忘れられないが、其のネルソンの恋人となる女が初めてハミルトンに生人形館で見染められる時だ、全裸の上半身がクローズアップされ、肌に焼ごてが当てられる。勿論画面には出ないが其のきな臭い煙が真白い女の背を這いつてゆく、私は見ていて堪らなくなつた。こ

これは歐洲方面にはよくある美しき裸女の見世物館である。そして愛らしき少女エレマが公爵夫人に迎えらるる事になる。……………

浜町河岸に日本橋の一流実業家によつて日本橋クラブという集会場が建つてゐる。

当時「ジゴマ」というフランスの探偵映画が余りに残虐であるという処から上映禁止になつてゐたが、そのクラブで非公開の形式で見ることが出来た。勿論今日からすれば大したものでもないのだろうが、非常な判で、私も子供作ら是非なんとかして見たいと思つてゐた処だ。前後は忘れたが下宿の若い主婦が両手両足をがんじがらめに縛り上げられたまゝ、無残にも絞殺されて、床になげ出されてゐるシーンだけハッキリ覚えてゐる。

又現在ではモードなぞ珍しいものではないが実際当時は歌劇華かなりし浅草金龍館であつても、踊り子は相当長い肉色パンツをはいていなくては駄目な時である。映画に文字通りの全裸の女体がハッキリ現われて来たものが一つあつた。矢張り同クラブで試写された「裸女騎乗」である。これは有名な物語だ、余りの重税にあえいでゐる市民を助けて頂きたいと王様に願つた王妃に与えられた課題は馬の背に裸体のまゝ乗つて市中を一巡する事

であつた、王妃は市民のためこの難問に對し女としての恥しさをかなぐり棄てた、市民はこの日皆戸を閉じこの慈悲深い王妃の御通行を感謝した。然しこゝに一人の不心得者がいた、秘かに表戸に僅か片眼だけ覗かれる穴を開けて、この美しき女体をお待ち申上げたのだ、この小さな穴から映画も覗いてゐた。街角を王妃は馬の背に騎つたまゝ覆いかくす何物もなく、生まれたまゝの姿で人影一つない街路を此方へ向つて近付いて来たではないか私は固唾をのんだ、この不心得者の様に眼のつぶれなかつた事が不思議な位だ。

私はこうして次第に生長して行つた。

珍奇艶笑本

甘美なるアリスの降伏

"The Sweet Surrender of Alice"

美貌の処女アリスが、その昔見捨てた男ジャックの策謀のために一室に監禁され、遂に屈伏させられるに至る迄の経緯を変態味豊かにユーモアを混えて描写されたサイズムの長篇小説。

作者は不詳であるが、その流暢華麗な文章よりして著名な作家の匿名の作だと思われる。

A new book, nothing the like Published so far nor so realistic and which we are certain will be considered by all who will read it as a masterpiece of erotic literatim ask for it: My snuggery or Orgies of lust. 一これ程に深くこれ程にリアルに描写された書の世に現れた事はない。本書を一読された諸士は必ずや艶笑文学の一傑作として認められることを確信する。

我が密室 又は

肉慾の躁宴

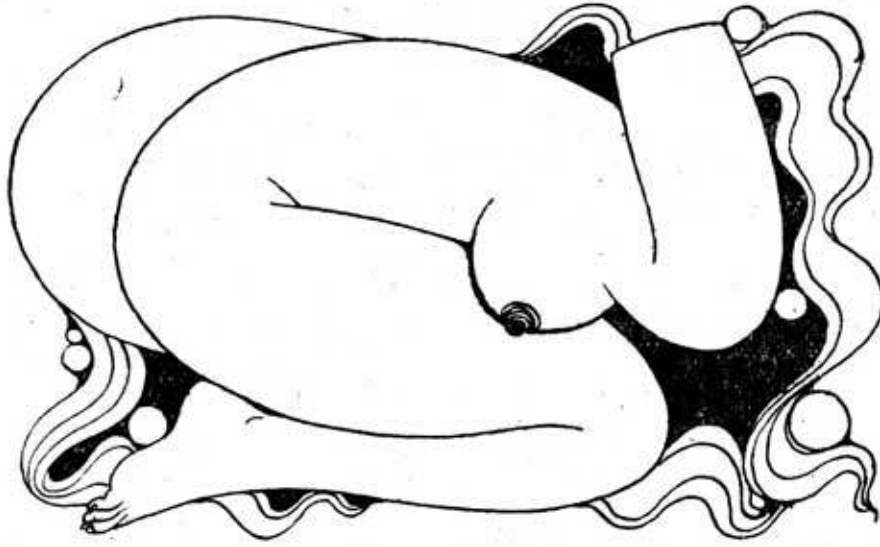
米画「モデルの生涯」でキンボールヤンクという女優が飢えに追われる娘になつて、画家のモデル募集の広告を見て、全裸になるシーンなど、オールド・フアンに私にとつて未だに忘れ切れない、「戦争と女」「イントレランス」「灼熱の十字架」等々無声時代の映画には書きたい事もあるが、既にあまりにも遠い昔話になつて了つた。

其の後(変態資料)で伊藤晴雨氏の逆吊の有名な写真を見て牛込五軒町の発行所を尋ねたのも、又前進座の座談会で偶然その晴雨氏がまだ翁とは云えない頃にお眼にかゝつた事なども懐しい。――

女囚私刑体験記

(三)

小坂多美枝



一、みんみん踊り

枕探しの京子に続いてその後に入れられた女囚は中森妙子という会社の事務員で彼女が取扱うお金を帳簿を巧みにごまかして四万円近い金を盗み出した二十五になるしたたか女です。

この女も新入りのあいさつするとき哀れつぱく誠しやかに家が貧しくてだの、親兄弟を養うためだのと泣言を並べてお美代の憐みを乞いッルなしのリンチを逃れようとしたのですが、念入りにツビ改めをやられて何人もの男と関係していたことがばれて嘘を見ぬかれた

挙句定めリンチ以外に色々面白い芸をやらされ一晩お美代の玩具になつたのです。

例えば房内の中央の窓よりの所に立つて居る柱によじ登らされるのです。若い娘が猿のように柱によじ登らされる恰好というものは浅間しいとも何ともいゝ様がありません。これは着物だけは着てやらせて貰えるのですが囚衣の裾が足にまといつくのでいやでも太股のつけ根迄まくつて柱を股の間にはさまないと落ちてしまいます。

お美代は後にたつて心地よげに妙子のそんな姿を眺め乍ら彼女の着物の裾をまくつて帯の下へたくし込む。ズロースは初めから脱がされているから白い大きいお尻は丸出しにされます。

「もつと上へ登りな」

お美代は手にもつた細い棒で妙子の白いお尻………をぐーぐーと突上げます。

「ヒィ、痛いよ」

「痛かつたら早く登るんだ」

そんなことに馴れない妙子はヒィヒィ悲鳴を上げながらそれでもどうやらお尻が立つて居るお美代の顔のあたりに来る迄必死によじ

登りました。

「さ、そこでさつきの歌をお歌い」

若い娘が尻まくりさせられてお猿のように柱にしがみついて居る恰好は吹き出したくなる程おかしなものです。そんな恰好で色々なみだらな歌を唄わせられるのです。その歌詞は余りにも卑猥なものなので公表を憚ります、一番当り障りのなさそうなのを一つ選んでみますと、

「ヨカチンチン、ヨカチンチン、ミレバ
ミルホドヨカチンチン、……………」

等というような愚にもつかないものですがまだまだもつとひどい歌を、生娘だつたら恐らく死んでも云えないような歌を、そんな四尺高い所で歌わせられるのです。しかも歌の合間に蟬のなきまね迄やらされます。

しばらく懸命にしがみついているうちに、自分の身体の重みにたえかねて妙子は、

「お願いッ、降ろして、降ろしてッ」と悲鳴をあげる。お美代は手にした棒で妙子のお尻を、チョンチョンと突つき乍ら、

「ネを上げるのはまだ早いよ、お前さん歌をお歌い、それとももつと痛い目に合いたいかい？」

妙子は泣き乍らでもせみの泣声だけ始め出

しました。

「あーん、あーん、ミーン、ミーン、ミーン
あいたッ、あいたッ」

「チンチンはどうしたい？ まだかい、お前さん」

ずり落ちそうになる苦しさにたえかねて妙子は遂にあの恥かしい歌を歌い出しました。

それを聞くとまわりの女囚達一同は、手をたたいて喜び新入りの哀れなそんな姿を嘲りあうのです。こうなると女は男に比べてはるかに残忍です。

そしてその次には柱を掌と足の裏で支えて身体を振つて色々な風に柱の上で踊らされるのです。これをみんな踊りと言っています。併し妙子は柱の上で堪えきれなくなつてずるずると落ちてしまいました。

「こいつたるんでやがる、だれが降りろといった。ふーん、それともパイパン責めの御馳走が食べたいのかい」

妙子は拘留所で既にパイパン責めの話をきかされてどんなことか知っていたので、パイパン責めと聞くとびつくり仰天して、疲れ果てた身体に鞭をうって再び柱に投げかけます。実際けいけんのない人には分らないでしょうが、柱の上の高い所で手と足の裏で柱を支

えて身体を振つて踊るのは極めて苦しいのです。しかも勿論あの猥らな歌を歌いながらなのです。妙子は今はもう汗びつしよりとなつて、お尻は丸出しで、上半身も殆んど露わとなり身振り乍ら半ばそをかい歌を唄うのです。

「オホホー、いい眺めだよ」

とお美代は妙子のお尻の下へ顔をもつていつて上をのぞき上げて辱しめます。それからお美代ののびる手先がどんないたずらをしたかは御想像にお任せします。

二、おセンチまたぎ

終戦を境として大きな時代の変遷があつたのですから、社会的な従来の秩序はがらつと変りました。田舎の地主階級は転落して従来の小作人が勢力を得、又大都市の多くは戦災にあつて大きな工場や商店が没落して、今迄の社長夫人が今日は見るとかげもない裏長屋のおかみさんに落ちぶれ、要領のよい闇屋がのさばつて、我が世の春を謳っていた時代でした。

そんなわけで従来の女囚刑務所へはそんな社長の奥さんや、大店の奥様がぶち込まれて来るような事は殆んどありませんでしたが、

混乱時代になるとそんな人達も貧しさにたえかねて、悪い事をするのでしよう。時々送られて来ました。こんな時に彼女等がかつて、牛や馬のようにアゴの先で召使つていた女、或はかつての地主のお嬢さんとして相手を輕べつして口もきかなかつたような小作人の娘の女工達が同じ房に古参の女囚として頑張つていますと、例外なしに酷いことになります。又その上に恋の恨みでもからんで居りますと、しつと心から男の刑務所でも見られないような女性特有の残虐なリンチがくりひろげられるのです。

こんな時はその古参の女囚がたとえ平の女囚であつても「恐れ乍ら！」と室長に願ひ出ると、室長のお仕置のすんだ後で新入りの身柄はその女囚に下げ渡され、それから殺したり、病室入りをせねばならぬような傷をつけない限り、どんな酷い目に合わせても構わないのです。いやむしろ室長等はそれを眺めて悦ぶのです。

さて二二一番の八木芳子という二十五になるパンパンです。娘時代に西条の町の機織工場で働いて居たのですが、その工場主と關係を結んだのがばれて、若い奥さんに辱められた揚句、暇をだされたのです。これが転

落の初まりで其後悪事を重ねて此所へ送られて来るようになったのです。彼女は其の奥さんを殺してやりたい程憎んで居たようで、いつも口癖に此所を出所したら御礼にいつてやると言つていました。

所が世の中は広いようでも狭いもので偶然にもその工場主夫人が入獄して来るようなことになったのです。浮き沈みは戦後の浮世の習いとか、一頃盛だつた機織景氣も急に悪くなつて、手広く仕事をしていただけに反動も大きく彼女の夫の会社はとうとう倒産してしまつたのです。所がぜいたくな生活が忘れられない彼女は金欲しいために言葉巧みに方々を欺して歩き遂に詐欺罪に問われたのです。

彼女、木村園江は三十二の女盛りです。十月も終りの事でした。新入りが園江であると知つたときの芳子の残忍な悦びはどんなだつたでしょう。室長のお仕置がすむと早速彼女は室長の前へ罷り出て、

「これこれの次第ですので、どうぞ新入りを私にお下げ下さい」と平伏しました。

「何に、そうか、それは面白い。存分に仇討をやつてみな」

と室長は芳子にけしかけます。芳子は不気味な微笑を浮べて恐怖にふるえている園江に近づき、

「奥様、私を覚えておいででございますか、これ、奥様」

言葉はいやに馬鹿丁寧ですが、險を含んでたずねます。

「は、はい。よく存じて居ります。芳子さんで御座いますね、どうかよろしく願ひします」

「お前さん、私をとてても可愛がつてくれたわね、そのお礼はうんとしなければいけないね。そう、あれをやらせてやろう。おセンチ跨ぎだよ、さあズロースを脱いでお立ち」

「勘忍して、どうか勘忍して、もうこれからあんなことはいたしませんから、私が悪うございました。どうか許して下さい」

顔をたゞみにすりつけるようにして許しを乞う社長夫人をもとの傭人だつたパンパンの芳子は荒々しくつきとばし、加勢の女囚とともに無理矢理に園江のズロースを脱がせてしまふ。それから園江の囚衣の裾をまくらせて帯の下にたくし込み

「さあ、そこへ四つ這いにおなり」
今は芳子のいゝつけに従うより他はないと

諦めた園江は云われた通りに丸出しのお尻をつゝ立てゝそこへ四つ這いになります。

芳子は園江のお尻の後に立つて

「股をもつと開くんだ、そんな四つ這いつてあるかい」

とどなりつけます。そうして帯を二つに折つて水に浸し、それを鞭代りにビシリ、ビシリと園江の裸のお尻をしばぎ始めます。

「ヒィ、ヒィ」

と園江は悲鳴をあげる。

三十ばかり力いっぱいヒツパタイて、白い丸出しのお尻が真赤になると、農耕班をして居る芳子はかくしもつた生のさつまいもの手頃の大きさのをとりに出すと、

………ます。仰天し

た園江のその時の様子は全く見物でした。

そして園江は………便所の草履

を口にくわえて、房内を四つ這いのまゝ三回程這い廻らされ、その後、お待ち兼のおセンチ跨ぎをやらされるのです。

これは………だまゝ便所の戸の

下の隙から潜り込んで便所の内を這い上り、戸の上の隙間から這い出して外へ出て又四つ這いで元の所へ帰るといってお慰みなのですが口に汚いぞうり、それに………

まれ、若しどちらを途中で落してもやり直しますし、又このときには、便所の戸の上に彼女用の湯呑に小便を入れてのせられます。そして戸をまたぐときにはそれを落さないで跨がなければいけないので、若しそれを落すと女囚達にえり、首をつかまえられて、丁度犬や猫の子のように顔を板の間にすりつけられてそのへんの汚を残らず口でなめさせられるのです。そうしてもう一度やり直させられ、成功する迄やらされます。

「さあ、おやり、何だいぼろぼろ涙なんかこぼして、口惜しいのかい。ふん、いゝ気味だよ、………丸出しにさされて、恥かしいだろう。どんな気持ちだい。さあおやり」

今はいゝつけ通りやるより外に道がないと悟つた園江は、もそ／＼と這い出して便所の戸の下へ首をさし入れて、浅間しい恰好で入り込みます。

中でしばらく苦勞して壁をよじのぼり、戸の上から外へ出ようとするのですが、これが又難しいのです。構造上どうしても足から先に外に出し棧の所に爪先をかけてゆつくりと身体を引抜く以外に方法はないのです。一世一代のサーカスをやらされている園江は便所の上の方でしばらくあれこれとためらつてい

ましたが、やつと右足を先の方から出し初めます。足首から膝、太股と見え出してききました。これからとんでもない恥かしい恰好をそんな高い所でいやでもしなければならぬのです。

女囚の一人が突然大きな声で

「×××丸見え」とからかうものですから園江は瞬間はつとして足を止らせると股をいやという程戸に挟み込み

「ひえー」

と悲鳴をあげたかと思うと、ガラ／＼ドシンと下の板の間にころがり落ちてのびてしまいました。

勿論戸の上の茶わんもころがり落ちて中の液体はその辺の板の間の上に散りこぼれます。園江は芳子達に首筋を押えられて引立てられその汚れを口でなめてふきとる様に強要されるのでした。

(未完)

【後記】永らく御無沙汰しまして申し訳ございません。何分にも暇がないのと拙い筆なのでお諒承下さいませ、これから少し暇になりますので、ぼつぼつ少しづつ書いてお送りします。書くことはいくらでもございますから、今日の分は原稿にならないかも知れませんがお許し下さいませ。

多美枝

淫 (みだらび) 火

【第七回】

松井 籟子

栗原 伸・画



貴船一郎が小百合夫人の面影を求めて必死になつてゐる同じ心で小百合夫人は貴船一郎に会うまいと必死になつてゐた。会いたいのだ。小百合夫人は一郎に会いたいのだ。会いたい心が強ければ強い程、精一杯の強さでそれを押さえなければならぬのだ。押えても押さえても、底から盛り上つてくる思いに耐えきれず、どうしても一郎のいる大阪という土地を一刻も早く離れてしまわなければ、自分で自分の心の始末がつかなくつた。

大阪駅を汽車が動き出した時、彼女はやつとほつとした。そしてやつぱり思いは大阪に残つた。これで一郎に会わないで済むという安堵の心の片隅で偶然同じ汽車に一郎が乗合わしはしないかという奇蹟を願つた。そう思う心に反撥して、もしそんな奇蹟が起つても顔を見合わさないようにと、殊更窓の外へ目をやつてゐた。

芥子色のスーツに茶のトック帽がよくうつつて、膝の上の茶のスイードのハンドバッグを軽く押さえている白いレースの手袋が初夏らしく爽やかだつた。

雄作は小百合夫人に並んで腰をおろしながら、美しい妻の横顔を幸福な思いで見る事が出来た。

旅というものはいいものだ。出て来てよかつたと思ふ。海が見たいという夫人の誘いだつたが、短距離のわりに時間のかゝる紀州より、いつそ特急で熱海まで行つて伊豆へ行く方が、汽車の乗り心地もいいのではないかと、慣れた東海道線をえらんだのだ。

「ふらすに行きたしと思へども」

「ふらすはあまりに遠し」

雄作はふとそんな詩を思い出した。

「せめて新しい背広をきて」

「きままなる旅にいでてみん」

詩人ならずとも旅はいいものだ。そうして小百合夫人と並んで汽車にゆられてゐると最近夫人に対して疎くなつてゐた情感が、新鮮によみがえつてくるようだつた。

自分は少し妻に対して臆病すぎたのではないかと反省した。妻を抱いていながら、ふと頭をかすめる邦彦との情痴が気になつて、雄作は妻に対して、ただ通り一べんの愛撫しかじなかつた。たわむれに近いような愛撫の仕方をして、つましい夫人に蔑まれそんな感じがしたのだ。しかしそれがいけなかつたのだと雄作は思う。愛情から湧いた行為なら、少し位はめをはずしたつていい筈だ。自分は妻を愛している。たしかに愛していると、彼は小百合夫人の可愛らしい耳たぽを見てゐた。口にふくんで軽く噛んでみたいような耳たぽだつた。

「どうなさつたの？」

小百合夫人は夫に言つた。

「何が？」

雄作はとまどつて聞き返した。耳たぽを見てゐた自分の視線が窓の外へ目をやつてゐる小百合夫人にどう感じられたのだろうと不思議だつた。

「あら、だつて何だか変でしたわ」

夫人がいうのに、彼は笑いながら思い切つて言つた。

「実はね、君の耳たぽを噛んでみたいような気がしたんだよ」

「常なら、はしたないと言わば言える言葉が軽く口から出るのも、」

旅のせいかもしれない。

「まあ……」

夫人は真赤になった。

「いやな方……」

そう言つてわざと顔をそむけて窓に向つたが、彼女の胸は異常に波立つた。「噛む」という言葉が電気のように体を走つたのだ。

「噛まれてみたい」

小百合夫人はそう思つた。そしてそう思うとたんまるで反射運動の様に貴船一郎の面影がすつとうかんだ。

「あの人はどうしているだろう」

一郎の情人らしい女の縛られた姿が目につく。強くくもられて、縄と縄との間からこぶのようにゆがんでふくれていた女の二の腕をガブツと噛んだりするのではないだろうか。「もつとひどいことをしてやることだつてあるんです」

そう言つた貴船一郎の言葉が小百合夫人の耳の中にきざみ込まれたように残つていた。

「もつとひどいことをしてやることだつてあるんです」

耳の中でその言葉が生々と夫人にささやく。素裸にして、身動き出来ない程に柱へ縛りつけても、まだそれが「ひどいこと」ではないのだろうか。鞭で打つのだろうか。一鞭おろされる度に「ヒー」と呻く。その度に体の縄はよけいに身を締めつけて、もがけばもが

前号迄の梗概

貴夫人というにふさわしい上流社会の、若く美しい人妻小百合夫人の体の奥底で得体の知れない虫がさわぐ。誰かにいじめてもらいたいと思うのだ。

その虫に誘われて、漠然と身なりを変えて大阪の下町の盛り場所新世界へ行つてみる。そこで村山富男というマゾヒストの男にあらう村山は小百合夫人が東京から渡つてきた不良少女でつる子という名だと口から出まかせを言つたのを信じてホテルへつれこむ。一度は逃げて帰えるが、見えない糸に引かれるように再び新世界へ行き、村山と旅館へ行つたが村山の情婦の嫉妬からみじめな目にあう。それを救つたのが貴船一郎という画家だつた。一目でお互いに惹き合うものを感じたが貴船にも順子という女がいて、悦虐の世界に溺れている事実を小百合夫人は知つてしまうその世界こそ夫人にとつて激しい魅力を感じるものなのだ。しかし小百合夫人はそうした自分の心を恐

れ、すべてを忘れたいと夫を旅に誘う。夫こそ正常だと思つていた。それなのに、夫の雄作は学生時分から深い関係のある南部邦彦という情人を持つていた。雄作も又正常な夫婦生活の本道を歩きたいと思ひ、夫人と旅行に出ることと邦彦との縁を切ろうとする。

一方貴船一郎は小百合夫人の清純な美しさにすがつて、自分のサジズムをおさえたいと思ひ、夫人に再会を願つたが、約束の日夫人は来なかつた。一郎も又小百合夫人を何処の誰とも知らない。村山にそれを聞いたが、村山はわざと嘘をついて一郎の怒りをあおり、苛められようとする。失望して帰宅すると、待つてゐるものは順子のヒステリックな嫉妬だつた。やぶれかぶれな気持で一郎は順子を柱に縛りつけて銭湯へ行つてしまふ。その後へたずねて来た村山の情婦松枝は、縛られた順子を面白がつて苛める。

銭湯の帰り道、一郎は村山から、芹屋のある邸につる子をつくりの夫人がいることを聞き、たずねてみようかと決心する。

く程、奇妙によじれて、反つて苦しくなつてもじつとしてはいられない。ふりおろされる鞭の下で、右に左に、前に後に、柱に手首をこすりつけてうごめき廻る。息を切らし、体中を波打たせ、べつとりと油汗をうかべて白い柔い肉体が柱の廻りで踊るのだ。苦しい。熱い。冷たい。痛い。くすぐつたい……。一つ一つがためしてみられる。苦悶の音色が違ふのだ。そして更に、真白い体は色々な色で

いろどられる。つねれば青く痕になる。噛めば赤く、鞭打てば紫に……。胸も背中も手も肢も……。無惨な痕が点々として残されていく。何をされようと、どうされようと、縛られた身はそれをさけることは出来ないのだ。失心してぐたつとなつてしまつても、体の痕をさらしたまゝ柱にくくりつけられているだろう。自分でとくことは出来ないのだ。縛つた人の思うまゝに、責められて気絶し又息を吹き返えして、もつと責められて、柱に縛られたまゝ何日も何日もいじめぬかれたらどうなるのだろう……。

「何を考えているのです？」

雄作に声をかけられて、小百合夫人ははつと我に返えつた。

「いいえ、べつに……」

そう言いながら、自分が今どんな表情をしていたらうと心配になつた。

雄作は妻の上気したような顔をみると汽車の振動が軽い疲労の中に煽情的な感じを起させるものなのかと思つたが、言葉には出さずただ熱海で泊ろうか、伊東まで行こうかと、ふと夜の褥を思い浮べた。

二

「駄目！」

夫人は雄作の手をはらつて、自分の手で乳房をかくしたが、声は甘えていた。

「いいじゃないか」

雄作は夫人の手をはずして、唇を近づけようとする。

「だつて……」

小百合夫人はわざとこぼむ。夫がもつと強い力でそれを押しのけてくれることを望んでいるのだ。

「どうして君はいつもそうなの？ねえ、一寸だけ……」

「だつて、いや……恥しいんですもの」

「何が恥しいの？ばかだなあ、君はいつまでもお嬢さんなんだね。さあ、手をどけて」

「いや！」

夫人は頑強に両手で乳房をかくした。

特急を熱海でおりると、ハイヤーで来宮の駅近い静かな宿についた海からは遠かつたが、団体客もなく、なじみの客だけ相手の感じのいい家だつた。

風呂から上つて、おそい夕食の膳で傾けたビールが、汽車の疲れを癒すのと同時に体中の血管をくすぐるように刺激して、小百合夫人の体の中に巣くつている虫がぎゆうとつかまえてくれとさわぎ出した。雄作もいつもより目の中に男の匂いを漂わしていた。

関西とは違つて関東は、夫婦が一つ寝床に寝るといふ習慣が薄いのか、一つ部屋に二枚重ねた寝床をちやんと二つとつてくれた。その一つをはなから空にして、小百合夫人の寝床へ雄作が横になつた。彼にしては珍らしい能動的な行為だつた。汽車の中で夫人の耳たぽを噛んでみたいと言つた言葉といい、夫人は何となく、その夜の夫に期待するものを持つた。

夫の唇を咽喉に受けながら、夫人は寝巻の紐をといた。そして何に気ない動作でそれをするつと抜いて、雄作の視線の届く肩のあたりへ。ふとんから少しはなして畳の上へ投げ出した。行燈の様な電気スタンドの灯の下で、赤い紐がくねくねと蛇のように青畳に這つ

ている様が、それと見なくとも小百合夫人には感じられた。

雄作の唇が咽喉から胸へ順に口づけしてきて乳房に近付いた時、急いで両手で乳房をかくしたのは、無理にその手をのけてもらいたいと思う媚態だったのだ。

「どうしてもいやなの？」

雄作は今まで素直にしていた夫人が急に抵抗するのをいぶかしく思った。

「いいじゃないか」というのに「いや」という。「いや」と言われると雄作はとまどうのだ。夫婦になつてもう四年か五年になる。もつと女として開花してもいい時期だった。「いや」と言つて乳房をかくす手で、雄作はもつと強く自分の腰を抱いてももらいたいのだ。腰を抱くばかりでなく、もつとその手は夫を愛撫出来る筈だった。

しかし小百合夫人は夫に思いきり乱暴に扱ってもらいたかつたのだ。乳房をかくす両方の手を無理やりにひらかして、それでも力を入れると枕もとにある紐をとつて、

「よし、いうことをきかないなら縛つてしまふ」

と言つて、後手にねじあげて縛りあげてほしかつたのだ。視線の届く所へ腰紐を投げ出したのも、わざと抵抗しているのも、たゞ夫に夫人を縛ることを考えつかせる手段だった。

しかし雄作は、小百合夫人の肉体の奥の欲求を到底見ぬくことは出来なかつた。それよりもむしろ、今まで燃えていたものが急に冷えていくような間の悪さを感じるばかりだった。

「いいのよ、何をしてもいいわ」

小百合夫人は夫の感情を敏感に察した。急に胸にあてていた手を放すと両方に開いて、夫をうながした。

「私、こうしてじつとしているわ。あなた、どうなさつてもいいのよ」

夫人のつもりでは今度ははりつけの様に両手を開いて縛られている形を夢みたのだ。何をされても動けないのだと自分に言いかけた。そして夫の唇から体の芯へ電流の様に走る快感をわざと身動きもせずにこらえていた。それは制すれば制する程、我慢すればする程体の芯を火の様に熱く燃すのだった。

しかし雄作は妻の体のからくりを察することは出来なかつた。たゞ人形の様になすまゝになつて、身動き一つしない女体に不満な思いを持つだけだった。潮の干くように、はじめの興奮がさめていつてしまふ。ただ何となく義務をはたすような寒々しい思いで、夫婦の営みを終るより仕方なかつた。

三

二夜すぎると温泉宿も所在なく、今日は夕方までに伊東へ行こうと、おそい朝食を食べている時だった。

床の間のすみにおいてある電話がリンとなつた。小百合夫人が立つより早く、近くに戻つていた雄作が手をのばして受話器をとつたが

「え？え？ああ」

と、答えながら、さつと顔にかけを走らせた。そして小百合夫人の方をすらすらとみて、何か用事をいいつける口実はないかと探したが、それより早く受話器の奥から声が聞えて来た。男の声だった。「ああ、駄目だ。いずれいつか話そう。いや、いけない。え？わからないよ、それは……。ああ、そんな……。そりやあ困る。え？

わからない奴だな。だめだ。とに角切るよ、さよなら」

随分こみ入った電話らしかったが、相手が何を云っているのか小百合夫人には聞えないながら、男の声であることだけは受話器から外へひびいていた。もし女の声なら、夫に誰か自分にかくした女があるのかしらと疑つてもいいような応答だったが、相手が男では見当がつかなかった。

「どなたから？」

小百合夫人はさりげなく聞いてみた。

雄作は額の汗を片手でぬぐいながら、一瞬ためらったが

「南部君だ」

と言った。

「あら、そうなの、お仕事の事？ 何処から電話かけてらしたの？ 大阪から長距離電話？」

何の用件か、相手が南部邦彦にしては、ばかにそつけない夫の返事だったと小百合夫人はいぶかった。夫婦で家をあけてきたからには、行先と宿屋は連絡出来るように留守宅へ知らせて来たので、留守にたずねて来た邦彦がそれと聞いて電話をかけてよこしたのだから。しかし、何を駄目だというのか。もの問いたげに夫の方をうかがつて、彼女は雄作が説明してくれるのを待つていたが、雄作は、いったん切った電話をすぐとりあげると、帳場を呼んでハイヤーをたのみ、すぐに立つから勘定書をもつてくるようにと命じて、そそくさと着がえをはじめてしまった。

小百合夫人は夫が仕事のことを忘れて休養するつもりで出た旅先へ、わざわざ電話でややこしい用件を頼んでもきたのを、お坊ちゃん育ちの我まゝさで、夫が不機嫌になつているのだらうと、察して

しいてそれ以上聞きもせず、自分も宿の丹前をぬいでスーツに着かえた。

しばらくすると、表のあたりで自動車のとまる音がした。

やがて、廊下を此方へ来る足音に、女中のしらせを待つまでもない、

「あなた、駅へ行くハイヤーが来たようですわ」と、トランクに手をかけた。

「ごめん下さい」

案の定女中の声でそういうのに

「はい」

と言いながら、雄作と小百合夫人が出ようとする出会いがしらに女中の後に立つていている人に気がついた。

「お客様で……」

女中が案内するまでもない。蒼白な頬を引き締めて、射るような瞳で二人を見ているのは、南部邦彦その人だった。それではさっきの電話は、熱海の駅からでもかけたのだろうか。

邦彦は、体で押すように雄作を部屋の中へ戻すと、

「君が会わないと云つても、僕は会うよ」

投げつけるように雄作に言った。

女中が部屋の襖を外からしめながら、

「自動車待たしておきましようか？」

おずおずと声をかけたが、部屋の中の三人は急には誰も答えなかつた。しかし、雄作はすぐに平静さを取戻すと

「ああ、すぐ行く」

と女中を去らして、邦彦に言った。



「まあ、とに角此処は出よう。君も一緒に来たまえ」
わざと小百合夫人とまともに視線を合わせることをさせているような邦彦に、夫人は漠然と不安を感じた。夫と邦彦との間に漂う不穏な空気の原因が自分にあるのではないかと思つたのだ。しかし、小百合夫人は、まさか邦彦が、自分に対して嫉妬の炎をもやして、いようとは思わなかつた。むしろ、邦彦が自分に好意を抱いていて、それを夫が不愉快がつての喧嘩ではないかと、考える方が自然だつたのだ。

四

十国峠を越えるあたりから、邦彦が何を思つたか明るく景色をほめたりし出した。伊豆から大島へ行つて、東京へ行こうというはじめの計画を、急に変更して箱根へ出ることにしたのだ。

雄作はそのまゝ東京へ行つてしまいたいと思つたが、邦彦が来たことで、妻と約束の此の旅行を中断するのともたえられなかった。

箱根へ行こうという邦彦の提案をわざと入れたのは邦彦のほこ先をやわらげて、とに角何にもしらない妻の前で秘密をあからさまにするようなことのないようにと思う心くぼりだつた。

大阪駅から雄作は邦彦へ出す手紙を投函して来た。若くて独身の邦彦が、自分からはなれて、幸福な結婚をした方がいいと書いたのだ。自分は旅に出て、しばらく東京にいるから、その間に気持ちを整理して、普通の男友達として交際するなら、自分の経済力なり社会的地位なりで、いくらでも邦彦の幸福になるように助力をおしなさいとも書いた。まさかその手紙を手にして、旅先まで追いかけてこようとは思つていなかった。熱海の駅から他の宿屋にいるから来てくれ、ゆつくり話しがしたいと邦彦が電話をかけて来た時、めいわくそんな冷たい返事をしながら、体のどこか片隅で、邦彦の声のひびきをなつかしがっている自分自身が雄作は恐かつた。大きな期待を持つて、新婚旅行のやり直しのつもりで出て来た旅なのに、はじめの夜から妻に失望してしまつた雄作の体だつた。その体が邦彦の来たのを喜んでいる。頼にさわる程喜んでいる。自然、体とはうらはらな心で、邦彦を嫌い、不機嫌そうにだまつていた。小百合夫人も夫の顔色を見ながら、押しだまつている。邦彦が明るくなつた



のは、箱根へ行くことを雄作がすぐ承知して、伊豆をやめてくれたからかもしれない。

箱根といつても湯元から強羅へかけて土地が別れて温泉宿が方々にあつた。その一番山に近い静かな所をえらんだのも邦彦だつた。宿へつくとすぐお風呂へというのは温泉場のならいだし、男同志一緒に入るのに、何のおかしなこともない。しかし、雄作は熱海で入りすぎたからという理由で、邦彦の誘いをことわつた。明るかつた邦彦の顔がさつと暗くなつた。そればかりか、夕飯が済んで、邦彦がもう一度雄作に、外へ散歩に出ないかと誘うのを、

「何だか疲れたから……」

と、ことわつた。

邦彦は再び頬をこわばらせたが、ふつと、無理につくつたような皮肉な笑いを口もとに浮かべて

「じゃあ、奥さんと散歩してきましょう。ねえ、いらつしやいませんか？」

と、小百合夫人を誘つた。そして、雄作に

「それもいけませんか？」

と、わざと念を押すので、雄作はもうそれ以上いけないとは言えなかつた。

雲の多い空模様だつたが、欠けはじめた月が、巨人の指の先のように雲の間から顔を出していた。

「少し登ると、芦の湖がきれいですよ」

そういう邦彦の言葉にハイキングコースらしい山道を上つていつた。道は細く一すじに光つてみえていたが、高い木立の間に入ると暗く、無気味に静まつていた。その木立の向うに、不意に湖面が明るくみえた。

「こつちへ来てごらんなさい」

邦彦はさきに立つと、道をはずれて木立の中へ入つて行く。月に輝く湖の面と、温泉宿の灯が夜の闇中で織り出す絵模様が、疎らになつた木立のはずれからよく見えた。

小百合夫人は都会とは違う大きな夜景の中で、自分が頼りなく心細い気がした。誰かにすがりたい。そのくせ人間の愛慾がうとましい。神のように、仏のように虚心にすがりつける者はないのだろうかと思つた

「奥さん」

邦彦に声をかけられて、はつとする程、邦彦が傍にいるのを忘れていた。

「奥さん、私は今日、奥さんがおそらく生れてはじめて知ることをお話ししようと思つてここまでお誘ひしたのです」

思いつめたような邦彦の声に、血管がこわばるような気がした。

そして、夜になつて若い男と軽はずみに山道を歩いて来たことを後

悔した。小百合夫人はまだ、邦彦が自分への好意を告げようとしているのだと誤解していた。だから

「僕は御主人を、いいえ、雄ちやんを愛しています。男同志でも夫婦のように愛し合うことが出来るということを御存知ですか？」

こう邦彦が言い出した時、

「え？」

と、小百合夫人はげんな顔で聞き返した。邦彦が何を言っているのか、言葉として伝わらなかったのだ。それは無意味な音のつながりでしかなかった。しかし、邦彦はつづけた。

「奥さんは御存知でしょう？ 雄ちやんが奥さんとの夫婦生活に満足されていないことを……。奥さんが一番知っているはずです。奥さん達の仲の良さはたゞ表面的なものだけです。いくら奥さんがお嬢さん育ちでも、本なんかで読んでいらつしやるでしょう？ 本当の夫婦生活というものがどういうものなのか。雄ちやんは奥さんとうまくいつていやしないんです。お体裁だけの夫婦なんです。奥さんは雄ちやんを本当によろこばすことは出来やしない……」

「やめて下さい」

小百合夫人は叫んだ。

邦彦の言葉がやつとおぼろに理解されてきた。そして先ず何よりも、自分が邦彦に対して考え違いしていたことが、女のうぬぼれだと思ふと、激しい恥しさが憤りのように彼女の身をほてらせた。

「ホホ、、、」

夫人は甲高く笑った。

「おやめなさい、そんな冗談……」

「冗談だというのですね」

邦彦がつめよつた。

「もし、もし、冗談ではなくて、僕のいうのが真実だったら、奥さんは雄ちやんと別れてくれますか？」

「そんな……ばかな……。いいかげんにしてちょうだい」

小百合夫人は邦彦を冷笑することで、自分の落ち込んだ困惑の中から、足をふまえて立ち直ろうとした。

「信じないですね」

夫人の冷笑が邦彦に移つたように、彼はふつと冷たく唇のはしをゆるめた。

「信じなければ信じないでいらつしやい。せいぜい僕をばかになさい。しかし、信じなければならぬようにしてあげます。奥さん」

邦彦は不意に小百合夫人の手をぐつと引いた。

「あつ！」

と、夫人は驚いてその手をふり放そうともがいたが、邦彦は彼女を引きよせて、手で羽がいじめにすると、片手を彼女の腰紐にかけて、するするとはどいた。

夫人は邦彦の手をくぐり抜けるように、かけ出そうとしたが、追いつる邦彦の手を逃れられず、かえつて片膝ついて転ぶのを、後から手首に紐がかけられた。それをとこうとなまじ自由な方の手でもがいたので、相手にその手もとられてしまう結果になった。

「何をするんです！」

夫人は言つたが、急には大声で助けを呼ぶ智慧が出なかつたのは見ずしらずの暴漢におそわれたのとは違つて、一緒に旅をして来た親しさが、夫人の分別のどこに残つていたからだ。

しかし邦彦は容赦をしなかった。夫人の手を後手に縛ると、吊りあげるように縄尻を引いた。

「痛っ！」

とあけた口へハンケチを押しこんで、その上から別のハンケチで頬がくびれるほどにかたく猿ぐつわをはめてしまった。縄尻は邦彦の手の中にある。宿の丹前の上から羽織をひっかけただけの姿でて来たので、紐をとかれた前がだらしなくてはだけていたが、それがかきあわせようもなかった。

邦彦は邪険に紐を引つづる。小百合夫人はよろよろと、罪人のように、声もなく、邦彦の手ひかれて歩いた。いつの間にか下駄がぬげていて、はだしになつていた。落ちてゐる小枝や針の様な落葉にあしのうらが射され、小石に爪先を傷つけた。

邦彦は小暗い木立の中を小百合夫人をひきずつて歩いてしたが、ふと荒縄のきれはしが落ちてゐるのを見つけると、道から少しはずれた灌木の茂みの中へ、小百合夫人を引き倒し、手と足を別々に木に縛りつけてしまった。

「少しの間そうして静かにしていられつしやい。あなたが嘘だとわらつたことが、嘘かどうかみせてあげるから……」

こう言い残して邦彦は、もと来た道をおりて行つてしまった。

小百合夫人は死んだように動かなかつた。

思いがけなく、思いがけない人の手で、自分が常日頃、夢にえがいた姿にされてしまったのだ。乱れた衿元から、白い胸が瀬戸物のように月の光に光つてゐる。犬のように横たわつてゐる地面は冷たくしめつてゐた。直に下になつてゐる方の手が、肩から二の腕にかけてしびれたきた。足と手を木に固定されていたが、腰をひねつて

しびれた手の位置をかえようとしたが、どうかえようもなく、衿元がよけいにくずれて、片方の乳房があらわになつてしまつただけだつた。冷たい夜気が乳首のさきにしみるように感じられた。

いつたい邦彦はどうするつもりなのだろう、夜の山道に通る人もなかつた。よし、人が通つたところで、声も立てられず、がさこそと草や木をゆすつて知らすより救つてもらふ道はない。しかし、それとても、小百合夫人は出来ないだろう。胸もあらわに縛られた姿をどうして知らぬ人の目にふれさせて平気でいられよう。邦彦には見られてしまつたのだ。よろめき引かれて此の木に縛りつけられたその人なら、もうどんな浅ましい姿を見られようと同じことだつた。しかし他の誰にも見られたくない。夫の雄作にも、貴船にも……。

そうだ、貴船一郎が此の姿を見たらどう思うだろう。

小百合夫人は今、貴船一郎が此処を通り合わせ、彼女のみじめな姿を見たら、急いで縄をとくのではないかと思われた。

小枝を拾つて彼女の白く光る胸を餅でもこねるようにもてあそんだりほしないうら。それをもしする人があつたとしたら、邦彦のあの冷たい射るような目より他にないと小百合夫人は思つた。

しかし、夜の山道はしいんと静まつて、足音一つしなかつた。

しびれた腕の痛みは背にも腰にも伝つた。無理にまげられてゐる足の膝頭も痛み出した。そればかりではない。チクツと腕に痛みを感じたと思うと、やがてそれが激しい痒みへ変つた。胸も痒い。足のふくらはぎからももにかけて……。痒い痒い……。月光にすかしてみると、黒い点の様に胸にくいついてゐる虫がいる。笹ダニなのだ。肉に頭をくいこむようにして血を吸つてゐるのだ。縛られた手はそれをはらうことも、つかみ殺すことも出来ない。かゆい！

身もだえして、地面に肌をすりつけても、かゆさはひどくなるばかりだ。痒い！息のつまるほど痒い！笹ダニばかりではない。蟻もいる。血を吸わなくともモゾモゾとうごめき廻る虫がいる。自然の拷問道具だった。豊醇な女の肉体は山の虫けらには又とない饗宴だった。

小百合夫人は呻き、もがいた。このたまらない痒さよりは打たれた方がましかもしれない。打って、打って、皮膚が破れる程打たれた。

たら、息づまる痒さが消えるだろうか。
小百合夫人はもつとひどい痛さを望みながら、足をこすりつけ、体をこすりつけて、半裸体になつて、ひとりで縛られた縄のゆるすかぎりで身悶えた。

中天の月が、此の美しい自然の生贄を冷く見おろしていた。

(つづく)

雲 後 雨

(破つた日記帳より)

川 端 多 奈 子

九月十四日(日) 雲後雨

電車を終点で下りて三軒の山道を登りつめた時はもう昼近くなつていました。朝から鬱陶しく曇っていた空は雲が益々低く垂れ込めて今にも降りそうなお天気です。幸いそんなお天気ですから誰一

宿りする一軒の家もないこんな山道で降られでもしたらどんなことになるでしょう。道の両側は杉の木立が林立していて、視界は中々ひらけそうありません。「もう直ぐ頂上になるから、そこで二、三枚撮つたら直ぐ下りよう」一杯にふくらんだ皮の鞆が肩か

らずり落ちそうになるのを托し上げながら塚本さんがそう言います。シユミーズが汗でべつとりと肌へべりついて、道の脇のちよろ／＼と流れる清水を一口、口にしてみたいと思いますが、少しでも早く頂上へ出て涼しい風に当たりたい気持の方が私をどん／＼と先へ

駈り立てます。杉の木立が切れると一面に背丈近いスキの原でした。そしてなだらかなスロープが山の頂までつづいているのです。

——早く裸にして縛つて——

私は口には出せず心の中でそう思いながら先に立つてス、キの中を進みました。ポツリ、ポツリ、その時でした、大粒の雨が最初は頬に腕に当つていたのが、私達が元来た杉の林へ向つて走り出した頃には次第に激しさを加えて白いしぶきとなつて視界をさえぎつてしまいました。

塚本さんは自分の身体で雨をさえぎりながらカメラを素早くピニールの風呂敷で包みました。一本

の松の木を雨宿りとして私も暫く佇んで待つていましたが横なぐりに降りつける雨には何んの足しにもならず花模様のデシンのワンピースは忽ち盥の中へ浸けたようになつてしまいました。——濡れぬ先こそ露をもいとえ——の繼どおり、全身濡れねずみとなつてしまつた今は、もうこれ以上雨を恐れる事もないと、二人は車軸を流す豪雨の中をゆつくり歩いて杉の林へ入りました。男の人はまだしものこと、女が頭から水を浴びたらどんな恰好になるでしょうか、然しこゝも雨に対しては別天地ではありませんでした。梢から落ちてくる雫は風が吹く度にどつと一度にかたまつて落ちてくるのです。

「途中に小屋があつた筈だが——」
「えゝ、確か東側にあつたと思ひますわ」私はそう答えて顎のところで結んだビニールの紐をゆるめてうしろを振りかえりました。
道は川の様になつてきます。やつと物置小屋へ辿りついた時は雨は小降りとなつて西の空がうす明るくほんのりと紅をさしてしました。小屋は二部屋に分れていて奥には麦藁が束ねて積んでありました。私はこの時、ふつと田舎の事を思い出して懐しい気持ちにかられました。そこだけが白く乾いた土の上にワンピースの裾からポトポトと色の染つた水滴が落ちるのを何か不思議なものでも見るような無感動な気持でぼんやりと眺めていました。

「うん、この小屋の中、面白いじゃないか、一つ撮つてみようか」
彼は早速職業意識を発揮してびしょ／＼に濡れた服を乾そうともせず皮の鞆のフラスナーを開きました。
「寒いわ、わたし……」
今迄歩いていたのでそうも感じなかつたのですが、こうしてじつとしてみると濡れた洋服が絶え間なく体温を奪つて耐えられない程寒く感ずるのです。
「では、裸におなり、その方が却つて温かいよ、僕の方はその間に準備するから」
写真を撮るから裸になれと言われてもそうも羞しくないのに、洋服が濡れたから脱ぐというのは何故こうも羞しいのだろうか、一つまみの布片の固りとなつたワンピースを丸太に吊り下げると、色に染つた私の白くふやけたような肌が現われました。

外は絹のように細くなつた雨が音もなく降つていましたが向いの山肌には明るい陽ざしが眩しいほど差しています。私がまだすつかり下着までとつてしまわないうちに彼はフラッシュ・ガンをとりつけたカメラを持つて私の傍に立ちました。
「さあ、この荒縄でその身体の濡れたところをこの柱に縛ろう」
濡れたズロースのまゝの私は藁の荒縄で後手にぎり／＼と縛り上げられ、二部屋の間を仕切つてある丸太のまゝの柱に身動き出来ないように縛りつけられました。藁のシベがまだ乾かない肌について変な斑をつくつてしまいました。ブル／＼と寒さにふるえていた私の身体は裸になつたにも拘らず、かつかつと燃え上つてきました。只べつとりと肌にまといついたズロースだけが気持悪くて、早くとつて欲しいと思ひました。
縛り終えた彼は「じゃ、これとつてもいゝね」と答えて濡れたまゝのをずつとズリ下げました。私は片足宛交互に曲げて足先からはずすと、指示に従つて苦悶の表情を作るよう努力しました。然しどうしても、にんまりとした笑顔になつて仕方ありません。彼は何度も躊躇していましたが、そう長く縛つておけないと思つたのでしよう。角度を変えて、三発の閃光球を焚きました。縄を解いて貰つた時はすつかり肌も乾いてしまつていましたが埃の積つた小屋の中のこと背中や肩なんかも真黒になつて、まるで縞馬のような恰好になつてしまいました。

KK通信大好評

見本一部三十円
半年分 百円

本誌の愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いの機関誌として発足しましたKK通信は号を追って発展、今や特別会員の連絡誌としての母胎になりつゝこゝに第十号を迎えました。本誌をお読みになられた方は是非KK通信も併せて御覧下さい。

特別會員募集

愛読者の強い要望に応えて特別會員制による諸行事を企画しました。会則の詳細はKK通第七号に掲載、申込用紙も同封してあります。

原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
- 一、内容は本誌に相当と思われるものでしたら如何なものでも結構です
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
- 一、発表作品には発行後相当の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、読者の体験告白文は内容及びその長短は問いません誌上匿名は御自由です。奮て御応募下さい。

(奇譚クラブ編集部)

◎編集方針について

読者のお問合せをお待ちします

尙本誌の内容編集方針について読者の御意見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい

- 一、縛られた女の写真に関して(塚本鉄三)
- 二、男子同性愛の件について(染田 玄)
- 三、縛られた女の件について(松井籟子)
- 四、編集方針の一般について(箕田京二)

◎本誌の旧号在庫について◎

本誌旧号は昨年九月号以降より毎号若干保有して居りますが、八月号より以前は全部売切れでございます。昨年度の分は一部送共九十円、本年度の分は一部送共百円にて急送申し上げます。KK通信第五号以前品切れ。

◎御願ひ◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料の同封をお願いします。但し文書輻輳の節は御返事の多少の遅延は御猶予下さい。尙理由の如何に拘らず直接の御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承願います。

先ず書店へ御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文獻的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

- 三月分三冊(送料共)三百円
- 半年分六冊(送料共)六百円
- 一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買渡れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真三枚一組一年分御申込の方には八枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

奇譚クラブ

第七巻 第七号
毎月一回一日発行

七月号

定価 百円

昭和二十八年六月三十日印刷
昭和二十八年七月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷人 上田 庄之助
発行人 吉田 稔

発行所 曙書房

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇
振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。